

奇譚クラブ

1957年 12月号

告白小説
カラーシヤの教典
西小路公彦
眞実は誰も知らない
辻村 隆



12月号

昭和三十三年十一月三十日印刷 十二月号（第十一号）
昭和三十三年十二月一日発行（毎月一回 一日発行）
昭和三十三年四月二十日 第三種郵便物認可

奇譚クラブ

昭和三十三年十二月号

12

奇譚クラブ

昭和三十三年十一月三十日印刷 十二月号（第十一号）
昭和三十三年十二月一日発行（毎月一回 一日発行）
昭和三十三年四月二十日 第三種郵便物認可

定価二百円

（送料八円）

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



IBM. 2805

〔奇譚クラブ最近号主要目次〕

女体運動機能測定器	四馬孝・面
縛られた女優たち	太田孝太郎
緊縛映画名場面集(一)	太田孝太郎
スクリーンで縛られた女優たち	太田孝太郎
縛られ拷問を受けるシナ・ロロブリ	太田孝太郎
我が異常性の記	南木仙治
マソヒズム見たり聞いたり	南木仙治
帝国憲兵要務綱領	南木仙治
探險服姿の女腹切	南木仙治
スロースE.T.C.	南木仙治
女優を縛る監督達	南木仙治
灰色のノート(或る流暢マニアの日記)	南木仙治
木馬責に関するノート	南木仙治
現代マソヒズム芸術時評	南木仙治
通信「最近の二つの話題から」	南木仙治
女装愛好者の方へ	南木仙治
ある夢想家の手帖から	南木仙治
或る(モデル志願の)女性から	南木仙治
手紙のアイディア	南木仙治
緊縛の軽演劇「魔窟X柱」	南木仙治
九雅節夫氏へ	南木仙治
ジャ・ナリズムに現われた	南木仙治
「続・潰滅の前夜」に寄せて	南木仙治
メデカル礼賛	南木仙治
続・切腹曼陀羅図録	南木仙治
花と朔風(四)	南木仙治
緊縛映画雑感	南木仙治
口絵・写真解説	南木仙治
縛り責めを好む男と女	南木仙治
緊縛映画速報欄	南木仙治
牡丹花秘談	南木仙治
家畜人ヤブー(第五回)	南木仙治

大衆文芸に現れた責の描写資料	佐々木ツトム
キクに捧ぐ私のアイデア集大成	佐々木ツトム
読者通信	佐々木ツトム
〇六月号(復刊第十五号)	
口絵	四馬孝・面
クツワの装置	四馬孝・面
地下室の拷問二題	四馬孝・面
振袖狂女(宮城野由美子の吊し責めシーン)	四馬孝・面
縛られた女優たち	四馬孝・面
「ある夢想家の手帖」(奴隷貿易より)	四馬孝・面
緊縛映画名場面集	四馬孝・面
我が異常性の記	四馬孝・面
上野の山の切腹面	四馬孝・面
おしめと流暢の幻想	四馬孝・面
ある女給の体験(三)	四馬孝・面
ローカル・レポート	四馬孝・面
「アベック裸にし暴行」	四馬孝・面
私のキタ・セクシユアリス	四馬孝・面
続・飛行服姿の女腹切	四馬孝・面
「切腹」の短歌	四馬孝・面
緊縛映画雑感(思い出の緊縛映画より)	四馬孝・面
マソヒズム見たり聞いたり	四馬孝・面
最近の話題と通信	四馬孝・面
縛り責めに関するノート	四馬孝・面
女装通話	四馬孝・面
ある夢想家の手帖から	四馬孝・面
切腹随想	四馬孝・面
灰色のノート(ある流暢マニアの日記)	四馬孝・面
創作「L・T商会」	四馬孝・面
キクに捧ぐ公開状況	四馬孝・面
私は女であるというお話	四馬孝・面
ふんどし幻想	四馬孝・面
家畜人ヤブー(第六回)	四馬孝・面
沼正三だより	四馬孝・面

切腹通信	中康弘通
加害送別会	中康弘通
流暢器具考	中康弘通
続・潰滅の前夜	中康弘通
懐かしい「浪人街」の牛裂の刑崎峨美也子	中康弘通
円照寺七不思議「弁才天利益雪解」	中康弘通
伊藤晴雲作甲斐仁参提供	中康弘通
女サジストの記(一)	中康弘通
「時評」	中康弘通
読者提供のアイデア	中康弘通
レポート「妻を立木にしはる」	中康弘通
「和装教室」(振袖幻想)	中康弘通
玉橋落穂集	中康弘通
映画速報欄	中康弘通
読者通信	中康弘通
〇七月号(復刊第十六号)	
口絵	中康弘通
涙のダイヤモンド(地下の拷問室)	中康弘通
縛られた女優たち	中康弘通
花坂道子嬢艶姿集	中康弘通
切支丹迫害史の内(石抱き算盤責め)	中康弘通
緊縛映画名場面集	中康弘通
「愛は惜しみなく」	中康弘通
私の本箱から(大衆小説の縛り場面)	中康弘通
異説八百屋お七「幻想炎の娘」(前篇)	中康弘通
少年矯正院体験記「重屏禁」	中康弘通
私のアイデア「ローソク責め」	中康弘通
ママになりたいたババ	中康弘通
ある女性から編集長への手紙	中康弘通
「恥しい夢」	中康弘通
麻生保の生活と意見(一)	中康弘通
創作「L・T商会」	中康弘通
ある夢想家の手帖から	中康弘通
秘蔵抄	中康弘通

股のぞきの責め図「姐妃のお百」	飯田靖子
告白「防衛服と私」	飯田靖子
落日婦士道	飯田靖子
水責に関するノート	飯田靖子
「女装通信」	飯田靖子
創作マソヒズムに生きる夢	飯田靖子
ある女給の体験(四)	飯田靖子
続・切腹曼陀羅図録	飯田靖子
和装教室(花嫁衣裳の巻)	飯田靖子
映画速報欄	飯田靖子
「奇談倶楽部」の会合(責めの研究)	飯田靖子
家畜人ヤブー(第七回)	飯田靖子
南支那海の鬼	飯田靖子
空想のネタ	飯田靖子
ワイセツが哲学か(バリー法廷で裁かれたサディズム)	飯田靖子
現代マソヒズム芸術時評	飯田靖子
女血たるま	飯田靖子
アブ・モード・オール・スクラツ	飯田靖子
揮とブリーフ	飯田靖子
一揮雑記	飯田靖子
私のアイデア集大成	飯田靖子
「通信」	飯田靖子
黒いベチコート(マリアンヌの手記)	飯田靖子
女斗美編路	飯田靖子
那津子の流暢日記	飯田靖子
仏、米の婦人ふんどしに就いて	飯田靖子
私のキタ・セクシユアリス	飯田靖子
六月号の批評と感想	飯田靖子
緊縛映画速報欄	飯田靖子
口絵解説	飯田靖子
読者通信	飯田靖子
〇八月号(復刊第十七号)	
口絵	飯田靖子

奇譚クラブ

復刊第二十一号
十二月号

目次

貢画 碟 (ハリツケ)

四馬 孝・画

滝れい子画集——滝れい子・画——

「夜の脱衣場」 「マダム」

口 繪 譯 繪 「ローソク責」

杉原虹児・画

映画紹介 縛られた女優たち

阿部 秀・提供

新東宝 「修羅八荒」 遠山幸子

大映「女狐屋敷」 近藤美也子

写 真 「縛った女体」

本誌写真部撮影

「くさり」 「ボリウム」

(擬装) (光沢)

洋画スチール二題

米映画「キング・コング」

米映画「杜鰐カイバー戦隊」

「カラーシヤの教典」

西小路公彦 18

マブヒズムへのいざない(第3回)

天野 哲夫 32

創作 ゆうべのお客様

近藤 一 36

時評 麻生保氏の生活と意見

麻生 保 40

「靴への愛慕と踏まれる喜び」

波路 洋 42

黒いペチコート

鴉囀吐夫 46

屠腹乙女桜(前篇)

藤山 秀緒 52

家畜人ヤプー(第七回)

沼 正三 56

ワイド映画の縛りシーンから

嵯峨美也子 65

「逆比例」

牧高志・文 68

ダイアナ夫人

栗杉貴代子 72

危難に遭った美貌の女

岸本 青龍 77

美容病院

久留木 栄 82

「非きもの読本」

白金 紅次 95

大衆小説の中から拾った縛りシーン

山下 真一 100

残酷芸術展覧会

伊藤 晴雨 104

ある夢想家の手帖から

沼 正三 108

ある女給の体験 (6)

日下 絹子 114

一揮亭続記

内田 武男 118

白人の娘のこと

樟田 荒夫 122

擦ったい秘密

須藤 律夫 124

看護人

青葉 模一 128

帝国海軍の私刑

香川 章二 134

「眞実は誰も知らない」

辻村 隆 138

ナースと浣腸(ブレさんの浣腸記)

岩村美智子 142

ケンちゃんのこと

柴崎 黎子 146

男奴隷のことども

皆川のふ子 150

本誌紹介 緊縛映画一覽

編集部編 154

154

読者通信

154



〔奇譚クラブ最近号主要目次〕

美への冒瀆……………四馬孝・画
加賀利江子嬢艶姿集……………加賀利江子・画
花魁一美吉野の折檻……………滝れい子・画
映画写真一タ立勘五郎……………楓月・太郎
映画題名、女優名当懸賞楓月太郎提供
洋面スチール二題
「聖衣」「岩窟の野獸」
旅廻り劇団の賣場面から……………星 光一
陰若植物（或る浣腸マニヤの告白）……………島 直樹
「時報」……………麻生 保
告白「恋する夫人への手紙」……………麻生 和夫
ある女給の体験……………日下 絹子
高井好晴氏のアイデアに答えて南川和子
一種亭雜記……………内田 武男
青い浣腸器……………久利須 照雄
魔女裁判に関するノート……………甲斐 仁参
おんな白虎隊（女腹切悲話）……………青山 芳樹
家畜人ヤプー（第八回）……………沼 正三
切支丹迫害物語「マリア観音」本因由郎
切腹随想「乗馬スボン」への憧れ……………藤山 秀緒
殘虐な女性……………森本愛造・沢村 天
創作「L・T商会」……………佐川 増夫
「腰巻のアンケート」（或る奇人夫婦を
訪ねて）……………牧 高志
大衆雜誌の挿絵から……………丘一明 提供
私の本箱から（探偵小説の縛り場面）……………星 光一
灰色のノート（ある浣腸マニヤの日記）……………矢崎 竜一
おむつカヴァーと私……………原 由貴子
諺のもつイメージ……………吉野 祐
雪の夜の怪事件「小屋に二人の惨死体」……………高崎 勉
ある夢想家の手帖から……………沼 正三
和装教室（紅燈お座敷着の巻）白金紅次
花魁「美吉野」の折檻……………本山 由郎
緊縛映画速報欄……………千葉 栄市
アイデテ「フアンタジア」……………田 華雄

告白「虹のかけ橋」……………皆川のふ子
アブ・モード・オール・スクラツプ……………矢桐 重八
続・潰滅の前夜……………土路 草一
婦女子襲撃事件の頻発……………岸本 青柳
七月号の批評と感想……………竹村 茂一
フエチシズム詩集より……………並原 新一
読者通信……………

九月号（復刊第十八号）

【定価 二百円】（千8円）

女体屈伸測定器……………四馬孝・画
いけにえの町娘……………滝れい子・画
新緑の陽を浴びて……………須川 令子
「括られちやつたワ」……………萩 千恵子
緊縛映画名場面集……………榎月太郎提供
縛られた女優たち……………千葉栄市提供
洋画スチール二題……………編集部選定
「征服者」「魂術師の応」……………柳沢 吉保
病床徒然草……………皆川のふ子
告白「鞭の線に描かれて」……………後篇
異説八百屋お七「幻想炎の娘」……………（後篇）
壮烈大和撫子……………沼地 佐渡
ある夢想家の手帖から……………藤山 秀緒
探偵小説に現れた地獄絵巻……………高崎 正三
美女を十字架にクギつけ（生にえのまわ……………東 一郎
りて肉体の狂宴）……………土俵四股平
相撲取草……………嵯峨美也子
ワイド映画の縛りシーン……………白金 紅次
和装教室（長襦袢濡れ場の巻）……………（続）甲斐仁参
魔女裁判に関するノート……………（緋への憧憬）
「苦しみを求めて」（1）……………近藤 正三
を持つ女性の手記より……………沼 真一
家畜人ヤブー（第九回）……………山下 一平
「短信」……………津々 武男
赤い煉瓦の家……………内田 春雄
体験談「水兵生活と輝」……………佐田
ビーチボールの魅力……………

残虐な女性……………森本愛造・訳
医学幻想……………古井直哉
映画速報欄……………千葉栄市
告白「女性志願者の夢」(前篇)……………真崎伸一
麻生保氏の生活と意見(二)……………麻生保
切腹随想……………兵頭庫一
私の本箱から……………(単行本、雑誌の責め場
面)……………星光一
美少年処刑の図「笑い」……………山口幸一
菊花会」例会報告……………筑紫美弥子
現代マゾヒスム芸術時評……………原忠正
フエチ通信「赤い下穿き」……………高木栄二
痛められし桃の実(第一回)……………(マリアン
ヌの手記より)……………鴉嘯吐夫・訳
続・潰滅の前夜(完結篇)……………土路草一
読者通信……………

十月号 (復刊第十九号)
【定価二百円】(千8円)

口絵
責画「鼻いじめ」……………四馬孝・画
縛られた女優たち(場面集)……………
……………阿部秀・楓月太郎・提供
緊縛写真「グラマー・ガールのニュー
スタイル」……………
責画「地下倉庫」……………「いでゆ」
……………北原純子・画
洋画スチール二題
「古城の剣豪」「指紋なき男」
絵物語「お加代源三郎旅日記」……………藤木仙治
告白「女性志願者の夢」(後篇)……………真崎伸一
女性の悲鳴について……………南川和子
「苦しみを求めて」(2)……………(細への憧憬
を持つ女性の手記より)……………近藤
良二断想集……………高木良二
終戦奴隸(或る勤労働員女学生の手記よ

告).....私の好きな女靴.....雪俊
 女性化願望と男性思慕.....波路
 家畜人ヤブー(第十回).....岸本 青柳
 東京の人よ何を書く(腰巻とバンティと)
 ふんどし).....古井 真哉
 「艶美なる捕物帖」.....松原三千代
 ある夢想家の手帖から.....牧高志文・画
 大陸暴行列車 (内附烙印38号の女の手
 記).....本因 由郎
 可憐なサド、可憐なマゾ 佐々木ツトム
 製糸工女.....木口 房代
 緊縛映画雑感「再映画化作品について」
 告白「恋する夫人への手紙」(二).....阿部 秀
 アブ・モード・オール・スクラップ.....麻生 和夫
 矢桐 重八
 痛められし桃の実(第二回)
 (マリアンヌの手記より).....鴉鳴吐夫・訳
 「美女達のお尻が風船をつぶすアイスシ
 ヨー」.....清水 恵二
 マゾヒズムへのいざない.....天野 哲夫
 女性切腹随想.....田谷 敬生
 和装教室(古典模様矢絰御共の巻)
白金 紅次
 雑報と雑感.....沼田 正三
 浣腸機報通信「アブ・マニア雑談」.....赤井 茂
 挿絵入門.....嶽 収一
 戦争未亡人の告白「ヒツプ受難」.....花田 育子
 美容病院(第一回).....久留木 栄
 モデル志願の女性より.....永井 朱実
 架空小説「残虐芸術展覧会」.....伊藤 晴雨
 雑誌通信「挿絵を中心として」.....山梨 一明
 フランソワの手記.....山梨 参次
 読者通信.....

磔

はりつけ

大の字にハリツケられた支那服の女、皮肉な笑いをうかべる
ジャンパーの男、奇妙な仕掛けのこのクサリは、どのように動く
のだろうか。空想は限りなく翼をひろげる。

四馬 孝・画



「マ ダ ム」

「ねえ一体、このあたしを、どうするつもりなの？」脂ぎった豊満なマダムの肢態が妖しく四帖半の部屋いつぱいにのたうつのであつた。何故、彼女は床柱に縛られなければならなかったのだろうか。



い れ 滝

『夜の脱衣場』 「あら、砂を踏む足音が近づいてきたわ」

女の声に男は「ううう」と猿ぐつわの下でうめいて起き上ろうとしたが、美貌の女は、その白い腕に似合わぬ強い力で押えつけて離さなかつた。



ローソク責

柱時計は十一時を打って、夫の寝息が、とぎれとぎれに聞えてくる。「このローソクの火が紐を焼き切つてしまうまで、お前はこうしているのだ」と夫は私を縛つて自分は眠ってしまった。溶けて次第に短くなるローソク
蠟涙は胸にしたたってくる。

杉原虹児・画



映画 縛られた女優たち (阿部秀) 提供



新東宝 「修羅八荒」 遠山幸子



大映 「女狐屋敷」 近藤美恵子

△縛つた女体▽

く
さ
り



伊
吹
真
佐
子
嬢

ポ
リ
ウ
ム



伊
吹
真
佐
子
嬢

凝
視



佐賀美智子嬢



光
沢

中富綾子嬢



米映画 「キング・コング」 ブルース・キャボット主演
美女とキング・コングのスリルに満ちた数々のシーンがある。詳細は本誌32年
9月号本田由郎「人身御供の美女」参照。



米映画 「壮烈カイパー銃隊」 タイロン・パワー 主演
テリイ・ムーア
馬上から投槍で突き殺される惨劇シーン。左後方には絞首台が見えている。

新しい文献研究誌

奇	譚	ク	ラ	ブ
---	---	---	---	---

1957年 12月号

(第十一卷 第十一号 通刊第百一号)



下着を見せる娘

『カラーシヤの教典』

西 小 路 公 彦

一

十数年という歳月が、忘却という言葉をも与え賜わらんことをと、祈るような心持で、毎日を送っていたのに、今は、より強い思慕と感情を、到底、抑制することが出来ない、妖しい心の疼きに、一刻の猶予もなくして、身も、心も、震え戦えている。思えば、何んと不可怪な幻想だろうか。

昭和十八年八月のある朝、ジャバ島ジャカルタ市でも、東端に近い、ウエルテヴデン街の瀟洒な住宅の赤い屋根と白い壁が、南方特有の濶葉樹の緑に囲まれている。燃えるような火焰樹が陽に映えて、空はからりと明るく晴れている。司令部差し廻わしの車を玄関先へ待たせたまま、私は形容も出来ない、苦い水を、心に飲み下していた。

特務機関に、籍を置き、この国の独立問題に、直接関係している

私という存在は、陰にかくれた大きな力で、絶えず鋭い監視を受け、その見えない眼に、蛸蟪のような触感を覚え、四六時中、厳重な警戒心を偽らせていたのに、今朝は、取り返しをつかない、失敗をしてしまったのだ。

昨夜、N長官の宿舎で、極秘に、魔の宗教カラーシヤについて、重大な指令を受け、その秘密書類を折鞘の中に、間違はなく確かに藏ったと、思っていたのに、今朝、机の抽出しから、取り出した折鞘を開けると、この書類は煙のようになどかたもなく消えている。

いや、確かにと、心では叫んでいるが、長官宅で、久し振りに、内地から航空機で運ばしたという日本酒が、つい、私を誘惑して、何時もより三杯だけ、多く過ぎている。それが、心の凝りとなつて、頭が重たく、不透明に曇らしてしまい、しかと、言い切れないものがあつたのだ。

ドキリとした。勿論、顔が真青に変わっていただろう。まさか此の部屋にまで、あの眼に見えない闇の手が忍びよるとは、考えられな

い。いや、或いは、想像もつかない力が、不可能を可能にしているかも知れない。私は、気が狂ったようになって、部屋の隅から隅まで、心を込めて、丹念に探したが、見つからない。

折柄、身の廻りを、世話しに来た、女中ルキーにも訊ねたが、『知りません』

と、明るい顔をして、笑っているのみだ。

家には、ルキーの他に、ネシヤ人の女中エダと下男、料理女の四人を備っているが、皆、身元は、極秘に憲兵隊で調査した上、しっかりした者ばかりを選んである。

殊に、ルキーは、支那人とオランダ人の間に出来た「合の子」で、小柄ながら、フランス人形のように愛らしくて、私は、久しい前から、ベットと心に決め、宝石のように、大事にしていた。

『そんな事が有る筈はない。が、若しかしたら、長官の宅に、置き忘れたのかも知れない。或は、車の中かもしれん』

私は、上衣を引掛かんで、先ず長官宅だと、部屋から飛び出ようとした瞬間、事もあろうに、可愛いルキーが、書類と長い麻紐を両手に捧げて、私の前に膝まづいた。

『旦那様。私は、何んにも知らないんです。でも、私の手が、悪戯をしたんです。悪い手。何卒、この手を縛って下さい』

最初、私は、その声と意味が判らないで、ただ彼女の手に、捧げられている書類だけが、眼の中に、飛び込んできた。青白い頬が、自分でも判かるほど、赤く燃えだし、心の底に、安堵の水滴が、ポタポタと音を立てて、拡がっていった。

が、彼女は、何んの為めに、こんな馬鹿げたことをし、また喋べるのだろうか。一体、誰が、彼女を唆のかしたのか。兎に角、蜷縮は、愛するルキーだったのだ。

しかし、私は、その時直ぐ、こんな理性じみた観察を、下したのではなかった。

むしろ、私の深刻な姿を見て、身をくねらせ、笑いを噛み殺ろしている、無邪気な悪戯娘の顔を、眺めている中に、言いようのない憤怒が渦巻いて、ムカムカと、身体中を駆け廻り、それが段々と高く、音を立てて、流れ始めた。

私は、可愛い手から、叩き落とすようにして、書類をひったくったが、彼女の手は、なお麻紐の端を持って、その指先が、挑戦するように。ピクピクと動いている。

感情は、遂に制止出来なくなった。意志のない右手が、私の心に叛いて、激げしく、ルキーの左頬目掛けて、平手打ちをくわした。『パチン！』

意外に高い音が、部屋中に響くと同時に、ルキーの身体は、ゴム球のように跳ずんで、絨氈の上を、五、六度横に回転し、部屋の隅へと、消し飛んでいった。

後から考えると、その大袈裟な動作の中に彼女の作為が、多分に感ぜられる。が、偶然のように、彼女の身体が、回転した為めに、麻紐が、クルックルツと、胸から腰、腰から太股へと、絡らみついていった。

『旦那様、ウンと、きつく縛って……』

頬に真赤な手型をつけた顔が、ニンマリと濃く笑う。その嘲笑は、ぐっと苦しいものが、胸に込みあげ、私の意志を奪ってしまった。つかつかと近寄った私は、股に纏わった紐を握ぎると、ギョツと扱ごいた。

紐は柔らかな肌に喰いこみ、骨がぐつと鳴る。私は、その紐を延ばして、更に、足首まで巻きつけ、固い結び目を作った。

『トアン。もっと強つくして。まだ、こんなに手が動きますわ』

そうだ。憎くらしいのは、その手だ。私は足首から垂れている紐を、引張り上げると、足全体が、窮屈そうに釣り上った。それを、強く引張り続けながら、胸の上に重ねられた手を、二巻、三巻、五

巻と、文字通り、身動きの出来ないように絞ほった。

こうして、嚴重な荷造りが出来上がると、急に疲れが、身体中一杯に猛れでて、咽喉がいやに渴わき、呼吸が、むやみに、苦しくなつて来た。

彼女も、きつと苦しいに違いない。と思われたのに、甘い香りを放ちつつ、なお私に挑んでくる。

『まだまだ。ほら、こんなに首が、動きますわよ』

けれども、私は、ルキーを其の儘にして、ぶいと部屋を抜けて、車のドアを開けたのである。

部屋の扉は、態と半開きにして置いた。そうすれば、きつと、エダか、下男が来て、紐を解いて呉れるだろうから。

それにしても、今日は、極秘の書類でなくて良かった。一体、彼女は、何んのために、こんなことを起して、自分から痛い目に、会おうとしたのだらう。何れにしても、これで私は、秘蔵のベツトを、永久に失うことになった。

この悲しみが、ぐつと胸に染み通つていったが、それよりも、もっと辛い問題が、この後にやって来るのを、寒々と意識する。

元来、彼女は、シヤバの華僑というより、南方全体を含めた華僑



の中で、金力と信用を以って、最も大きな巨峰の一つに、目されている宗慶肅氏、自身の紹介で来た子である。従つて「辛い」とは、この有力なる宗氏との間に、深かい溝が堀られると云うことで、如

何やら、カラーシヤ教団の、有数な幹部の一人に、祭り上げられているらしい彼を、今、失うことは、私の仕事に、大きな障害をつくることになる。いや、本当は、こんな問題で、彼二族の或る人と、会えないようになったら、それこそ、死に勝る苦痛の十字架を、負わされることになるのだが。

だが、宗氏ばかりか、王族も数人、信者の中に加え、ケラア山の中腹に、傲然と本院を構えている、この宗教団体は、何んと偉大で、不気味な存在だろう。

N長官が、これに眼を附けたのは、確かに、慧眼と言わなければならぬ。

司令部に着いた私は、担当事務の変更もあって、目の廻るような忙がしさに、取りつかれた。そのため、夕方、ぐったりした足が、我が家の敷居を跨ぐまで、私は、すっかりルキーのことを忘れていた。

彼女は、下女パイか、下男ジョングスに助けられて、既に姿を消していることだろう。そうだ、怒りに任せて、余りに酷い縛りようをしてしまった。もう少し冷静になって居れば、あの愛くるしい眼が、或は見られたかも知れない。私は、頭を二・三度、横に振りつゝ、部屋の扉を肩で押した。

と、ルキーは朝のまゝの姿、いや、髪を振り乱して、絨氈の上に転がっていた。

『お前は、エダから、紐を解いて貰わなかったのかい』

私は、急いで、結び目に、手を走らせながら、驚愕の色を、眉の上に現わしつゝ、努めて優しい声を出した。

『旦那様の意地悪。旦那様が扉に鍵を掛けて下さらないから、下男ジョングスや、皆んなが、やって来て、色んな悪戯をするんです』

何んという意外な言葉だろう。私は無惨にも、紫色の帯が印けられた、柔かい腕を、軽く、擦すってやりながら、荒々しく、下男ジョングスを

呼びつけた。

『いいえ、解こうとしたんですが、ルキーの奴。旦那様が縛ったのだから、触っちゃ、いけないと言うんで……悪戯なんて、でも余り可愛い顔をしているので、ちよつと、額ひたいに、キッスをしたまでなんです』

この時、私は、緊縛も亦、深淵なる愛情の表現であるとは、夢にも知らなかった。

しかし、済まないという感情が、優しい愛撫となって、ルキーの心に、ジーンと染み通って行くのが判かり、それが、私を慰ぐさめ樂しませてくれたのを、覚えている。

二

翌朝、私は、鏡のついた大きい洋服だんすの前で、珍らしく、軍服を脱いで、白の蝶ネクタイを結んでいた。ネクタイの上には、昨日の私の平手打で、腫れぼったくなった可愛い顔が、鏡の中で、挨拶をしていた。

けれども、当のルキーは、手首に、薄青い線こそつけていたが、ケロリとして、普段と変らない、明るさを撒きつつ、私の身の廻りの世話をしている。

今も彼女は、背後から純白の上衣を着せかけて、つと隅の戸棚に顔を突っ込んだ、暫らくすると、いつも衣類や、布を入れている、行李を逆さにして、私に笑いかけた。

『旦那様、今日も御出掛けになる前に、私を縛って下さいませんか？』

『何に？ ハア、。今日は、お前の手が悪戯をする、重要書類は無いよ』

『でも、そうだわ、旦那様の大切にしている、時計や、お軍刀がたなや、ほら、お金銭かねが沢山置いてあるでしょう。だから是非縛って、お願い。その代り、昨日のように下男が来て、いじめると嫌やだから、

この行李に入れて、きちんと縛り、結び目に、封印をして下さいませんかしら』

私は、ルキ一の心が、判からなくなった。彼女は全身で甘え、運動会前夜の、小学生という期待に燃えている。

突然、私の心が疼いて、何にかを督促し、古い、知らなかった追憶が、呼び醒まされるような気がした。勿論、本能的なものだったろう。しかし、それは人間本来の本能が、首をもたげたという感情である。いや、確かにルキ一の眼は、妖しい輝やきで私の心を魅了し、魂に、魔法の粉末を振りかけていた。

『よし、そんなにまでいうなら縛ってやるが、痛いといって泣いても知らないよ』

『泣くもんですか。私は、貴方の大事にしている、お人形ですもの』悪戯ッ気が起きた。一寸の間、手を後方に振しろうかと迷ったが、だらりと垂れた手をそのままにして、行李から放り出された幅の広い布を取り上げ、ぐるぐると、肩から足まで巻き、包んでやった。

『私の大切な御人形が、毀れては、いけないからね』

行李は大きかったが、それでも、ルキ一を入れると、蓋が高く孕らんだ。私は、行李を軽く十文字に縛って、ごろんと、横に一回転し、序いでに縦に立てて、揺さぶって見た。それから、勢よく転がして、蓋を取ると、馥郁たる香りを放ちながら、パツと上気した顔が、眼の中に飛びこんで来る。が、あの可愛いらしい眼は、何故、開けたのかと訝かっている。

『フン、意気地なしで弱虫の旦那様』

赤い唇から毒舌が洩れた。ようし、少し懲らしめる必要がある。私は、お雛様を蔵まう時のように、毛布で、彼女の顔全体をくるみ、再び蓋をした。

「お人形。生きていない只の品物」そう心に言い聞かせながら、態ざと、行李を横にしたり、裏にひっくり返えしたりして、細引を強

よく緊め、その度に、甘い歌声が厚い布を通して、私の耳を擦ぐった。

最後の結び目が造くられると、私は、日頃から大事にしている日本紙と、糊を出して、言われた通りに封印をし、その上に、べたりと判を押した。

そうだ。今日は午前十時に、宗慶と会見する予定だった。それなのに、時計は、早や十時二十分を指している。私は、大急ぎで車を駆った。

しかし、ルキ一の悪戯は、この大事な会見を目茶苦茶にしてしまった。色々な意味で、今日こそは相当突っ込んだ問題に入ろうと、気負っていたのだが、事がデリケートであっただけに、乱れた動悸が、冷静を保うとすればする程、話題を混乱に導びいていった。

宗氏も、この会見には、或る期待を掛けていたに違いない。それなのに、私の態度が伝染したのだろう。問題の核心が突けなくて、お互いに焦燥を感じつつ、待たに時が経ってしまった。遂に宗氏は、白髪の交った頭を横に振って、話題を変えていった。

『そうそう。堅苦しい御話は、また後ですとして、内の宝蘭に、会って下さらんか。何にか貴方に、おねだりするんだって、待っていますよ』

宝蘭、宝蘭こそ、私にとって、世界中で唯一人の女性である。華僑という自由で奔放な、しかも、がっちり生活に根を下した特別の環境は、古い支那という観念からは、想像も出来ない近代性と、特殊な融通性の中に、柔軟で自由な生活が営まれている。

その上、富豪が持つ、良い意味での享楽性と、鷹揚さに育てられ、高い教養と、妖精のようなコケテツシユを備えて、生れ成長して来た彼女は、背丈こそ余り高くなかったが、日本人に似て、黒眼、黒髪で、また何処となく、ルキ一にも共通した容貌を持って、私にも気易く接してくれる。

最初の二回、三回の会見は、好ましいという印象こそあったが、今のようになく深い感情ではなかった。それが宝蘭が愛用車を自分で運転して交通違反を犯して、日本の憲兵に捕まり、非常に困っていたのを、助けたことから、急速に発展し、何時の間にか、言葉以外の言葉が、囁やかれるようになっていった。

私もそうだったが、嘗て彼女は、私の出現に、今まで眠っていた魂が、はっと醒まされる思いがしたと、洩らしたことがある。最初こそ、父の政策に踊らうと、努めたのも、事実だろう。が、今の二人には、国境も、戦争もなかった。

『おねだりって、何んです』

『何んでもないんです。明日の日曜日に、テニスを教えて下さいませんか？』

ふくよかな腕が、私に絡らみついた時、普段なら、それだけで、その接触面から不思議な熱線が体内に伝導し、駆け廻ったことだろう。勿論、嬉しかった。が、今日は其の中に、一抹の不純なものがあるのを、恋人の敏感さで、彼女は受けとっていたに違いない。『おや？』という不審そうな顔は、直ぐ口惜しいと云うように歪がみ、次に、やっきとなって私を離なすまいと、無理な嬌態を示し始めた。

そして、此の焦燥は、折柄、来合わせた宗氏にも波及して、若し、このままの状態では帰えしたら、私に對して大きな恥辱であり、事業の支障を来すとも考えたのか、執拗に私を離なさなかった。

宗氏には、大きな魂胆が隠くされていた。それは、私の背後にある権力と提携して、途方もない大事業をでっち上げる野心である。しかし、私がそれを聞いて、愕然、色を失ったのは、もっと後のことである。

宝蘭に至っては、前々から、今日の訪問に胸を躍らしていただけに、何度か浮かした腰も、椅子に針付けにされ、本当に、宗家の門

を辞したのは、既に四時を過ぎていた。

ルキーは、如何しているだろう。息せき切って駆け戻った私は、部屋の前で取りだした鍵が、カチカチと、慄え啼いていたのを、今でも判っきりと思い出す。

部屋は、むっとする暖気に包まれていたが、静寂であった。行李は絨氈の端に投げだされ、蠅が一匹羽を休めていた。何んだか、寄るのが怖いような気持ちに襲われたが、足を忍ばせて見ると、不意に、蠅が飛び上がり、若々しい匂が、ブーンと漂ってくる。

『ルキー』

私は、手を軽く行李のふちにかけて、小さく揺すりながら、小声で呼んだ。一瞬、行李は、キュツと緊まり、次の瞬間、激しく慄え始めた。

『よしよし。さぞ、辛かったろう』

私は本気でそう思い、同時に、今から遊ばなくてはと、心が眩やいた。早く出してやろうと云う口実は、行李を邪慳に扱える。

封印は、元のままだった。ナイフという字が、頭の中をかすめたが、私は固く縛った結び目を、無理に指先で解きつつ、行李を横に縦に、逆さにして見た。その度に、短かい音楽が、幽かに洩れるのは、やはり、ルキーの奴、参っていたのだろう。

やっと蓋に手がかかり、さっと若々しい香水が部屋中に流れ、先刻の蠅が、仲間を連れて、行李の廻りを踊りはねている。

くしやくしやになった毛布の中から、ルキーの顔を取り出したが、ひどい汗で、ぐるぐる巻かれた布も、じっとりと濡れている。私は、慌ただしく波立っている彼女を担いで、ベッドに運こんでやった。

『随分、遅かったんですね』

その言葉には、千万量の怨みが込められているようだった。

『どうだ。懲りたろう』

私は、ゆっくりと布を解きながら、顔を覗き込んだ。しかし、ル

キーは、懲りたとは言わずに、臉を二度、瞬いて返事の代りにして
いた。ただ非常に疲れたらしい。

それからの一時間は、何んという素晴らしさだったろう。私は、
バスタオルで、全身の汗を隅から隅まで拭くってやり、マッサージ
を優しく施してやった。そうだ。どの部分に触れても、ビクンと筋
肉が躍動し、ねっとり汗ばんだ軟体動物は、妖しい香気を発散し
つつ、私の心臓深く、微妙な電流を流していった。

当時の私は、まだSとは程遠い、存在だったに違いない。しかし、
その素質は、意識をしない中に、心の隅に巣喰っていたのだ。しか
も、それから来る喜びは、お互いの深い理解と愛の絆を基として、
MとSの完全な融合によって出来上がる。そして、厳しさと、苛酷
な体刑の後に来る深い愛撫によって、更に強い感情と、美の表現が
完成されるということを、私は無意識の中に学んだのである。

学び。私は、先天的に其の資格を持ちながら、一日一日と訓練さ
れていった。そして、この訓練こそ、ただ単に、私とルキーの間で
なされたのではなく、もっと大きな指令の手が指図していたのを、
当時の私は、全然、知らなかった。

三

翌朝遅く、私は、ひどい仏頂面で、しぶしぶ寢床から這いだした。
それは、睡眠不足も手伝っていたが、ルキーと、顔を合わせるのが、
羞かしいような、怖いような心持で、つい床から起き上がれなかつ
たことも、原因していた。

けれども本当は、古い因習からくる、誤った良心の疼きに、自分
自身で耐え得られなかった。と同時に、もっと強い刺激と期待が、
心の何処かで餓え、それらが、不機嫌という形で表現されたものと
思う。

ルキーも、今朝は機嫌が良くなかった。毎朝取り交わす、

『お早ようございます』の挨拶に、私が答えなかったのが、いけな
かったのかも知れない。

何んでもないことに、邪魔を企て、無言の中に、罪のない反抗を
示めた。

「ルキーよ。昨日は遅くなってしまって、本当に済まなかった」と
いう贖罪の心持も多分に含まれて、私は、極力自制を計った心算だ
が、何故だか、笑顔が出来なかった。

それが、却って誤解され、しかも其の誤解が、また私の胸に戻っ
て、益々、お互いの心がちぐはぐに付きだし、段々と身動きが出来
なくなってきた。

けれども、宝蘭が今朝訪ねて来ると、私が知らした時、ルキーの
心は、遂にヒステリーを爆発させてしまった。

『旦那様。今日だけ、宝蘭様にお会いしないで。そんなの嫌です。
もうこれ以上私を、いじめないで下さい』

こんなことは絶えてなかった。あんなに仲の良い宝蘭とルキーが、
一体、如何したことになるだろう。私には、到底、理解の出来る問題
ではなかった。

罪のない反抗が、罪のある反抗と代り、事毎に盾ついていった。

グレーのセーターを出せと言え、急いで、それを隠してしまう。
下男に、ネットを張らせようと言え、道具入れの箱に鍵を掛けて、

これ見よがしに、鍵を胸の中へ落してしまう。ラケットも何処かえ
蔵って、いやいやと首を振っている。而かも、昨日の気まずい宝蘭
との別れから言っても、今日は、私にとって、掛替えのない、重大
な一日である。

私は、ルキーに瞞まされまいとした。昨日の二の舞を演じ、それ
こそ、永久にルキーを失うようなことが、あってはならぬと、限度
を越えて冷静になろうとし、命令は懇願に代え、事を別けて、彼女
を説き伏せようと努めた。

「図に乗る」という言葉があるけれどルキは、下手に出れば出る程、依怙地になって嘲弄をし、知らず知らずの中に、私をして激しい怒りに狩り立て、我を忘れさせられていった。



がっている荷物から、縄や紐を素早く解くには、余りにも複雑に固く結わえてある。宝蘭は、何時ものように、ずんぐりと私の部屋へ、足どりも軽げに、近づいて来るだろう。

今は、たまらない程、彼女が憎らしく、いじめぬいてもあきたらない残酷な心持が、むくむくと頭をもたげ始めた。

そして、その結果、道具箱の鍵を、取り上げるためには、彼女の青白い手を、後ろに高く捻じらないうと駄目だった。いや、捻じ上げるだけでなく、結局、丈夫な紐の助けを借り、両手ばかりか、全身をくねらして反抗する彼女の足も、胴も、首さえも、紐が静止を命じないと、鍵が取れなかった。

ラケットの置場所を知るためには、紐の上に縄をかけ、結び目の上に結び目を作り、鼻を抓ねらないと判らなかった。

こうして、やっとラケットを手にして、ほっと息をついた時、突然、自動車の警笛が外から流れ、耳を揺さぶったのである。

『しまった』

何時の間にか、時計は駆け足をしていった。しかも、私の部屋に転

咄嗟に、私は決心をして、紐に手を掛ける代りに、ルキ一の小さな口を開けて、私の使い古したハンカチーフを押し込み、側にあったネクタイで上から縛り、大急ぎで、洋服箆の中、転がし込んだが、箆の戸を締めるか、締めない中に、真白なスポーツ服をまとった宝蘭が、部屋の前で、媚然と微笑んでいた。

宝蘭は、昨日の嬌態とは引きかえ、今日は特に可愛いらしい顔を、にこやかに綻らぼしている。私の顔は複雑だった。が、極力微笑もうと努力したし、事実、嬉しくもあった筈である。これが幸をしたと云うのか、疑いを知らなかった宝蘭は、私の姿を見ただけで胸が躍ったようで、駆け寄りざま、ぐっと手を握んで、唇を前に突き出した。

『よく来て呉れましたね。嬉しい。でも昨日は本当に悪かった。御免なさいね。そう云えば、今日もちよっとの間ですが、正午に如何しても抜けられない用事が、出来たんですが、許して呉れますか』
『ええ、仕方がありませんわ。けれど公彦様。御用は直ぐお済みになるんですよ』

意外なほど、神妙で、甘い鼻にかゝったソプラノが、部屋から洋服箆の中へと、流れ染み通っていった。

この瞬間、私の胸の中で二つの感情が、急激に渦を巻き始めた。一つの渦は、大きな歓喜であり、今一つは、非常な不安である。今は何に措いても、早く、ルキ一を箆の前から、引張り出さなければいけない。が宝蘭は、私の心を知らなかった。

『公彦様。ルキ一は何処に居りますの』

ぐさっと言葉が心臓に刺さり、鼓動を凍漬けてしまった。私は、観念の眼を閉じて、箆の中から聞えるであろう小さな音に、ジッと耳を澄ました。が、伝わって来たのは、台所で触れ合ったコップの音だけである。

「神、我を救い給う」私は、ひそかに太い息を吐いた。

『ええ、ちよっと、町へ買物にやっただけです。そうだ。それよりも、早速、汗を流しませんか』

『そうなの、私、お父様から、ルキ一に閑暇があったら、明日でも明後日でも良いから、ちよっと来て欲しいと云う、お言伝を頼まれましたのよ。ほら、明後日はルキ一のお誕生日ですよ。だから、何にか御祝品を上げるんですって。父は、そんなことが、とても好きなんですのよ』

ゴトリと、箆が軋んだ。もう一刻の猶予も出来ない。抱えるようにして、私は彼女をせきたててテニス・コートへ連れ出したが、それは、何んと情けない競技だったろう。

本当に『教える』という言葉、昨日使うのではなかった。口惜しいぐらい惨めで、焦れば焦れるほど、手首が云うことを聴いてくれない。短気を起して、ネットプレーに出れば、球はフワリと頭上を越して、私を嘲り笑っている。

しかし、これは予期してなかった収穫で、彼女を、すっかり喜ばし、昨日の暗雲が、すっかり拭われ、晴れやかな青空が、彼女の心の中で拡がっていった。そして一時間後、渇いた咽喉に、ナンカの冷たい果汁が甘く流れ、午後の再会を約して、嬉れしように、はしゃぐ彼女を、無事に自動車の中へ送りこむことが出来た。

正午の用件というのは、洋服箆の中にある。車を見送ってから、私はゆっくりと足を運びつゝ、胸が胸に話しかけていた。

「先ずルキ一を、早く解いてやらなければ可哀想だ。しかし、お仕置はちやんと置いて置かないと、また同じような悪戯をする傾向がある。でも、この浮きくとした心持は、一体、如何したというんだらう。宝蘭の故だか、ルキ一のためだか判からないが、悪魔が踊りに誘うような匂いだけは、確かに感ぜられる。いけないことかも知れない。がもう骰子は、既に投げられてしまったのだ」

意外なことに、箆の中のルキ一は、すっかり落着いていて、戸

を開けると、下半分がネクタイで歪んだ顔を、すりつけるように近づけ、全身で甘えてきた。不思議にも、私がネクタイに手を掛けると、嫌や／＼をし、眼がぐっと輝やいて、妖魔の幻術を現わし、却って私を掴み、捕虜として離さないでいる。

そうだ。本当に骰子は投げられ、もうアト戻りは出来ない。私は、判つきりと緊縛が如何な快楽を与えてくれるか。ルキ一の喜びが如何なものであるかを知った。

そして私は、知らず／＼の中に、MSプレー第一課の勉強を、始めていたのである。

五

ルキ一の誕生日に、宗慶甫からはジャスミンの香水が届けられ、私からは本絹のシユミーズと紫水晶の耳輪が、プレゼントされた。共に当時では得難い品物である。その返礼にルキ一は、S第二課の授業を懇願した。

それは、今までと違って、ゆっくりと、二人だけの楽しい世界を、心ゆくばかり満喫さしてくれた。

縦横十文字に廻わされた紐の中で、真円になった物体が、あちらに滑べり、こちらに転がると、その度に紫の耳輪が美しく光り、何んとも云えない香気が溢れる。

『痛くないかい』

と聞くと、首を無理に振って、

『もっと、強つくして』とせがむ。

そして、部屋の隅から、不自由な身体を狩り立て、私を追い廻わし、私に近づくと、まるで牀内に潜ぐり込もうとするように、ぐい／＼と押してくる。それを掬い上げてやると、濡れた唇を突き出して、私の口に舐めやぶりつき、その熱い息が、咽喉に触れる時、私は、思わず快哉を叫ばずにはいられなかった。

汗ばんだ弾力のある肢体に、指を突っこむのも面白かった。そして、ビチ／＼と動ぎ跳ねる其の感触は、気狂いのように亢奮させて、止むところを知らなかった。

こうして、二週間というものは、瞬く間に過ぎて行き、その間、抓る喜びも、擦ぐる楽しさも味わった。海老責め、ガンヂガラメ、蛙縛りも教わって、ルキ一の身体の間々まで知り尽くした。

この点、彼女は、実に良い先生であった。そして、無邪気な表情と軽い抵抗を、アクセサリーとし、私の技術を指導し、また直ぐに反応して其の喜びを、卒直に、現わすのだった。

殊にルキ一は、猿轡と私の匂いを好んだ。いや、ルキ一自身が、一つの強烈な香りを発散する物体で、彼女が亢奮して熱すると、四辺は馥郁たる香氣が漂い、私を、武陵桃源の仙境に誘いこんだ。

しかし、之等の技法も、それだけで終ったならば、如何なに味気ないものだったろう。

死んだ方が、どれほど幸福かと思われる若痛も、深い愛情と信頼がなかったならば、偉大なる芸術は生れ出てこない。いや、緊縛をする前の芝居や、行爲の中から、既に美の創造が始められ、縄から解き放された後の、愛撫と労わりは、私にとって、何物にも代え難い天国の美酒である。

私は、この天国の美酒をより甘美なものにするために、殊更、彼女に対して荒々しい残虐ぶりを発揮していった。

私達は、技術的にも、精神的にも、目覚ましい成長をしていった。もう行李は余り使用しないで、外からよく判り、上から悪戯の出来る、支那米の袋か、ダッチワイフの細長いカバーが利用された。

九月に近い或る土曜日の午後、私は、軽くステップを踏んで、司令部から戻ってきた。部屋に入ると、もう足音を聞きつけて、灰色の袋が小刻みに揺れている。私は、帰宅した挨拶の代りに、袋へ腰を下ろし、徐むろに足を挙げて靴紐を解き始めた。踊る／＼柔らか

な坐布団が、声のない喚声をあげて喜んでゐる。

私は、上衣を脱いでワイシャツの袖をまくり、股を開いて袋の口を、ほんの少し開けた。その口からは大理石のような爪先が顔を出し、きつちりと縛られた足は、神経を尖んがらかして、次にくる期待に震えてゐる。

私は、軽く小指を曲げて、コソ／＼と擦るぐつて見た。すると、汗に濡れた布を通して、声なき声が腰の下で奏でられ、ボロ自動車に砂利道を喘えぐように、激しく揺れた。そして、拘束された指先が、背一杯、のた打ち廻る其の震動に、私は、得も云われぬ法悦の世界に溶けて行くようだった。

突然。私の心臓は停止し、雷のような閃光が背筋から足の爪先に走り去るのを感じた。何にか何者かと居る。この部屋の何処かで、私と彼女の演技をジッと凝視している眼がある。慄然として思わず臉を閉じると、心がカツ／＼と燃え沸き始めるのが意識された。

『クツ／＼』

また忍び笑いが響いてくる。

判った。洋服筆箱の中だ。その瞬間、音もたてずに立ち上った私は、黒豹、そのものの姿であり、素早い行動だった。而も、無意識の中に掴んだ陶製の灰皿を、右手高く差し上げて、筆箱の前に忍び寄り、勇を鼓して、サツと戸を押し開いた。

『オホ、／＼、／＼』

もう声を殺した笑いではなかった。下腹を押さえ高らかに咽喉を震わしているのは、何んと、シユミーズ一枚の姿で屈んでいる、ルキーではないか。

呆然自失。そんな言葉すら忘れて、突っ立った私は、本当のデクの棒であった。

『旦那様。私の差し上げましたプレゼント、御気に召しまして』
おゝ、支那米の袋の中にもルキーがいる。いや、ルキーではない

何者かと。

私は、急に亢奮の冷めて行くのが、自分自身で感じられた。我が家には、下男も、ネシヤ女中も居り、ルキーと共演している演劇は、陰ながら見物していることだろう。それだからといって、私はルキー以外の者が参加することは、私の芸術を冒瀆すること、絶対に御免を蒙りたい。

『女中エダよ、如何か。私の芸術的良心を許してくれ』

そう願いつゝ、私は、袋に近より、ぐつと口を大きく開けて逆さにしたが、次の言葉は出なかった。

白い彫刻は、今朝、ルキーに粧った通りに、胸と胴を紐で二つに分け、高く後手に重ねられた交叉点から、首に延びた白紐が、ピンと張って、更に腰下を潜ぐり、元の手首に戻っている。顔は、私が今朝外したばかりの下布が、殆んど眼だけを除けて喰い入っている、その儘の姿で、宝蘭が、ドサリと、投げだされたではないか。

私の口は自分の意志を發表することが出来ず、意味の判らない言葉、もが／＼と呟ふやいた。

『何んと云うことだ。いや、こうしてはいられない。早く／＼、何んとかしなければ。そうだ。縄だ。第一に紐を取ってやらなければ……』

私の手は夢中になって、たゞ徒らに紐を引掻き廻わしていた。結び目が固くて『痛い』と感じる。それでも如何にか彼女の両手を解き、足を自由にしてやって、口の中から下布を、ずる／＼と引きづり出した。

『ルキーの意地悪』

宝蘭は、つい、こう叫んでいた。それは、ルキーの高笑いによつて、折角、楽しもうとしていた遊戯が、余りにも早やく終結部が奏でられた其の不満が、つい、この叫び声となったのに違いない。それなのに、其の時の私は、全然、意味を取り違がえていた。

『うん。何んにも知らない宝蘭が、私の部屋へ来て、ルキーを助け出してやったのに、悪戯好きなルキーは、恩を仇で返えして、彼女を押さえ、無理矢理に自分の身代りにしてしまったのだ。無情なルキー。そうだ。不人情で、意地悪で、悪魔のように憎くんでも余りあるルキー』

命令を受け、けしかけられた猛犬。私が、ルキーに飛びかゝった姿は、それだった。宝蘭も自分の腕を擦すりながら、私達の争斗を楽しそうに見ていたが、やにわに、躍り上って駆けより、加勢をしだした。

ルキーは、まだ高い声で笑っていたが、身体は懸命になつてもがき、必死に抵抗を試みていた。

そのため、紐は必要以上に強く緊まり、縄は生物になつて噛みつき、腕も、胸も、胸も、胴もくびれ、足も振じれて、冷静に見れば、眼も当てられない、無惨な荷物となつて転ろがされてしまった。

宝蘭は手を叩いて『好哉々々』と叫び、其の周りを踊り舞っている。

五

この洗練された、高貴とも形容した宝蘭が、また同好同志であつたとは、最初、如何しても信じられなかった。



けれども、ルキーの悪戯は、私達の間に垂れていた一枚のペールを、サッと吹き上げ、赤裸々な魂と魂の触れあいに役立った。そして、この日を境にして、宝蘭はまったく私の肉体の一部にな

り、剥き出しにした愛情を以って私に突進し、ペルシヤ猫が鼻を鳴らして擦り寄るように、甘え枝垂れ掛ってきた。

会えば直ぐ、上手な誘導で、私が苛酷な命令を与えるように強要し、それに絶対服従することを以って、大きな喜びを感じていた。

時には、わざと反抗を示めして、私を愚弄し、私の行動を悉く邪魔し、嘲笑して、最後には、汗びっしりになる、激しい緊縛の重労働を、強いることもあった。

本当に、宝蘭は、ルキー以上に、この道の訓練が積み重ねられたエキスパートであった。その経験と本能から、私自身が知らなかった、私の本心を、前から掴んでいたのである。

二人は、正確に日を決めて奉仕をし、私をして、益々、この道の奥義に達するように、学ばしてくれた。不思議にも、彼女達は喧嘩一つしないので、寄るとさわると額をつけあって、色々な計画を廻くらし、私に実行させては嬉れしがつていた。

また後日、宗氏と二人切りで微醺を交わした時、白髪が、ついアルコールに溶けて口を滑べらしたのだが、図らずも、ルキーが、宗氏第四夫人の子であり、いわば、宝蘭と義姉妹であることも判った。

こうして、偶然と思われた愛の芸術も、実はルキーの創作でなく、宝蘭が、そーッと拵しえていたのだ。が、更に其の背後に何にかあるのか、その時、私は迂濶にも、少しの疑いすら懷いてはいなかった。

芸術は複雑化し、程度の高い演出に、その楽しみと喜びは、昨日より今日、今日より明日へと飛躍しつづけ、また宝蘭の愛がいよいよ強く、絶対なものになってくるにつけ、フト彼女の胸に、嫉妬とか、妬みという心持よりも、もっと怖ろしい疑惑の影が、射しこんできた。

それは、私と何時も寝起きを共にしているルキーが、緊縛の喜び

に、うっとり潤るんだ眼を、妖しいまでに輝やかすのを、見ている中に、一本の毒矢が、ぐさつと可愛い胸に刺ったらしい。

私も、いけなかった。この強烈な遊びに圧倒されて、夢中になり、恋人と妹との愛情の区別を判っきりと表現しなかったからだ。

思い余った宝蘭は、遂に、ルキーへ、残酷にも、皮革と金属から出来ている奇怪な型をした貞操帯を、宝蘭が居ない時は、何時でも、身に着けなければならぬと云う、命令が下された。

これは、最初、私達の間に大喝采を以って迎えられたが、困ったことに、これに着けると御手洗に行けないことである。

勿論、唯一の鍵は、宝蘭が持ち帰ってしまうし、海浜で見かける人手のような怪物は、しっかりと股に吸いついて、少しの間隙も、与えてくれない。可哀想なルキーは、泣いてこれの改造を懇願したが、ようやく赤ん坊の「おしめ」に似た布を入れることが、許されたわけである。

こうして、宝蘭の心配が、取り除かれると、彼女自身も同じ苦痛を味いたがった。そして、さよならを云う時は何時でも、私の手を借りて、同じ型の貞操帯を着けさせ、鍵を私に預けて帰っていった。

でも、私が用事のため、二・三日ジャカルタの町を留守にする時、彼女は一体、如何しているのだろうか。一度それとなく、顔を赤らめながら尋ねたが、ちよつと困った顔をしてから、黙って濡れた雑布を振って見せるのだった。

ルキーは、これに着け始めてから、水も、飲物も、出来るだけ節約しようとしている。しかし、南方の強い日の光りは、その無謀を嘲笑しているのか、余計に、彼女の咽喉を焼き焦がし、甘い溶けそうな果汁が誘惑の媚態を示めして、却って、じっとり濡れた布を、気持悪そうに着ける結果となり、いよいよ強く、彼女特有の香気を放っていた。

私達の芸術祭に、宝蘭が、加ってからは今までの遊戯ばかりでな

く、簡単なストーリーを、組立てゝやる事が多くなった。

例えば、十種ほどの間隔がある柔い鎖で、足首と膝頭を束縛し、両手は、お祈りをする時のように前で揃えて、細い革紐を肘まで網目に巻き、きっちり組み合わされた掌に、ボクシングで使う、グローブの片方が嵌められる。

こんな様子で拳斗が始まる。拳斗ではなくレスリング。いや、規則は部屋の中央に敷かれた絨氈から、兎に角、外へ飛び出した方が負けという簡単な競技である。また或る時はこの上に黒い厚い布で、眼隠しをしてやったこともあった。

奇怪で滑稽な斗争であった。不自由な両手を、相手目掛けて勢よく突きだしたが、鎖が足に悪戯をして、ずってんどうと前のめりに転回運動を試みる其のアクロバット。

その転がった相手の身体に預づいて、逆立をして振る、尻のダンス。足と手が絡らみ纏つれあつて、如何しても解けず、思はず頬と頬をすり寄せて、赤い息を吐く二人の選手。手の間に足が、腰の下に頭が重なりあつて横に廻る輪舞。

それは、凄惨なスポーツというより、笑と美を混合した舞踊劇で、至る処に奇妙な芸術の創造を繰り展げていた。しかし、何時かは戦いも終り、ちよつとした油断が、二人に運命の宣告を下だす時がやってくる。

勝名乗りが終ると、私は、彫刻家に早変りをし、勝者はモデルに、敗者は粘土の固まりとなつて襤褸布に包まわれる。

天才芸術家は、在り来たりのポーズでは、インスピレーションが湧いてこない。例えば諧謔の中に真の美を見出だそうとする。

モデルは、足を前に投げ出して、やゝ前屈みになり顎をぐっと突き出す。「にらめっこ」笑つたら負けよと、子供達がよくやるように、顔の半分を歪がめて片眼をつぶり、指先を使って鼻と口を醜く曲げ、大きな舌をペロリと出す。

モデルのポーズは六ヶ敷しく、色々と駄目が出て、手の位置を直し顔をいじくり廻わして、やつと形が定まると、始めて雑布のような襤褸から粘土を取り出して、創作にとりかかる。

私は其の時、木炭の粉末を手につけながら製作を始める。所謂、私の指先が、粘土の如何な部分にも触れない処がないよう、それを見別ける為めに。

大体のポーズを創くると細部の製作にかゝる。先ず胸から胴、腰、手、足と。足の裏を造りかゝると、粘土は生物のようにピクピク動いて擦ぐつたい表情を示す。

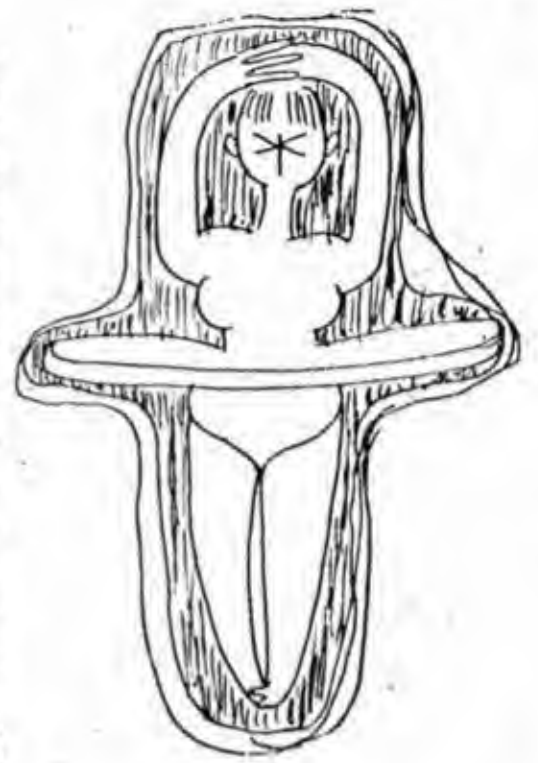
アトリエが蒸され、塑造の髪の毛から、歪がんだ鼻、口、ダラリと垂れた舌までが、黒黒と染められる頃になると、モデルはようやく疲れを覚えてくる。

芸術家の神経は鋭く繊細である。崩れたポーズを直すために、つい、紐や裳が必要になつてくる。けれども、粘土には疲れという言葉が許されていない。

おゝ、出来上つた。青銅の像のように、黒ずんだ彫刻を前にして私はモデルと思わず抱きあう。そして、再び彫刻が毀れられないように、綿や当て木を使って、慎重に白布で包んでやる。ペロツと垂れた舌まで丁寧に繙帯が巻かれ、その前で、芸術の謳歌と、愛の歓喜が交わされるのだった。

宝蘭とルキーという、このこよなく卓絶した良き指導者を得て、私の眠れるMS意識は急激に伸擡していった。それは占領地に於ける占領軍対現地住民という関係も大いに影響していたであらうし、又、日に数回或は十数回もマンデーをしなければならぬ赤道直下の熱帯国という開放的な、それでいて強い刺戟を求めてやまない氣候のせいでもあったに違いない。

(次号へ続く)



マゾヒズムへのいざない

(第三回)

天 野 哲 夫

いろいろな告白を耳にし、いろいろな告白的読物に目を通したりする機会は多くあったが、私はまだ本当の告白にぶつかったことがない。告白とはなまじっかな気構えや単なるひやかしじみた精神からは生れない。といって偏屈なまでに深刻ぶったり、不当にアブを神聖視してみせると事実は必然的に歪曲せられる。告白は矢張一つの芸術であるべきだ。人を感動させない告白は無意味だ。それは単なる精神的露出趣味に墮するばかりで一時的に同好者の欲情を刺激し得ても、のめりこむような真の共鳴と、正常異常を問わず人間をして広く深い感動を与えることは出来ない。私は決して窮屈な定義を此処に持出して、変に尊大ぶろうとしているのではない。もっともっとと素晴らしい共鳴と陶醉とをば、お互分ち合うことの可能と、それへの期待に胸を燃すからだ。その点沼氏の「手帖」は貴重な存

在だと思う。「手帖」は単なる雑感ではない。一つの形式による告白だ。一つの精神を組成せる要素の一つを、あのようなかたちで解剖し、それを告白の位置にまでたかめた沼氏の業績はもっとと評価されてもよいのではないか「残酷なる女性達」の文献としての価値とは本質的に異なるところに「手帖」の意義がある私は「家畜人ヤブー」より「手帖」の方をはるかに評価したい。この点に関してかねがね書いてみたいものと思っただけだが、此の際は本題から外れそうなので又の機会にゆずることにする。私は私なりの告白を、それがいささか退屈の気味を感じさせるうらみを思い切った無視しながら続けようと思う。私の未完の作品「暗い欲望」の中から次の部分を紹介してみよう。

私は小学校の六年生だった。私はいわば出

来の良い生徒の一人だった。私はしかし妙に引込思案で、そのくせ大胆にも先生の教えることがらに軽い本能的な軽蔑を感じていた。運動場の午下り、私は一人でそこに群れている一団に目を注ぐ。何とも名状のしがたい感情が私をつかまえていたのだ。私の視線と、そのような感情の指向する先に可愛い少年達の汗に輝く顔と手があった。それから足と……私は彼等に近づき声をかけた。

「僕も仲間に入れて！」

彼等は五年生だった。みなドッチボールの手を休めてこちらを振向く。クリクリした目がとてもかわゆく健康だった。

「僕、四年生です。ね、いいでしょう？僕を仲間に入れて」

皆互に顔を見合わせた。この大柄な四年生をどう扱ったらいいのか、一寸はかりか

ねたのだろう。でもそれはほんの瞬間のこと、彼等の態度は彼等自身によって即座に決められた。

「ダメ！ 下級生はダメ！ ホラ、あっちへいった、いった……じゃまだったら、あっちへいけよ」

そう私にきめつけた子は眉が割に濃く、唇がチンマリとまるっこい。私はその子の断乎とした命令口調を聞いたとき、私を支える全神経がチリチリと激しく痛むのを感じた。下級生から更に下級生扱いされることが私の慾求とは！ 子供は本能主義者である。私はもっとも卒直にこの私の本能をこのようなかたちで呈出した。いっそあのボールを、思いきりつよく私の背中に、私の頭にぶつけてもらえたら……それもその時彼等のつぶらな瞳が、獲物をもてあそぶ野獣のあの残忍さで輝いていたとしたら、私はその時の痛みのために死んでしまうだろう。そしてそういう死を思うとき私はしびれる様な眩暈を感じるのだ。

私はそのころ、セックスについてまだなにも知らなかった。

「伯母さん。赤ちやんは、どうして出来るの？」

私は伯母に、こうして質問をした。

「まあ！」

伯母はあきれたように私を見ながら

「子供がそんなこと訊くもんじゃありません」

すげない返事だった。私は一寸頭を下げ横に坐っていた一つ年下の従兄弟の方を横目でみた。問いかけた本人の私よりも、かえって従兄弟の方がきまりわるげにしていた。その場のなんともいえぬぎこちない空気に私ははじめてそういう問いの意味するもの、大人というものを意味する世界、そういう未知なものを予感したようなあの空漠たる不安におののいたのだ。

「あの子は氣をつけないとあぶないよ」

伯父、伯母、それに私をとりまく大人達はいっぴくに厳しい調子で私の両親に注意したということだが、もっとも、私はそういう風な注意をうけるにふさわしい、いやにひねた子供だったのであろう。

しかし、それにしても当時の私は、まだなんにも知らなかったのだ。

「赤ちやんはあそこから生れるんだぞ」

そういういきる友達に対して

「そんなこと嘘だ。赤ちやんはお腹が割れて出てくるんだ」

私は自信を以て反撥したものだ。マゾヒストは生来本質的にレジスタンスの使徒であり、最も本質的に潔癖な人間であることを私は疑わない。このことも又事例を挙げながら後述したい。

私は確定したものを信じない。それがどんなに立派な考えであり、どんなに正当な理論であったとしても、それが確立されてしまってみれば、もうそれは虚偽だった。その正当さが完全でありすぎるためにそれを信じる気にはなれないのだ。その頃、級友達の殆んどがあのことを知っていた。赤ちやんがどこから生れるのかをも知っていた。子供達ほど利巧なものはない、彼等はない、なんにも知らぬ氣に大人達と接する。私はそうした子供達の既に知り待たものを信じなかった。

「赤ちやんはお腹が割れて出てくるんだぞ」

そのくせ私は、なにかも心得顔に大人達と接するのだ。そして私は大人達があのことを否定したり、あのことを私の目や耳あらゆる感覚から蔽いかくそうと努力するのを醜氣に氣付いたとき、大人達を信じなくなった。

「赤ちやんはどうして出来るの」

伯母に問いかけた私よりも横でおとなしやかにうつむいてた従兄弟の方が、ずっと狡いのだ。

一人の少女が無心に遊んでる。そっと私が覗きみる。露路に人影はない。何気なく見たとき、思わず私の足は少女の傍でとま

ってしまった。

何を遊んでるでもない。少女は只無中のだ。蟻の行列、少女の足元を無数の蟻がいそがしげな行列でつづいていた。その丁度行手に少女の大きな指先が、彼等をすり潰すために待ちうけているのだ。

前かがみに蹲まっている少女のオカッパが額のあたりに垂れ下ったままそよとも動かない。再び或る種の感動が私を捕え始めていた。

「なにしているの」

「蟻を殺してるの」

少女は無感動に答えた。その無感動さが私の感動をいよいよ誘った。

「どうして」

「どうして……蟻は悪い虫だからよ」

嘘だ。

私は心の中でいった。何がどうして嘘なのか分らない。でも、悪い虫だから蟻を殺すという少女の言葉をそのまま素直に受取る訳にはいかない。あのひたむきな真剣さ！あの憑かれたような目の色！それは残忍そのもので輝いていた。少女は殺すために殺していた。その残酷さが彼女の行為をひたすらに駆らせるのだ。その晩、私は蟻になって少女から殺される自分を空想し、いつ迄もねむれなかった。

卒業式、子供達にとって最も厳粛で、それでいて最も滑稽な儀式、男の子達は、真面目につくろわれた先生達の、並べられたその表情の一つ一つ、これほど不可思議で滑稽なものを外にしない。校長先生の訓話のあの無為な長い時間を、袖引き目引き、彼等は彼等なりに自分等の時間を創造する。この逃避は又正当なる一つの反応、一つのプロテストであるのかもしれない。

「おい、泣いてるぜ」

一人が一人にそっとささやく。又一人が一人にささやく。言わず語らず皆が横目で女生徒のなんている方へ視線を走らす。するとそこには黒くつややかなオカッパの列が皆一様にうなだれ、人目も構わず取り乱した有様で泣きじやくりを始めていた。男の子にとって女の涙は不思議だ。あの涙の正体は何なのか。涙の後で彼女等はきつと他愛もなく笑いこけるに決ってる筈だが……

私はその時、不図人気のない露路の光景を思った。

「悪い虫だから殺すのよ」

そう言った女の子のひたむきな残酷さ！あの憑かれたような目の色、それとこの式場における彼女等のあの匂いを含んだやるせなくも物哀しいコーラスとの重り合う位置を私は本能的に嗅ぎ求めている。彼女等

の歌声は優しかった。あの優しさが、あの優しさをこめて私に

「お前は悪い子だから殺してあげる」

と言ったとしたら、私は彼女等の足下にひれふして、どうしようもない感動に身もだえしたであろう。しかも私はその時、まだ何にも知らぬ子供だった。純情で感傷的な子供にすぎなかった。

ずい分長く引用した。しかし、矢張私自身の生い立ちと現在の状態とをば知っておいてもらわねばならぬ必要からそれは止むを得ない。私の告白「暗い慾望」「幻炎」と、この二つの文章を足場に、その先に私の語りたいものがある。なんだかテれたように遠くから薄笑いを泛べ、自己の不在証明をどのようにして得ておくか、いざとなったら逃げ出すんだと半ばへっぴり腰で書かれるマゾヒスト物これではやっぱりかたちを変えた場末のストリップ劇場の少々グロテスクな見世物と何等ちがいはない。世の人達の聲をかう所以である。又単に思いつきだけで書かれる小説がつまらないのと同様、思いつきだけで書かれるマゾヒズムはもはや滑稽ですらない。いつ迄たっても、そんな人、変態よ、と軽く片づけられ蔑まれる所以もここにある。表現技術の未熟さはお互様、それが本職でない限り見逃してもらわねばならぬ、しかし一つの視点

マゾヒストとは特殊な変態性慾者で、それは物語の中でだけで納得出来る、いわば一般人間には理解出来ない猟奇主義の信奉者、というような世間一般の画一主義に対しての抗議的意識だけはこれを常に熾烈にかきたてねばならないということである。これは異常性慾者および人達に勿論共通した問題でありただ単なる遊びとしての猥談のたぐいとははつきりして区別をつけなければならない。マゾヒズムは決して猥せつではない。一般の人達が女のはだかに興味を抱く気持と、マゾヒストがクリンニングスにおもいをさせる気持とは峻別しなければならぬ。前者は遊びであり、後者は生活である。生活をして遊びにおもねることなど、厳につつしんでもらいたい。

私がここで申し述べたいもう一つの不満、このことについては常日頃声を大にして訴えたく思いながらも、永い間その機会もなく打過ぎてきたことではあり、したがってその機会に恵まれたことを感謝しつつ、書き記してみたい。

夜の床で、ひそかにK・Kの頁をくりながら、与えられた醜態をさも貴重なものの様に口に含む男の挿絵などに胸をわけながら読み耽るマゾヒストの一人一人は互に何のつながりをも持たず、全くの孤立状態におかれているというものである。小説の中で、春琴抄よろしく繰りひろげられるマゾの物語に、一種の自慰にも似た興奮は得られるにもせよ、その興奮を一体どのように、どのような方法で解決すればよいのか、恰も鼻元につり下げられた餌を追って堂々めぐりをする馬か犬のような工合に、いっかなそのものにはありつけない状態におかれる。小説や、あるいは告白と称する読物には、丁度折よくあつらえ向きの気の勝った主家の娘とか、従姉妹などがいて「あたしの言うこと、何でもきくか」といきなり言い出して馬にしたり踏んづけたりする願ってもない話であるかはしらないが、こういう都合のいいケースというものはそうザラにあるわけがない。大多数のマゾヒストにとっては、主家の娘も従姉妹にも恵まれずにいるのである。よしんばいたしたところで都合よく「あたしのいうこと、何でもきくか」とは言うってくれぬのである。その上大部分のマゾヒストは、権威を笠にきてかかってくる卑劣な人種に対しては人一倍反逆的である。マゾヒストは往々にしてあまのじゃくであり、人見知りする場合が多い。一見これらはマゾヒズムと矛盾するようではあるが、ここにマゾヒズムの本当の姿がある。内部に於てさまざまに矛盾し合う要素が組み合い、しかも渾然と被虐への熱情にかられるところに生きたマゾヒストの姿がある。話が横道にそれそうなので又本題に戻る。

私の言いたいところは要するにただその欲

求を掻きたてるかのように、時には荒とう無稽な告白や読物にはありつけても、その最も実際の、しかも効果的な方法を教示、或いは研究し合う機会を与えられずにいる現状についてである。たまに会員組織のクラブか何かが出来る。問合せてみれば特別会員がどうの、一般会員がどうのといった営業機関である。そこではマゾまがいの遊びが行われるにしたとしても、決してそれはマゾそのものではない。マゾに生活をかけ、あるいはかけたいと望む者は金が無い。金など一文もかけられない方法がある筈だ。女から地面に食物を投げ与えられ、平手打ちをくった私の体験からいっても、そのことは、はつきり云える。卒直に、具体的に、理屈でなく実際の面から、そしてひけらかしではなく、本当に手をとる合ような工合に研究し合えないものか私はそれをやりたいと思う。そして筆をとり始めたのがこの文章である。そのためには私の生い立ちや何かを知ってもらわねばならぬので、一番手近な「暗い欲望」を紹介するところから始めた。それがあるいは退屈な感じを与えるかもしれない。しかし、その点何卒御辛抱願いたい。

一人でも私の趣旨に共鳴して下さる人があらんことを願いつつ……

(未完)

創

作

ゆうべのお客様



近

藤

一

五月から遅番でお店に出て来る女の子にのり子という娘がいます。

昼間は歴とした女子大生なんです。家庭も裕福らしいし、それとなく調べたところでは学校の成績も良い模範生とのことでした。或人からきいて来たこと云って履歴書を持って直接私を訪ねて来た、云うならば当節流行の学生アルバイトなのです。いろ／＼云うに云えない事情もありそうだったので、私も一切を呑み込んで偽って貰うことにしました。

漆黒の豊かな髪を綺麗に梳って、真白い襟足を覗かせたのり子のびち／＼した姿態を見ていると忘れてしまった青春が心に甦って来るようで、私にはのり子がまるで妹、いいえ私の分身のような気持がするのです。ですから私がのり子を他の女の子達より可愛がったことも当然でしょう。

のり子もまた、私を慕ってくれました。私に話しかける時、私の傍にそっと立ったままふり向くまで待っています。私がわざと知らん顔をしていると、「ねエ、ママア」とアル

トの声を甘くのぼして呼びかけるのです。そつと横目で見るとフレアースカーートの膝のあたりが小刻みに可愛く揺れています。

お店は二階建、階下を喫茶、階上をバアにしています。赤線とか青線とか云われる一角を控えた街並にあるので、時間をつなぐらしいお客で、いつもかなりな繁盛を見せています。

昨夜の閉店間際でした。三人の男の方が綺麗なお嬢様を連れて二階のボックスへいらつしやいました。いずれも人品の良い方ばかり殊に焦茶の地に銀の細い縦縞の背広をお召しの方は六十年輩の方でしょうか、一見した御様子、その少女のお父様らしいのです。いつもは階下にいるのり子が閉店間際のことなので気易くおしほりをお持ちしたり、お給仕をしたりするのを、勿論たしなめる氣も起りませんでした。

私が階下から戻って来ると、確かビールのおしやくをしていた筈ののり子がスタンドの隅でしょんぼりしています。

「どおしたの？ 氣持悪い？」

のり子は頭を横にふりました。見ると、胸のあたりが濡れていて、眼に光るものが溜っています。

「駄目よ、少し位お相手しなくちや。こんないい体してて飲めないなんてことないわ。」
「だって、だって、鼻からなんて、飲めないわ。」

「いらつしやいませ。」

銀髪の男性と、その傍の少女は、私に丁寧に応えて下さいました。私はビールをすすめながら誰にもなく云いました。

「女の子が御冗談を本氣にして泣いてますのよ。困りますわ。」

「マダムが身代りを努めてくれるのかい？」

二十二、三の青年が云いました。

「私にお相手が努めますかしら。私も鼻からではお酒を頂けませんから。」

私はもう一人の二十七、八の青年と、その若い青年との間に坐らされました。

「マダム、ちよつと酷い眼に合わせるけど逃げ出さない？」年下の青年が云いました。

「まあこわい。私もかよわい女ですもの。酷いことをなされば泣きますけれど、今更逃げ隠れするとしてもございせん、器用に泣かされてあげますわ。」

私は酔払いを扱う意識で応待していました。お嬢様が、まるで哀願するかのような真剣な眼付で私に会釈なさいました。温顔に微笑をたたえた老紳士と、清純そのものの少女とが並んでいる処は盛り場のバアに夢幻の雰囲気

氣を誘います。そんな中で「覚悟はいいね。」という囁きと共に、私の両手首は左右の青年に取られ、背後に捻じられていたのです。店の娘達と違って私はいつも和服でお店に出ます。若い娘達と体の線は競えませんが、それに酔眼で見られるせいもあるのでしょう。三と和服でいる時は實際よりも遙かに若く、三十そこ〳〵に見て貰える喜びも秘めているのです。ゆうべは菊の花に流れをあらわした白地の浴衣を着ていました。

右側の青年が緑色の、恐らくはお嬢様のものとかわる眼のさめるような扱帯を出して私の胸に二巻きした時、私は縛られるという感じを既に当然のこととして受け容れていました。お客様の中には私を縛ってながらもからお酒を召上がるのを楽しみにしていらつしやる方があるのです。それでもおかしいことにこんな上品な方々が逃げる筈もない私を何も縛る迄の事もないのに……という氣持もはつきり湧いて来て私は眼の前のお嬢様を見たのです。それがお嬢様の視線にふれるとその余りの美しさ清らかさに打たれたというのかしら、何か本心に罪を犯して処刑の庭に曳き出された囚人のような感じに陥ったのです。私は従順と、いいえむしろ進んで両の手首を重ね頂垂れていました。別の紐（あとで見ると綿ロープでした）で浴衣の上から両脚を腿から足首まできっちり括り合わされ

て私は完全に祭壇に供えられた女身でした。お嬢様がのり子を呼んで私にも何か飲物を作るように命じました。私は四肢を失った胴体だけのような妙な気持のまま、シンコークを注文しました。

「何か曰くがありそうですね。」左の青年が笑いかけるのです。私は、「別に。唯コークが好きなんです。ほろっと苦い味、まるで失恋ばかりの私にぴったりなんですもの。」と、そこはやはり長年の職業意識なんでしょうか。

「ビールは？」右の青年が云いました。

「ビールは余り頂きません。お茶みたいなのですし、あとでお手洗が近くなるんですもの。困りますわ。」私には右側の青年の生意気さが我慢できかねたので、ずけ／＼と云ってやりました。

「マダム攻略と行こうかな。」

「さア、私が陥落しますかしら。」

「余の辞書に不可能の文字なしだ。」

左の青年は、よほど馴れているのでしようか、私は飲まされるままに、二呼吸で飲み干して、ほうっと息を吐きました。飲まされる者の呼吸をよく捉えた手際に私は二杯目もごく／＼と空にしました。体中がかあつと火照るようで、流し込まれた氷の小片が快く、かり／＼と音を立てて噛み砕いていました。

頬は勿論、両の胸乳の隆起が今にも躍り出しそうに、どきんどきんと脈膊つています、視界の真中の美少女がこう云いました。「もっと／＼続けてお飲みになって。」

否も応もない響きがあつて、お代りを持ってきたのり子が泣顔で見えていました。「大丈夫よ、安心なさい。」と眼で笑ってみせても、まだスタンドで不案げな顔をしています。

「今度は僕だ。」右の青年が、いきなり荒々しく私の肩を引き寄せたのです。まるで、一本の棒のように紐で自由を奪われた体は、男の胸に倒れ込んでいました。喘ぎながら、私は大きく呼吸を整えようと努めました。胸の隆起を娛しむように男は私を抱きしめていました。が突然、全く隙を狙っていた野獣のような速さでコップの中の液体を、私の口の中へ流し込みました。不意をつかれた私は、当然のことながら、空気の代りに液体を気管へ送り込んでしまったのです。息がつまって、苦しくて、私は激しくむせ返りました。

男の掌が私の顔をがっちり抑えて放さなかった。ので、私が苦しさに夢中になって顔を左右に振り廻しても液体は殆ど私自身の浴衣の胸から肩の辺りへ吸い取られるばかりでした。痺れそうな脳裏に、のり子の視線が痛い程感じられました。私もいろ／＼辛い思い出がありますけれど、こんな苛め方をされたのは初めて、まして良家に育った模範女子大生

ののり子の眼に、この惨酷な遊びが何と映るでしょうか。

口を覆うにも両手が利かないので、私は膝に顔を伏せて、なおも咳込んでいました。左の青年が背をさすってくれました。

「マダムは僕の手からじや飲めないらしいや。」と右の青年が笑いました。

ゲダモノッ／＼バカッ／＼ 私は知っている限りの悪口を浴びせてやりたい想いでした。酔とは無関係に頬からすう／＼と血が引いて行く思いがしました。

「私は野育ちですもの、犬や猫みたいに他人様に馴れていませんのよ。」

「皮肉のつもり？ それとも酒乱？」

「さア。でも暴れるかも存じませんから、首に縄でもおつけになったら如何？」

「もっと飲ませようか。」

「どうぞ、御随意に。いくらでも苦しんであげますわ。」

「おこったのかい？」

「笑っていられることかしら？ 弱い者いじめが、よく恥かしくないのね。」

美少女がシガレットケースを開けて、「如何？」と云うのです。

「頂きますわ。」両手を使えない女に煙草を進める以上、どうせ拒んでみたところで良いように囁られるのがおちでしょうから、私は負

けていられませんでした。どんな遊び方が知らないけれど、好きなようにして貰おうじゃないの。麻酔？ 冗談じゃない。そんなものに尻込みなんかするのですか。今更生娘でもあるまいし、男に抱かれて災難とも思えずに幾日も諦めきれなかったのは昔の夢。先刻の入浴後身につけた新しい肌着も心強かったのです。

右の青年は一本を口にくわえてライターを鳴らし、一息、大きく煙を吐くと、私の左の鼻の穴へ刺込んだのです。あっ／＼ ああ／＼ 私は叫び出したい恐怖を喉の辺りで僅かに押し殺しました。男はにやりと笑うと、更に一本をつまんで火をつけ、右の鼻の穴へも差込んだのです。苦しいッ。私は激しくなる呼吸を必死に抑えて整えようと思いました。そして息を溜めて一気に鼻の穴から障害物を吹き飛ばそうとしました。

けれども鼻の穴に刺込まれた煙草は真直下を向いているので煙は垂直に昇って眼にしみて来ます。これを避けるために顔を上に向けなければなりません。

右の青年がハンケチで、私の無防備の喉を軽く撫でるのです。

ふあっ、ふあっ、ふあっ

反射的に吸い込んだ煙が咳を呼び、涙を滲ませるのです。

「鼻から吸って口から吐く。鼻から吸って口

から吐く。」左の青年が耳許で呪文のように呟くのです。癪だけれど、でも、それどころじやありません。激しい動悸につれて、そろ／＼吸い込む煙が熱くなつて来しました。「綺麗な指だ。」右の青年が私の指を握りました。

「白いし、柔い指だね。」男は囁きます。

「ほら、こんなに攪やかだよ。」いきなり私の指が、ぐぐつと逆に曲げられたのです。

い、いたいッ／＼ あっ／＼ふわっ／＼あついッ／＼ 痛みに耐えかねて息をのめば鼻の芯まで熱気が襲うのです。

「ほら、こんなに曲げても曲がりそうだよ。」男の声はいかにも楽しそうに響きます。

い、いたいッ／＼ う、うふッ／＼

折れるウッ／＼心中に叫んで、指の痛みが僅かに鼻の先の熱さを紛らわすのかしら。

火が迫って鼻が焼ける責苦。痛い、指が。

私は眼を開いていられませんでした。視界が赤一色になり、黄色になり、星が乱れて飛び交っていました。熱い／＼ 苦しい／＼ 痛い／＼ 然しそれなのに倦い。私は何か叫んでいました。いいえ、そう思ったのは気のせいかも知れません。

びしや／＼私の顔一面を何かが叩きました。

指の痛みが減り、煙も来ず、ほろ苦いコークの味がしました。

真蒼な顔でのり子が立っていました。空の

コップを手にして、全身がぶる／＼震えていました。

や、やめて下さい／＼ 押殺したような泣声でのり子は一言だけ云いました。右の青年が立上ろうとしたのを私は体で制しました。

「のりちゃん、お客様お帰りよ。お見送りしてね。」

「ママ。」

「いいのよ。どうやらお遊びの場所をお間違えになったらしいわ。もうお目にかかることもないのよ。」これが客商売に生きる私の精一杯の抵抗だったのです。

「そうかも知れない。」左の青年がぼつりと云いました。「だが今夜、この店でマダムに逢ったことは決して忘れないよ。」

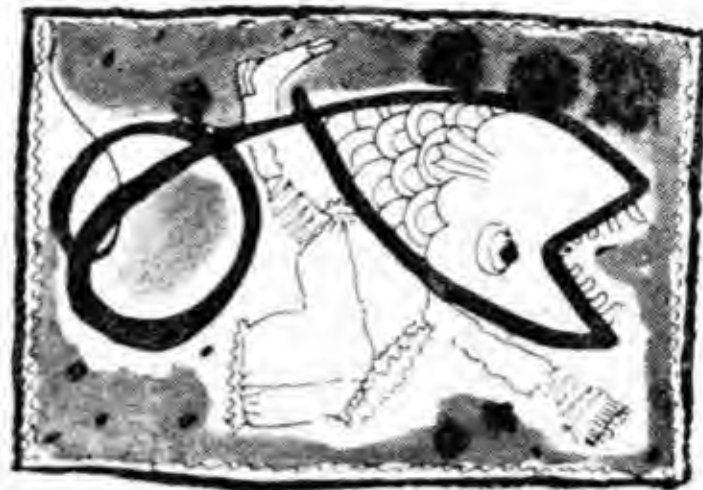
何を今更……と思った時、カクテルに濡れて火の消えた煙草を取り出そうとするのり子の震える指先が鼻に触れ体中にびりりと走る痛み。火傷／＼ 涙がじいんとこみ上げて来たので私は黙っていました。

恐ろしい程変ったお客様。私の身にも心にも大きな傷を残しながら、銀髪の老紳士は遂に一言も云わず、美少女がハンカチで顔の滴りを拭ってくれたばかり。私の体に纏いついた緑色の扱帯とローブを残したまま、黙って去って行ったのです。

週刊サンケイ七月十四日号

「スポーツと女性」

——いささかも足りない記事だった。もっと、テッテイ的に、この問題を取上げて貰いたかったが、まあ、週刊誌なら、仕方あるまい。



時 評

麻生保氏の生活と意見

(三)

麻 生 保

まず、ボクシングフアンの女性の話から始る。鮮血のとぶ、金子、中西の一戦を、喰いいるように見る二人の若い女性。『中西サアーン、シッカリイ！』と、両手を振り乍ら、悲鳴に似た声を張りあげる。司葉子さんの言をかりると、「迫力が、どのスポーツよりも強烈です。はじめは、恐ろしくて、見ていられなかったけど、そのうち夢中になって、大声を張り上げそうになっちゃった。」南田洋子さんは、ボクシングに熱中してから、すでに五年の由。彼女の御意見は、「猛烈な、撲り合いをみていると、氣持がスーッとする。」との事。作家の井上友一郎氏は、やや遠慮勝ちに、こう仰言る。「女性は、ボクシングで、汗まみれの裸の肉体が血を流して斗うさまを、実に熱心に見る。そしてコープンする。これは、男性美へのアコガレと、惨忍性のなかに生ずる一種

の快感を味っているのだ。」

何といっても、これが、女性のサディズムと、間接、又は、直接に結びつく事は、疑いをいれない。そして、血と、汗にまみれたボクサーに対して、母性的な愛情を持つに至るであろう事も、十分に想像し得る。

次にプロレスの話が出てくるが、これも大体同じような効果があるらしい。

シエクスピア時代には、スポーツなる語は、もっと、直接に、性的な意味を持っていた由である。そこで、杉靖三郎教授が、スポーツと、性との問題を、極めて大局的に述べている。

以上は、見る方であるが、次は、女性が、やる方のスポーツ。

卓球オリンピック選手、渡辺絹生子さん、江口富士子さんの説く卓球の興味。「自分の思う場所に生命を持ったように飛んで行く白い球。」これは、一寸、きき捨てならない発言ではなからうか。これを、一種の支配慾の現れと解するのは、またもや、筆者の我田引水であろうか？ 例えば、ゴルフにしたところで、球を、自分の、思うように、時には遠く迄、時には、足の下のホールにと、自分の思う処へ飛ばすのが楽しいのである。

これが、乗馬となると、もっと話が、はっきりしてくる事は、言うまでもない。

「女性の乗馬熱」という一項目が、ちゃん

とある。

——近頃女性の乗馬熱がさかんになった、と当事者が驚いている。(麻生註、慶賀の至り)各乗馬クラブで、赤、黄、ブルーと、華やかな、色彩が、馬場を駆ける。(中略)大きな動物を、尻の下に敷いて、まことに堂々たるカンロクである。紅潮した頬に汗が流れて、一点を凝視する瞳は、清らかだ。(麻生註、なんだって、こんな、セン情的な言辭をロウするんでしようね。ツミだよ、キミ。)

「乗馬の魅力の秘密は？」と真正面からたずねても、ニッコリ笑って、明確に答えてくれない。「ナーニ、オシヤレの一種だよ」と男性はきめつける。つまり、「わたし、ウマをやっているの」という事が、女性の貴族趣味を、強く満足させる。いや、この一言でフラフラとなるオトコもいるというわけだ。(麻生註、ハイッ、ボクデス、フラフラ)(中略)

ある未婚女性はいふ。「生き物を制御する喜び。自分の意志のとおり、自分より力の強い動物をうごかすのは、愉快に違いない。ここには、人間本能の支配慾、征服熱の満足が、頭を出している。(麻生註、ゴモットモ、ゴモットモ)(後略)

六月二十二日附、東京新聞、世界短信欄に「英女王姉妹の英姿」として、エリザベス女王と、マーガレット姫が、アスコット競馬場

で乗馬している写真がのっている。記事に曰く。「この写真がとられた直後、女王姉妹は競走したが、マーガレット姫が勝った。」

「女性騎手による競馬」については、奇く本年二月号に、原忠正氏が述べられているから、重複を避けるが、ここでは、競馬騎手が、あの美しい英女王姉妹なのだから、一寸たまらない。筆者の空想は、果しもなく拡がって行くが、あまりクドクなるから止めて置こう。

週刊サンケイ九月一日号

「ソラヤ皇后」

中東の名花といわれている、美しいイランの皇后、ソラヤに関して、私は、前から、ゆっくりと書きたかったのであるが、週刊サンケイに出たのを機会に、一寸、かんたんに、奇クに御紹介しよう。

ソラヤ皇后こそは、あの、絶対的な権力と、威厳と、勇氣と、品位と、残酷さと、更に美貌とをあわせ持った、古代近東の伝説に出てくる女王の風格を、今日に伝える唯一の女性ではあるまいか。そして、ドイツ人との混血であり、ヨーロッパで教育を受けた彼女は、その上に、近代的な知性や、教養も、ちゃんと持ち合せているのである。エリザベス女王は、ソラヤ皇后に比べると、はるかに優雅である。この上もなく威厳があり乍ら、むしろ、思いやりとか、やさしさに満ちている。

例えば、エリザベス女王が、沢山の奴隷を所有しているとか、敵の捕虜を、自らの手で拷問したり、殺したりする様な事は、想像出来ない。然し、ソラヤ皇后の風貌は、それを充分に想像させる。そうかといって、ソラヤ皇后に、野蛮さなどは、みじんもない。要するに、あの、マゾッホ好みの、女王に他ならないのである。

スポーツ・ウーマンとしての、ソラヤ皇后は、有名であり、特に、乗馬は、専門家の域に達しているといわれる。よく外誌でみる、彼女の乗馬姿は、本当に素晴らしく、キッと唇をむすんで、鞭をかまえたところなどは、彼女が、馬に対して、如何に峻厳であるかを思わせずにはおかない。馬を責めて、責めて、責めぬいて、乗りつぶすなどは、日常茶飯事といった感じである。(エリザベス女王の乗馬姿も、大そう美しく、氣品があつて、筆者も大好きであるが、そのようなイメージは、一寸持ちにくい。)

ソラヤ皇后は、いま、イラン王室のお家騒動の中心に立たされているが、ここでは、一切省略する。

彼女は、ヨーロッパでは、非常に人気があり、よく雑誌でみるが、あまり日本に知られていないのは何とも残念である。最近の、パリ・マッチ誌の表紙は彼女であり、記事もある。

る。いささかお古いが、マリークレール誌、MARIE・CLAIRE (PARIS) の、昨年クリスマス号には、彼女の乗馬姿、デイオールのロープでの結婚式のスナップ、虎狩、(彼女の足下に虎が二匹死んでいる)、パリのキヤバレで(素晴らしい毛皮にくるまっている)等、なかなかいい写真がある。念のため、ソラヤ皇后の名誉のために申し添えるが、彼女は写真うつりがいい時もあるが、恐ろしく悪い時がある。マッチ誌の表紙は、あまりいいとは申し難い。

群像「毛皮を着たヴィナス」 七月号

佐藤春夫訳

すでに、原氏、沼氏の論評があるので、筆者が、改めて取上げるのは、全く蛇足であるが、かの、治洲氏の原文に忠実ではあろう

し、又、原作品への愛情がうかがわれるが、恐ろしく生硬なに比べるなら、今回のものは、何ととっても、はるかに流麗であり、特に前半がいいと思われる。

治洲氏の訳は、用語が——特に会話に於けるワンダの言葉が——下品なのが、甚だしく感興を殺ぎ、致命的な欠点となっている。

治洲訳「まだあたしが解らないの? エエ、あたしは残酷よ。」

佐藤訳「まだ私をおわかりにならないのね。そうよ。私は残酷よ。」

治洲訳「毛皮を着るのを手つだうんだよ。ねえさあグレゴール早くさ。」

佐藤訳「わたしに毛皮をきせて。奴隷」

治洲訳「不平はこぼせないわよ。自分で望んだんだもの。」

佐藤訳「どっちみち、不平を言う理由はな

くってよ。あなたは、そうして貰いたいんだから。」

ごらんのとおり、治洲訳のワンダのオコトバは、全くヒドイ。これでは、黒テンの毛皮が泣くというもの。如何に美しくてもこんな野卑な言葉の女性の足下にひざまづくなどは、筆者は思いも寄らぬ。佐藤訳のワンダの言葉は、少し、女学生みたいではあるが、前者に比べたら、はるかに品位がある事是一目瞭然で、この一事だけで、治洲訳を凌ぐと思う。

なお、筆者は、ラドス・ラファエル・ド・ボーフォールの仏訳本を持っているが、今一寸見あたらないので、細部にわたる比較が出来ないのを残念に思う。

マゾヒスト十日物語

「靴への愛慕と踏まれる喜び」

波 路 洋

前稿で「私の好きな婦人靴」を書いたが、事が前後するけれど私の幼い頃の思い出話を小説風に書いてみよう。

静かな杜が近くにあって一町とは離れていない所を都電の通る道がある、楓並木の美しい城北の町に私の家があった。

時は昭和二年頃、私の八才の晩春初夏の頃で楓の若葉が微風にそよぐ一日だった。

「洋ちゃん遊ばない」と叫びつつ微笑を可愛い顔に浮べて駆けて来る女の子があった。君子と云う近所の米屋の子で九才になる活発明快なお嬢ちゃんだった。

「みんな杜で遊んでいるわ、あたい達も行きましょうよ」

この杜は私の家の南にある一番遠い森でしかも、一番大きく、その中に、小さな山や泉水もあって西洋風の建物がある所だった。この建物は病院でその庭にはいいのみに林にこまれた美しい広い緑の芝生もあった。近所の子供達の良い遊び場所である病院の管理人も子供にはその庭を無制限に開放してくれていた。

「そう、じゃあ僕達も行こう」

「ええ」

二人は手を取り合って杜の道を行った。そこについても誰も居ない、遊んで居る気配さえもなかった。

「何んだ、誰も居ないじゃあないか、うそを云ったな」

誰も居ない腹立ちさの余り君子を私は突き

とばした。普段の君子ならばけっして負けてはいないのだが、今日は倒れた時に木の根に右手をついて小さな挫傷を負っていたし、痛みも余程強かったとみえて君子は大声で泣き出した。

「おばあさまに言いつけてやるから」

と叫ぶとわめきながら家の方へ駆けて行く。傷を負わして居るし、私の母は厳格だからおこられるのがこわかった。僕は急ぎ君子を追ってつかまえ、

「僕はとても悪い事をしたね、ごめんよ」

と君子に平謝まりに謝まった。君子を草の上に座らせて右手をとり滲み出た血を口で吸取りハンカチーフで押えた。傷は思った程の事もなく血は止まり、大して痛くも無さそうだった。君子は泣きじやくりを繰返して中々許すとは言ってくれない。駄々子振りを表わしている。しやくにさわる事此の上もないけど腹立ちを押えて、この所は何んとかだまさないければと思ひ、やさしく

「君ちゃん、ごめんね、僕つい乱暴しちゃったね、悪かったよ、そのかわりこんどから必ず君ちゃんの言う事をきくからね、ごめんね。」

君子の顔をうかがいつつ何度も何度も根気よく繰返し繰返し君子に詫びた。君子はやがて泣き止んで始めて美しい大きな眼で私を見つめた。

「洋ちゃん、もういいわ、許すわ、そのかわ

り、あたいの家来になってよ、幸夫ちゃんの家来なんか止めて……」

君子は私と幸夫との主従関係を知っているらしい。

「うん判ったよ、僕、君ちゃんの家来になるよ、だからごめんね」

「家来になるなら許すわ、あたい幸夫ちゃんが洋ちゃんをいじめて居るの一度見た事あるわ、誰にも言わない、だから幸夫ちゃんはおたいの家来よ」

「ああ、いいとも」

と返事をした。私は君子が私と幸夫とのことを見て知って居るのに驚いた、どんな場合を盗み見られたのかな、これは大変だ、口では内証にすると云って居るが、君子の云い通りに服従していた方がいい、そうすれば言われる様な事は無いと思った。

それにしても君子は恐い子だ。

「洋ちゃん、靴を磨いて、きれいにしてお」

もう君子の主人としての命令が出た。見ると君子は傍の大きな石に腰かけて脚を私の方へ差出す様にのぼしている。私に家来の誓いをさすつもりらしい。私はその足下にあぐらをかいて坐った。そして君子の右足を左手で受けた。美しいのびのびした脚だ。足には黒い型の良い皮靴が履かれている。私は右手で自分の着物のすそをまるめて泥によごれた靴がピカピカに光る迄たんに磨かされた。私

の小さな身体には好奇心と何んとも云えない
 気持で一ぱいになった。既に私の身体にはマ
 ノの芽生えが存在していたのだろう。そうし
 て居る中にこの様な屈辱的な仕事をするのが
 とてもうれしく感ずる様になった。君子は右
 足の靴が磨き終ると、左足を私の膝の上にの
 せた。私はかがみ込んで丁寧に磨いた。ひた
 いには汗が滲み出た。

「さあ磨き終ったよ、太陽の光でこんなに黒
 く光ってるよ」

君子の顔には笑みと優越感が現われた。

「とても綺麗ね、磨き終ったのね、じゃあ、
 そこに寝て」

私がぼう然と佇んでいたら頭上で君子の命
 令が矢つぎ早に下って来た。

「ねるのよ」

私は恐る恐る君子の足下に伏していた。

「駄目よそうでは、上向けに寝なけりやあ」

私は君子の威圧感のある声を受けるや、す
 ぐに上向けに寝返りをうって君子を見上げて
 何をされるのかおろおろした。

「それでいいわ」

と君子は満足げに微笑みをその顔に浮べて
 立ち上るや右足を上げると私のお腹を踏みつ
 けた。

「いい靴ぬぐいね、靴の底のお泥を落しまし
 よう」

と独り言をいいながら足に力を入れるとぐ

いぐい靴底を私の腹の上の着物にこすりつけ
 始めた。かわいた黄色い泥が私の着物をよご
 してゆく、腹上に感ずる君子の片足の重みに
 何んと云うか重苦しい快感が身体全体に腹か
 ら伝わって来て思わず細目に目をとじて、

「うむ」とうめき声とも似つかぬ声を上げて
 しまった。君子は私のうめき声に驚いたのか
 踏んで居る足の力を少しぬいて軽く踏んまえ

「底を見てよ、泥落ちてる？」

と返事をうながした。実に落ち付き払って
 シヤアシヤアしたものだ。私の眼は顔前
 に大きく近接している靴の底にすい付いた。



底皮には無数のきずが付いていて小石のささった跡らしい凹みが見られまだ泥が少しついて居た。

「泥がもう少しついて居るよ」君子は私の顔の上から靴をはなし自分の方へ靴の底を曲げてむけて、

「あら、そう、仲々綺麗にならないのね」

と言いながら更に一層の力をかけて踏みこむ様に拭き始めた。お蔭で私の着物は泥だらけになった。すると泥のつかない部分へ足を移して拭いている。右足が残り今度は左足の泥を丹念に落し終えたと君子の次の命令が下った。

「立って着物の泥をお払い」

私の立つのをうながすのか君子は足の爪先で私の腰を小突いた。私は命ぜらるるままに立ち上り着物の泥を払い終った。

「何故立ってるの、泥を落したら又ねるのよ」

君子の命令にあわてて足下に寝た。もうすでに靴は磨き終り、底の泥まで落し終って黒光りする靴を履いた君子のすらりとした両脚が私の顔の上に二本の柱の様に立って居る。

君子から解放されたと信じたのもつかのまだった。君子は次の何かを目論んで居た。左足をもって私の胸をギューと踏みつけた。

僕は眼を細めて君子の姿を見上げた。口をきつく閉じりこんだ様な尊大な君子の顔から視線を足に下げる。君子は踏んまえた靴に力

を入れて前後左右に少しづつ足を動かして私の身体の上を踏みつけていた。その足首のデリケートな運動、足の曲線の美しさと圧迫感

は私の心を天国に誘った。

「ああ、君ちゃん、ああ」
思わずうめき声を上げた私は眼を見開いて見ると、君子は右足を私の胸に左足で腹を踏んまえて身体の上に両脚を開いて仁王立ちに乗っていた。

「くくく苦しい」

私は両手で胸の上を踏んで居る君子の右足を払い除けるべく押えて身体をよじった。君子は安定を失ったので草の上にとび降りた。

「ああ、面白いわ、こんなに」

何を見たのか君子は笑い出した。その意味は次の君子の行動ですぐ判った。

この日以来、私は完全に君子の家来否奴隷となってしまう。いつも君子は人の居ない原や杜でよごれても居ない靴を私に磨かせた。君子は私を踏台にするばかりか段々図々しくなり我儘を発揮して顔の上を踏みにじったり、靴の底をなめさせたりした。

ことに君子がよるこんだのは、お盆に新しい靴を買って貰った時、始めて、その靴で私の身体を踏みつけ、夢中で汗を流して私の身体を蹂りんした。私の靴に対する崇拜はこうして少年期に芽ばえた。君子とのこうした遊びは長く続いた。思春期を迎え君子がハイヒ

ールやパンプスを履く様になっても二人だけの秘密として行われていた。ことに彼女が二十才のときお嫁に行く前日、綱島温泉の旅館でお別れの意味もあってゆっくり踏まれた。涙を浮べて別離をおしみつつ、残酷に踏みつける彼女の面影と思ひ出は、一生忘れられない。

その頃の君子は、内気な温和な美しい箱入娘^{ハコイ}になっていたが、秘密のあの遊戯の時のみはどうしてあの様に残酷に踏み出す事が出るのかと思われる程ひどくやった。君子の紅潮して酔ったような顔からは別離の涙は跡かたもなく消えた。彼女の結婚は幸福だったとき。

しかしその幸福の中に一抹の抜ける所がある筈だ。御主人にあの踏まれる事に喜びを感じる事が無い限り……

君子は結婚前日、綱島で私を踏みつけるときは五足も靴を用意して来た。あの涙と共に行われた思い出消えざる踏まれる遊戯の詳細は別章で又書く事をお約束しよう。この五足の靴は記念に私は頂いて現在も宝物として大切に保管してある。皆どれもフランス型のセシ細な感じのスルパンプスである。

黒いペチ・コート

(マリアンヌの手記より)

原作 セシル・フォーレ

翻訳 鴉 嘔 吐 夫

黒いペチ・コート

セーヌの岸边に、マロニエの葉が散り始め、秋が音もなく訪れて来た。

たつぷりとある遺産、嫌な夫も居らず、世間にわずらわされる事もなく、よそ目から見れば、マリアンヌは、誠に幸福極る身分であった。

あの折檻の日以来、女中のジュリヤも全く猫のようにおとなしく、ひたすら、主人のいつけを畏って承たまわり、如何なる些細な事も聞き洩らすまいと緊張しているような、忠実な仕え振りであった。しかし、その眼に時々訴えるように走る、物憂い閃き、それをマリアンヌは見逃さなかった。

或日の事である。今は亡き夫の寝室で、ジ

ユリヤに着物を脱ぐのを手伝わせ、さて横になろうとした時、主人の脱ぎすてた下着類をじっと胸に抱きしめ乍ら、ジュリヤが、何かいいたような顔をしてマリアンヌを見た。そして、そのまま黙って立っている。

「どうしたのジュリヤ。どうして黙って立っているの」

女主人は、女中に訊いた。

「奥様、わたくし……」

熱い吐息を洩らすと、その若い女中は、俄に、顔を真赤にして、何か口ごもった。

「どうしたの、はつきりいってごらん」

「奥様、わたし、以前に、奥様にお叱りを受けた時のように、又、私、胡椒のきいたお菓子が戴きたいのです。一体どうしてこんな気持ちになるのか、自分でも解らないのですが」

「そう」

女主人は、もじもじとして立っている女中の顔をじっと眺めた。そしていった。

「そんなにほしいの」

「ええ」

「それじゃ、今日は、お寝み前に、たつぷり上げることにしましょうね。でも、今日は、お尻だけじゃありませんよ。体中にですよ。それでもよいのですか」

「ええ」

女中は、恥らいに顔を赤らめ乍ら、それでも懸命に頷いた。女主人は厳しくいった。

「すぐお脱ぎなさい。何もかも全部です」

自ら、折檻を願った女中は、女主人の前で、ためらう事もなく衣服を脱ぎ行つた。ブラウス、スカート、スリッパ、やがてブラ

ジャーと薄いナイロン・レースのパンティだけになって、すっくりとそこに立った。

若々しい、白く張り切った体が、眩しい程艶々と光ってそこにあった。

「それものです。全部といったら全部脱るのです」

マリアンヌの声は厳しかった。ジュリヤは、ブラジャーのホックも外し、最後の

の下着も脱った。女主人は、今は何も身に掩うもの

も無く、立ちすくんでいる彼女に向って、つかつかと

近寄ると、彼女の手を、昔夫が良く使っていた、天井

からの吊環に広げて各々括りつけた。足は、一米も離

れてある足台に、しっかりとバンドで結いつけると、

大の字なりになった彼女は、もう、少しも身動きが

出来ないようになってしまっていた。

「さあ、何にしますか。貴女の好きなものをいってご

らんない。チヨコレート色のもの。それとも、クリ

ーム色のもの」



「奥様、私、奥様がいつも、旦那様から……」
「お黙り、女中の分際で、そんな事をいうと容赦しませんよ」
「そういうとマリアンヌは、把手が太い固い木で出来ている、ゴムの鞭を持って来て、ビ

ューツと、一つ空中に素振りをくれた。
「さあ、たっぷり上げますよ」
いきなり、豊かな乳房の上を、ビューツと黒い鞭がまきついた。
「ひえーっ」

と、まるで、魂が飛び出すような悲鳴が洩れた。そして大粒の涙を、ぼろぼろこぼし乍ら、ジュリヤは「奥様、もっと、もっと、ジュリヤを痛い目に合せて下さい」と必死になって叫んでいた。

股に、臀部に、女主人の鞭は絶え間なく続き、白い体に、赤いくっきりとした線が幾筋も、度ぎつく、つけられて行った。

二

ジュリヤはそれでよかったかもしれない。這うようにして、部屋を出て行ったが、その顔は、すべてが終った後の晴々とした喜びに輝やっていた。

しかし、マリアンヌの昂

ぶりきった胸の炎を、どうしておさめることができようか。一度覚えてしまった、禁断の木の実の味は、忘れ去るには、あまりにも美味であった。

寝床の中で、燃えたくってくる胸を押えながら彼女の考えるのは、郊外の丘の上にある。クラブ・コンプレッショナーであった。

黒い透き通ったベチコートのみをつけ、会員となつて、思いのままに、被虐の悦びに耐える楽しさを思い出すと、いてもたってもいられぬ思いであった。

彼女は卓上の電話をとうとう取り上げてしまった。そして、出入りの、車屋を呼んだ。夫が居なくなつてからは、自家用車はほったらかしになつていて、外出にはいつも、バスかハイヤーを呼ぶことに決めていたのである。

電話をおくと、女中をすぐ呼んで着換えを始めた。まだ痛む体を、ひきずるようにしてやつてきたジュリヤは、不意の外出に吃驚して、

「奥様、今頃からどこへお出かけで」と訊いた。

「いいのよ。お前は心配しないで、私だってたまには、気晴らしに、夜、外を歩いても構わないでしょうに」

「それはそうですけど」

「尚も心配そうにしているのへ、」

「さあ、大急ぎで外出着を持って来て」

とびしやりといった。

年よりは、ずっと若作りの、裾の張った三段のギヤザーになつてゐるスカートに、薄い桃色のナイロン・ブラウスをつけると、まるで十代の娘のようにさえ見えた。

「奥さま、本当に美しゅうございますわ」

ジュリヤは女主人を惚々と眺めた。

やがて、着飾つた、マリアンヌを乗せて車

は夜の巴里の町を走つて行つた。彼女は心中でしきりに、一つの言葉を繰返してゐた。

「私は、真面目な貞女なのだ。他の男の事など、ちらと考へたこともない。ただ夫の事をいつまでも忘れないようにするため、あの辛い鞭打ちのお仕置を受けに行くのだ。夫の思ひ出の為、私は我慢を続けるのだ」

自動車は、何時か来た郊外の丘の上にある

一見何の変哲もない白い家の前に着いた。

「ここよ、私のお友達の家は。運転手さん有難う。帰りはいいわ。タクシーを採すから」

多分のチップを弾み乍ら、彼女は何気なくさりりという云つた。だが運転手は表面は有難そうにチップを受取りながら、瞬間チラと不思議な眼をその家に向けた。

彼女は一人でその家の扉を叩いた。今度はのぞき戸から一寸見ただけですぐ扉があき、奥のマダムが部屋に通された。

「先日はいかがでしたか。御気分は」

マダムはにこやかに微笑みかけながら、まづ真ッ先にその事を聞いた。

「ええ、おかげさまで。だから早速やつて来たわけですよ」

「それはよろしゅうございましたね。私共でもお役にたつたと思うと嬉しゅうございますわ。それで今日も早速」

「ええお願いしますわ」

「ではこちらへ」

彼女の持物を部屋のロッカーへ預かると、隣室へ入つた。そこはクリーム色の部屋である。既にそこには、もう盛りを過ぎたが、かつては一世を風びした映画女優の、Dが、憂愁にみちた特長ある面影を、今日はむしろ喜びにほてらせ、程よく色づいた体で今、黒いベチ・コートを脱ぎ裸になつて、もとの衣服に着換えようとしていたところであった。

マダムは聞いた。

「どう、Dさん、今日は」

「ええ、とてもようございましたわ。私にはこれが一番よい健康法ですわ。肌もひきしまるし、いつまでも若さや艶を失わないですみますし」

それでも、お尻から背中にかけて、幾筋も紅い線が痛々しくついており、絹の柔いコルセットをまといつけるのさえ、やはりかなり痛そうであった。

その美しい姿態に見とれているマリアンヌ

に向ってマダムはせきたてるように言った。

「さあ早く、お脱ぎなさい」

彼女は慌てて上衣とスカートを脱ぎ、下着類を、傍らの脱衣籠に脱いでいった。

そして以前写真を撮るためのった足型の所へつれて行かれた。

「今日は、これからお出でになるたびに、貴女の体の一部がどのように美しく変化して行くかを、実際に証拠だてるため、鞭のあたる部分だけの写真を撮らせて戴きます」

マダムしかない部屋で、彼女は、マダムに命じられるままに、手をそのまま前について、犬のような型で、暫くじっとしていなければならなかった。

どこか隣の部屋から、シヤッターを切る、かすかな音が、幾つか聞こえてきた。

それが終ると、マダムから、例の透けて見える黒いペチ・コートだけを貰って身にまとい、廊下に出た。

円型の大きな部屋の寝台や椅子、木馬等には、既に大勢の夫人達が、それぞれ、好みの恰好で縛られて、今や盛んに悲鳴を上げていた。真底から痛さを訴えているものもあるし泣きわめいている者もある。ただいづれ変らぬのは、皆自分から、この苦痛を求めて来た人々の、喜びの声であるということだった。

この部屋の中の一切の指導は、いずれも、三、四十才台のまるで女のプロ・レスラーか

とも思われる、ガッシリした体の、黒い皮の

ブルマーに、黒い皮のブラジャーで、しっかりと身づくろいした女性が幾人かでやっていた。その一人がマリアンヌに近づくと

「奥様どうぞ」

と彼女を、隅の台の上へ連れて行った。

そこには、やはり、皮の下着をつけた、マリアンヌと同じ位の背の高さの頑丈な体の職員が立っていた。そして、彼女のくるのを見ると、自分の皮の下着類を、その場に次々と脱ぎ捨てて、すっくと裸でたった。職員の女はいった。

「今日は生憎、柱も木馬もあいていませんので、私が柱の代りをお勤めします」

やがて、マリアンヌの体は、大の字にすくくと立った、びくとも動かない彼女の体に、同じく大の字にして、腕の先、足の先をしかりと結いつけられた。

乳房は乳房とびったりとつき、柔かい腹部同志も密着している。唇は、女の唇に故意にふれ合され、お互いの息が、香わしく往復する。

上品な紳士がそこへやってきて、彼女に一礼すると、鞭を取り上げた。

黒いペチコートを、片手でもち上げ、むりにたくしあげて、臀部をむき出しにすると、やがて鞭を振り上げた。

びしりっ——と最初の一げきが、彼女の体

の上を走った。

「あっ／＼」

暫く遠ざかっていた鞭の、想像以上の痛さに、あわてて体を動かそうとしたが、女の体に結いつけられた彼女は、まるで、大地にすいつけられたように、もうビクとも動かなかった。

職員の女は、まるで木で出来たしっぺりした柱のようであった。たまに鞭の先が体にまきつく事があっても、体の筋一つ動かさなかった。

マリアンヌは、必死に痛みを逃れるため、体を動かそうとするのであるが、どこも動かすことはできない。後ろは痛い鞭、前は柔い同性の肌にしっぺりと包まれるようにして、それから二時間も、激しい快楽の苦痛を味ったのであった。

三

外は涼しすぎる程であったが、激しい鞭で痛めつけられた体には、むしろ快よい気持ちであった。

丘を下りればセーヌの川である。一人でぶらぶらと夜更の町を歩きながら、彼女は、最前の喜びの痛みを、しみじみと思い返してみた。

『もう駄目だわ。私はすっかり、鞭打ちの痛みに囚われてしまっている。あれが無かった

ら、一日も送れない女になってしまいいそうだわ」

その彼女の傍へ、スーツと一台の高級車が止った。何気なく振向いた彼女に、車の中に居た、上品な婦人が窓から話しかけた。

「可愛い若い奥様」

「え？」

「さっきも私、あそこの部屋で、打たれ乍ら貴女のこのを見ていたのですよ。良かったらこれから、私の家へいらっしやいませんか？」

私はメリッセ伯爵夫人、怪しいものではありません」

「はい」

彼女は、夫人の上品な美しさに吸いつけられるように車の中の人となった。

「私の邸に参りませんこと。もっと面白くお過しになれますわ。貴女みたいな可愛い方を探しに私は、いつもあの家へ、黒いベチ・コートを付けに行くのです。私の家の方がずっと楽しくお過しになれますわ」
車は再び郊外の住宅街を

横切り、上品な邸ばかりが立ち並ぶ一角に入って行った。

応接室には、何れ劣らぬ、美しい、若い、そして品の良い夫人達が、なかには、まだ女

学生かとも思われる若い少女も交って、雑談していた。

二人が部屋に入ると、一齊に立ち上り「ブラボー、今日のお客様」

と集って来て、彼女の体中、皆がよってたかつて、接吻をした。

そして、彼女はいつのまにか、洋服も下着も脱ぎすてさせられていた。女達も皆、裸になった。

隣の部屋へ入ると、裸の女達は、手に手に壁の鞭を持って、お互い同志、転んだり、掴みあったりしながら打ち始めた。

誰が誰の相手だか、自分らが、打たれているのか、打っているのかまるきりお互いに解らない、激しい混乱であった。

マリアンヌも、四人位に押えつけられて、背中に幾つか打たれたと思うと、次の時には、少女の襟髪を掴んで、そのまだ幾らもふくらんでいない、固い臀部に向けて、激しい鞭を浴せかけ



ていた。

悲鳴、嬌声、女の体だけがぶつかり合う混乱、部屋は忽ち、艶めかしい女の汗と体の匂いに充ちて行った。

この狂気のような一時は、マリアンヌにとつては、まるで生れて始めての楽しさであった。

まるで動物のように、何もかも忘れて狂い廻る瞬間の喜び、それは、現代の人間が、わずらわしい社会の規範を一切逃れて楽しみ遊ぶ、やっと見つけ出した大事な時間であったかもしれない。

いきなり仰向けに突き倒された彼女の顔の上を、肥った婦人のお尻が、しっかりとふさいだ。息がつまって、苦しまぎれに彼女は、「うう——」

とうめいて、わずかに顔を横に向けて、息をした。

しかし、体は、どこを押えられているのかもう動かなかった。

いきなり、今迄、殆んど打たれた事のない腹部に向って、激しい鞭が浴せかけられた。

「ひいっ——？」

思わず彼女は悲鳴をあげて、体を動かそうとした。それはまるで、じーんと脳髓にひびいてくるような痛さであったからだ。その腹の上に、美しい夫人の体がどきりと倒れかかってきた。

夫人は唇の中へ直接話しかけるように、唇をつけて言った。

「御免なさい。今度は私が貴女のお腹を守って上げる」

二人は抱き合ったままごろごろと床を転がった。その体の上を、幾筋もの鞭が追いかけて来て蛇のように巻きついた。

その夜、

彼女は再び衣服をつけたのも、車に乗せられたのも、全く夢うつつであつた。

激しい鞭打は、遂に彼女の氣持をまるで夢の世界に居るように、させてしまったからである。

氣がついた時は既に翌日の昼過ぎ、それでも彼女は、自宅の寢台で、ジュリアに付きそわれて、安らかに眠っていたのであつた。

四

「ああ奥様、お気づきになりました」

ジュリヤが心配そうにいった。

「まあ私、自分の家に居るのね。昨夜、私どうしたのかしら？」

「それがもう夜明け近く、綺麗な御夫人と一緒に帰りになりました……何だかまるでお酒に酔ってしまったようにぐったりなさっておいでだったので、早速お着換えさせて、お寝みさせたのですけれど」

「それではおまえ、私の体を見たね」

「ええ、はい」

ジュリヤは、真赤な顔をしてうなずいた。

「では、私の体中についている、赤い筋も」

「ええ、はい奥様」

「よし、もう許さないから。今晚は酷いお仕置をしてあげる」

「奥様」

女中は、哀願するように膝まづいた。しかしそれは、もう今晚の苦痛の喜びを求めての歡喜の姿勢であつた。

「それまでに、私が充分、体力が恢復するよう、おいしい朝御飯を作っておくれ。力が体中から出て、お前を強く打てるように」

「ハイ奥様」

女中はいそいそと部屋を出て行った。

マリアンヌは、又、夢の中にひきずりこまれるように、うとうとと眠りにおちこんで行った。

黒いベチコート — 3 —

今回は第三章、赤いベチコート

△マリアンヌの手記▽

第一章 痛められし桃の実

第二章 黒いベチコート

第三章 赤いベチコート

第四章 文部大臣の専属室

第五章 狂い泣く大交響楽

屠腹乙女桜

(前篇)

藤山秀緒

(一)

「お役目、御苦勞に存じまする——」

用意の白布の上にヒタと両手をついて頭を下げる由美。

ここ賤ヶ城の重臣桂木左近の邸では、上使を迎えて、次女由美の自害が行われるところです。美貌の由美は、城主森山能登守の云うままにならなかったところから、憎しみを買い、些細な科を云いたてて死を命ぜられたのでした。由美は、せめて最期だけは、武士の娘らしく立派に自害したいと思いました。

切腹——切腹こそ誇りに殉ずる者にとってただ一つの道なのです。由美は女乍らも切腹を申出て居たのでした。

能登守は、女だてらに自ら腹を裂くのは、

自分のした事へのレジスタンスに相違ないと思つたのでしよう。死体は、首を討たず、戸板にのせて城中へ運ぶように命じたのです。首を打たず御前へ運ぶということは、介錯してはならないという意味になり、切腹人の苦痛は甚しいものになるのです。

「女だてらに、猪口才な奴。苦しませい！よいか、苦しませるのじや。」

能登守の内意をうけた上使の役人達は、あられもなく裾を乱してのたうち廻る由美を想像して残酷な笑いをうかべ乍ら席についたのでした。

由美は、見事に彼等の裏をかきました。彼女は、若武者のように鎧下を着け、具足を穿

いて、髪も男髻にとりあげ、男装して死の席にのぞんだのです。

「お役目、御苦勞に存じまする——」

凛々しく両手をつく由美に役人達は静かな驚きの目をむけています。武家のたしなみとして、女乍らも武装の用意はありましたが、公式の席へ、着用するのは今日がはじめて。

赤地錦の美しい鎧下に金色の具足を穿いた由美は、巴御前を思わせるりりしさです。

由美は、自分の美しさに満足しきつています。誇らかに死にいどもう！苦しからう……いいえ、由美も武士の娘、死に遅れまい！

彼女は、静かに鎧下をぬぎ、上半身は白無垢になります。そして、再び白無垢の前を寛げて——。

白い乳房が襟許をこぼれて、彼女の下腹は惜しげもなく一同の前に息づいています。由美は、ゆっくり短刀をとりあげて、切先を二寸ばかりのこして紙を巻きしめ、右手に待ち、左手で雪の肌を二度、三度、力をこめて揉みほぐします。

「いざ、お見届け下さりませ。方々、おさらば！」

キッパリと云って、由美は上体をのびあがらせ、大きく息を吸い込んだと見るや、

「うっ——」

崩れるように、短刀のいたでを泳えつつ前へのめりました。短刀は左の脇腹ふかく食入

ったのです。

人々がハッと息を呑むうち、由美は、顔をあげて、健気にもニッコリ笑み、

「カ、桂木左近の娘由美……い、いまこそ本望……本望とくる此の最期……お、女乍らも武士の娘……み、操を守つての切腹……ど、どのように苦しもうとも、ゆ、由美は、喜んで死にます。ま、まことの、武士の……は、はら切りは、こ、これ、この通り——ウウム、ウウムッ！」

由美は、顔をゆがめ、体をくねらせつつ、短刀を右へと引廻して行きます。

「あ、ああッ……む、むむ……ううッ。」

彼女の下半身が、必死になって、崩れかかる上体を支えています。充分右脇迄引きつけた彼女は、肩で喘ぎ乍ら、

「むう……。」

グッと短刀を引抜きます。

介錯人の居ない切腹の場合、十文字腹は、最も名誉な死に方とされています。

由美は、ふるえる手に短刀を握りしめ、鳩尾へ押しあてています。

作法通りの十文字腹をしとげようと固く思いつめた女武者の壮烈な呻き。

「むむむ……ウーッ！」

腹から絞り出すように呻いて由美は切先を鳩尾に加えたのでした。

ワナワナとふるえる両手に持ち添えた血み

どろの短刀が、小きざみに由美の腹を縦に裂いて行きます。

「ク、ク、ク、ク……くくくくくッ。」

どさり。泳えかねて前のめりに俯伏せに倒れる由美。臍の右をかき切った短刀が、そのまま背筋へ突きぬけ、白無垢の背に血汐が溢れて行く。

「ああ、ああ、ううむ、ううむ……」

(二)

切腹は終わりました。切るべき処は切り、このまま死を待つより他はありません。

気丈な由美は、血まみれになりながらも、見苦しい形は見せず、俯伏せになりながら蒼白となった美貌を引きつらせて苦痛を泳えています。急所を断つことさえ許されぬのは苦



しみを永引かせようとの能登守の企みなのです。ああ健気な由美！

かくては果てじと上使は、立上り、「由美の最期、見届け申した。この上は、この姿のまま戸板にのせ、城中へ運ぶことに致

す。方々、急ぎ支度めさるるように。」

これまで無言であつた桂木左近は、はじめて、怒りに身をふるわせ、

「こは御上使の仰せとも覚えぬ。いまだ息のある娘、いましばらく御待ちあらば、尋常の最期、息絶ゆるは必定。心静かに死なせつかわしたる上、死体となりし由美をこそ御城中へ運び召さるべけれ、この苦しみをよそにして、のたうち悶ゆるあさましき姿のまま、御前と差出す事、桂木左近、不承知でござる。」大音声に云いきります。

上使は冷やかに、これこそ殿の厳命、御重役といえども、殿の御意に従わぬ時は、その分に捨て置かぬ。と無理に戸板を運ばせ、齒をくいしばり、脂汗をうかべて泳える由美を戸板に横たえ、一散に左近の邸をあとにするのでした。

由美は、舌を飲んで死のうと、戸板の上で何度か、もがきました。でも、もう由美の舌は、固くこわばって、歯噛みする力さえないのでした。

そして、能登守の待ちうける奥御殿へ、由美の泳えくた呻きをのせて、戸板は運び込まれて行ったのです。

奥殿には能登守が待っていました。能登守は、あられもなく裾を乱した由美を見て楽しむつもりだったのですが、運び込まれた由美は、きつちりとした鎧下、具足姿で、しか

も、ものの見事に腹十字にかき切り、主君をあざけるように、行儀正しく両肢を揉み合わせて立派に泳えぬいているのです。

重ねくの敗北に、能登守は、可愛さあまつて憎さが百倍する思い、ツカツカと戸板のそばへ歩み寄って

「由美。苦しいか。予の命に従わぬ其方には其の苦しみが分相応。あられもなき男姿。見苦しいと思わぬか。士分の自害をゆるせしのみにも格別の情。戦場にもなきに鎧姿とは予に背かん最後のあがきよな。返すくも憎き奴め。これでもか！これでもか！」

突込んだままになっている短刀を、能登守はむんずとつかんで扶りたてます。

「ア、アアアアアッ！ ウウウウウッ！ ウーッ、ウーッ！」

流石の由美も、この苦しみに力及ばぬのか泳えかねた絶叫と共に具足をはいた両の足を烈しく屈伸させて壮烈な断末魔の形相です。

「ア、アアッ？ わ、わがきみ……お、おうらみに……、お、おうらみ……ウーッ！」

「はははは。苦しめ、苦しめ。桂木家の不屈は、そち一人の切腹では償えぬ。追付け左近も、一家の者も打首となって、そちの許へ行くであろうよ。」

「え、ええッ！う、うむ、ち、父上も！」
由美は齒がみをしました。桂木家の安泰の

ためにこそ、こうした苦しみに耐えて主君の前に不本意な自刃さえした由美でしたのに。

「お、お、の、れ！ううむ、ううむ、む、おの、れ、ひとでなし……こ、このうらみ……ア、アアッ、ウーッ！」

「なんと！人でなしと申したな。家来の身として主人を罵る憎き奴。これでもかッ」

木刀を取って十文字腹の傷口へ、ぐっと突込む。

「ウウウーッ！む、むうッ！」

由美は、両手に木刀をつかみ、ぐっと体を起こして、恨めしげに能登守を見上げます。

「此奴！」

能登守は、木刀をひねって由美の手を振り払い打ちつけるのです。

「う、うう……」

地獄の責苦にあえぐ由美。

ピシリ、ウーッ。

ピシリ、ウウムッ！

由美は、両手を腹にあて、溢れ出る臓腑を抑えようと必死に身をかがめます。いつしか美しい口もとからは一筋の血が滴り落ちて、男装の由美の凄惨な断末魔は、いま刻々と迫って参ります。

彼女は、ぬらぬらと溢れる臓腑をつかんで齒をくいしばっていました。やがて、ずるずると小腸を引きずり出して、背まで貫いた

短刀を力をこめて引きぬき、逆手に取り直して小腸を切り取ります。

「うむ。うむ。うむ……くくく……。ウーッ！」

由美は上体をしごいて、かき切った小腸を右手に握りしめ、ワナワナふるえる手先に、最後の力をこめて、

「む、むむッ！」

奇譚クラブ旧号の在庫案内

本誌は復刊以来、すでに二十一号を数えました。現在既刊の中左記の通り在庫しておりますから御入用の方は、お早い目にお申込下さい。既刊の中、すでに若干の売切品が出ておりますが、売切品の補充は絶対に出来ませんし、在庫している中でも、残部の僅少なものがございますから、欠号は今の中に御求め願います。尚、各月号の目次は、最近号の表紙裏、目次裏に掲げてありますから御参照下さい。

★復刊号の分

復刊第1号 (30年10月号) △売切▽
 復刊第2号 (30年11月号) △売切▽
 復刊第3号 (31年4月号) 二百円 (送16)
 復刊第4号 (31年5月号) 二百円 (送8)
 復刊第5号 (31年6月号) 二百円 (送8)

ダツと能登守めがけて投げつけます。力つきた彼女の右手をはなれた小腸は血の糸をひいて能登守の裾をかすめ足許に落ちました。飛びすぎる能登守。

「あ、あああ……。ク、ク、ク……。うっ、うっ、うっ……。う、う、う、う……。うっ、うっ、うっ……。」

由美は、心ゆくまで自らの肉体に鞭打った誇らしさ、満足さに、思いのこすこともない

復刊第6号 (31年7月号) △売切▽
 復刊第7号 (31年8月号) △売切▽
 復刊第8号 (31年9月号) 二百円 (送8)
 復刊第9号 (31年10月号) 二百円 (送8)
 復刊第10号 (31年12月号) 二百円 (送8)
 復刊第11号 (32年1月号) 二百円 (送8)
 復刊第12号 (32年2月号) 二百円 (送8)
 復刊第13号 (32年3月号) 二百円 (送8)
 復刊第14号 (32年4月号) 二百円 (送8)
 復刊第15号 (32年6月号) 二百円 (送8)
 復刊第16号 (32年7月号) 二百円 (送8)
 復刊第17号 (32年8月号) 二百円 (送8)
 復刊第18号 (32年9月号) 二百円 (送8)
 復刊第19号 (32年10月号) 二百円 (送8)
 復刊第20号 (32年11月号) 二百円 (送8)

〔代理部だより〕

○本誌復刊号は三冊以上まとめてお申込の方には送料は当方にて負担いたします。六

のでありましょう。心をはげまして上体をおこしたかと思うと、どつと棒のように俯伏せに倒れて行きました。

能登守は、呆然と立ちつくしていましたがやがて桂木左近の邸へ上使を立てて、一家全員に死罪を申渡したのであります。

(つづく)

冊以上一緒に求めの方には、手札型写真三枚、十二冊以上一括してお求めの方にはキヤビネ版写真三枚贈呈いたします。

○三条春彦画「時代物責絵巻」は、未製本の分が若干残っておりますので、御希望の方はお申込願います。八枚一組一揃、百五十八円 (送共) です。

○代理部分譲品総目録による焼増しは中止いたします。全部絶版にしますから今後お申込下らないように願います。新しい分譲品目録は、目下企画中です。完成次第今まで八円切手封入にて御予約下さった方々へ急送申し上げます。

○休刊前の本誌は殆ど売切れてしまいました。が、只今、昭和30年2月特大号より同年5月特大号まで、少し宛残っておりますからお申込下さい。各冊一部百四十円 (送料十六円) です。この分は三冊以上も必ず送料を御加算願います。

未来幻想マゾ小説

家畜人ヤブー

(第十二回)

沼 正 三

第十九章 神々の起床

一 肉反吐盆と香樂浴

麟一郎がドリスの噛み捨てた^{チユロイグマシルム}霊茸を犬の様に頬張っていた頃、クララの枕許に置かれたロケット型宝船の中で、小伶人多聞天は静に^{アウエイグニョグミユシツ}覚醒樂を奏し始めた。

樂の音が次第に強まると共に、ほの暗かった室内が段々と明るくなって来る。この宮殿の壁面は水晶質で、唯その透明度を自在に減じて室内を暗くしてあるのだ。覚醒樂に合わせて透明度を増す様調節された寢室の外壁面は、丁度窓のカーテンを絞ったのと同様に、朝の光線を明るく流れ込ませたのである。

クララはパツチリと眼をあけた。外気がどこからともなく流入して爽やかに彼女の頬を撫でた。

——夢にうなされて目が覚めて……又一寝入したんだわ。随分良

初めて読む方に 今から二千年後の宇宙帝国イース。女性が男性を圧倒し、貴族平民の別ある白人達の下に奴隷階級の黒人が仕え、更にその下にヤブーと称ばれる黄肌の家畜人が白人の生活を快適にする為使役愛玩消費されている。科学の力は人権を失った肉体に現代人の想像も及ばぬ変形を加え、畜人大畜人族や、矮人を作り出し、更に肉便器その他の生体家具各種を誕生させた。——劣等人を家畜化し切った白人達の女権的貴族政治の世界、その精密図を描くのがこの小説の第一の狙いである。

イースの大貴族ジャンセン家の嗣女ボーリン、その妹ドリス、その兄セシル、彼の義弟ウィリアム、本国星カルーから地球別荘に来ている。円盤で時間遊歩に出たボーリンの墜落事故から、現代の独乙美女クララは婚約者瀬部麟一郎と共に、二千年後の地球面にやって来た。然し、彼女がジャンセン家の客人としてもてなされ、安逸の生活を享樂し得るのに反して、麟一郎はヤブーとして扱われ、畜化処置を施される。——この家畜化の過程を細

かく通るのがこの小説の第二の狙いである。

全裸強制の皮膚強化処置に逆上の極無理心中しようとして失敗し去勢された麟一郎は、予備檻の中で、朝から家畜適性検査を受けている。早起して海岸で泳いで来たドリスが帰りにそれをひやかした。その頃水晶宮の上階では……

く寝た……。

四肢を開いて伸びをしながら、寝台下の肉便器^{ストウ・ラウ}を呼び出す口笛を吹いた。曉方使用してからこっち大して溜っている訳はないから、軽い尿意に過ぎず、昨日迄のクララなら勿論我慢したに違いないが、一挙手一投足の労もなく膀胱を空にすることが出来る以上、どんな軽い尿意だって泳ぐ必要はないというイース人風な気持ちにクララはいつか同調していたのである。(第八章二例10注参照)。

宿直の寝台番黒奴^{ベッ・キイ}とは早や交替したらしく、馴染の従者F1号が、湯呑に液体を盛って捧げて来た。目覚水とて、弗素その他口腔衛生に必要な薬品を溶かした含漱液^{うがい液}で、これを口に含めば、むし菌に罹らず、これで咽喉を洗えば、声が美しくなる。

寝台に上半身を起すと、寝台脇に肉色の小盥^{バシ}が置いてある。一隅に人間の顔を彫刻してあり、その下隅に孔がある。洗面器^{ウオッシュ・バシン}でなく、うがい水の吐捨^{ウエイスト・バイン}口^{ホール}だなど悟って、口を充分漱ぐとその盤中へ吐いた。

「お風呂とお食事と、どちらを先にお召しになりますか？」とF1号。

「朝風呂があるの？」

「は。この部屋のは香^{パーヒューム}薬^{ミクスチャー}浴槽^{バス}でございますが……」

「ふん」何のことか分らぬ儘「じゃ風呂に」

「畏りました」

その時、今使った吐捨盤^{はきすて}が見る見る縮小して人間の顔丈が残るとその下で跪いていた身体も見えて来た。立つと一四〇釐程の身長、廻れ右して去る。アッと叫びたいのを必死に抑えてさりげなく、

「あ、あれは何て云ったっけ？」

「ベリカン型肉反吐盆^{グロミット・ラウ}でございます」

と、従者は怪しむ気配もない。

「そうそ、ヴォミトラ^{グロミット・ラウ}だったね」

肉反吐盆は、古代ローマ人の使用したヴォミトリウムの畜人化したものだ。イース人もローマ人同様、宴会時、満腹後更に物を食べる為、嘔吐して胃袋を空にする。吐いては食い、吐いては食うのだ。その嘔吐物は、黒奴に「神贖^{カノノ・ナマス}」とて好愛され、黒奴酒酒場^{ネグ・タール・バー}では最高級の下物として売られる。(白人の便が黒奴酒の材料でもある時、肉便器が誕生した様に)、この嘔吐物を口にし腹に納めて白人黒奴間を媒介するヤブーが登場するに至ったのは、当然のことだろう。

初めは生ヤブーに特殊な覆面^{マス}をさせた奴を使用したのだ。目蓋の下にレンズを入れて眼球を保護し、鼻孔に管を引いて呼吸を確保し顔の周囲に外枠を密着させ、上蓋を附ける。ヤブーにすれば奇妙なお面だが、外からは上蓋のある小盥の底が顔面になったものとも見られる。そこでこれを反吐盆とみなし、上蓋を外してこの中に嘔吐すれば、顔の上に溜って否応なく口に入ってしまう。この覆面ヤブーを Vomitor と称んだのだが、やがてその役専門の新種が作られた。アフリカ土人の様に下唇を伸張させ、唇の縁に金属ゴムで伸縮枠を附け、この口を開かせ直接口腔内に吐き得るのだ。これがベリカン型肉反吐盆^{グロミット・ラウ}で、宴会の食卓に止まらず、毎朝使う洗面道具の一部として寝台にも備えられるに至ったのである。クララはこうして、段々に色色な生体家具の使い方を憶えてゆくのだ。

F1号は、彼女を寝台の上で素裸にすると、両腕で軽々と抱えて

衝立の向うに運んで行った。

浴槽に横たえる様下ろされる。空だが、浴槽そのものが暖かい。と、得も云われぬ芳香が全身を包んだ。又別の香がする、又別の香が混る、初めの香に戻る……

——句の音楽見たい

そう思った時、全身の肌に不思議な振動を感じた。何時か濃厚な蒸気に漬っているのだが、その蒸気を伝って皮膚に訴えて来る波動があるのだ。全身の部位によってその強弱高低が異なる。空気を伝って鼓膜に來る波動ばかりが音楽を生むのではないのだ。この香水蒸気の波動は直接全身の肌を叩いて、微妙な音楽効果を生んでいるのだ。刻々に変化する芳香と協奏している様に思われる。



——これが香、^{パフューム}樂、^{ミュージック}浴なのが生れて始めて味う快適さに、彼女は陶然として暫し万事を忘却した。

彼女の目には見えぬが、この浴槽を大きく覆って半球状の強力空氣幕^{アカーチヤ}が作られ、浴槽近傍と室内の他の部分とを相流通せぬ二空間に分っているのである。中に満された香水蒸気の混合体は、昔の香水と違って、時間的に芳香発散を調節できるので、句を刻々変化させることができる。まだイースの芳香文化に慣れぬクララの方では「句の音楽」等と比喩的な表現をしたに止まったが、やがて嗅覚が洗練されてゆけば、これが「音の交響曲」と同様、一曲一曲を芸術的に鑑賞しうる文字通りの「句の交響曲」であることが分つて来るだろう。香水をつけて喜んでいた前史時代とは、芳香文化の段階が異なる世界なのだ。

香水蒸気の波動も、イースでは千年も前からある美容法で、それぞれ好みの「楽曲」を全身の肌に聴きながら好みの句を肌に浸み込ませ、これによって肌の若さを保つ。昨日クララが逢った人々が一人一人違う句をしていたのは、この為だったのだ。

と、俄に暖い湯が噴き出して、浴槽を満した。湯といっても、唯の水でない、矢張り香水である。それも薄めたのではなく、濃い原液らしい。むせかえる様な強烈な芳香だ。

湯が入って身体が軽く感じられた時、どこからか十二人の矮人が現れた。潜水兜らしいものを冠り、手にブラシを持っていて、浴槽の縁に一列に並ぶと、跪いて彼女の顔を拝む様に見えたが、忽ちザブンと湯の中に飛び込み、それぞれ受持があるのか、腕へ、腹へ、股へと迷わ

ず泳ぎ着くと、馴れた調子で擦り始めた。実に工合のよい全身の流しだ。これは云うまでもなく、浴槽矮人隊（第十章三註3）である。クララは矮人を知っているの、これには驚かず、彼等のなすに委せた。二十世紀球面の垢が綺麗に擦り取られていく。……

香水湯が捨てられ、新しく噴き出す。垢を流した丈で捨てるのは勿体ない様だが、そのまま黒奴食糧（給食管による。後述）の匂附に使われるので無駄に捨てる訳ではない。石鹼の様なものを使わぬから、身体に害がない。貴族に限らず、唯の湯を使う平民の浴後水でも、単に放射線殺菌のみで、別段垢は除かず、そのまま黒奴用水



道に廻り、飲用にされる。黒奴酒導管以外でも「白人の下水が黒奴の上水」という関係が成立しているのである。次には健康液スポンジによる全身マッサージだ。……

二 肉浴槽霊乳浴と唇人形キミコ

この辺で、彼女の恋人、郎ドレイバアの部屋を覗いて見よう。

寝台は空だ。では、奥かな……

やはり、入浴中だ。然し、今し方クララの部屋で見たのとは大分違う。外側にヤブーの群像を浮彫にした浴槽に真白な液体が溢れて湯氣を立て、下で掻き廻しているかの如く波立っている。美青年は目を瞑って凝っとしている様なのに、どうして波立つのか、矮人隊ではこんなになる筈はないのだが……

ウィリアムは肉浴槽で霊乳浴をしているところなのだ。

霊乳とはテラノヴァ星産の珍獣オロンの乳である。オロンは有翼四足人王国時代から珍重された動物だが、地球人も征服後、その乳の味の絶美に驚いてやはり保護動物としている。宇宙間の珍味であるのみならず、肌の美容にも良いので、高級な化粧品には含有されるが、何分にも産額が少いので非常に高価で、飲料としても化粧品としても平民にはとても手が出ない（黒奴には初めから使用禁止である）。ところが一部の大貴族の奢侈は、この珍奇な霊乳で風呂を立てるに至っているのだ。ウィリアムはイースの男にしては身装を構わぬ方だが、霊乳風呂で肌を磨くこと丈はかかさないので、この別荘に來ても、頼んで朝晩これを立てて貰っている。勿

論ヤンセン家にとっては、この贅沢は別段驚くには当たらないのだ。——靈乳は垢をよく溶すが、垢の溶けた奴も、値が下る丈でやはり売物になる。平民にも手の出る値段になるので彼等はこれを買って飲む。平民の中には垢の溶けた方が美味いと信じている者が少くないが、かつてある成上り貴族が眞の靈乳を味わって後、平民時代に飲んだ靈乳はこれに比べれば泥水に過ぎぬと証言した。しかし垢の為にそれ程味が落ちて、尚平民の口にし得る他のどんな食物よりも格段に美味だから、平民共は自分達の飲む方が貴族の飲むのより美味いと信じさせられている訳なのだった。

肉浴槽（洋風浴槽）というのは、十二匹のヤブーの肉体を組み合わせて作った風呂桶（洋風浴槽）である。生体接着糊と皮膚素と発癌物質とを主成分とする糊があり、これをヤブーの皮膚に塗って他物に接合させると、人工的皮膚癌を生じてその物質の内部へ糊の浸み込んだ所まで毛細血管組織が伸び、肉体そのもので結び付いてしまう。肉体と無機物でも然りだから、肉体同志なら問題なく、沢山の個体の任意の部分を生きたまま接着してしまふことができる。血が共通になるのではないが、接着面では相互の毛細管が交錯し合うので、事実上一个の肉体に化するのだ。一方栄養循環装置（第二章四）の發明は個体から摂食と排泄の爲の運動を不要ならしめた。つまり、コールドで新陳代謝が行われる以上、接着されたままでも、その肉体は生きてゆけるのだ。かくて栄養循環装置と生体接着糊とは、相合して、ヤブーの肉体を煉瓦や材木並の工作建築材料に化してしまつたのである。肉寝台、肉椅子等といった複合生体家具がこうして誕生した。（後章で、ヤブーの背中を床墊にしたダンスホールや生きた黒髪を編んだ絨氈も作られていることを諸君は知るであらう）肉浴槽もその一つなのである。甲の股が乙の首を挟む、その乙の両脚が丙と丁の脇の下を通る、その丙の手が戊の足首を握

る……といった風に、十二の個体が、内側に浴槽らしい容積と曲面を残しつつしかも水の洩らぬ様、びったり肌と肌を接して奇妙な姿態でからまり合っている。群像の浮彫とは、それを外から見た印象だったのである。

内側は湯を入れても平気な様、珪皮化されている。つまり血液槽剤使用によって皮膚を珪素化してあるのだ。更に十二体の組合せの工夫で、浴槽の底と左右とから十二本の手が出て、自由に動ける様になっている。ウイリアムの周りで波立つのは、その手が彼の身体を落すべく盛んに活動している結果なのである。この手を洗浄手という。洗浄手つきの肉浴槽では浴槽矮人隊は不要な訳である。彼の従者M9号がぐったりとだるそうな主人を抱き上げて、大理石の冷却床の上に横たえた。ひやりとした石の感触が緩み切った彼の肌を刺戟して、快感を覚えさせる。

「キミコー」

美青年が目を瞑じたまま呼んだ。

声に応じた現れたのは、首輪を嵌めた全裸の美少女である。黄肌黒髪、ヤブーだ。だがその容貌も姿態も、畜人皮を着たドリスに劣らぬ素晴らしさ。両手を後に廻して輪手錠で拘束されている、パツチリした黒い目は慎しやかに、然しヒタと、美青年の身体の一点に視線を注いでいる。注いだまま、近寄ってゆき、跪いて、上半身を前に折り曲げた……

この美少女は、ウイリアムの唇人形キミコである。舌人形、唇人形は、身長も半分が良いし、視力も要らないとて、第二章で紹介したリングの様に畸形生体家具化されることが多いが、この様に生ヤブーの肉体のまま使役されることもあるのである。又肉便器と違って、必ずしも雄である必要はない。貴公子は雌の唇人形を持つことが多い。

それはこういうわけだ。貴族が平民の間に崇愛者を持つことは、イース社会独特の風俗現象であるが、平民の男子は貴婦人に身代舌人形を贈り、平民の女子は貴公子に身代唇人形を贈り、こうして自身で相手の肉体に為し得ぬことを自分の贈物にして貰おうとする。自分の代りにしようというのだから、勿論同性の成るべく立派な個体を選ぼうとするわけで、かくして、貴婦人は美男の舌人形を、貴公子は美女の唇人形を持つことになるのだ。

キミコは、ドレイバ伯爵令息の崇愛者のある平民女性が、彼への贈物用に生畜人市場で買って、彼の誕生日に贈った品で、イース男性らしくない活発さから比較的崇愛者の少いウィリアムとしては、初めて唇人形の贈物だったので、彼はとても大切にしている。

キミコ自身は、贈物にされる前に、洗脳され、郎ウィリアム・ドレイバアの肉体の一部のみに関心を持ち、他の物には何の興味も持たぬ様、条件付けられているのである。彼女の心理では、彼女の主人はウィリアム自身ではなく、彼の肉体の一部なのだ。彼女はその主人の女奴隷として仕えている。彼女の視線はその主人の在す以外の場所には注がれない。

ウィリアムはキミコが気に入っているもので、今度の地球行きにも携行して来た。然し肉便器と違つて、唇人形、舌人形は人前で使用する物でないから、朝晩の霊乳浴の後で呼び出して使っているわけである。

キミコの奉仕を受けつつ、彼の思いは、昨日識った旧世界の美女クララを追っていた。

——クララ、貴女はもう起きたかしら……

大理石の床に長々と伸びた逞しい白い肉体、その脚の間に蹲る後手錠の黄色い肉体、その横に佇立する桃色コンビネーション制服の黒い肉体……構図も色の配合も……

「ひげそり」

暫らくして美青年がそう命令した。召使が彼の顔面に合せてオーダー・メイドされた髭剃覆面を顔にかぶせた。肉質軟プラスチックが顔面に密着し、中の矮人が髭を剃り始めた。キミコも主人への奉仕を続けている……

三 黒奴監督機

今度はボーリーンの部屋に行つて見よう。

水晶宮の女主人は、朝風呂より食事を先にしたらしい。寝台で上半身を起したまま、横に召使が捧げ持つ配膳盆から朝の食事を摂りつつ、一家の主宰者としての任務たる黒奴監督機からの報告聴取に忙がしい。

見事な果物を盛り上げた大皿に瓜楊子代りに矮人が附けてある。それと靈乳を一合ほど。これが朝の食事だ。この果物食尊重がイース人の不老の一原因だが、果物の質が段違いなので、昔のハウザー式の様な窮屈さがない。西瓜の様な水蜜桃、林檎ほども大きい莓、長い渦巻型のバナナ……園芸科学二千年の発達は、雑草を根絶し、大輪の草花を咲かせると共に、この大型果実を作り出したのだ。それに加うるに、各種の他星植物の果実がある。しかもその種類の豊富より驚くべきは匂や味の絶佳だ。何とも譬え様がない。神武時代の人間が二十世紀の東京で西瓜やバナナを食べても、その美味さを何に譬えることができよう。それと同じで、この紀元四十世紀の果物食は二十世紀の人間には全く未知の贅沢品なのだ。

ボーリーンには、然し、ありふれた果物に過ぎぬ。無心に口を動かしながら、受話器から流れ出す声に耳を傾けている。

……円筒船乗組の召使13号の報告に依れば、同8号は昨日午後同船の帰途船艙に収容せる円盤艇内操縦室において、「鞭の処女

地」たる旧ヤブーの背中に折柄現場で収容した右のヤブーの鞭を当て、飼主の権利を侵害したものの由。同8号自身はこれについて報告しておりません。……

ここで、日記報告制度による黒奴支配の機構を略説しよう。

すべての黒奴の最大の義務として、毎日必ずその一日の出来事を細大もろさず報告機に吹き込まねばならない。これを日記報告という。殊に他の黒奴との交渉や犯罪の嫌疑についてはできる丈詳しく述べねばならぬ。述べ終ると最後に「右の報告に嘘言なきを誓う」と宣誓し、これで初めて一日の義務を果たしたことになる。(第十二章二註参照)

この報告は全部テープに録音されるが、同時に嘘発見機が作用して、真実性監視を行い、嘘言があればあとで追及できる様になっている。一方テープはファイルされ、人工頭脳にかけられて分析整理される。これを照合過程という。甲が乙と丙について述べていれば、乙丙の供述に該当部分ありや否やが調査照合され、一致すれば良いが、齟齬するか報告が欠けるかしている、自動的に赤信号が出て、追及してゆける様になっている。だから仮に嘘発見機には気附かれなくとも、この照合過程で発覚する。黒奴は絶対に嘘がつかないのだ。嘘が分れば私刑公売(第十二章二註第二十五条)にされてしまうのである。

こうして真実度の高い日記報告を入手できるから、黒奴の非行はすべて判明する。嘘をついて自由しなくても、その嘘が分って終うし、他の黒奴も黙っていない(右註第二十六条)。そして白人は自身は遊んでいながら、人工頭脳に黒奴の全行動を掌握させて、その非行をビック・アップして知りうる様な仕掛になっているのだ。

これが日記報告の制度である。白人には勿論こんな報告義務はな

い(刑余者は例外だが)し、ヤブーには報告に値する私生活がない。つまり、これは文字通り黒奴の義務である。これによって一家の主婦は家庭内の黒奴を監督支配してゆけるのであり、家庭管理の為不可欠の制度になっているから、各黒奴の報告機からテープを受け取って照合する人工頭脳を管理機械又は黒奴監督機というのだ。然し人間の相互関係は複雑で、黒奴の私生活は、その使役される白人家庭の外に及ぶこともあるから、ある一家庭内の各報告を綜合する丈では照合は完璧でない。だからテープの内容は更に高次の欧州管理機、地球管理機、中央管理機へと伝えられ、照合を重ねてゆくのである。例えば、この水晶宮のジャンセン家所属の黒奴が隣別荘マック家の黒奴と悪事の相談をすれば、その日の報告では判明しなくても、欧州管理機によって数日後には犯罪を嗅ぎ附けられてしまうであろう。

白人に百倍する人口を持ちながら、黒奴達が全く団結し得ず、白人の奴隷として頤使される状態から決して浮び上れないのは、根本的には、黒奴の居住を原則として、家畜星(黒人居住星)に制限し宇宙船を全然持たせない内治体制(後章詳述)によるが、選抜された優秀黒奴が召使族として混住する天国星(白人居住星)でも、黒奴の組織化が絶えて成功せぬのは、偏に監督機によって私行を監視されている為なのである。監督機の本体たる人工頭脳は矮人を利用した有魂計算器(第八章二例22及び第十章三)なのだから、白人は矮人を利用して黒奴を支配しているということもできようか。

今ポーリーンは、昨日の各報告照合の結果について、監督機の魂体から報告を受けているのだ。隣一郎の背中を戯れに鞭った8号の行為(第十章一)は、かくて犯罪として女主人の耳に届いたのである。

——何てことを。おや、それにその鞭っているのは、クララのじ

やないかしら……あの時ヤブーは初めから裸だった様だから。もしクララだったら、重盗盗だわ……障子破り検査が要るわけ(※)。でも、一寸クララに確かめておこうか。打合せとくこともあるし……ポーリーンは、つと寝台から下り立った。

(※註。重盗盗とは白人の所有物を盗んだことをいう。障子破りとは特に白人女性から物を盗んだ男性黒奴に対し、劣情を懐いていたかどうかを調べる為裁判の時施行される検査であるが、後に詳述するから、それまでは字義から内容を想像せられよ。

四 化粧肉椅子と畜肌焼彩

セシルの部屋に行ってみると――

彼は起きて入浴と食事を終ったばかりらしい。今は化粧室の四面鏡台の中央に腰掛けて、房々として金髪の手入に余念がない。昨日は編んで左右に垂らしたが、今日は上に捲き上げて結おうというのだ。結髪係召使は一心不乱だが、仲々主人の氣に入る様にできない。クララに対してあんなに慇懃な彼も、召使への鞭は遠慮しない。足美容矮人隊が足趾の一本々々に取附いて先程から爪を磨いているが、度々踏みつけられている。セシルは心に懸ることがあつて、焦々しているのだ――つまり、昨日の失敗を詫びにこれからクララの部屋へ行こうというのである。

やっと結い上った。今度は眉を描かせる。イースの男性は、毎日眉の姿を変える。却って女性の方はそれをしない。男女の地位が転倒し、男性が女性に対して媚を呈する様になって以来、男女共に美男美女揃ではあつても、おしやれということへの感覚と熱意は、男性の方がより強くなつて来ているのである。化粧室に居る時間も男性の方が長いだろう。時には三時間も腰掛け続けている。

それに関連して化粧肉椅子のことを説明しておこう。今セシルが

腰を下している椅子がそれだ。排泄の頻繁なイース人が何時間でも腰掛けていられる椅子――そういえば、もうお分りであろう、一種の便器椅子である。複合生体家具の一種でヤブーの肉体を生体接着糊で結合してあるのだが、その中に肉便器が仕込んであるのだ。貴公子用と貴婦人用では少し違ふが、ここは貴公子用つまり男子用で、大便器と小便器とを腰掛けた姿勢に合せて施設してある。本国から携行した専用器で誠心能附だから、排泄したい時に排泄すれば良く、全部受けて呉れる。黒奴の監督管理等政治に属することには一向関心のない(又権限を与えられてもない)男性が、何時間もおしやれに身をやつすには、この化粧肉椅子位便利な腰掛はないだろう。

それから、肉足台、肉椅子、肉寝台などの肉家具類では、体温調節もできる様になっている。夏は三度という冬眠、一歩手前の低温から冬は四二度の高温まで、体熱を自在に高下しうる様栄養循環装置に調節器が附属している。従つて夏はヒヤリと涼しく、冬はホカホカと暖く、快適な肌触りを満喫することができるのである。セシルが今掛けている肉椅子は、秋の氣候と室内暖房の因子に応じて、体温を高低しつつ、彼のお尻と背中を暖めているのだ。

ところで、肉椅子は複合生体家具だというのに、先刻の肉浴槽と違つて、黄色い肌が見えないのはどういふわけだろう。彼が掛けている椅子は、成程肉質らしくはあるが、アラベスク模様の描かれた物体に過ぎないが……外被だろうか？

そうではない。近寄つて見ると、背中 of 倚り懸りが前向きになつた女体上半身の露出した肌でできていることが分る。セシルの背中を自分の乳房で受け支え、外から彼を抱く様にして美しい雌ヤブーが中腰になり、その尻の下に更に雄ヤブーの四道の姿が見られ、一方雌の膝の間に拘模型大便器が坐し、更にその前に侏儒型つまり小

便器が向い合つて立つ、都合四体が複合し皮膚と皮膚を密着させて一個の椅子を化成している。その皮膚表面に直接色々の模様が現わされているのだ。

これは畜肌焼彩（電烙刺青）^{スクリン・ペインティング}といつて、生体彫画と総称される畜体美術の絵画部門をなしたる畜皮画の技術の産物である。

ヤブーは旧ヤブー当時から刺青文化の担い手だった。肌を染めることへの宿命的な愛好があつたのだ。家畜化された時、その肌が画布代りにされるに至つたのも故なしとしない。そして原始的な刺青の技法は、まもなく、電熱焦彩画法に迄進歩した。各種色素を血液媒剤と共にエネマにより腸内注入し、電気焼筆とて温度調節器附の先細電熱鋸で肌を焼くと、先に（第十章一）説明した原理で、色素はそれぞれ特有の温度に応じて皮膚表面に定着する。色温示度に注意する丈で全身が自由に染められるのである。

唯の絵画と違つて、立体感がある。運動性もある。野心的な画家は競つてこれに赴いた。やがて生体接着糊が發明されると、何匹かを横に並べて接着し、その背中を大画布に見立てて画筆を揮う者も生じた。雌雄二匹を抱擁させたまま固定して奇妙な彩色を施す者もあつた。展覧会、コンクール、新しい美術としての畜皮画の公認、やがて工芸化が始まり、生体家具への彩色は珍らしいことではなくなつた。クララが今迄見た生体家具類が黄肌だったのは、個人の趣味を尊重するイース人の風として、接客用家具には色を附けないのが普通なものと、昔の日本建築における白木の様に、彩色せぬ生肌の良さも一部には賞揚する人があるからである。

金髪碧眼の美男子のお尻を支える四匹の雌雄ヤブー（肉便器は必ず雄であることは既述）は、こうして畜肌焼彩によつて、使用主セシルの注文通り（※）皮膚を彩色されているのである。

（※註。イースでは来客用以外の椅子はオーダー・メイドが原則である。だから腰や背の寸法に依つてゐるので掛心地が良い。考へて見れば、個人の使用する椅子を、衣服同様一人一人の身体に合せて作ることを行なかつた二十世紀の世界は、商品の規格化に毒されて、生活の快適さを求める精神が鈍つていたのである。

セシルの化粧は、もうじき終りそうだ。黒奴が何か持つて下階から戻つて来た。セシルは満足そうに黙頭うなづいている。何だろう？

ビュを縛つて引き立てたドリスは私室ヘヤに帰つた様だし、ポーリオンはクララの部屋の方に行くらしい。往来漸くしきり。水晶宮は全く目覚めたのだ、ドリスの私室を訪れて見るとしよう。

〔次章はソーマ・バーティ迄の神々のゆききで、ドリスは逆吊にしたビュを助けてやろうとするクララに対して、ヤブーの鱗一郎を譲れと申し出します。どうなるか御期待下さい〕

甲斐仁参案 四馬孝画

『涙のダイヤモンド』（略号）

大中判印画紙焼付 二枚一組 三百円

胃の洗滌 彼等に手取り足取りされた娘は真白い肉体を梯子の上に仰向けに固定され、両腕は後手に梯子の下で縛られ、両足首はそれぞれ梯子の棧に縛りつけられた……ゴム管の端についた濡斗からは、幾杯もの水が次々と注ぎ込まれ、胃が水で一杯になるとゴム管を引き出し、

梯子を逆さに立てて水を吐かされる苦しさ……ヒマシ油責 マダムは娘の手足を奇妙な椅子に縛りつけさせた。尻当てのない骨ばかりの罪の椅子に全裸のまままで坐らせられた娘は……

ハ詳細解説は本誌七月号及八月号に掲載してあります。V



ワイド映画の

縛りシーンから

嵯峨美也子

時代劇映画には、美女の緊縛シーンという魅力がある。これは、サイレント時代からの映画の美しい夢である。これがトーキーになり、カラー作品になり、遂に邦画もワイド映画になった。そして、この緊縛シーンの美しさ、迫力は一層昂まり、緊縛マニアの目を楽しませている。最近の邦画のワイド映画、近く封切の作品等から、この緊縛シーンを省察してみよう。

ワイド映画のトップバッター、東映スコープ「鳳城の花嫁」もこの緊縛シーンはちゃんと計算に入れてあった。立廻り、追っかけ、そして危難の美女、美丈夫の救援。これは、時代劇映画の最大の要素である。

長谷川裕見子、中原ひとみの美しい姉妹が悪旗本に捕えられる。裕見子には、好きな若殿、大友柳太朗の源太郎君がいるので、旗本の大將のいうことを聞かぬ、それで「二人を庭中に引出して、一本の杭に背中合せに縛りつけ、頭の髪の毛を剃り落して丸坊主にしてしま、殺してしまえ」ということになる。二人は背中合せに縛りつけられる。立派なゴツゴツした着物の上から太縄をかけられているので、三重縛りになっているが、緊縛感はあるがあまりなかった。二人の周囲を、鬼の面をかぶった侍が剣を振り廻して踊り狂い、あわやという時に、大友柳太朗の源太郎がかけつけて助けるのは定石通りである。西部劇の土人

に捕えられた白人の美女が、いけにえとして火刑にされる筋書によく似ているが、迫力では未だ未だという感じだった。

大映のビスタビジョンの第一作「地獄花」(監督伊藤大輔)では、京マチ子の素晴らしい緊縛シーンがあった。室生犀星の舞台劇で、尾上梅幸がやっている「舌を噛み切った女」の映画化である。

山に捨てられて、山賊の頭、袴野の磨に拾われ、育てられた野性の女ステには京マチ子が扮している。このステが、馬の背に太綱でガンシガラメに縛りつけられ、その馬を走らせるシーンがあった。口にまで、その太綱の狼嚙を噛まされて。……それは、育ての

父であり、夫である袴野の磨が、身ごもったステの腹の子の父親を白状させようと折檻する。だがステは白状しないので、グルグル巻に縛られて、袴野の磨に杖で突出されてきて馬の背に縛られ「寿命があったら勝手に助かれ、無けりやそれまでだ、地獄となりと極楽なりと好きな所へ行け」とムチで馬を走らせるのである。疾走する馬の上で身をもぐく京マチ子のシーンも長い。ハラハラさせ、ハットする瞬間、前手縛りの手で木の枝にとつかまり、地上に投げ出される。後も縄を身にまとうている。京マチ子を強姦した山村聡の山賊は仲間のオキテとして、夜空にさかさ吊りのリンチにあらうが、凄惨なシーンだった。

東映ワイド「大菩薩峠」もサディスティックなシーンが多く、緊縛マニアには喜ばれる作品である。今度は三度目の映画化で、大河内伝次郎の机竜之助、入江たか子のお浜、片岡千恵蔵の竜之助、三浦光子のお浜、そして三度目が千恵蔵の竜之助に、長谷川裕見子のお浜である。

許婚の宇津木文之丞と机竜之助との、明日に控えた剣道の試合を心配したお浜は、文之丞に内緒で、竜之助に「明日の試合を譲って下さい」と頼みにゆく。「剣道の試合は女の操と同じだ」とナゾの言葉を投げて、竜之助は下男の手八に、帰途についたお浜をさらわさせる。

その庄巻シーンは、水車小屋の中に猿ぐつわをかまされ、後手縛りで転がされ、失神しているお浜である。その前に、覆面の竜之助がジッと見つめている。内田吐夢はアングルを考え、お浜のうらめし気な顔をアップで撮っている。さすが仲々迫力のあるシーンである。丘さとのみのお松が山形勲の神尾主膳の邸へ腰元としてあげられ、好色な主膳に見込まれる。百人一首の竹の子勝負で、負けたら一枚脱がされて行く。遂に長襦袢一枚にされ、あわやという所で、裏宿の七兵衛の機転で助けられる。以前の深水藤子のお松の時の方が面白かった。

この七兵衛が、姪のお松を無慈悲に追い返した山岡屋の伯母のお滝に復讐するシーンが面白い。その夜、番頭といちやついているお滝の前に現われた七兵衛は「おかみさん、命をとるとは云わねえ、一寸はずかしい思いを……」カット、原作では山岡屋の店頭に、赤裸でお滝は番頭と背中縛りで晒される。映画では、赤裸は撮れない。風呂敷をかぶせられたうごめくものがある。風呂敷を取りのぞくと、長襦袢一枚にひんめくられ、背中合せに番頭と縛られたお滝がうずくまっている。中年女優の縛られ女優としてナンバーワンの日高澄子のお滝だけに、桃色の長襦袢の色とともに、色っぽい縛りシーンだった。

日活スコープ第一回作品「月下の若武者」

は、長門裕之、津川雅彦兄弟が共演する、平安朝時代の絵巻物風の仇討物語だが、この中に長門、津川二人とも父の仇に捕えられ、縛られるシーンも入れて、長門、津川のファンをハラハラさせるシーンもあるが、美しかったのは、長門の許婚の浅丘ルリ子の千加の縛られ姿である。浅丘は、嫉妬した山の娘アケミ（香川美奈子）のために、人買いに売られ、白拍子になる。兄弟の、父の仇の前で踊らされ、遂に短刀で突っかって行くが、女のやさ腕、捕えられる。緋の袴に白衣の上を三重縄で縛られ、突きとばされ、獄舎にひかれて行くが、このシーンが長く、白衣と緋の袴に縄の色のコントラストもよく、痛々しい美しさだった。最後に、兄の長門の小太郎は縛られ、吊られようとするが、弟の千寿丸に助けられ、目度く父の仇を討つのだが、ハラン万丈というところであった。

大映ビスタビジョン「銭形平次捕物控、女狐屋敷」では、女目明しお品が邪教天心教の秘密をさぐるために、巫女となってもぐり込むが遂に化けの皮をはがれ、縛りあげられる。近藤美恵子のお品は、胸のぞくような薄いレーヨンの着物の上から後手縛りに緊縛され、縄尻を悪浪人たちに引張られる。ぐっとしめ上げられた感じで、キッチリと後手縛りも見せていた。もう少し色気があればいい縛りシーンだが、惜しかった。

東映スコープ「素浪人忠弥」で、最後の裸馬の引廻しで、片岡千恵蔵の忠弥について、三浦光子の女房ゆみ、松浦築枝の母親すが白の囚衣に本縄をかけられて引廻されるシーンがよかった。中年の色気を見せる三浦光子の縛りシーンもよきものである。

往年には「大菩薩峠」のお浜がある。

現在撮影中のものに、東映スコープ、市川右太衛門主演の「黄金魔殿」がある。吉川英治の「有明無明」の映画化で、市川右太衛門の北条貢を捕えんために、そのおとりとして長谷川裕見子の女房鶴江と、植木千恵の娘菊乃が捕えられ、谷中の天王寺の五重塔の前に三日間晒しものにされる。

高札、捨札、青竹の垣型の中にしっらえられたカヤブキの小屋に、囚衣で縄付きの鶴江と菊乃が群集に向かって坐らされている。

「美しい女ですわね」 「あれで強盗の女房たあお天道様も聞こえませんか」というような勝手な雑言を聞かされながら……。

夜になる。晒場の母子がグッタリしてくるころ、北条貢が助けにくるのである。

長谷川裕見子も東映の縛られ女優の随一である。

東映スコープの「ゆうれい船」でも長谷川裕見子の薄命の美女雪姫、円山菊子の侍女茶々は海賊に追い廻されるが、侍女の、新人桜

町弘子のさつきは五郎太夫の邸宅に忍び込んでいるのを見つけられ捕えられ、鞭うたれる。田代百合子、三笠博子のいなくなった東映で、今後大いに可愛がられることだろう。

東映スコープの「魔の紅蜥蜴」で、若水美子の扮する綾小路万里子姫は、市川右太衛門の白旗ろく助を助けたために捕えられ、田沼意次のために、庭先の大きな松の下枝に両手を吊上げられて「曲者の名をいえ」とはげしい拷問を受ける。たまげる悲鳴、「もっと責めろ」と鞭打たれる。短かったのが惜しかった。

スタンダード版では、大映の「万五郎天狗」で、小野道子の旅芸人お夏は、一度に着物をぬがされ、裸にされて取調べられようとする。この時は雷蔵の万五郎に助けられる。そのご恩のために、万五郎の許婚の深雪の身代りとなり、カゴの中にサルグツワをはめられ、後手縛りにされる。小野道子は肉体があるので、縛られ姿もよい。

新東宝の「風雲天満動乱」では、筑紫あけみの芳音が悪役人に縛られ、最後は邪教のために火あぶりにされようとする。新東宝では縛られ女優のナンバーワンである。火あぶりのシーンは、高い木の上の縛られ役はつらかっただろうが、火との距離感が迫真力を欠いていた。バーグマンのシャノンヌダークの火刑

のようなシーンが日本では撮れないのだろうか。また、邪教の巨頭、魚住紙子の豊田貢が後手縛りで引かれて行くシーンも見せたが、群集シーンで反抗し、捕手に縛られてつきとばされて行く娘達の中に仲々迫真力のある縛られ女優もいたが、一生懸命のワンサ女優の真剣な姿として楽しませてくれた。

同じ新東宝の「修羅八荒」では、浅香恵之助の妹お蘭（遠山幸子）が敵の陣場弥十郎らに襲われ、猿ぐつわで、後手縛りでカゴで運ばれた。原作では、お蘭が陣場弥十郎らに捕えられ、烈しい拷問を受けるが、映画の宇治みさ子は、捕えられ、お蘭のいる牢へつれて来られるが、すぐに恵之助や嵐寛寿郎の瓢箪屋銀八に助けられ、期待していた人々を失望させた。

また、新東宝の「美男剣競録」(監督赤坂長義)で、千葉栄次郎、齊藤敏之助に恋心を描く花川戸藤兵衛の美しき姉妹娘お三輪(松浦浪路) お絹(野々村律子)は父を殺され、ニセ御用盗の悪旗本にさらわれ、屋敷に連れてこられ、背中合せに縛られ、満座の中に晒される。「焼いて食おうと煮て食おうと思いのままだ」と嘲笑を浴びる。三重縛りにされて、乙女の胸は波立っている。切ないシーン、そこへ栄次郎、敏之助が助けに現われるのは定石通り、悪旗本は捕手に追われ逃げまどう。

『逆 比 例』

牧 高 志

文・画

一、盛装一締め大汗の巻

『晴れの日取りが定まったってね、いつだい？ 一つお祝いしなくっちゃならんから』

『アラ、そんな、まだ判つきりしないんですけど、まだ三カ月もあとなんですって』

『ですって、人事見たいに澄ますところを見るとまだトチ坊、花嫁修業が終らんと見えるな、精々綺麗なお嫁さんになる事だね、仕度は洋装かい？』

『それが高島田なんですって、ホホホ、また云っちゃった、純日本式に神前結婚やれって御注文なのよ、あたし嬉しいんですけど困っちゃった、あんな物うまく着れるかしら？ 窮屈なんですってね』

『大丈夫、向うは商売だもの、黙って澄ましてるうちに満艦飾の花嫁御寮が出来上っちゃまう、大船に乗ったような気持で素顔に下駄ばきで式場に行って御覧！ 立ちどころに別人に仕上げて呉れるから愉快だよ、物は試しと云い度いが一度切りで撮り直おしがきかないから考えようによっちゃ一寸寂しくなるね』

『取り直おしって何んですの？』

『いや、一事が万事、こちらのお手伝いが一回限りで君が奥さんになっちゃうと云う訳なんだ。で——その折は最後の願いごとを聴いて呉れるかい？』

『それ、何んでしよう？ その節はどうぞ神妙にいらして下さいませね、いつもの吹き出したりなんぞなさらないで、ホホホ、これ、トチ坊からお願いごと』

『勿論！ ただね、どうして君のゴテゴテづくめの盛装した娘御最後の御姿を撮ったらいいか、今からさっぱり見当がつかんのだけど、一通り着付を済ませるとお手洗の二つべん位は行くんだろう？ あそこは専用の廊下がちよいとあるし、そこで一枚は撮れる、もち、何んとか申すって祝詞の前なんだ、いいね？ 約束しとくよ』

——てな具合で晴れの当日、厚つかましくも細引一本、白布一つを持参、いや早や人生忙しい連続とは申せ何んと汗の出る事よ。

眼かくし十秒、胸に一本かけて後手約一分正面から手前後退してパチリまでに二分、続いて後姿をおトイレに向い後下り一分半、計四分何がし、汗三升とは少々大きかった。何故折角の花嫁衣裳に縄目が少いのか？ は考えても見給え、御存知のがんじがらめにアクセサリーのべら棒に多いこと、正に身の細る思いをこれでもか、これでもかと巻きつけ、締め上げてのゴテゴテ、美学論的に云っても細引一本はキーポイントの役目を果たし得て妙ではないか（い図）

メモに曰く

トチ坊、ここに縄目を受けて遂に嫁く、ああ悲しともまた恥かし、乞い願くば先方理解あるハズであれかし、優しき妻であるよう、勝手なことを云って虫のいい奴はどここのどいつだい？ 死んじまえ！

昭和〇年十一月、大安の日、(但し空^{そら}ていた)

於〇〇苑、さらば——

バイ、バイ……………

二、派手好みぎゆうつと

三締めめ巻



い 四

『きものを脱いで長襦袢一枚になるとずっと身体が楽になるぜ、僕等でもYシャツ一枚だと仕事が倍運ぶんだ、一つ脱いで御覧！』
『だって、今しがた着たばかりよ、また帯を解くなんて面倒くさくって』
『そこが君の値打の分れ道なんだよ、きものは脱いだり、着たりするところに醍醐味があつてさ、女の人は寧ろ楽しいのじやないのかい？ 僕が君ならハイッ、って素直に御命令を聴くんだけどなあ——、惜しいよ、全く、

さつと脱いで長襦袢一枚になるとパツと花が咲いた様で冷や酒だつて熱かんになつちまう、一つ勇敢にさ、まだ君、秋口にはならんのだぜ、暑つからず寒からずの絶好の宵だもの』

『嫌やな方、とうとうお脱せになるのね、じや、どうぞ、およろしいように、フフフ』

踊る阿呆に見る阿呆！ などと冷やかさないで呉れ給え、酒、おつまみ、席料共一、金三千円也の長襦袢代なんだからである。

『どうだい？ 寒くも何んともないだろう。大石蔵之助は、これで鬼ごっこをやったんだぜ、一つやるか』

『馬鹿ね、お女中さん達に笑われるわ』

『笑われてもいいじやないか、しかつめらしくお酌してたら心中者と思われるぜ、さあ、これで眼かくししてと、小学校の運動会だ、序でに縄飛び競争、縄もこの通り、飛んだり躍ねたりしちや畳が傷むから静かに坐ったままでパン喰い競争としやれて見るか？』

『眼かくしのパン喰い競争ってないわよ、嫌やなひと、アラ、どうなさるの？ 嫌や、嫌や、本当に手を縛ったりなんぞして、困るわ、そんな、痛くって』

『どうです？ 三本縄がきつちりお胸にかかつて締め上げられた処は芝居のお軽じやないが絶世の美女と早替り、逃げ出そうなんて不

埒な了見はお棄てなさい。今輪際出来っこなし、どうぞお締めなすって、へへへ、これこれ、そう暴れずに、お静かに静かに、折角の熱かんがひっくり返えりますわよ」

序でに御紹介しときましょう、姓はひさご家の名は君枝、当年取って二十と二才、らしい、どうぞ宜敷しく。(ろ図)

ときとところはまあまあ、御容赦の程を。

三、素裸のぐるぐる踊り子 御難の巻

『ヌードって女の人によりけりでね、たるみ乳房に贅腹は見ててげっそりするよ、そこへ行くと君なんか、うってつけだけだなあ』

『でも今日は踊りの帰えりでしょ、何んにもつけてませんのよ』

『つけてないってお腰巻位は締めてるんだろ？』

『ホホホ、お腰巻をしてないと御師匠さんに叱られますの、でも男舞の弁慶の時は下にもう一つ』

『うんとふん張るからそりや必要だよ、第一失礼にもなる、いつかもさるところの姐さんが黒田武士をやったけど、ああなると蹴出しも余っ程気をつけないと後味がまずいねえ、ピンクのホルの腰巻なんぞ閃らめかしられちゃ、さっぱりさ、』



ろ図

『本舞台の時は別ですけど、普段は人絹物が一番さらさらして踊りよくって、嫌やだわ、そんな話になっちゃって、ホホホ』

『じゃ、お腰一枚のところでは今日は我慢します。何ね、或る挿画を頼み込まれて弱ってるんだ、スリッパじゃ感じが出ないし、ショーツパンツじゃ白一色でね、同じ描くなら、ちよっぴり色気があった方がよいと思うし、それに田舎娘と来てるんだからなお更』

『でも、あたしなんぞで勤まるかしら？ お腰は赤ですけどよろしいかしら？』

『願ったり、かなったり、大いによろしい。それともう一つ、作者によると何か悪い奴の口車に乗せられるか、乗せられたかで田舎からぼろーと出た初鼻に拐される、誠にお気の毒な』

『踊りだとすぐ背景が問題になりますわね』
『いや、どの道周旋宿の二階位のところかな、』

柱にゆわえられて』

『まあ、怖い、それで裸なんですの？』

『そのあたりは雑誌屋の方からの注文でね、きつと売る買うで御本人は仲々首を縦に振らない、で、まあそう云う事になりますか、一つ、演って貰いましょう、田舎の娘さんになったつもりで』

『手足と目の動かない踊りと思えば、でもお腰巻までのところではよろしいんでしたら、松が柱に変わった浦里さん見たいでホホホ、これで、一寸恥かしいわ、余り御覧にならないで、じゃ、どうぞ、はいッ、そこへ参ります、こうですの？』

『そのまま、それで結構、もうちよつと斜め横に、身体でなく、右の脚を後ろに引いて下さい。両手は固くならないで後ろに廻わして下さい、細引が五、六本かかりますよ、おっと、立てないように脚にも一巻き、痛い？ こうなったら君でなくもう田舎娘になったつもりで少し乱暴に縛り上げなくっちゃ写実的にならない。ひい、ふう、みい、ようつ、と脚と五



は四

巻き、それとお腰しの紐で六本か、後で迷惑でしょうを、慮んばかりで眼かくしを一丁、どうだい？ これでも首を縦に振るのが嫌やなのかい？ 四の五の抜かしや、もつと痛い目に逢うんだぜ、判ったかな？ ハイッどうも御苦労さん、終り。』(は四)

怪し気な素描きと称してカメラを使用、そのカメラアイは見事にみどり嬢を捉らえて、

名取りになろうとなるまいに拘らずその妖姿をアルバム内に残して燦然と光彩を放っている。そのアルバムを譲って、そりや無理ですよ、相手は嫁入り前の娘さんなんですからね、内緒にしてやって下さい。

当時で芳紀正に十九才、今で云う長髪女族で典型的なニッポン娘たる事を本人の名譽にかけて申添えときましようか。

以上若き女に関する三章編目篇、これを要約すれば次の如し。

凡て女体は若し着物を愛用せんか、腰巻、裾除け、長襦袢、足袋に腰紐、伊達巻、着物、帯に帯メ、帯揚げ、あしんど、の順を以て緊縛せられるものである。さればこよなく斯る女の姿態を愛し愛情の接吻の一つでも捧げまつらんの男性は須らく装着する重みに逆比例して巻数を算定するを要す。早い話が振袖なら一掛けで沢山、お腰巻一枚の時はぐるぐるが御本人も至極よろしいと云う訳なんざんす。

おしまい。

ダイアナ夫人

未亡人 期 (二)

乗杉貴代子

乗馬好きの女はすぐ分ると思いますが、馬術は巧致だけが手柄でスリルがありません。打つ、蹴る、締める、激動するといった快感はやはり障害飛越です。例のマダムを説き伏せて店に出入りするK大生の工藤敬之君を紹介させたのは桜の花の散る頃でした。私が敬之君に目をつけたのはヒョットとしたらこの青年は私の最もよい乗用馬になれる素質を持っているからとにらんだからでした。というのは彼自身K大の馬術部員であり、相当な巧者であるのに加え、W過剰的というか、マソヒスト的というか、なんとなく異性による圧迫を求めている風情が感じられたからです。私の馬になって、もて遊ばれる前に遠乗したことがありました。その時なども私が馬に跨ろうとすればすぐ足を支えるし、下馬すれば塵を払い、馬具を手入れし、長靴をはいたま

ゝ磨かせても喜んで奉仕する。血のにじんだ拍車はハンケチでふいてくれるといった調子だったのです。五尺六寸、十七貫近い若さに溢れた青年を前にして私はジユクジユクと湧き出るような快感を感じました。その日は余りに楽しかったので自宅に呼びました。同好のもの同志ですから話はすぐ馬のことになります。入浴をすませビールを交わしながらしばらくして彼は小声に切出しました。

「乗杉さんはどんな馬が好きですか」

「さあ、そうね、少々ジャジャ馬の方が乗ごたえがあつていいわね、余りにおとなしいのは満たされせんわ……」

「僕も大体そうです。打つても蹴つてもどうにもならないのを長いこと時間をかけて乗りならすと何んなく満足感が起きると同時に不満も起きてきます。僕が馬だったらこうする

の다가……」といった調子でした。私は笑いながら冗談めいた口ぶりで、

「それじゃ私が、ためしに乗って上げましょうか。どれぐらいの程度の馬か」

彼はしばらくにやにや笑って諾否を決しかねていたようでしたがやがて、

「一つ、乗杉さんの腕前を拝見させて頂きましようか、今度の土曜の夕刻なら来られます」

と答えたので、私はとつさにこゝで深追いは禁物と話題を転じて最近の学生気質といったものに焦点をあわせ、その晩は時を過ぎました。

ほどなく待遠しい土曜の夕刻がやっと来て心はずませながら風呂をたかせたり、食事の準備をさせたりしているところへ敬之君が現われました。応対準備を終えた女中には夕

食を早目にすませ、映画見物に出したあとは水入らずでゆつくりと乗馬の練習にかゝりました。彼は持参のバッグから海水パンツや轡のようなものを取り出しました。みると木の枝の股のところを巧みに切取ってかぎ型としその一対をヒモでつないだもので、この木製轡にガーゼを巻いておけばヨダレやつばき止めになるという中々念入りのものでした。「乗杉さん、これなら口も余り痛まないし、馬の轡にも見えるでしょ、何か手綱になるひもを貸して下さい。作るのにちよっと苦心しましたよ」

と自慢げに目の前にぶらさげました。その際私はさてひもはと思いましたが適当なのが浮ばぬまゝにいたづら気分もあって、「どうお、フルフアッジョン靴下では、長さも手頃よ」

といいますと、

「それも面白いですね」

との答え、そこで小ダンスから古靴下を取り出し轡の端に取付けた金輪にツマ先の方を結びつけました。

「女性の香りがブンブンにおう手綱ですね。それで、あとは乗馬時の服装をして頂ければ結構です」

というので例の佐竹氏提供の服装に薄いナイロン白手袋をつけ、

「では洋間の方へゆきましよう。乗馬中は物

は云つては駄目よ」

と念を押し、追い立てるように洋間へ連れてゆきました。調度類を壁側に押付け十畳ほどの空間を作つて、静かに立っている彼の首を鞭で抑えました。彼は直ちにひざを折り手をついて腹ばいになるのですが、これでは低過ぎて足がのばせませんので花びん台（台の下に小さな車をつけて、移動させ易くしてあります）に手をつくよう指示した上、右足を大きく開いてどっかと跨りました。やはり相手が若いだけに老人ウマと違って骨が軟かく、皮膚もつややかで早くもはずむウマの脈搏が心地よく内股に伝ってきます。私は股と手綱を締めると鞍上にいる時と同様に彼をグイグイ押出しました。何を考えているのか彼はさっぱり動きません。二度、三度やった挙句拍車（出血する恐れがあるのでガーゼで巻きピンポン玉のようになっていきます）で太股を蹴りました。すると四、五歩歩きましたがまたとまりました。癖馬によくある例です。このような時は主人に逆う悪癖も矯正するためにも蹴りまくり、打ちまくるのが良いのですが初乗りの関係で穏やかに徐々に矯正する方針をとることにし、間断なく小刻みに蹴る、打つの動作を続けました。このような仕草は流石乗馬経験者だけにまことに上手で跨っている私でさえ、これでポリウムがあり野外だったら実物の馬と錯覚するほどでした。

だんだん乗り手とウマの呼吸も合ってきて押せば歩き、蹴れば早目になり、鞭をあてればはねるといった具合になる頃には彼も大分汗ばんできました。そろそろジョーブスに彼の汗がしみ込む頃、私はウマを一たん停止させるとジョーブスだけ脱ぐことにしました。もっとじかに触れ合いたいという欲望がそうさせたようです。とかく冷え勝ちな私のお尻が心地よく暖められたかも知れません。しばし若い血汐の温みを楽しんでいるところへ夜遅く帰るはずの慶子ちゃんが、

「ただいま」

と勢いよくドアをたたきました。少々驚きましたが、いまでは同じ穴のムジナ同然なのでウマに早速着換えておくよう命令するとともにジョーブスをはいてかけつけるようにドアを開けました。

「おばさま、どうしたの？」

と一瞬驚いた目付きなので、

「ちよつとお客様と馬術の練習してたのよ」

とさりげなく答えました。こうなると才媛の慶子ちゃんのこと、

「アーラ、お一人でいいことばかりして、私

にも乗せてよ……」

と甘ったれます。

「でもね、ウマの方でいいっていうかしら……」

……といっているところへ奥の方から、

「どうぞ！」

という敬之君の照れた声がきこえました。かねて乗馬好きの若い女性が同居していることは写真や話で知っていたので絶好のチャンスと彼は思ったのかも知れませんが、慶子ちゃんも「どうぞ」っていつてゐるわ、いいでしょね」というや否や私のOKがあったものの

ように、

「では、ちよつと御手洗に行ってくる」といつて洗面所へゆきました。お化粧でもしていたのでしよう、十分ばかりしてショートパンツの上に前の割れたスカートといったくつろいだなりで現われました。私が紹介するのも待たず、



「始めまして、私、慶子、どうぞよろしく」

と自己紹介、一方敬之君は闊入者に対する驚きで少々もじもじしているのが、

「お友達の方藤さん、まだ学生で馬術がとてもお上手、ついでながら乗られる方も……ホホホ」

といった破天荒の紹介となりました。かみしもを脱いでこゝまでお互いに裸になつてしまえば後はスムーズで一通りの茶のみ話の後には早くも慶子ちゃんが、

「おばさま、どういう風にお乗りになったのかしら、私も高校生と馬と遊びをしたけど跨がりながらジャンケンに勝つ気持悪くなかったは……」

と誘導にかゝります。すると敬之君も、「僕は女性に跨ったことがないので僕の方も、こゝらでためしたいですな」

とマソヒストがサディストに豹変したのには驚かされました。しかし結局三人相互に乗り合うことに妥協点が見出され早速楽しい準備にかゝりました。先ず敬之君が形ばかりですが私の背に跨りましたが、私がウンウンいうのももの一、二分でやめついでショートパンツ姿の慶子ちゃんに跨りました。

「中々気分がよろしい、ハイシハイシ」などと冗談をいいながらやっていました。が、これも二、三分で取止めて結局敬之君

は慶子ちゃんに散々乗り回される番となりました。

「良くって、このお姫さまは気分が良くなるまで下りませんよ、少々悲鳴じや許しませんからね」

と前置するが早いかスカートの前を大きく開くとさっと跨り、肉付の良いお尻を敬之君の背中でもみ減らすばかりに前後にゆり動かしました、それがひとしきりすむと上下動です。太ももでシャツ一枚の彼の肋骨を締めながら伸び上るようにしたあとすぐ豊かなお尻を勢よく落す、といった調子です。動作が鈍ければ悪びれもせずハイシハイシのかけ声をかけながら彼の太ももを蹴りつける、といったわけで見ている私の方が頭が熱くなってきたしまいました。女性が実物の馬の背で心地よげに股をこすらせているのを見ても、爽快な気分は避けられないの一番弟子と知っている慶子ちゃんも早くもこの有様なのは「流石いま時の若いものは違う」と感心したりしました。二十分ぐらい経た頃でしょうか、突然ウマの敬之君が「美人にこう責め立てられちや辛抱できませんよ」といい出したので楽しみは細く長くと思ひ、

「慶子ちゃん、もうやめたら……」

とすゝめましたが、

「アーラ、もうおしまい。もう少しね」

といいながら、激しく腰をおり出しまし

た。女性が心地良さそうに馬を責めたてる様子は同性がみてもなまめかしいものです。しかし流石のウマにも疲れが見え出したので、「クイーンとおウマさん、もう休んだら」という二度目の勧めでようやくスポーツは

終わりました。敬之君はそのあと入浴を所望しましたので二人は愛馬とともども入って汗を流してやったり、洗わせたりしたことは申すまでもありません。

さて私と佐竹氏ならびに工藤君とはざっと以上の通りごくありふれた平凡な関係ですがこれは相手の人格を完全な馬格？にまでつきおとせないいろいろな理由があるからです。その最大理由は人格を買収しきれないということだと思ひます。これではほんの、お遊び程度にとどまり誇り高き女王の体内に荒れ狂う魔性の欲望は満足させられません。そこでおよそ二十年の月日を費して一匹のメス動物を見付け出しました。メス動物といっても外見は人間の女です。ただ精神状態が人間よりも動物に近く、人格などというものは選挙票と共に込みで百円で買手があれば売りましようといったタイプの女なのです。うまいものを食べさせ、小ぎれいな衣類を提供してくれ、僅かの小遣と住居を保証してくれるならば、どんな汚賤の仕事でもやるというタイプの女です。しかし彼女がそのようになったのもやむを得ないでしょう。

岩手県の鉄道から十里近く離れた山奥の炭焼の娘で男親一人だけに育てられた四人姉妹の末っ子というのですから、もちろん食うや食わずで小学校も分校に二年しか通っておらず、白米を毎日食べられたらというのが一生の願いだっただけです。

苦谷ユキといい、今年で二十歳、五尺一寸十七貫もある大女ですが力仕事はおよそなんでも嫌がりません。その代り人と会ったり、話したりする事や、創意工夫を必要とする仕事は全く不向きです。誰かに頼ってその人の指示、命令を受けなければ生きてゆけないといった女ですが、私のような家で女二人のための力仕事や雑用をさせるのにはかえってうるさくなくて都合なのです。その上家出同様にして知人を頼り上京したもののその知人も全く頼りにならぬといった境遇なので帰るに帰れず、私の家ででも使ってやらねばどうにもならぬというわけです。

そんなことから私の使いぶりが荒いといえは荒いわけで、力仕事、水仕事、走り使いはもとより入浴時の三助、時には大小便のあとの始末までさせますが、どれも嫌な顔一つせず、これらの仕事を天職と心得ているようにやるのが取柄です。病院などで経験済みの方もあるかと思いますが、お手水のあとの始末をさせるというのは、なかなか、オツなもので、一方ならぬ、征服欲を満足させてく

れるものです。ましてや主人のあらゆる恣意のまゝに動く動物を飼つておくということはどれだけ人生を楽しくするか分りません。ひとたび、この味を知ったなら恐らく一生忘れられないと思います。かつての米国南部諸州現在でもサウジ・アラビヤや南阿連邦には奴隷ないし、それに近い人間がいるようですが支配階級が是非善悪がおかまいなく自分の快楽追求や気まぐれな慰安のために、このような半人間的動物を飼いつけたら楽しみばかり多くてとても飼育を止めることはできません。

話が横道にそれましたが、私のさゝやかな人間的愛情はこのユリをもう少しスマートにし、簡単な洋裁や料理ができるようにしてやることです。その手始めとして彼女をやせさせるため次のように説明しました。

「ユリや、お前みたいに太り過ぎていたのは都会ではどうにもならぬから普通の洋服が着れるように目方を減らすからね。食事と睡眠はいままで通りでよいけど、どっさり運動をさせるからね。お金のある人は美容院へ行って全身マツサージをさせたり、むし風呂に入るけどそれと同じ効果を出すため私と慶子ちゃんがもんであげる」

もうお分りと思いますが、これは私と慶子ちゃんが二日おきにユリをほとんど裸にして疲れて倒れそうになるまで部屋中乗廻すので

す。冬の寒い晩などは冷えたお尻が温まり、ウマはウマで汗さえ流します。細いゴム管にヒゴ竹を通したムチで鞭打しながら大てい一時間余り責め続けるので、口に嚙ませたさらしの手綱はつばきとよだれでビシヨ濡れとなり、背中では摩擦で赤くなり、尻から太ももにかけては何条かの鞭跡が後を断ちません。時には汗とも涙ともつかぬものを流しています。が、いちいち構っていてもはたしめが滅殺されるので楽しめるだけ楽しんで潰れる寸前にやめます。寸前にやめるのは乗馬のあと私たちがからだを手入れさせなければなりませんから。

このようなことで三カ月ばかりかゝってユリのぜい肉も一貫目ほどとれ、ひと頃よりスマートになりましたが、あと二貫ぐらい減るまではできるだけ乗回してやらないとすぐ元へ戻ってしまいそうです。そこで最近では私や時には慶子ちゃんやんの服の付根が痛み出すほど乗り続け、そのあと痛む部分のマツサージを閑さえあればやらせますが私たちは大体において本物の馬、時に佐竹氏、工藤君、それに二日おきにユリと跨り続けるので軽い筋肉痛が腰や内股から消え去る時がありません。

さて今後の私の夢ですが、もし私に映画「ボルシア家の毒薬」の中に出てくる高貴でごう慢で権力あるルクレシア姫のような地位が得られるとしたら、犯罪予防競馬をさせてみ

たいと思います。各地から重犯罪人を集め、人間の権利をすべて奪いとり、手にゴム車輪つきの手かせをはめ、一定水準以上の美女を騎手に仕立てて千米競走をさせるのです。騎手は正規の華麗な乗馬服で出場し、優勝者に多額の賞金を与えたとすれば美女たちはウマが心臓マヒを起そうが、肋骨を蹴折られようが、拍車で皮肉が裂けようが尻にみみずばれが無数にできようが一向おかまいなくしやにむに走らせることでしよう。そして中にはヒ―ヒ―泣くウマも出てくることでしょう。

この際ウマの方は優勝すれば刑を軽減してやるといったことをやってもよいかも知れませんが。そして私は最近エリザベス女王が誕生日に馬上から近衛兵を閲兵したように（女王の馬上時間が長かったので近衛兵の中には貧血を起こして卒倒したものがあるとサン新聞は報じていました）白馬に跨ってこの競走を観閲し、競走態度の悪いウマはじきじきに馬上から蹴りつけるなり、皮膚が破れるほど鞭打ってやりたいとも思います。或は怠けウマを呼寄びよせ私が跨って女性に対しては絶対服従の態度がありありと見えるまで乗廻し、少々でへこたれるようなことであれば、それこそハガネのような痛い鞭で皮膚が切れるほど打ちのめしても誇り高い女性の道具として有能なものに教育してやりたいと考えています。

(完)

危難に遭った美貌の女

闇の山中で三人の怪漢に襲われる？

岸 本 青 柳

酷熱に喘いだ真夏も漸く過ぎて、朝夕は余程涼味を覚えて来たが孟蘭盆の夜、この中市では慣例に依って一ヶ月後の八月十五日を新盆と称え、その一週間前から寺院が孟蘭盆会式を修行するし、壇家はまた年に一回巡り来る仏さまの迎魂で、お寺詣りやら墓参やら中元御祝儀の贈答やらで、夫々の家庭が俄かに繁忙を極めた。それも十五日夜の送魂で一と安心と云った体で、その夜から翌日の敷入りにかけて盆休みとなった。この頃から映画館や劇場ではお定まりの怪談ばかりで、牡丹燈籠、四谷怪談、安達ヶ原の一つ家、鍋島猫騷動、番町皿屋敷といったような怪談、お化け劇など実に物凄いものばかりで、各館とも

に市中をはじめ、近郷近在の人々の観劇でハチ切れそうな大入満員で、お客止めの大盛況を極めた映画館も相当現われた。概して怪談とか幽霊という奇々怪々な話は昔から、夏の宵の涼み台の話題を賑わすもので、肌を刺すような雪の夜、氷の朝には滅多に話題にも上った例はない。こうした無情に即応するため奇談倶楽部は送魂の夜、市内の山紫水明の観光地の一角「環翠園」で精進上げを兼ねての総会を催した。男女全員十数名が参加、親しい晚餐を共にした後、誰いとうなく怪談ばなしが持ち出された。これにに応じて自然的にいる／＼の複雑怪奇なお化け話で持ち切った。中には少々酔の廻った連中は裸

体で宴席から庭園に飛び出し幽邃池の辺りを千鳥足で逍遙している。婦人連も亦、池辺に陶器の腰掛けを持ち出しては、団扇や粋な扇をバタ付かせて頼りに涼を入れている。こうしている間にも夜が更け、美しいお月様の顔が泉水の上の松の木の間からニッコリ浮んで来る。一同は予定の通り枕を並べてこの環翠園に仮泊することとなり、明晩までの行事予定に就いて懇談することにした。そして懇談の結果は法規を乱さない程度で、思い／＼に趣向を凝らした実験、写真撮影等々で、思う存分に遊戯することに取り決めた。

趣意としては会員同士の妥協、申合せ、事前諒解とやらを取り止め、奇想天外な行動を執ることが望ましいというので、先ず婦人連が心秘そかに「どうなるのだろうか」、また「どんな事をされるのか」などと案んじている向きもあったようだが、総じて「焼いて食ったり煮て食ったり」するような乱暴をするような男会員もあるまいと稍々安堵の胸を撫で下す者の方が多かったようだった。一方男の会員の方では、どの女を自分の相手役にしようか、どんな風にして実験や撮影しようかと相当に頭を悩ましていた様子だったが、私は特に親しみのある秋山と田口という兩人とも小学校教員を勤めた従順な会員と三人組となり、同夜の会合に列席した中の美人に属する、田代美都子という最近入会した、ある金

融業兼本屋の若奥様に目標を置いて、美都子の行動を注視することにして、秋山と田口の兩人を敵役に、私が写真撮影の役に廻わり、総べての仕組、指揮を私がすることにした。

其の翌朝早くから三々五々この環翠園内や附近の妙見山に、男女会員が浴衣の儘出掛けで行った。午餐も過ぎ少し早い晚餐が終つて散会を告げ、男女会員が親しく談笑しつつ帰路に就くこととなり、殿りを承った私たちの三人組も漸く御輿を上げて、美都子の帰る後を見失わないようにして急いだ。ところが意外にも美都子は私らに向いの小山の妙見山を越えた伯母の宅を訪問して直ぐ帰宅するからと簡単な挨拶を述べてサッサと行つて終つた。

どうせ帰りはこの山道を越えて来るだろうと目星を付け、頂上の妙見堂の蔭に身をひそめて美都子の帰りを待った。すると約一時間も経ったかと思われる頃、美都子は花束と小さい風呂包を小脇に抱えて、妙見山の南麓から頂上へ登つて来た。十六夜のお月様は晃々として昼を欺くばかりの明るさであり、山といつても小丘に過ぎない妙見山であるので、通い馴れた山道だと云わんばかりに、美都子はボツ／＼と登つて来る。三人の曲者？は片唾を呑み息を凝らして美都子を凝視している。ソナ物騒な人間が持ち受けているとも知らぬ美都子は妙見堂の前に差し加かった。

美都子は暫く妙見堂の賽銭箱の前に頷き何

事かを念じていた左右の背後から、手拭で俄か作りの覆面をした二人の怪漢が、物をも云わず、側に置いていた風呂敷包みを解くが早いか、美都子の口に狼嚙を箝め、一人は両手を後ろ手に燃じ上げ用意の荒縄で、高手小手に強く縛り上げた。

この怪漢の暴行？に驚駭した美都子は、両の前膝を地面に突いて起ち上ろうとしたが二人の力に押え付けられて起ち上ることも、救いを求める声も狼嚙で出すことも出来ず、身を藻掻くばかりであった。纏て二人の怪漢は美都子の縄尻を握り、その背後から小突きながら妙見堂の裏手に引き入れようとした。

美都子はまた左様はさせじと頻りに後退りして逃がれようとするのであったが、最後の抵抗も空しく遂に観念したものの、厠所に曳かれる小羊の如く差し俯向きながら、杉の木立の中に連れ込まれ、大きな杉の根元に縛り付けられた。附近は木蔭でお月様の姿も見えず薄暗い陰鬱な夜氣の身に浸みて来るばかりで薄暗に微かに覗かれる美都子の顔色は真ッ蒼となり、恐怖から細かく身を震わしていたのが窺れた。此の惨状を撮影しようと思つたが今感づかれては不味と考えた私は、ツツと怪漢の横手に廻つて、次の芸当？を指揮すると二人は頭を上下にして見せた。

この時の美都子の服装といえ、水色地に細い矢絛りの単衣に、濃黄地に茶色の菰番目

の単帯、白襟のかかった水色縮緬の長襦袢、桃色の腰巻、白足袋、ゴム草履という夏物を纏い、後ろ手に縛られる時に身悶えしたので淡青色の帯揚げの右の端がダラリと前に下り左の鬘も、二、三本顔に乱れかかつており、映画に現われる何とかの女優の縛られた表情その儘であつた。稍あつて二人の怪漢は、美都子の縄を杉の木から解くや否やその後髪を引っ掻んで後に引張ると、美都子は上向けに引っ繰り返らうとするところを、強か柔腰を蹴り上げ、前向けに倒れんとするところを二人が、美都子を背後から抱えて無理矢理に起たせて、その杉の太枝に吊り上げようとしたので、美都子は前から襲いかかった一人の怪漢を左脚で蹴り上げた、その機みで美都子も危く後ろへ転げようとした。残る一人の怪漢は血相を変え、前の怪漢と力を合わせて、美都子の身体を地面から一尺余も吊り上げた。

後ろ手に緊縛され、狼嚙を喰ませられた美都子の身体は、吊り上げられた瞬間、二、三度クル／＼コマのように転回した。そして前に俯向いた美都子は白い両脚をダラリとブラ下げ、棒立ちしたような姿になった。その時一人の怪漢は、附近から拾い上げた太い枯枝で、力強く美都子のお尻を何遍となく打ち叩いた。すると美都子は両眼を吊り上げ顔を左右に振りながら、激しく身悶えしている。此処ぞと待ち受けた私は、電光一闪、フィルム



に四、五枚収めた。この撮影で美都子は奇談倶楽部会員に不意打ちの吊り責めにされたのだと感付いた様子で、撮影する毎に両脚をバタ付かせて苦痛の色を見せるのであった。こうした美都子への不意打ち吊り責めは僅か十分間ぐらいで終り、怪漢二人は美都子を杉の枝から下ろし、猿轡と後ろ手に縛った荒縄を

解こうとすると、何故か美都子は頭を頻りに振り、縛られた儘前の妙見堂の広縁に腰をかけ早く来いと頭で合図する様子だった。呆氣に取られた私ら三人は、無言の儘美都子の側に倚ると、美都子は私の膝に凭れ上眼使いに私の顔や他の二人の怪漢の顔を見廻わし初めた。私らは美都子が突然縛られ、吊り

責めされた恐怖の余り気でも狂ったのではあるまいかと内心ビク／＼したのだが、肝心の美都子本人は案外平気を装っている様子だったので少々安心した訳だが、暫くしてから美都子は頸を振るので、猿轡を解いて進ると、はじめて美都子は少々怒り半ば満足したような面持ちで

「美都子」「あんた達随分ネ、吃驚したワ、どんなことをされるのかと思って本当に怖かったワ」

秋山「田代さん、ほんとうに済みませんでした、何うぞ悪しからず」

田口「田代さん、何とも申訳ありません、この通り平に謝ります」

と二人の怪漢は俄かに善人振りを發揮して、美都子に対する乱暴の罪を只管に詫びる。私も亦その後に次いで

岸本「美都子さん、堪忍して頂戴、実は、あんたに同意を求めたかったんですが、昨晚の申合わせに従って夫れも出来ず、随分乱暴をいたしました。その責任は全部私が負いますから、悪しからず諒解して下さい」

美津子「まあ岸本さんのお指図ネ、随分思い切ったことをなさるのネ、私はまた無頼漢の乱暴かと思って随分怖わかったワ、でも写真を取ったので、始めて会員さん達だろうと感付いて、少々安心し

ました」

岸本「では田代さんは私達が、猿轡や荒縄を解こうとしたのを何故直ぐに叱じて呉れなかったんですか」

美津子「エー、それわね、妾はじめて後ろ手に縛られ、そして木の上に吊責めされた時は、何だかこう怖いような、うれしいような何とも云えぬ感じがしたのヨ」

秋山「でも縛られて吊り上げられた時は随分苦しかったでしょう、痛くなかったですか」

美津子「そりやね、縛られた両手はシビレるし、縄目の強さで息も詰まりそうになったワ」

田口「吊り上げられた時はどう？」

美津子「だん／＼縄目が身に食い込んで来るので、早く許して欲しいと叫ぼうと思ったんですが、猿轡を噛ませられているので声が出すことが出来なくて随分苦んだワ」

岸本「では今、どう思う？」

美津子「申合わせより、彼のような咄嗟の方が可いワ、でも木両手を後ろ手に縛られた儘その後で暫らく寝かせて欲しかったと思うワ」

秋山「何故、早く縄を解いて欲しいと思わなかった？」

美津子「縛られて身体が引締っていたので何と申しましようか、でも、嫌でなかったの

はたしかだワ」

岸本「これからも、こんな酷い目に会わされて見たいと思わない？」

美津子「エエ、貴方達にだったら酷い目にされたって構わないワ、これからどうぞ」

岸本「今晚のように縛られて吊り責めされたいんですか？」

美津子「モツと強く縛って、モツと吊り責めなり、磔なり、逆さ吊りなりあなた方の思う存分に責めて欲しいと思ってるのヨ」

秋山「美都子さんはお顔に似合わず、余っ程変ったお人だね」

こんな取り留めのない会話を交わし約三十分はとも経ったかと思われる時分、美都子は漸く高手小手に縛られた縄目を解いて欲しいと云うので、秋山はその荒縄を解いて遣ると美都子は両手頸に付いた縄目の跡を視入っていたが、余り遅くなれば家庭でも不安がられ変な目で見られる憂いもあるので、岸本、秋山、田口の三人が、田代美都子夫人を保護しつつ、県道筋の広道で四人とも会釈して、後日を約して帰宅するのであった。

茲で一才附け加えて置きたいことは、美都子が吊り責めの最高潮に達した瞬間の姿勢は十月号の奇クの挿画の中で、島田雷、黒襟のかかった疎い基盤縞の着物を着て、少しく前向きに俯向加減に、松の木から吊り責めされてる可憐な下町風の娘の姿とは、寸分違わず

唯、猿轡を噛まされていないだけで、彼の時のモデル女山田豊子に、ソックリ似寄っているのには一驚させられた。私はその翌晩、美都子の店舗を訪ね、秘かに奇ク十月号を見せこの挿画は「あんたを模写したものだろう」と告げると、美都子も熟々その挿画に視入り顔には薄く紅潮の色を浮べていた。その時私は、仮令記述は不味くとも真相を述べ、その上記述に合致した挿画があれば、両方とも飲ばれ、且つ親しまれ、奇クの取り付く縁で会員、読者が増加して、奇クの真精神が広く世人に、諒解されるのではあるまいかと、美都子に同意を求めると、美都子も亦、大いに好感と賛意を表せられたのには、頗る意を強うした訳であった。

其の後私はこの美津子の、平素の行動や客扱いの言葉などを、夫れとなく内緒で探って見たのだが、美津子は近村の中農の二番目の娘で、十人並勝れた美人であり、また勝気性で高等女学校時代には、クラスのお転婆娘だったとの評判もあり、温厚な父母や姉に甘やかされた故でもあろうか、我儘のところもあった様子らしく、また美都子の主人公も、町のアンチヤン式とか顔役だとかの噂も立てられ、多少金の廻りが良いところから相当これら若人達の仲間には知られて居たともいう、夫れにお転婆娘の美都子は女学生当時には、度々町の喫茶店に出入する内に、今の主人公

と懇意になり、似た者同志が恋愛結婚して、親から資金を出して貰って、蘭金融と本屋を営むようになったのだとも伝えられていることが略ぼ判明した。

恸した境遇に成長した美都子であるが、お琴、お花、裁縫、お茶といったような普通女性の習う道は好まず、講談倶楽部、探偵小説時代の映画等を好み、特に猟奇ものには頗る興味を持つようになり、衣裳も派手好みで相当以上に小遣金も使っているらしく、近隣附合いも良く愛嬌者であるというので、近所の人には極めて評判が良い。だが今日まで一度も変態的行動はなかったようだと、一般の見るところであった。そんな性質上から最近奇談倶楽部へ何人の紹介もなく入会したのだというのである。夫れを裏書するかのよう

「では其の内あんたを縛って泣かして上げるヨ」と、これまた簡単な返事をして置いたのだが、約束通り近日中に適当な場所を選び、晴雨画伯好みの丸髪、黒襟格子縞の着物、緋縮緬の長襦袢、緋の腰巻といった幕府時代の下町方面の呉服屋の後家か娘風を装わせ、いろ／＼の縛り、種々雑多な惨虐な責め方をし、彼の女に悲鳴を挙げさせて遣り度いと思っている。この場合には猿轡を使わないで、彼の女の真の苦痛苦悶の表情、悲鳴の有様等を写真に収め、これを奇巧に寄稿したいと思っている。

(おわり)

絵画 写真 のアイデア募集

本誌の口絵(写真を含めて)並に代理部の分譲写真、或は「画帖」「写真帖」などのアイデアを広く皆さまから募集いたします。内容はどんなものでも結構です。採用の分には、原画、若くは引伸写真、画帖、アルバムを贈呈の外、優秀なるプランは本誌に掲載の上、編集用のフोटを贈呈いたします。出来るだけ詳細なる説明及び出来れば略面の添布をお願いします。(困難なときは略面はなくとも差支えありません。)(編集部)

◎北原純子責画傑作選◎

〔女学生の羞恥責め〕 (略号女学生)

大中判印画紙焼付 四枚一組 五百円

純情可憐な花も羞らう制服の女学生が、正面向いて、あられもなく後手に櫓に縛りつけられ、片足を水平よりも高く無理矢理上げられたり、スカートをまくり上げられたり、まことに大胆きわまりない制服の女学生に対する責構図四態。

〔ハートの的、女体洗滌室〕 (略号はあと)

大中判印画紙焼付 二枚一組 三百円

ハートの的にされた全裸の豊満なうら若き女性に対する奇想天外な責め、縛られて身動きも出来ない全裸の女体の隅々まで、余すところなく洗滌せんとしている構図。

〔緊縛ヌード十六ポーズ〕 (略号ぬうと)

大中判印画紙焼付 二枚一組 三百円

柱、棒、杭、石等の小道具を用いて緊縛されたヌードのポーズに変化を求め、十六の優美な縛りポーズの一つ一つが、平凡さを脱して私達の目を楽しませてくれる。

美容病院

久留本 栄

あらずじ 美しくなりたいと願う女のため、美容センターである五階建の立派なビルディング美容病院が誕生した。一階が温泉センター、二階が総合美容院、三階がボディビルの美容道場四階が衣服相談所とデザイン研究室、美容博物館、五階が美容相談所と整形外科である。このほか紫外線照射、マッサージなどの施設があった。丸石百貨店、呉服部員木村愛子は疎遠になりかけた愛人の気持をひきとめるため、少しやせようと、この美容病院に相談に来た。その結果、やせるのは至難のわざで一般的な治療をうけるのにもかなりの金額がかさむのを知り、やせて美しくなるのを絶望しかけた。しかしその時、河野副院長から研究中の心理的美容法に協力者となって研究を手伝ってくれないか、そうすれば、無料で一般的美容法はおろか、この美容病院特有の特別美容法を施してもよいと相談を受けた。協力者となって研究に協力する期間は約一カ月、ついに木村愛子はこれを承諾して一カ月間入院することになった。その日は身体検査をして帰され、いよいよ次の木曜日に入院した。そして入院後一日目の経験は、まず最初に歯並びの矯正をするためといって、プラスチック製の特殊合成樹脂によるサルグツワをされ

(五) 入院患者 木村愛子の経験 その四

絶対時間厳守のための基礎訓練の巻

どのくらいだったろうか。写真撮影が終ると愛子は寝台のある別室に入れられ、しばらく休憩させられた。体中がだるく、余り手荒い取りあつかいを受けたわけでもないのに、ぐったり疲れ、身体は鉛のように重かった。寝室に入れられるとき「もうきようは、これでおしまいにしましょうか」といって笑った河野副院長の顔を思い出すと、「この偽善者め!」と罵倒したくなる。でも、そんなことをしたら手ひどく取りあつかわれることだろう。どちらにしても手ひどく扱われるのなら、いっそ一思いにと思っても肝腎の声が出ない。声が出ないということは実に悲しいことだ。どうしたら、あの男に一目でも思い知らしてやれるかしら、愛子はそう思った。しかし、その思いはすぐまた「いやいや、そんなことより、今は、どうしたら苦痛をより少くするかを考える方が先決だ」という考えに頭の中は占領された。それにしても、このように力強く上下の歯をしめつけている、プラスチックのサルグツワは、なんとかならないものだろうか。彼女は再三、唇の中に手を突込んでゆすってみたが、

ることであつた。これで上下の歯の運動、アゴの運動を完全に固定され、言語を奪われた。こういう彼女に河野副院長は、心理的美容に必要な刺戟が苦痛であることを知らされた。そしてその日はさらに心理的美容法の効果測定のための資料作成に必要な木村愛子の写真撮影が行われた。もちろん全裸にされた全身撮影で、そのほか身体の一部位まで精密な接写写真までとられた。かくて、その写真撮影ですっかり疲れた愛子に襲ってきた経験は――

いずれも皆徒勞だった。だが、あきらめきれない。あきらめきれないのは、まだ愛子の中に人間の感情が残っている証拠だ。彼らの考えからすれば協力者は実験に供された犠牲物、即ち品物である。だから人間の感情はもってはいけない。といわれれば、それまでだが生きてゐる限り、感情はもたないわけにはいかない。しかも実験対象が直接、間接にこの感情にあるのだから、木村愛子の存在は嵐の中の木の葉みたいなものだ。彼女はいつしか考えることを忘れてぼんやりしてゐた。すると無暗に腹がへたり、小用を催してきた。小用といえど、この地下室に連れてこられたとき、一度したきりである。河野副院長が「これでもうおしまいに……」といったくらいだから、もう時刻も夕方に近いに違いない。すると、かれこれ六時間近く小用をこらえていたのだ。そう思うと尚更我慢ができなくなった。愛子は寝台の上におきてキヨロキヨロあたりを見回した。尿意というものは、そう気づきたしたら、一層急激に催してくるものだ。と、ちょうどその時、池田フジが呼びに入ってきた。愛子はまだ裸だったので、あわてて、手で前を押えた。

「あら、可愛い人ね。そんな恰好をして、じやこれでもお着けなさい。」

池田フジは親切気に、そういうと例の白衣の作業服を授けてくれた。愛子はためらったが、すぐ氣をとりなおしてしぶしぶ素肌の上に白衣を着た。木綿の粗い肌ざわりが、いかにもくすぐったくて、彼女は裸でゐるより、どんなに恥しいか改めて思い知らされた。「さ、木村さん、そんなにもじくせず、こちらにいらつしやい。これから寝るまで、皆さんが一寸用事といっていますよ。」

池田フジはそういつて、愛子を再びさきほどの研究室に連れてきた。そこには河野と小野が手ぐすねをひいて待っていた。例によって河野副院長はいんぎんに愛子を迎えたと丁寧な言葉付きでいった。

「どう木村さん、第一日目の御感想は、ものたりないって、そう恥しそうにされなくてもいいでしょう。どうも、ものたりなくてすみませんが、お約束どおり、第一日目は、これでやめましょう。ところで僕たちはいま、貴女が休憩しておられる時間に食事をすませ、入浴して、用を足してきたのです。まだ五時過ぎですが、普通ここでは昼食はとらないので、いまごろ早目に夕食をたべるのですよ。貴女もいただきますか。お風呂はいかが、御不浄は……」

河野はそうきいた。愛子は、そういわれると尚更、空腹を覚え、小用をしたくなつたが、言葉がいえないので仕方なくまず一番痛切に感じることを身ぶりて表現した。彼女は手をすりあわせ、下の方を指さした。三人の指導者はそれを見ると、やっと氣がついたという風な顔をした。

「そう、そうですか、そんなに溜っていたんですか。ちっとも知らなかった。さっそく池田さんに案内してもらいましょう。でも、その前に一言いっておきたいことがあるわけです。時間厳守ということを知っていますか、今日は入院第一日目だから、大目に見ていただきますよ。この時間厳守のためには皆さん相当苦勞なされます。というのは人間は感情の動物とかいってなかなか時間厳守できないからです。まあそれはそれとしてその時間厳守について十分お教えしておかないと、さっそく明日からの生活に困ると思うんですがどう

でしょう。いいですか、どうします?。」

河野はそこで話を一時切つて、相手に充分自分の意味が伝わったか、どうかたしかめた。木村愛子が不安げな表情をしていると

「そう心配されなくても、いいんですよ。あとで説明しますが、これがあすからの日程表です。」

河野は紙をちらつかせた。

「ま、これによってあすから一週間行動してもらうわけです。実は今晚から、と思つていたんですが……貴女の心の動揺が余り大きすぎるので遠慮したんですよ。それで、どうしても明日から日程表を守ってもらうに一番必要なこと生活に必要な基礎的訓練とい

いますか、時間厳守の癖だけは今日中につけておいてもらいたいと思つて御相談したわけです。この訓練だけは受けますか、そうしないと折角の美容訓練が駄目になると思つて、木村さん、どうします。」

木村愛子は仕方なくうなづいた。「じやもつとくわしく説明しましょう。生活に必要な基礎訓練となづけたわけは、時間厳守でも一番守りにくいのが飲食と排せつ作用



なのです。たとえば七時朝食となつていても、食欲がなくてはどうにもならない。また三時小用となつていても、その時したくなければ困る。一般の時間厳守なら七時にたべなくては食べなければよい。またあとでということができる。用便もそうだ。でここではそれじや困る。絶対に七時にたべ、三時に小用をさせるわけです。そうしないと一カ月間のうちに精密に組立てられた研究計画に齟齬

をきたすというわけです。で一分でも狂わないようにするには、どうしたらいいか。それは、人間の意志を無視して、そういうことはできる方法があるということ、それを貴女に知ってもらいより他ないわけです。それを実行してもらおうというわけです。幸い、貴女の体は空腹だし、かなり小用も溜っていられるようだから、満腹で食欲のないときにくらべて楽だし、排泄作用も苦しくはないでしょう。そう思っていままで我慢を願ったわけです……もっとも、かなりたまっていても、心理的なショックが強いと、人間の体はなかなか、自由意志で動かぬものでしてね……なに……いまにわかりますよ、池田さん、支度はできていますか。」

「はい。」

「それじゃ木村さんをトイレに案内して下さい。私が余りおどかしたのでびっくりしておられるようだが、丁寧に扱って下さい。」

「はい。」

木村愛子は、その研究室を出され、廊下を進んだ。トイレは玄関の傍にあったので、そこに連れていかれるかと思ったら違った。木村愛子は河野副院長からきいた基礎的訓練、すなわち飲食と用便の時間厳守がどんな形で行われるか、とても普通の形ではさせてくれないだろう、そのくらいのことは、写真撮影の時でもそうだし、もう覚悟を決めていた。しかし、それが愛子の人間性を根本から失わせるものになるとはまだ愛子は想像していなかった。

池田フジは廊下を折れ曲り、階段を五、六段のぼって、化粧室といた部屋に案内した。その横に婦人研究者用トイレといたドアがあり、中はまだまっくらで灯りがついていなかった。池田フジは愛子を婦人化粧室の椅子に腰かけさせて、灯りのついてないドアを指さしていった。

「木村さん、あそこが便所です。これからずっと使用してもらうところです。で、それについてお聞きしたいのですが、便所の照明は

明るい方がよいですか、くらい方がよいですか。明るい方だと、百ワット分の光りは充分ありますよ、……明るい方ですか。」

愛子は首をふった。

「暗い方ですか。」

愛子はうなずいた。どうして明るいところで用を足すのを好む女性がいよう。どうせ池田フジは離れないだろうから恥しい姿を人目にさらすのなら、明るいより、くらい方がいいと、彼女は判断したところがその判断は予想に反した。池田フジは突然彼女に目かくしをしようとしたのだ。

「アウウッ」

愛子は「何するの」といったつもりで夢中で池田フジの手をはらった。池田フジはその木村愛子の手をつかんでいった。

「おや、なにをするの、木村さん、あなたがくらいところを希望したんじゃないですか、またさからうの。照明をくらくするの目かくしをするのも同じじゃありませんか、抵抗するなら覚悟があります、それでよいですか、さあおとなしく。」

池田フジの声は忽ち愛子の意志を奪った。その声を聞くと愛子は絶望に身をふるわした。目かくして小便するなんて！ 愛子は一瞬そう思ったが、身体の方はいうことをきかなかった。池田フジが黒い布の目かくしをとりだした。しかし愛子はもう抵抗しようと思ってもできなかった。

黒い細い布が、きっちり三巻、四巻、愛子の形のよい目の上を覆った。明るかった世界は再び暗黒となった。その暗黒の世界の中でフジが、パチリとトイレの照明にスイッチを入れる音がきこえてきた。

「さ、こっちにおいで、準備するのよ。この部屋は私以外に誰もいないのだから、恥しがることはないのよ。さ、着物をよごさないようにお脱ぎになって。」愛子は池田フジに手をとられ、トイレの前に

つれてゆかれると有無をいわず裸にされた。それからフジはあわれな犠牲者をトイレの中につれて行き、中央の台のところに伴っていった。台、それはなんと奇妙なかつこの台だったろう。第一、目かくしされた愛子の目には見えなかったが、この部屋自身がすこぶる奇妙な部屋なんだ。もし愛子が目かくしされていなかったとしたら、恐らく一步も中に入りきらなかったろう。床は有機ガラスでできており、中央に排せつ物を入れる壺があったが、これも完全にすけて見えた。さらにその床の下方にカメラがすえられ、その下方は別の部屋になっており、数脚の椅子が主待ち顔に置かれてあつてまるで、これでは、舞台の天井にすえられたも同然である。

台は床から上方に向けて立っている三本のパイプで、二本のパイプは上方の端が、靴修理の鉄のペロとなっており、そのペロを包んで、形のよい編上靴がこしらえてあり、これに足を入れて固定するようにになっているのが一目でわかった。おかしいのは、その編上靴のすぐ横にとりつけられた金属性の手錠と今一本のパイプである。今一本のパイプは、編上靴を結ぶ線を底辺とした二等辺三角形の頂点のところにあつて、その先に直径一センチ、長さ三センチの合成樹脂のボールが二本とりつけてあつた。木村愛子は、池田フジに手をひかれてこの台に近づいた。そして小さな足つき台にのせられると、片足ずつ交互に編上靴の中に入れられて固定された。池田フジはその動作が終ると木村愛子の肩をおさええて、ちようど日本便所で我々がよく行う時のような恰好にしがませ、すばやく手錠を左右の手にはめた。このため木村愛子はちようど、昔コザック騎兵が好んで用いたという縛られ方、右手右足左手左足の形になった。それから池田フジは前に回ると、体が不安定で前後にふらふらし、やっと重心を保っている愛子の髪を右手にぎってぐいとひっぱった。アーンと思わず愛子の悲鳴が出た。しかしフジは委細かまわず愛子の体を前にのばし、押えつけると、左手でくちびるをめぐり、

プラスチックのサルグツワの穴にボールトをねじこんだ。実にうまいことを考えたものだ。これで愛子の体は、完全に空間に固定されたことになる。しかも、唯一のうめき声の通路であつたサルグツワの穴まで完全にふさがれたのだ……。

「さ、準備終了だわ。」

池田フジはそういつて平手で、突出された愛子の尻をビシャ／＼と打った。それから彼女は、

「そうそう、木村さんは、さっき目かくしする時、抵抗したね。きつと明るい方が好きだったのでしょ。じや目かくしをとってあげましょう。そのほうがいいわね。」

といいながら、ゆるゆると黒い布をとった。あゝ、もともとこうすることが彼女らの目的であつたのだ。愛子はそれに巧みにかけられたにすぎない。じらされた挙句、思い知らされた感じである。それにしても何という有様だろうか、彼女の目に入った世界は？ 彼女の想像もしていなかった光景だった。

「あッ」彼女は思わず身をすくめた。が、どうなるものでない。彼女はサルグツワとパイプによって顔を床に向け固定されているので、馬のような恰好をされた自分の姿は見るべくもなかったが、有機ガラスの床の先に河野と小野が哀れな女を指さして笑っているのが見えた。それを見ただけで体が硬直するような恥しさを抱いたのに、池田フジは平気で鏡を持ってきながら愛子にいった。

「ね、木村さん、折角、こんな美しい姿になりながら、自分の姿が見られないなんてつまらないわね。ほらごらん。これをこのパイプにとりつけると貴女の美しい姿が充分堪能できるわよ。」

なるほど彼女のいうとおりだった。池田フジによってパイプの柄にとりつけられた三枚の凹面鏡をみると、どうした光線の屈折を利用したのだろうか、とにかく前後横の自分の三態が縮小され一目で見わたされた。大きく部屋の中央に突出された二つのパタクスのス

ブリット、彼女はそれを見ると思わず両脚に力を入れた。だが所詮
儚ない抵抗だった。

「どう、どう見ても、きれいなトイレでしょ。どうぞ御自由に用を
足して下さい。なに……もうしたくなかったって、こまるわ、そんな
こといったって……でも、多分そうでしょうね、こんなに素晴らしい
トイレなんか使ったことないものね、でも、これから毎日使われ
るの、うれしいわよ、きつと、………
……あら、ね、したくないなんかいなかったって、でも、ほら、このと
ころがこんなにふくれて……」

池田フジは勝手にひとりごとをいいながら愛子の背中を押えた。
たしかに愛子の気持はすっかり動てんして、尿意はすっかり消
え去っていた。全く不思議な現象だった。それより池田フジの手を
にげようとして甲斐ない力を体中に入れた。だが、それは自分のみ
じめさを覚えるだけの効果しかなかった。

「なにも、そう、しやっちこばらなくてもいいでしょう。もうすぐ
気分が落ち着けばしたくなりますわ、私たちそれまで待とうかしら、
でも、とてもそんなことできないわ、そんな暇、もったいないし、
そんなお人好しここにはいませんわ、でないと貴女は喜ばないもの
ね、木村さん、これ知っている。こんな便利なものもあるのよ、こ
れを用いれば万事OKよ。」

池田フジは一本の金属の棒をとりだした。それは泌尿科医が用い
る道具カテーテルだった。フジはそれを愛子の目の前にもってきて
見せつけた。愛子が思わず目をつぶると池田フジは、その道具を横
においてマブタを手で押しあげ接眼鏡をかけさしてマブタの行動
を奪った。そのため、愛子は自分の体に加えられる加虐を見ないわ
けにはいかなかった。愛子は悲鳴にならないうめきをもらしつづ、
両眼から大つぶの涙をこぼした。やがて、彼女の誇りも、人間とし
ての意識や感情を一のみにし、洗い流し、連れ去っていくのを、見

た。

「どう御感想は。」

と池田フジがうれしそうに聞いた。ふっくらと肥えたフジの両頬
はこのかけがえもない美の祭典に堪能してか、うっすら赤味をおび
してゆったりという誇りに輝いていた。

「どう、これで、心のしこりも、軀のしこりもとれたでしょう。ね
うれしいことない。何一つ自分でしなくてもよいのよ。昔の大名の
お姫様でも、きつと、こんなにまで従女の手をわずらわさなかった
でしょう、そう思うと貴女はこの世の中で一番幸福な人ね。ほんと
に私に感謝してもいいのよ。明日から毎日このしあわせが味わえる
んだから、全く素晴らしいことね、私もぜひ一度くらいされたいわ、
でも駄目ね、研究協力者じゃないもの、ふ、ふふ、泣いてるわね。
でもこれだけで許されると思うと大間違いよ、もっと楽しいことが
あるの。」

池田フジはさももったいつけるようにいうと、言葉の効果を一そ
う高めるように、涙にぬれた愛子の頬をつついた。愛子は涙をこら
え、自分の今の立場から逃れようとしたが、しかし反抗する力も、
方法もなかった。たゞわずかに自由になる両膝を屈伸させ、泣き方
をまずだけだった。新しい涙がほほを次々にぬらした。その涙が頬
をつたっておちると、その涙は鏡の表面にあたって散った。涙にぬ
れた鏡は大きなバタックの半円球をうつし出して、それが上下にゆ
れながら愛子の視界の中をくらげのようにふわついた。

「ね、そんなにうれしいの、まだ、なにもしないというのに、そん
なに喜ばなくなっちゃってよいのよ、木村さん、喜ぶのはまだ早いの、
ほら、これを見てごらん、その中央の鏡の中にうつっているでしょ
う。どれ何でしょう、それそれ、天井からおりてきますわ。」

池田フジはもがき苦しむ愛子に止めをさすようにいった。いわな
くたって見える。見ようとしなくなっちゃって見えるのだ。その器具は、

「オーなんといおうか、イルリガートルといったら、いいだろうか、愛子はそう思った。叔母が一度使われたことがあるといった道具、かつてある雑誌の広告で一、二度見たことのある器具であった。これでいまから私に……あゝあの雑誌の広告を見ただけで赤くなったのに……カンチヨウ、カンチヨウをしようとするのだ。愛子は相手の意図を知ったとき、目先が真暗になった。」

「木村さん、この用法知ってる。知らない。知らない方がいいのよ。いまから教えるのよ、ね、貴女、子供のころイチジクカンチヨウというのをやられなかった。それ覚えていてでしょう。これ、その親玉なのよ、カンチヨウにもいろいろあるのよ、でも今日は俗世の塵を流さなくちや美人の郷には入られないものね。だから徹底的にお腹の中を洗ってあげるわけなの。もっとも、貴女が、お慈悲だからといったら明日からはやめてあげてもいいのだけど、時間厳守がでなければこの器具が喜んで貴女の心を洗ってくれるわね、木村さん、本当に便利なものよ、お腹の中の汚いものをすっかり出してしまふのは、案外きもちいいものよ、さ、これに感謝なさい。」

池田フジはそういつて管から、石鹼をとかした食塩水を二、三滴愛子の背中におとした。ヒヤッとした感じに愛子は思わず背筋をこわばらした。いくらもがいても、いくら泣いても……ああ、この悪魔のような人間たちは、平気で人をさいなむのだ。人の身体だけでなく、その心まで、うちくだいてしまうのだ。木村愛子は全身から力が抜けて行くのを知った。それと同時に考えるという意志が次第に剝奪されて行くことも。

「私はもう人間ではない。木村愛子ではない。完全な道具、実験材料、オモチャなのだ。……自分で何一つ、何一つすることができない。することのできるのは、苦しむこと、もがくこと、それだけだ。それだけが私のすべてなのだ、あゝ……」

愛子は体のどこかで、そんな思考がちらと閃いたのを知っ

た。だがもがいても、苦しんでもどうなるものでもない。木村愛子は全くみじめだった。全く人間の意地というものがなくなつてからの愛子は、巧みな演出者のあやつるまゝ、体をくねらし尻をふり、あくない研究者を喜ばせた。そしてやっと四肢を解放され、口のポルトをはずされたとき、彼女は自分一人の力で立つこともできず、自分の体からしほり出された汚辱の塊の中に、全くボロボロのように転落した。

池田フジはそういう彼女の足首に無情にも別の足かせをはめるとそれについていくくさりで彼女の体をひきずって隣の浴場につれて行った。そこで頭から冷水をあびせ、石けんをつけ無抵抗の女の体を洗った。それから再び水をあびせたのち、足くびから足かせをとくと、傍のむしぶろの中に首だけ出して押込んだ。

それから四、五分もたったろうか、木村愛子には非常に長い時間に思われたが、暖い蒸気が、むし風呂の中に充滿して、冷えきった体を暖めると、やっと愛子の体の中に、人間らしい感情と意識がよみがえってきた。愛子は不安と屈辱にもえた目であたりを見回した。愛子の世話をしていた池田フジの姿はすでに浴場の中にはなくとなりで湯をあびているらしい水音がした。

一体、こんなことをして、私は果して、どうなるのだろうか。

これから、またどんな恥しめがやってくるのだろうか。

愛子はまずそう考えた。それから改めてあたりを見回した。愛子のいる浴場は総タイル張りで、大きな鏡が一枚あった。その一隅に愛子のいれられているむし風呂がすえられ、シャワー、西洋風呂が一緒にとりつけてあった。きれいに洗い流したのだろう、あたりからはすでに何んの不快な臭いもなく、螢光燈が明るくついていた。両方に扉があり一方が例のトイレ、一方が脱衣場らしかった。愛子は二坪余りのガラシとした浴場に一人で残されていたのだが、いまは、その殺風景な中に独りいることがうれしかった。愛子ははじめ

自分がむしぶろに入れられている——ということに充分の意識はもたなかったが、漸次意識が回復するとともに、そのことがわかると不思議と落付きが出てくるように思えた。
 こんど、たとえなにがはじまるにしても、よもや生命までとろうとはいわないだろう。



よって体の条件がよくなったためだろうか。池田フジのいったように心のしこりがおちたためだろうか。それとも一番恥しいことを平気で人目にさらされたためだろうか。とにかく、羞恥心なんていうものは限界を越えれば、あつてないようなものだ。恥かしさと不自由さをしのべば、心配されるようなことは何一つない。そんな事

「そう思うと急に元気がでた。しかしその元気は決してありきたりの元気ではなかった。『どうあがいても仕方がない』という一種のあきらめをもった元気だった。すると急に一種のおかしさが胸にこみあげてきた。というのは鬼みたいな人間たちに寄つてたかつていじめられるということは我慢ならぬものであるにちがいないが、金もうけにもならないのに多額の金を使って、あわれな女をよつてたかつていじめる、そんな奴ばらのさもしい心が、軽蔑すべきものに思われたのだ。あいつらをアザ笑う、私は苦しむことによつてアザ笑つてやればよい。そう思うとなんとなく愉快であり、気持がよかった。全くもって、あれほどいじめられた者が、そんなことを考えるなどとは理窟にあわぬことだが、彼女は心からそう思ったのだ。むしぶろに入れられたことに

実がおぼろげながらわかってくるようでもあった。木村愛子はほくそえんだ。そして首カセをはめられているような恰好だが、むしろの中の手足は自由に動かせるというほんの束の間の解放感が、非常に貴重なもののように思われた。これが地獄における幸福というものであろうか彼女はそう思った。その時、また池田フジが入ってきた。

池田フジは、さきほどの白い作業衣を、うすい褐色のチエックのブラウスとバイヤスを生かしたボウの飾りのついたキヤザースカートをまとい、風呂に入ったのであろうか、顔と手から新しい香水のにおいをさせながらはいってきた。池田フジはしきりに手をふり身体をくねらせて、自分の身体の調子を整えているように見えた。

木村愛子の胸にその体から発散するホワイトローズの甘美なかりがしのびこんだ。池田フジがいった。

「どう、はっきりした、木村さん、この風呂だけは楽しめるわね、毎日入れてあげてよ、入り具合はどう、いいでしょう。でも本心はどう、束の間のしあわせという感じじゃないかしら。でも、もう御安心なさって、あと食事だけすませばいいのよ、そしたらいいよ。今日はお別れね、さ、出て頂戴、食事をしに行かなくっちゃ。」

フジはボックスの鍵をあけ愛子をつれ出した。そして体をふいてやりながら

「新しいねまきを着せましょうね、ねまきというよりガウンといたらいいかしら、貴女がとびあがるようなすてきな物よ、エレガントで優美な！」

といった。愛子はどんなガウンかしらと内心びく／＼した。それだけでなくもダメされつづけたこの女の心はもう疑い深いものになっていたのだ。だが案に相違してそれは上品な、普通の寝巻だった。淡いローズ色のオックスフォードで作った、レフト型の寝巻で、それを着ると愛子はほんとにどこかのお嬢様といわれても不思議ない

ほどの姿に見えた。しかしそれ以上に愛子の心をうるおし、喜ばしてくれたのは、池田フジがくれた一杯のジュースだった。フジは愛子を脱衣場につれてくるとその片隅にあるアイス・ボックスからバイリースのオレンジジュースを一本とりだし薬呑みに入れ、サルグツワの穴から口の中に流しこんでくれた。愛子は欲も得もなく、夢中でそれをむさぼりのんだ。池田フジは笑ってそんな愛子をみていた。それは愛子を完全に薬籠中のものにしたという笑いだった。池田フジはいった。

「さ、食事に行きましょうか、オレンジおいしいかった。ね、ほんとにおいしかったでしょう。食事もおいしいのよ。きつとこのまゝ貴女をつれていったら、喜んで食べるわ、でもそれじゃ食事も貴女の意志どおりにいかないという美容法の研究原則に反するわね、だから、食事は食事でもそのへんを心得てもう少し我慢するのよ、わかった。」

愛子は素直にうなずいた。

池田フジは愛子を食堂に案内した。愛子は従順に従った。食堂はそれから程遠くない、小部屋で、美しい丸テーブルの上に、何か品物を入れた、黒ぬりの木箱が置いてあった。愛子はそのテーブルの正面におかれた椅子にこしかけさせられた。椅子はエバースソフトを使った贅沢なものでふんわりとして腰が沈み、気持がよかった。

しかし愛子は椅子にすわらされると、それがまるで当然の姿であるかのように椅子の脚と手すりに、それについている四つの皮バンドによって四肢をつながれた。愛子はバンドをしめられながら全然抵抗せず、なすがまゝにされていた。そんな様子が池田フジにはちよつと不満足らしかった。しかし程なく再びくしあげられた愛子の前に河野と小野が現われ、それと同時にフジが、愛子の回りに、ピニールでできたマント状の布をまきつけた。床屋で散髪のときつけられる白衣のようなものである。明らかにそれは、これから食事を

させる、そのさいこぼしても大丈夫ということを示すものだった。愛子は河野と小野の二人をみたとき、これからまたこの男たちの前で食事か……もしそれならきつとサルグツワをはずされる。それならこのさい奴らを一思いに嘲笑してやろうかと思った。ところがあてがはずれた。すっかり準備が終ると河野はテーブルの上におかれた木箱の蓋をとりながらいった。

「ごらんなさい、これが今夜の献立です。」

木村愛子は「ええ」と返事をし（「ええ」は母音なので、それらしくくもり声になる）何気なく献立をみたが……それをみた途端ゾーッと背筋に冷氣がさした。なんと、その中には薄気味のわるい生物が動いていたのだ。へ、へ、へ、へ、へ、へ、と愛子は思わず口の中で叫んだ。今日の献立でとかれた紙を見ると

- 一、今日の献立 夕食カロリー 三五〇〇カロリー
- 一、ビタミン A、B、C、D、E、K、P
- 一、動物的食物
 - まむし、バッタ、蜂の子、豚肉少々、卵一個
- 一、植物的食物
 - 米、麦、トマト、キャベツ、西瓜のタネ、ヒキ茶、コンブ少々
- 一、食物は完全消毒の上全部生食とする。

と書いてあった。それで箱の中に動いているへびはマムシとわかった。こんなものがどうして生食できようか、そう思うだけでも愛子は胸がむかついた。河野がそんな愛子の気持は百も承知といったふうに話しかけた。

「こんなものがたべられるかと思ったのでしよう。でもこれはおいしいのですよ、一種のホルモン料理だから。ま、きょうの労力は余りひどくなかったので、疲労も少いかもしれませんがね、あすから

美容体操や柔軟体操ボディビルなどをやらされると、これだけのものをたべてもカロリー不足に悩まされますよ。それにこれは食物としては高級品中の高級品だし、エキス中のエキスですよ、決して体に悪いものではありません。しかも私はこれを貴女に直接手をとってたべてもらおうというのではないのですよ。米や麦はミキサーでくだき、マムシもバッタも細粉にし、野菜ものも或いはスープに、或いは粉末にして、皆一緒に練りませくだを通じて貴女の口につめこめば事たりるんです。それだけで貴女は自分の意志に反して完全に食事できるというわけです。わかりましたか、木村さん。池田さん、フレキシブルを用意して下さい。」

河野が命ずると池田フジは有無をいわず愛子のサルグツワの穴にフレキシブルでできた食食用のパイプをはめこんだ。愛子は首を左右にふって、抵抗したが、そのていどの抵抗では知れていた。やがて池田フジの手が部屋の壁についているボタンにふれると、フレキシブルのパイプは天井にひかれ、短くなり、ピンとはって愛子の顔を仰向けて固定した。それと同時に、そのパイプの中から、異様な臭気をもった。異様な舌ざわりの、ドロドロの液体があふれで、口の中に入ってきた。味も異様である。愛子は完全に吐気をもよおしたが口の中に入ってくる力は強かった。

「どうです、おいしいでしょう。早くのみこみなさい。そうでないと、よけい苦しくなりますよ。のみこまないと鼻をつまみますよ。ほらこんな具合に。」

そういつつ河野の手が鼻の上にのびた。それを見ると愛子は我知らず、異様な食物を胃の中におしこんだ。

「そう、その調子、結構、おいしく食べれるじやないか。その中には消化剤のパパヨスターゼもジアスターゼも含糖ペプシンも入っていますからね、御安心なさい。吐き気止めもいってますよ、フ、フ、フ」

河野は満足そうに笑った。愛子はそうやって十分ぐらい、奇妙な食物を充分たべさせられると、水が一杯与えられた。愛子が水を池田フジにのましてもらっているうちに食卓は片付けられ、いつの間にか、その上に日程表がおかれていた。

河野はいった。

「木村さん、これがあすからの一週間の日程表です。これによって万事、研究事業は運営されます、わかりましたか、よくごらん下さい。」
愛子が体をまげてその日程表にのぞきこむと主な仕事はつぎのようにかいてあった。

「第一週目日程表」

七時	起床、排便（大、小）洗面、美容体操、入浴
八時	朝食
九時	化粧実習（一時間）
十時	苦痛による美容の研究（二時間） <small>この間に小便</small>
十二時	茶、午睡
一時半	苦痛による美容の研究（三時間） <small>この間小便</small>
四時半	マッサージ 入浴
五時	夕食、休憩、用便
六時半	ボディビル、柔軟体操
七時	苦痛の歴史的再現法、実習（一時間）
八時	小便、むし風呂、マッサージ、化粧
九時半	就寝



愛子はこれを見た途端、一分間も自由時間がないのがわかった。徹底的にいためられる——というおそれが思わず脳裡をかすめた。

その時、河野がいった。

「一覽表にすれば恐いようでも、やってみればたいしたことない。木村さんなんか一日でなれてしましますよ。ね、池田さん、木村さんは強い方だから、じゃ、明日まで、私はこれで失礼します。小野君いこう、あとは池田さんにまかして、僕は帰りに一ぱいやるう。」

「そりや願ってもないことですね、明日からの楽しみが大きいんだから。」

河野と小野はそういいながら相ついで出ていった。あとに残された愛子は池田フジにつれられて寢室に案内された。

寢室はさきほどちよつと入れられたことのある別室、全く大きなベッドだけの部屋であつた。エバーソフトのマットに白いシーツ、白いシーツの上に柔いナイロンの袋をかけてあり、愛子は寢台に横たわるとその袋をだいて顔にこすりつけた。体がみえなくなるくらい沈み、柔かな弾力がエバーソフトのマットからはねかえってきて彼女をいたたまらない気持ちにした。

「いやね、このこは甘えちやつて、木村さん、しっかりおしよ、さこれから私のいうようにして、その袋に入つてねるのよ、そうしたら解放してあげる。ほら、そんなに甘えたらガウンがしわくちやになるじやないの、さ、それを脱ぎなさい。」

池田フジは愛子をにらんで叱つた。しかしその叱り方はさきほどのすごさはなく、なんだか柔しかった。河野や小野が引きあげていったせいだろうか。

「はやくしなさい、そうしないとまた縛りあげるわよ。」

そういわれて愛子ははじめて我にかへつた。愛子とはびおきた。

池田フジはそんな愛子の体に手をかけるとガウンを脱がせながらいった。

「寝るときはいつも裸になるの、もちろん真裸よ、そしてこのナイ

ロンの袋の中に入るの、ガウンは夜だけ着るのよ、朝は朝の着物があつたわ、パンティもコルセットもスリッパも、明日の朝になったらいろいろできあがつてくるわ、いま皆注文、製作中なの、あなたの体にあわせて仕立中なのよ……わかつた。」

愛子はいわれるままにナイロンの袋に入った。池田フジはその袋の口を愛子の口のところでしめ細い丈夫な紐でくくつた。袋はいつ作つたのか知らないが愛子の体に良くあつた。ビタリとはいかないまでも良くあつた。このため体は全く不自由ではなかったが、あるていど自由を束縛された。足も二十センチぐらいの間隔で左右にひらいた足をまげるときは両足一緒でなければ動かなかつた。また手は体の線にそつて自由になつたが大の字にはなれなかつた。池田フジはその袋を可成り太い絹の縄で首のところと足の先を寢台に固定したので自由はさらに束縛されたが、愛子はノビノビと休まれ、袋の中だけでは充分自由であつた。これなら逃げ出せずしかも体は楽にねられる、うまいものを工夫したものだと愛子は思った。ふとみると寢台の真上には大きな鏡がはつてあり、その中に愛子の体がうつっているのが見えた。ナイロンの白い袋の中に入れた彼女の肉体は、すけて褐色にうつつていたが、それだけ素裸よりなまめかく見えた。池田フジはそんな愛子をしばらくみていたが目を細くしていった。

「ほんとに嫉けるわね、この娘つたら、こんなにきれいで、これ以上きれいなろうなんて、こうしてやりたいワ。」

彼女は、ナイロンの袋の上から彼女の乳房のあたりをつねつた。

「アッ」

彼女は身をくねらせてその手を逃けた。そのためにベッドがきしんだ。やがて疲れたのか、あきたのか二人ともおとなしくなつた。池田フジはいよいよ部屋を出て行く前にしじみと話をし、愛子のひたいにキスした。

「こわかった。苦しかった。今日一日の御感想はどうなの、でもね、卒直にいわしてもらおうと私たちびっくりしたのよ。貴女が余り元気がいいのでね。それで初日からうんとおどかさないと、途中で嫌気がさされては困るというわけで、あんなひどい計画をたてたのよ。考えてごらん、河野さんの言葉の中にも随分矛盾があるでしょう。裸の写真をとるときこの写真を売ってもらうんだとか、食事にマムシの生をたべさせるんだとか……ね、こんなに一日何千人と押寄せ、もうけて仕方がない、美容病院の経営者が、裸の写真を売るなんてそんな危い橋を渡るわけがないでしょう。だからあれはみんなウソなの、また東京の真ん中にマムシなんかいないし、貴女一人のためにそんな食事なんかできませんか、あの食事は美容訓練に入院している人たちのための特殊流動食で、ニワトリ、豚などのスープから作ったものですよ、皿にいれてたべたらとてもおいしいのよ。ああいうと驚かされて変な味がしたんでしょう。人間の感情なんてそんなものよ。なにしろ、こちらは貴女の体を傷つけないように苦痛を与え、その苦痛に耐えかねて貴女がやせ、貴女が苦痛に服従することによって女らしい美しさが現われるようにせねばいけないのだから、むづかしいわ、協力者と研究者の知恵くらべね。だから、どちらにも良心があり、どちらにも美を愛する心がないと、この心理的美容法は完成しないのよ。貴女が心まで打ちひしがれるようだったら、その研究は失敗ね、だから強い心を持つよう、勇気をふるいおこすことが大切だわ、じや今日はこれでおやすみ、あなたにはまだわからないかもしれないけど、苦楽といって楽しさも極まれば苦しいし、苦しみもうすらげば楽しいものよ、じやあ、またあした、うんと泣かしてあげるから、それを楽しみにしていてね、おやすみなさい。」

愛子は池田フジの言葉にも一理あると思った。だから池田フジが出て行きたゞ一人にされるとこわかった。孤独感とともに名状しが

たい恐怖がおとずれた。彼女は泣き出した。が、しかしその泣き声は長く続かなかった。この孤独の波を押しやぶるように優雅な音楽がひびいてきて彼女の心をやさしくつつんでくれた。池田フジが愛子のためにかけた音楽であった。愛子は自分の腕で素裸の自分の胸をだきながら、このやさしい調べに身も心もまかせきった。音楽の無限の抱擁にあいながら、そういえば一日中痛められながら実質的に自分の肉体の上には何の影響も痕跡も止められていないのを知った。すると最後に池田フジのいったことは本当なのかしらと思う、彼女はそれを機に一日中のできごとを静に反省してみた。裸体撮影にしろ、食事排便にしろ、あままでしなくてもよかったものと思われもするが、しかし、美容法のために必要といわれれば、あれに近い形は進んでしたかもしれない。すると五十歩百歩なのだ。自分の意志で行うことを他人の意志で行う、これが心理的美容法なのかしら、彼女はそう思った。しかし、そう思っても我慢できない事が多かった。しかし、その我慢できない事も、音楽の柔しいしらべにだかれてみると、はたして我慢できなかったことかどうかかわらないような気がした。そういえば今日の出来事自身がまるで現実のものと思えないような気がする、苦しさに泣くだけ泣きたい。その泣きたい気持ちの中に、恥しさに火のようになった体の中に緊張の極限から汚辱の底に突おとされる瞬間の空虚さの中に、彼女は不思議な感情が生れはじめたのを覚えた。それがなにかわからないが、一種な甘美な、酔い心地みたいなの、境地である。それを思うと彼女は泪がかわき、はずかしさが身ぶるいにかわるのを覚えた。彼女はあれ程いじめられながら……あれほど憎いと思った人間どもを、この期に及んでちっともにくむ気になれないのが不思議だった。女というものは、やはり、いつでもお姫様のようになりたいたいのだろうか、人手をかりて総てを相手にまかせるといふ幸福の中に夢を求めながら……彼女はそう考え考え、いつしかねむっていた。

「非きもの読本」

—— 美的情感誘発要因の分析 ——

白 金 紅 次 文・画

劈頭^{（まづ）}先ず恐ろしく研究報告めいたサブタイトルが氣に喰われないであります。ありったけの単語を寄せ綴ってさも六ヶ敷しいかの如く、ぶつては見たものの、要するに中味ナシのもの、だから全篇秋冬の戯筆、駄画と思召さばもつけの幸い。然からば『非きもの読本』とは何んぞや？

要するにこれもすな、婦人雑誌の附録と程遠く、きものは、きものでも至極勝手気儘の云い度い放題、読んで阿呆らしくなる御婦人もおられることでしょう……がまあ本頁を開いたのが運の尽きとお諦め下さい。

では例によって例の如く賢明なる女性を無視しての漫筆を御披露することに致しましょうか。

ちよつぴり出すのが 色かいなの巻

『君、衣裳は全部借りてあるんだよ、思い切つて——そうだ、つまりさ、今度の大作に主役の一人として君が抜擢されたんだ。いいぜ仇と狙う敵方のお屋敷に腰元となつて君がちよりと乗り込む、最初の内は兎も角、中頃からジャンジャン情報が耳に入つて来る。証拠の文書が手文庫にあることも確かに見届けた。よしッ……じやない、いいわ、てんであとは機会を窺つて一刻も兄者^{（あにや）}人に知らせなくては……と云う処で惜しい——』

『まあ、中でフィルムが途切れたようにお止めになったりして——どうしたんですの？』
『いや、よくあるじやないか、あわや、ナンテ云う処で君が捕まらんと面白くない。嫌やだるうけど捕まり給え、それからが山になる

んだ、どうです？お腰元の気分は？』

『アラ、まだ何んにもなっておりませんのに——だって箱根や日光の大名行列じやあるまいし、ゾロリお腰元なんて困るわ、そのお腰元が捕まったらどうなりますの？』

『それは——まあ後廻し、どうでもお氣に召すまま、その時の風まかせ、ねえ？折角の衣裳方の御厚意を空しくしないで勇敢に一つ腰元になつて御覧なさいましよ、そこら近辺惚れ惚れして来るんだから』

『嫌やな方、厚っぽつたい帯をお腹一杯に締させて、まためつたやたらにお抱きになるんですよ、この間みたいな強制接吻なさらないなら、フッフ、演つてもいい——げんまん』
『大いに判りの助、じや衣裳屋の友ちゃんに頼んでおくれ、その筋のお達しにより暫く別室で喫煙だ、よか腰元になり給えよ』——と

云う訳。いや、別に今回は深い考えがあつてのことではなく、チャンスがチャンスを手放さず、日頃の蓄蓄を地で行ったらどうなるかに彼女を利用したのに過ぎないのかな。

もつとずるい逃げ口上で申すならば、縄を出し度い処を紳士の仮面で手控え、着付一切を友ちゃんなる男に任せて遠のいたつもりで乙に澄まそうと思つたのに——不覚にも、腰元が捕まつて云々、と喋つたんだから困りますよ。

『やあ——、奇麗な腰元衆が出来上つたね、成程、君だつて相当なもんだよ、速製にしちや出来過ぎた、かつらもびつたり、流石は女だ』

『お馬鹿さんね、本当の女ではばかりさま、でも、一日中こんな着てゾロリ歩かされちや堪らないわ。もういいでしょう？ 撮るなら後姿で沢山だわ、脱ぐわよ』

『おっと、待った、待った。どうして、また、折角、着付して貰つたのに、君、そうせくもんじやないよ。今日はね、その美的情感は何処から湧くか、いや、色っぽい線は何処に秘んでいるかを試めそうと思つてねえね、いいだろう、まあ、そのまま坐つて御覧よ、



い図

先ず、先ずお静かに、おしとやかに——さ』
テナ具合——。今時の娘さんは、これだから骨が折れて芯が疲れる、矢つ張り玄人の女でないと駄目かな？

『これでいいんですよ。バア—と裾が開いちやつた。一寸行儀が悪いわねえ。だって、ゾロロした裾の方は捌き方を知らないんですもの——、もつと？ なら赤いの、こんなに打ちわうよ、そうでしょう、そんなに出しちやおかしいですよ。この位よ、嫌やだわ、これお腰じやないわよ、長—裾—絆、お床入り前のお嫁さんじやあるまいし、御免なさい。変

なこと云つちやつて——フッフ、お腰元はこれ位なのよ、三つ指ついて見ましようか、どうお？ 前から御覧になつて三角形に？ そうなるわねえ、これ以上矢絰が捲くれちや、嫌や嫌や、今日は真面目に観賞なさるんでしょ？ そうお、後姿は駄目でしょ。手が遊んでいるんですもの、邪魔だつて？ アラ、こんなポーズでいけないのかしら、嫌だあ——そんな、どう、なさる、んですの。腕をお廻わしになつて痛いわ、どうして？ ひどい方、お縛りになつてどうなさるおつもり——捕まつたお腰元って何も後手でなくてもいいんですよ？

嫌やだわ、何か責められてる見たい、悪趣味ねえ——、じゃ、誰にも見せないのならいいわ、お撮りになつても。その代り覚えていらつしやい、後でたんまり身代金頂くんだから——、ホホホホ、嵌めてないわよ、お腰巻から始めたんですもの。夏向きねえ、フッフお腰元って満更でもなさそう、アラ、あたしでなくって貴方の方なのよ、万事卑怯な方ねえ、貴方って云う方は——』

これが色かいなの序幕全巻であります。腰元衆が逃げ出す時、パツと裾をからけて廊下

を、部屋を走る処は哀れにも色っぽい線を突破してなまめかしい風情、この方が待ってましたとばかり凄くいいのかも知れないが——まあ序の口は借り役者朱美嬢一席のちりりずむで我慢して頂きましょうか。黒白引伸して「い図」の如し。

さてお次はぐつと粹に

その二 お戯れに斯うかしら

ねえの巻



熟し柿のような女はそのまま自体なまめかしいですなあ——。今更追取刀にお縄を拝借しなくとも——。

『そうかしら？ホホホホ、どうせ売れ残りのお婆さんですものね、そんな髪結って見ましようか、うんと昔風なんでしょう。あり合せの物で我慢して頂戴。なら、きものもぐつと粹でなくっちゃ——少し寒いけど薄物の方がよろしいんですよ。帯も夏帯と云う処で、ま

あ——ずんと色っぽいこと、赤い蹴出しじや、まるで若い芸妓さん見たい、それでよろしかったら——ホホホ、でもその方が殿方はお好きなんでしょ、ちよいとお待ちになって、御注文のように出来すかしら、ねえ』

あとは寝て待て打水光る四疊半哉である。で、つまりちよっぴりよりももうちよい型、『ぐつと膝が崩れ

んかなあ、これも両の手が手持無沙汰でどうにもならん。一つそのこと、どうです？手足無しのお達磨さんじゃ？いや、手だけで結構、この腰紐で結んだ姿はまあ観念菩薩かな粋なお姿を生かすには白布で覆うのも便法ですぞ、そうしておいてのウイソクの流れ目はいいですな。その右の膝はもうちよい左にひけませんかねえ、おっと、いいところ、赤い蹴出しの皺目はえも云われぬ、ぼさぼさの色っぽさ、粋な方は斯くあるべし、あらしむべし序でに——と云ったって僕がしなければ出来ない相談だけど肩を抜いて胸口をはだけると誰かの歌じゃないけれど

「やわ肌に触れもせであわれ道を説く君って事になる。如何です？何あーんだ、つまらない！全くその通りです。要因の分析つてものは凡そこんなもんですぞ、もつともここまで持つて来るまでには徳川三百年の歴史があつたが、由来日本人は色気について計上するデータは嫌いに見えるから科学的な証明はとんとつけられない。ぐつと一番我慢するんですよ。今更粋とは何んぞやと禪問答したって始まらないんだから——。

白布を脱ぎ四疊半曰くさ

『湯文字って、こんなところでよろしいんですよ、あんまり見えちやお嫌やでしょうから、でも芸妓衆でこの呼吸を識ってる人が何人いるかしら？心細いでしょ、パンティやシユミ

「ズの世の中なんですものねえ、あたしなんぞは、まあお腰で育ってますから今でも平気余程の時でなくっちゃ洋式は嵌めませんの、浅い川なら、ホホホ、御希望通りで御座んしように、さあ？ お眼々の保養になりますかしら？、くくられた女ってそんなに、あたしでも、まあ御冗談を仰言ると真に受けますわよフフフ、怖いこと。そりや両の手をこんなにお縛りになっちゃまえば女は服従する外に手は——、この手をお解きになるのは何時の頃か判りません、となれば殿方の仰言る通りにされ放題、またその方が——

でしよ？ たんとお撮り遊ばせ、うば桜受難の巻でお気毒さんでしよけど、ホホホ、縮緬の蹴出しですから膝を立てると動きますでしよ？ 斯うですの？ もっと、まあお色気たっぷりですこと、それでまた猿轡をお嵌めになる——」

「御苦労さん——、これで中開きの段終了、物には程々って事がありますからねえ、白いふくら脛にはこれ位の処が薬ですよ、浮世絵はこれです、たんまり儲けている、どうせ

似て非なる浮世絵ならこんなもんだとスナッブしたのが、「ろ図」と云う処——」

素人の演出は土台頂けませんねえ、お嫌やなら見ないで下さいよ。その方が身の為になりますから。さてお後のどん尻は、

その三 アラアラ失礼御無体

ばあツとの巻

「おーい、今晚は一つ陽気にやろうじやないか——芸者共寄って来いッ、ジャンコ、ジャンコのサービスだ。こらッ春駒、お前、白虎節



は四

をやれッ、出来ん？出来んことがあるか。たすきと鉢巻がありやすく踊れるじやないか。仕度は要らんよ、そのままでやれよ、いいぞおーい、みんな静かに静かにせんか、今、春駒姐ちゃんも勇壮活潑に踊るとよ、裾捌きも鮮かに御覧にいれる——おい？そう、そっぽを向かんでハイツと返事をしたらどうかい、なあ、諸君！ そうだろう？ さあーお待兼ねお待ち兼ね、そらッ、たすき代りに兵児帯だ、手拭もあるぞ、さあ、待ってました。一丁勇敢に願いますよ、ようーし、腰を挙げた

そう来なくっちゃいかん。」

「じゃ、売られた白虎女見たいなものを演って見ます」

「何んだと？馬鹿に女々しくなったじやないか、誰が売られたんだい？ 官軍へだらうあんまり聞かねえぞ、そんな踊りは——、なあ、諸君！」

「即席なんですけど思い付でよろしいでしょう、そんな事もあったんじやないかと」

「よからう！ やり給え、三味線は白虎隊でいいんだな、じや一丁頑張った」

「戦雲暗く日は落ちて
孤城に月の影くらし

あたしは、はぐれて敵に捕えられ
今宵曳かれて行くわいな

『行くわいな、はよかったぞ、ちよい待ち、ちよい待ち、おかしいぞ、そんなの、あるかい、素手でひらひら曳かれる馬鹿はねえぞ、君は捕えられたんじゃないか、それならそうと恰好つけなきや、来給え、丁度いいこの兵児帯でさ、こうしなくっちゃ、本当だぞ、いいじゃないか、みんなの前だって何んだって折角の君の自作の踊りはさ、本式にやらにや駄目だよ、どうだい？ これなら気分が出るだろう、ようし、今一度アンコール、アンコール、だ』

この結末はどうなったと思召す？ いや早や酒が廻っての戯れ事なんでしょうが、尋常沙汰で収まる連中ではないだけに白虎女の哀れさよ。

『おいッ春駒、よかったぞ、そのまんまで酌をしろッ』だの、『どうせ、どうせだろうどうせ敵の大将んどこ曳っぱれて行くんなら俺のそばへ来たっていいじゃないか、なあそうだろう？』と肩を抱いたり、『その一真赤な緋縮緬って奴、気に入ったぞ、もう一丁舞え！』こらッ逃げんでもええじゃないか、おいッ、そんなに邪怪にせんでも』と裾を掴んで追いつがった途端、ばあッと開いた花一輪の全光景、また悪い奴がおって閃光を放つ

たから、御覧の通り（は図）。

もうこうなりや万事終点ですな、あとは本研究論文以外なんですから——。

で——これを分析すると、何んのことはない弁天小僧見たいでその見て呉れの緋縮緬、情感が何処かに戸まどいして誘発どころか真向からいやもう辟易の態でらくと御座い。困

りますね、これじゃ要因の緒解く口がないじやありませんか、無けりや止めたらいいだろ、仰言る通りです。では今日はこれで閉幕としますか、どうもえろろお粗末さまでした。どうぞ、ほかの頁にお移り下さいまし……。（おしまい）

◎最新作◎ 女体緊縛写真 分譲

花坂道子嬢 全裸緊縛集

大中判印画紙焼付

十枚 一組 八百円 (略号はな1)

可憐な容貌と優美な姿態で好評のロンゲヘヤースタイルのモデル花坂道子嬢を特に煩して全裸の緊縛を敢行し、マニアの皆様の熱烈な要望に応えました。今まで一度も衣服を脱いだことのない花坂嬢の責められる素晴らしい姿態を印画紙焼付の鮮明な写真にてごらん下さい。

花坂道子嬢 股間縛り集

大中判印画紙焼付

十枚 一組 八百円 (略号はな2)

数々の傑作を過去に於て作成した写真部が、ここに美貌のモデル花坂道子嬢の全面的の協力を得てマニア垂涎の強烈な股間縛り写真の撮影に成功しました。全裸股間緊縛というこの逸品を是非皆様のコレクションの一端へお加え下さい。

◎以上二集（二十枚）にて千五百円

〔雑誌通信〕

大衆小説の中から 拾った縛りシーン

山下 真一



大衆小説における縛り場面の描写については、すでに数多くの場面が藤見氏をはじめ東氏、星氏等によって紹介されましたが、私の蔵書のなかにも皆様に御紹介するに足るだけの価値があると思われるものがありますので梗概を書抜いてみましょう。

これは読切評判倶楽部（昭和二十八年三月特別号）に掲載されたもので題名は「地獄館事件」作者は河原浪路という人です。現代ものでこれだけの縛り場面の描写をしたのは珍しいのではないでしょうか。

二上宏と片倉菊代は山の温泉に保養に来ていた。二人きりの湯ぶねに我を忘れて幸福感に浸っていると浴室の外に一人の女がシユミーズ一枚の半裸体で倒れていた。それはニュースター映画に採用された筈の北藤嬢だった——着物を着ている暇も無かったタオルを巻いたまま菊代が母家に飛んで行くとした時である。

突然、浴場の角からばら／＼と数人の人影が現れて行手を立ちふさいだ。はっと棒立になった彼女の胸の前へ、一人が突きつけた小型のピストル——月光を受けて銃身が鋭く輝いた。

「動くな、声を立てたら一発だぞ。おとなしくしろ。」

日本人らしい者もいれば外人兵らしい長身の男もいる。三人の怪漢が宏と菊代、そして傷ついた北藤嬢のまわりを囲むように迫って来た。

「二人とも手を上げろ」

日本人が低い声で命令した。三人は手にピストルを構えている。外人兵一人を入れて相手は実際発砲しかない権威を見せている。菊代は勿論、宏もタオルを胴へ巻いて手を上げるほか仕方がなかった。三人は互に目くばせし合った。一人が宏の背後へ廻ると、ガーンと猛烈な鉄拳を後頭部に浴せた。宏はううっとうめくとうめくたり前に倒れ伏した。思わず叫び声を上げようとした菊代は、別の一人のために口をふさがれてしまった。抵抗する余地もない。宏も菊代も細縄で高手小手に縛り上げられ、猿轡を噛まされて引立てられた。

「歩け、急ぐんだ」

二人の男が縄尻を取った。外人兵は倒れている北藤嬢を軽々とかつぎ上げた。怪漢共は離れの裏手から谷川の岩壁へ進んだ。外人兵

「所長、長倉です、開けて下さい。」

一人の男が外から呼んだ。すぐ中から返事があって扉が開けられる。

「どうした、長倉君、北藤千佐子は捕ったかい。おや、その二人は何者だね」

ドアの中から顔を出した男は、半裸身のまま縛り上げられた二人を見て一寸驚いた風だった。が、その声を聞くなり、宏はキッと唇を噛んで男を睨み上げた。忘れようにも忘れられない卑劣漢、狩田専一郎の憎々しい声音だったのだ。

「北藤千佐子がこいつらの入浴中の浴場へ逃げ込んだのです。我々が追掛けて捕えようとしたら、こいつらが千佐子を介抱して話していました。女の方は千佐子を見知っているらしいので、秘密を守るために、こいつらもしよに引きさらって来たというわけですよ」

男共は説明しながら二人をドアの中へ押し入れた。明るい電燈の光で二人の顔を見たとたん、狩田ははっと気がついたらしい。

「は、あ、成程、わかった。これは中々珍客だね、二上君に片倉嬢じやないか。すると、君達はまだ懲りずに我々の仕事にお節介していると見えるね、北藤千佐子が君達の所へ逃げて行ったとすると、これは疑いもないスパイだったのだ。長倉君、その狼轡を外してやり給え」

狩田は窓のブラインドを用心深く下し、ド

アを閉じて隅の事務机に向って腰を下した。宏と菊代を自分の前に立たせると、しげ／＼となめ廻すように二人を見比べながら、

「どうだ、二上君、そうだろう。プロフェッサーの芳川は片倉嬢を共産党か右翼の手先と疑ったそうだが、こうまでしつこく妨害して来る所を見ると、満更根も葉もない疑いではなさそうだ。おい二上、白状しろ、君らは確に赤の手先に違いないんだ」

「何をいう、貴様こそ、この怪しげな映画撮影所で罪もない女達を苦しめているのじやないか。さっきの北藤という人を、貴様どんな目にあわせたんだッ」

宏が憤然とやり返したのを頭から黙殺して狩田は卓上から白い洋紙を二枚、二人の前につきつけた。

「余計な世迷言をいうな。二人とも右手だけ自由にしてやるから、この紙に署名するがいい」

「署名？ 何の署名だ？」

「何でもいい。姓名を書いて、拇印を押しさえすればいい。どうだ、書くか、書かんか」

「いやだ。俺はそんな訳のわからん署名捺印は御免だ」

「片倉、君はどうだ、署名だけでもすれば即刻家まで送り返してやるぜ」

狩田の眼が蛇のようにネチ／＼と菊代の肌を見つめた。タオルを通して彼女の乳房や腰

のふくらみを見透しているようだ。彼女はゾツと身ぶるいしながらキツパリと、

「あたしもいや。二上先生が署名なさらない限り、絶対お断りよ」

「ふん、強情者ぞろいだな。まあいゝや。いやなら仕方がない。その代り、当分ゆっくりとこゝにお泊り願わなくちやならんことになる。断っておくが、こゝは日本人オフリミッツの世界だから、こっちの要求に応じない限り、永久に自由になる見込はないんだぜ。それさえ承知なら、いくらでも強情を張っていい給え。長倉君、このお客さん達を奈落にでも御案内しておきな。十分にこゝの設備をお目につけようじやないか」

狩田は意味ありげにニヤリと笑った。二人はまた男達に引立てられて、廊下の方へ連出された。

薄暗い廊下を幾廻りかした後、奥の方の地下室へ通ずる狭い階段を通って、二人は「奈落」へ連込まれた。そこで二人は別々に引離され、菊代は宏と別れて地下の奥まった一室に閉じこめられてしまったのである。

「しばらくこゝに入っている」

連れて来た男は乱暴に菊代を室内へ突き入れて外から鍵をかけた。菊代は両手を縛られたまゝ、重ね／＼の苦痛、恐怖、疲労、羞恥の連続にグッタリと床へうずくまってもう動くことも出来なかった。ガランとした板壁の

三坪ばかりの小部屋だった。物置部屋のようなだが何も置いてある物は無い。一方の壁に五寸四方程の小窓が取り付けつてある。窓というより覗き穴に近い。しかし、窓の向うは真暗で何も見えなかった。

しばらくの間、菊代は何を考える力もなく窓の下に壁にもたれて坐っていた。何時間位過ぎたかわからないが、その中に突然、壁の向うにバタ／＼と人の駆廻る物音がした。つづいて絹を裂くように鋭い女の叫び声が、

「いやです、あたしだっていやです。誰が北藤さんを殺したの。可哀そうに、モナリザ——北藤さんが逃げたのは当り前よ、誰がそんなこと——汚らしいッ」

烈しい、狂ったような叫び声——あの人だ北藤千佐子の友だった水代さん——ハッとして見上げると、窓の向うにバツと電燈がついたらしき明るい光が見えている。同時に強く太い男の声が、

「ふん、いやだとは云わせないぞ。君の体は大金を出して買ったのだからな。ぐず／＼云わずに稽古にかかってもらおう。いゝか、ダンテの神曲、パオロとフランチェスカの物語だ。北藤が死んだからどうしても君にフランチェスカをやって貰わねばならんのだ」

てよるめきながら立上ると覗き窓から向うを眺めた。煌々ときらめくおびたゞしい電燈に照らされて、二、三十坪もあるうと思われる広い部屋の光景が眼に入った。が、その刹那あまりに奇怪な光景に彼女はアッと叫んだ。広い室内がまるで地獄そのものゝ恐ろしい様相を呈していたからである。——彼女は自分の目がどうかしたのではないかと疑った程だった。

室内の天井と云わず、壁と云わず、床と云わず、毒々しい真赤な血が至る所に塗りたくられていた。あちらこちらに彼女が見たこともない様々な拷問道具が置かれ、弓なりに彎曲した拷問台が三つ四つ隅々に並んでいる。しかもその中の二つには全裸の女が仰向けに縛りつけられ、二目とは直視出来ない無残な姿である。その上、菊代から見ると真正面の壁の前には、西洋の十字架が三本立ち並び、三人の女がやはり全裸のまま括りつけられている。柱のすぐ前に五、六人の男女が立って激烈く口論をしているが、その一人は水代という娘でブラジャーとパンティだけの惨めな姿に顔色蒼ざめて涙を流している様子だった。

「さあ、何をしている。早くかゝらんか。おい、浅島、君も用意はいゝな」

「君がパオロだ。いゝか。神曲の地獄篇を読んで見ればわかるが、不義の恋のために地獄に堕ちたパオロとフランチェスカが、番い離れぬ小鳥のように寄添って、地獄の責苦を受けている。こゝを映画にするのだ。二人が抱合って思いを遂げている所へ地獄の鬼がやって来て、二人を引離し拷問する。いゝな、さあ、水代、何をしている。早く裸にならんか」

芳川は助手達に目くばせした。二、三人の助手が娘を捕えて全裸にしようとした。水代という娘はさつと身を引くと狂気のように十字架の背後へ逃げた。

「待てッ、逃げようたって無駄だぞ」

助手達は左右から容赦なく追い迫る。

「いやです、離して、あたし、そんな映画いやです」

「馬鹿、今更、いやの応の云っても通るものか。それとも私刑を望むのか。お望みなら拷問道具は揃っているぞ」

「畜生、悪魔ッ、何をするのよッ」

辛くも助手達の手を逃れた娘は必死に拷問台を駆廻って、バタ／＼と菊代の見えている窓の方へ走って来た。振りみだした髪、血の気の無い顔色、恨みのこもった眼差をギラ／＼宙に走らせながら、彼女は又隅の方へ追詰められてしまった。

「ちッ、畜生どうでもしな。私刑でも何でも

「――どうせお前達は悪魔なんだわ。多分向うの小部屋には今夜も青い眼のお客さんが面白がつて覗いているんだろ。お前達は外人に尻尾を振っている犬なんだ！」

「娘の唇をついて激しい罵り声が部屋一ぱいにこだまをよんだ。」

それから後は見るに堪えない残酷な私刑が行われた。菊代は我慢出来なくなつて覗き窓を離れた。もう見ていられなくなつたのである。が、壁の向うでは、獣のような男共が娘を拷問台に縛りつけて鞭打っていると見える。ビシリ、ビシリッ、というつんざくような凄まじい鞭打と、その度に血を噴くかと思われる娘の悲痛な叫び声が上がった。

「あまり肌を痛めるな。ヌード撮影に差支える。いや少しは傷があつた方が地獄らしくていいかも知らんがな」

冷酷な芳川の声がする。地獄の鬼にも等しい残忍さ――聞いていた菊代は自分が責られているような苦痛と憤りに身をふるわせた。

こゝは正しく地獄の館だ、娘が叫んだ通り、外人に尾を振る犬共の巢窟でなくて何だろう。こういう猟奇と秘密の撮影所だからこそ、共産党や右翼にかぎつけられ反米宣伝に利用されるのを恐れているのに違いない。宏や菊代を捕えて、怪しい白紙の署名を迫つたのも、二人を共産党のスパイにでっち上げ、占領目的阻害者として、軍事裁判に廻し、こ

れを抹殺しようと思つたのだ。あの白紙には二人の署名を取つたあとで、宣誓供述書の形式で二人がスパイであることを自認したように書き入れるつもりだったに相違ない。

「よし鞭打はその位にしておけ。あとは承知するまで放つておくんだ」

芳川の声と共にようやく拷問がすんだ。男達は口々に娘を罵りながらドカ／＼と室を出て行く様子である。菊代は息をついて再び窓から向うをのぞいて見た。

向つて正面からやゝ左寄りの拷問台の下に全裸の水代嬢がうつぶせに倒れていた。縄を解かれて拷問台から滑り落ちたらしい。大きく肩で息をつきながら立上る力もなく、バラバラに髪を振りみだして床に頬をつけたまゝ泣いていた。すゝり上げながら、とぎれ勝ちに彼女はつぶやくのである。

「北藤さん……千佐子さん……すまない、あなたにすまない……あたしが広告にだまされて、あなたを誘つたために、あなたを殺したのも同じことだった……千佐ちゃん、モナリザ……」

両手で床をギリ／＼とかきむしりながら娘は苦しそうに半身を起した。

「千佐ちゃん……きつとあなたの恨みを晴してあげる……あの悪魔達をきつと滅ぼして見せるわ……」

娘は又バツタリとうつぶせに倒れた。美しい

い豊満な裸身の至る所に赤くにじんだ鞭の跡、その傷ついた身を、必死に引きずつて彼女はシリ／＼匍い出した。悲痛とも無残とも云いようがない。どうするつもりか、娘は一す、二寸と正面の十字架の方へ匍い寄つて行く。見ると、三本立ち並ぶ十字架の、右の端の柱の根元に、何かキラ／＼光る銀色の小さい物が落ちていた。娘はそれに向つて這い寄つて行く様子である。

何をやる気だろう。と見ている中に菊代の顔色がサツと変つた。

彼女は娘の意図がハッキリわかつたのである。あの銀色の物は――あゝ、それは何という思いきつたたくらみなのだろう。

「待つて、水代さん！」

彼女は思わず声を上げた。が、その時、彼女は再びハツとして背後を振り返つた。いつの間にかドアの外に誰か来ていたと見える。ガチャリと錠を外す音がして、ギョッ／＼とぶくドアが押し開けられた。

「ふゝゝ……」

いやらしい含み笑いと共に入つて来たのは狩田だった。ロイド眼鏡をキラ／＼させながら、一足、一足と菊代に迫つて来る。

「何の用があるんです。あたしに――」

菊代はゾツとして壁伝いに後退りした。狩田の顔に卑しい欲情がキラ／＼と脂切つて輝いていた。

「ふふ、なに、大した用でもないよ。お嬢さん。たゞちよいと、あんたの体を借りに来ただけだ」

狩田は一旦立止ってジーンと菊代の全身を眺めた。タオルに包まれた胴の美しい曲線を堪能するように目を細めると、

「お嬢さん、たしか、片倉さんだったね、今の水代雪枝のさまを見たかい。強情を張っていれぼろくな事はないっていうのはこのことさ。あんたもあの拷問台に上りたいかね」
「さっきの署名のことでしたらお断りよ。何遍云っても同じことです」

菊代は火の出る程狩田の顔をにらみつけながら云切った。

「よし、じゃア、水代と同じ目に遭わせてやろうよ。いや、水代は撮影の都合があるから大分手加減してやったが、あんたはそうはいかんぜ。うふふ、その美しい体が惜しくないかい、お嬢さん」

一歩、二歩近づいて来た狩田は、急にバツと躍りかゝると、いきなり菊代を抱きすくめて乱暴にタオルを剥ぎ取ろうとした。

「何をするの、離してッ」

菊代は身をもがいたが縛られている悲しさには抵抗が出来なかった。強い手で押し倒されたまんま、ズル／＼と縄の下からタオルを引き剥がれる。緊しく食込んだ縄の下から、タオルが半ば剥がれて乳房が露わになった。

もう駄目だと観念した利那、突然、壁の向うでメラ／＼と異様な物の気配、つゞいてブーンと鼻をついて来たセルロイドの焼ける臭い同時に爆発するような女の叫び声があった。

「ほッほッ、さ、さまを見る、さ、さまを見る、皆燃えてなくなれッ、千佐ちゃんを殺した奴等は皆焼けてしまえ——」

ぎよつとした狩田があわて、菊代を離すと覗き窓へ飛んで行った。

一目向うを見るなりアツと叫んで彼はドアの外へ飛び出したのである。

「火事だ、火事だッ、地下室が火事だッ、皆水を早くッ、水代がフィルムを燃しているぞオッ」

菊代も懸命に身を起して覗き窓にいざり寄った。窓の向うに見えたのは、どこから引出したか、映画用のフィルムを帯のようにまき散らしながら右手に握ったライターで次から次と火をつけて廻る、水代雪枝の気の狂った凄惨な姿だった。フィルムから床柱、壁——見る／＼真赤な炎が地下スタジオを包んだ。十字架や拷問台に括られていた女達が悲鳴と共にもがき立てる無残な肉のあがき——黒煙はあたりにももって犠牲者達を押し包んだ。その間に踊り狂ってライターを振りかざす水代雪枝の白い肌がしばし火の中に見え隠れするばかりである。火は容赦なく菊代のいる所まで燃えさかって来た。菊代はやっと立上る

と、狩田が開け放して行ったドアから夢中で廊下へ飛出すのだった。

「菊代さん、菊代さん、どこにいるッ、菊代さんッ」

火と煙の渦巻く地下室の廊下を、二上宏は危険も忘れて叫びながら駆け廻った。別室に閉じこめられていながら、やつのことで縛られた縄を抜け、ドアを突き破って外へ出たのである。その時にはもう火は殆ど地下室一ぱいにひろがっていた。消し止める術もない。

勿論、内部の人間は我先にと屋外へ逃出した。が、菊代の身を思う彼には一人で逃出す気は起らなかった。呼吸さえ苦しい煙の中を身を低めながら必死に部屋々々を探し廻る——だが、菊代の姿はどこにも無かった。

「菊代さん、菊代さんッ」

その時、宏は奥の方からかすかに女の声が洩れて来るのを聞いたように思った。ホッホッ、ホッホッ、と気の狂ったような笑声が火の中からとぎれ／＼にひびいて来る。ぎよつとした瞬間、宏は敢然とその方へ突進した。

身をかゞめたまま宏は廊下を突走った。女の笑声はもう聞えない。やつとこのへんだっと思われる奥の広いスタジオ風の部屋の前にたどりついた時、突如轟然と建物の崩れる響きがした。

「あッッ」

目の前に上った真赤な火柱、スタジオの、天井が焼落ちたのである。中にいたであろう女は一たまりもなく焼け死んだに違いない。

「だめだ！」

宏はあきらめて引返そうとしたが、落ちた天井の穴から黒煙はさつと噴上って、暗い廊下がやゝ明るく見通された。と五、六間向うの壁際に倒れている半裸の女の姿——白いオタルを腰に巻いたまゝ、後手に括られてうつぶせに転っている……………。

「あッ、菊代さん！」

躍り上って宏は駆寄った。抱き起した彼女の肌は温かった。

まだ息がある、煙に巻かれて気を失ったのだらう。縛めを解いている暇さえなかった刻々と四方から迫って来る火焰の渦、菊代を抱き上げた宏はバリ／＼と焼落ちる天井や壁の火の粉の雨について出口を走った。——

以上この物語の中心になっている部分を書

き抜いてみたわけですが、皆様いかがでしたか。挿絵は後手に縛られ猿轡をはめられた半裸の女が綱で吊るされている場面が載せてありますが構成が荒いので大したことはありません。この物語の中には本誌の口絵や分譲写真のアイデアとして生かせる場面がいくらかあるようですからぜひ御利用をお願いしたいと思います。

(以上)

殘虐芸術展覧会

伊 藤 晴 雨

此展覧会の出品は至極合理的に出来上って居て、流石は専門家丈けあると寒心させられる所がある。其一例に就いて云えば昔し東京にあった出歯亀事件（某陸軍大尉の妻女を凌辱した事件）池田亀太郎という植木屋の職人を疑似犯人として逮捕し署長自らが池田に向

って「淀橋附近の安全を期する為にどうか君が自白の形式を執って貰いたい。警察でも実は此附近の商店街で困って居るが」と頼み監房の中へ物凄く化物を作って威嚇した結果、此男を真犯人にして行った調書やら留置場の中に作った化粧物の模型など罪人製造に労力

を費した警察官の如何に真犯人製造に苦心したかを物語っている。

それが凌辱事件に遭遇した犯人の現場写真（一杯の人集りがしているので気の弱い者は見られない程だ）東京小石川原町増田大介氏の出品にかかる女の一生（淫売婦の惨殺）という絵巻は最初ボット出の田舎娘が上野駅へ着いて悪車夫にそそのかされて玉の井の魔窟へ売られる。茲には拷問を専門にする爺が居て売春法を尻目にかけて盛に女を責める。其責めの方法を絵にした長さ七、八間にも余る絵巻物で最初客を取れと云って責められた女が此度は責の見世物になって責めの見世物として、玉の井の名物になる。あまりの折檻が烈しいので逃げだすと仲間捕えられて吊

し責やら雪隠責やらに遇うトドの最後は女を責めた最後に責めた爺が一人丈に残って法網を免れるという御都合主義の責場を好む人には垂涎三千丈の絵巻で巻中には秘密室で女のセリ売りや女の肉体の切売り（立場を替えれば）という題で人肉屋という看板を掛けた地獄（だろう）の街へ女の肉を切売りをする店がある。人間に虐待されている牛や馬や各種の動物などが銘々女の人肉を買いに来る。肉屋はハカリにかけて人肉を売るが血を流した処は画かれていないのであるから、さのみ不快な感じは見る者に与えないのである。

残虐絵巻の方はあらゆる方法で残虐の限りを尽したもので現代の挿画家の大家、或は日展の主なる画家の筆になったものを順序よく配列したので相当見ごたえのある所品揃いである。其他、女の責場を絵いたものに、女の略歴と責の順序を絵き或は人形を以て其惨酷な表情等を如実に示してある。又一方に就ては責められた女の毛髪の写真、かつらと実物（責められた女）の比較研究材料として、人形を以て責の順序を示してあるので此前に立つ女性が吾れ痛痒を感じずと許りに案外平然として居るのは面白い現象でもあり心理でもある。人形として尤も精巧を極めたものは谷中初音町に居る面六事、田口六三郎氏の出品にかかる責め殺される迄の女という題で、縛られた縄の跡から始まって殺されるセツナ

死の直前迄を写真に示したもので、殺されてから切り刻まれ首を切られ手足を切れる臓腑が出てくる処などは見るに堪えない程専門的に出来ている。其他、徳川時代の奉行所の拷問車で責め殺された女が幽霊になって奉行の枕元に現れた処はシオラマで出来ている。血屋敷のお菊の惨殺は竹藪の中に井戸があつて井戸の中から女の人形が出たり入ったりする様に出来ている。中将姫雪責の人形は全裸体でホンの申訳けに薄い腰巻をまといっているが、或る部分は其腰部の薄絹を通して光線の関係でおぼろ気に見る事が出来る様に作つてある。此人形が会場の中で一番人気があると

見えて一杯の人集りである。会場の一部には「誰でも責められたい女の人は申出でられたし云々」という広告が出ているが見世物にされる程度胸のいい女もないと見えて開場五日目になつてもまだ応募者がないと事務所では云つていた。

別館の方に行くと昔しから芝居や講談でお馴染の「責められる女」の略伝が正しい楷書で記された奥にパノラマ式で各自の生き人形が出来ている。此会場に陳列してある生人形には悉しい説明がついている古今の文献やら考証やら凡その説明の限りを尽してある。これを細かに見ていると際限がないので程々に省略して置くが（これは別頂に委細に記す事にする）K市の博物館から出品された徳川時

代の責道具を見ると流石はK市で江戸の物より柔かく出来ている此位なら気丈な女なら石抱きの拷問にも堪えられたらうと思われる。扱、私も会場の案内でベンが疲れたから本文に入つて責場美人伝という今迄あまり筆を附けない方面を開拓する事に仕様と思う。

〔編集部註〕

△責物美人伝▽（腰元お菊）の原稿と挿絵を頂いておりますが、誌面の都合で、次号誌上を飾ることに致します。

〔告知板〕 △お断り▽

○雑誌の購入や分譲品の申込或は編集者への面会などの用件にて直接発行所を訪問される方がありますが、理由の如何を問わず固くお断りいたします。是非お申込は郵便にてお願いいたします。また、編集者への用件も訪問や電話をされる以前に必ず書面にて御連絡下さるようお願いいたします。尚、本誌では只今文通の幹旋や投稿者の住所氏名の公開などは一切致しておりませんから左様御承知おき願います。返信料封入の御照会に對しましては回答出来る範囲内に於てつとめて御返事するよう努力しております。

（編集部）

ある夢想家の手帖から

沼 正 三

第二百二十二 便器 奴隷

性具たる奴隷にも匹敵する最下等の手段的性格を有する存在としては便器奴隷がある。

それなるものが実在したのか？然り。

岩崎良三氏訳「サチュリコン」の中の、有名なトリマルキオの饗宴の冒頭の場面で、成上りの富豪トリマルキオは髪を伸ばした少年達（奴隷はすべて髪を短く刈り込まれたが、主人の放埒な快楽に奉仕する奴隷のみは長髪を蓄えることを許されていた。）と毬投げをしている。その傍に、銀製の尿瓶（いんぴん）を持った宦官がいる。

トリマルキオは彼の指をビチビチと鳴らした。すると一人の宦官がこの合図に駆け寄って、遊戯を続けている彼のために尿瓶を支えた。膀胱を楽にさせてしまうと、彼指洗盤を求めて手を浸し、それから一人の少年の頭髪で拭いた。（以下浴場に入る。）

この文ではトリマルキオは自分の手を使った様にも思えるが、これは、毬投げを打切るについて、遊戯中の手の汚れを洗うためだったと見るのが正しく、彼自身は毬投げを続けながら放尿したのであ

る。単なる推測ではない。マルチアリスには、宦官は主人の弾指の合図を知っている。気むずかしい放尿のさせ方を心得ていて飲んべえな主人の酔った××を管理している。

というのがある。これは酒宴の席上のことだし、宦官が「管理している」というのだから、主人が自分で何もする必要はない。つまり、寝転んだまま指を弾いて合図するだけで足るのだ。便所にまで歩いてゆく手間（フランス語で便所のことを「王様でも歩いてゆくところ」という表現があるが）さえない。便利で清潔ではないか。

右二例はいずれも男性の主人の放尿に奉仕する例で、浅学にして、女性に奉仕した例をあげ得ないが、次項に引くユベナリスの第六篇には、男に交って「飲み且つ吐く」ドミナの存在したことが描かれているから、父権的なローマ社会においても、男の様に生活した貴婦人がいたことは明らかであり、従って、彼女等が便器奴隷を使っていたと想像することは少しもおかしいことではない。彼女等は女性たる前に貴婦人だったのだから。

そして、一旦そのことに気がつけば、昔の貴婦人が、前項附記二のように「自分達の身の廻りの世話をするのを任務とする奴隷や体

僕が男性であることなどは少しも気になかった。女性達が、便器奴隷の使用を少しでも躊躇したと考える方がおかしいことに想到するだろう。女では……と考えることが既に古代人の心を心とし得えない証拠なのだ。貴族の贅沢という点では甚だ見劣りする日本でさえ、平安時代には桶洗し（桶箱という便器を洗うのを仕事とする下司。尤も女であつた。）という便器奴隷がいた。十二単衣の衣裳は着用したままでは排泄行為に不便なので、一箇所に穴をあけて便器をさし込んで用を足させる様にできていたという。勿論自分で拭くことはできなかったし、その必要もなかった。……日本では然りである。クレオパトラが自分で尻を拭いたなんてことが考えられようか。石崇の廁には常に十余人の美婢が侍列していたというが、然らば則天武后の廁にはもっと数多くの美男奴隷が並んでいただろうではないか。ルイ十六世の一小姓の思ひ出話によれば、国王の便器係役人は二人任命されて、年俸実に二万リーブルを給されたというが、女王マリー・アントワネットの便器係のことを記録してないからといって存在しなかったと見ることの非なるはいうまでもあるまい。

貴婦人は便器奴隷を使つたのだ。又それによつて、その高貴性を維持したのだ。排泄行為、排泄動作から成るべく遠ざかることによつて。——もう少し敷衍しようか。

排泄ということは、人間のもつ最も動物的な面であつて、人格の尊厳と相容れない。然し排泄自体は生理の必然でいかんともし得ない。唯自分で始末をすることを避けることはできよう。少しでも排泄から遠ざかりたいのだ。チベリウス帝治下のローマでは、皇帝の肖像ある装身具をつけたまま公衆便所に入ると、不敬罪として嚴重に処罰され、又肖像ある貨幣を見せることもいけなかった。とシユミーゲルは「便所の風俗史」（シドロヴィツ編『私生活用具の風俗史』の中）で述べているが、これは極端な例としても、少くとも

誰しもできることなら「自分でお尻を拭く」ことはしたくない筈だ。そして昔は奴隷という手段的存在があつたから、人間のその欲望が現実化され得、かくして、貴族は自分の手を排泄に關係させることなく、精神の高貴を維持し得たのである。（印度では今も不可触賤民がこれに従事させられている。）

残念なことに近代の人権思想は、人間の悪平等化を推進し、現代の人間には、最早、便器奴隷を使用する機会がなくなつてしまつた。かりに人を強制してそれを命じたとしても、罪悪感なしには使用し得ないだろう。その限り、今日の我々には便器奴隷を持つ資格はないのだ。平然と人間を手段視し得た昔の人の大らかさはないのだ。今日の世界の主権者が、いずれも自分で尻を拭く人々だということとは現代の精神的墮落でなくてはなんである。美しいエリザベス女王や清宮様や或いはグレース公妃でも、昔なら当然便器奴隷を使われたであろうに、今は自分で水洗便器に跨つて……ああ、何という幻滅！

そこで、マゾヒストは、失われた夢を求めて便器奴隷のいた時代を空想の中に再現しようとするのである。女主人の便器奴隷になろうとするのである。それは単に自己卑下になるばかりではない。彼女をして昔の貴族達と同様に、自分の手を汚さぬことによつて精神の高貴さを得しめると同時に、通常の現代人の所企し得ぬ所を持たしめることによつて、彼女を一段と高い所に押し上げてしまうのである。

これが進むと、排泄否認空想になる。天皇制教育を受けた児童が「天皇陛下はうんこなんかしない」或は「金をうんこをする」と信じたのと同じ様に、排泄行為自体を否認ないし美化してしまふのである。然し彼の理想は児童の信じる様なことはうそだと主張する。そこで、彼の情熱は、それを口にして見せることによつて

て、理性を説得しようとするのである。「あれは食べられる」「だから普通の排泄物ではないのだ」………そういう論理なのだ。これが肉便器願望を支える。便器奴隷はその極めて軽微な表現ともいえよう。

昔便器奴隷というものが存在しなかったとしても、マゾヒストは恐らくそれを空想したであろう。然し現実には昔それが存在していたという事実が、どれ位現在のその空想を力強く具体的なものにしてゐるか、これは測り知れないものがある。

附記一 前項解説で「最も内密な (intimate) 私用とは本来入浴や上廁の世話を意味する」と述べた。その上廁の方は本文で述べたのであと入浴の方が残っているが、第五十一項「ポツペアの牛乳風呂で」としても触れたことだし、特に一項を設けず、唯ユベナリス (第五項参照) の諷刺詩から、宦官が女主人の入浴に侍ってきわどいことをする場面を引くに止める。

Callides et cristae digitos impressit aliptes
ac summum dominae femur exclamare coegit,

刊行者に迷惑を掛けぬ様、訳さないで置く。志ある方は試みられよ。aliptes は塗油係、femur は太腿の意である。

附記二 トリマルキオが寵童の頭髪で手を拭くところで思い出すのは、二十九年六月号馬族保氏「美しい暴君」でヒロイン百合子が奴隷に尿で洗礼してやった後、「お前はこれから髪を長く伸ばして私に仕える様におし。………髪に油をつけないこと。いつも洗っておくこと。いいかい。私がバスから上って、マットの代りに私の足をお前の髪で拭くのだから」と命ずる乗りである。氏の着想がどこから来たか知らぬが、マグダラのマリヤの自発的献身と異り、主人側からの手段化の契機のある点からトリマルキオの同一類型に属すると云えよう。

附記三 便器奴隷は貴族社会の必須物であるが、然し、本項冒頭の二例の様に、指弾き丈すれば、あとは奴隷が一切やり、主人は仕事を続けていられるという所迄訓練したのは少いであろう。これはローマ奴隷制の完璧性の証明といえる。イース世界の肉便器が、口笛で現われて来てその場で用を足させるのは、もとより荒唐無稽な空想ではあるが、ローマ世界の貴人達の到達し得た贅沢をイースの貴族達に味わせぬでは申し訳ないと思つて、空想したもので、空想の源はこの種の便器奴隷にある。彼等が主人の合図に全身の注意を集中し、排泄時の奉仕だけを生存価値とした。いわば主人の肉体の生理状態に完全に隷属した。その心理における手段性を考えると、空想の産物たる肉便器と果して選ぶところがあるだろうかとさえ思われるのだ。

第二百二十三 ドミナの朝

第二百二十一項註及び第二百二十項附記で触れた高山洋吉訳「プロレタリア性風俗史」は、比較的良心的な訳業であるが、所々に無理なこじつけ訳がある。ローマ風俗を扱った部分でその極端な一例をあげて見よう (手帖の性格上、各個所の指摘の繁に堪えぬから、マゾの興味ある部分での指摘に止めたが他にも見当る。) ユヴェナリスの詩を次の様に訳している。

前の晩その夫が別のベッドで寝たりすると
翌朝女主人は柳眉を逆立てる。

夫はズボンを脱いでいるにちがいない。

前の夜遅く女奴隷が夫のところに来たのである。

夫はほかの女と寝た過ちを懺悔せねばならない。

相手の女奴隷は、鞭が折れ、

皮膚が破れて血がにじむまで鞭打たれる。

…………… (以下略) ……………

この詩は、野溝訳でも滅茶苦茶であり、それを不満として森本愛造氏が本誌二十九年二月号一八五頁で別の訳文を示しておられるがやはり大分誤解がある。

森本氏のでは右の引用の後三行以下から次の様に訳してある。

配下の者達が、疲れの為に、

眠り誘われた科を

彼（看守又は見張らしい）はつぐなうのだ。

……（中略）……

国民は科を逃れる為には、

一年の間、食を絶つにも等しい貢を捕吏に贈る。

彼女（女帝又は王妃ならん）は、

者共を鞭打たせつつ

……（以下略）……

野溝訳は余りひどいから問題にしないが、いずれも良心的な右両訳共間違ったし、しかもこの原詩は有名な作品で、よく引用され、独訳なども私の知る限りでも二種（シドロヴィツの引いたのは、即ち右両訳の基いたのは、ベルク訳）あり、内容的にも面白いから私の訳を示す意義は充分あると思われる。

原詩はユベナリス諷刺詩六卷四七七行以下――

夫君が昨夜は奥様に背中を向けてお休み、（そのため奥様はすっ

かり気難しくなっている。そこで）

さあ女中頭は災難だ。（八つ当りするのである）

化粧係はスカート捲らにやならぬ。（お尻を鞭たれるのだ。ここ

は男奴隷が服を脱ぐとも読める）

それに今日はリブルニヤ（出身の）奴隷の来るのが遅かったそう

な、（勿論不機嫌からの難癖である）

奴は他の男が眠った科を償わねばならぬ。（他の男とは、昨夜奥

様を抱かずに眠っていた夫君の意だ）

鞭で血を流し、しもとで血を流した背中で、笞が折れる。（ここは別々の個体にも読める。）

何しろ処刑吏に年金を払ってる女だ。

彼女は鞭撻を指図しながら、傍でお化粧し、女友達のお喋りを聞き、

或いは豪奢な金糸編の服地に見惚れつつ、

一方で打擲させる。長い新聞の記事を読みながら、

一方で打擲させる。鞭つ方がくたくたになるまで。

彼女は不機嫌に怒鳴って止めさす。

「お下り！」

……（以下略）……

前の両訳と比較参照して戴きたい。森本氏はこの女性を主権者と解されたが、ローマには女帝はないし、ここは単にさらにある奴隷酷使の叙述だから、そう解しては誤りで、ドミナでさえあれば、こういう懲罰の対象にする男女奴隷がいたわけなのである。高山氏は、女主人の不機嫌の対象を夫と同衾した女と解されたが、とんでもない。それなら古今東西妻たる女が怒るのは当たり前であって、ローマの貴女の暴虐の証明にならぬ。単に夫が前晚自分を満足させなかったというだけの性的不満を、罪もない男女の奴隷に当り散すから面白いのである。この原詩の続きにこういう行がある。

肩も露わ、乳房も露わに、哀れ、ピセカス

「何でこう捲毛が高くなり過ぎるのかしら？」そこで牛革の鞭が

鳴って

直ちに罪を罰する、捲毛の犯罪を。

ピセカスが何をしたというのだ？

あなたが自分の顔の鼻が気に入らぬからといって、この娘に何の

責任があるというのだ？

……（以下略）……

ある女給の体験 (6)

日 下 絹 子

つまり鏡を見て髪が気に入らぬ、鼻の恰好でいらいらする。唯それ丈の理由で、裸に剃いた女奴隷を鞭つ、捲毛や鼻の犯罪を顔の造作に関係のないピセカスが償わされるのである。

これらを踏えた記述をコルヴィンの「鞭撻者」から引いておこう。ローマ貴族の奴隷に対する鞭の支配を述べたあとで、こうい

う。然し、特にローマの貴婦人達が、この権力を自分の男女奴隷に

対して全く無茶苦茶に濫用したものらしい。当代の文士連は一致してこれを叙述している。奥様の不機嫌はすべて哀れな奴隷達が償わねばならなかった。よく眠れなかったり、朝鏡を見て新らしい皺やそばかすに氣附いたり、或いは夜夫君からの愛撫が不足だったというのでさえ、朝の化粧に侍る無数の婢僕達にとって地獄になるのだった。……

若いマネージャーの出迎えをうけて私達東京組の女給一行が新橋駅に乗り立ったときは希望で胸がふくらんでいましたのに私はこちらへ来て一カ月ばかりで病氣になってしまいました。毎日体がだるく胸がいたいので診察をうけますと肋膜炎だと云われました。毎日近くの診察所へ行ってマイシンを打ってもらい品川近くの宿舎で一人寝ていますと、夕方みんながお店に出たあとは心淋しきで気が狂いそうでした。その頃、お店の守衛をしていた

中田という人が度々見舞いに来てくれました。風さいの上らない中年男ですが、私の下着まで洗たくしてくれて心細さで泣き出した頃とて彼の親切は地獄で仏の様でした。病氣の方は比較的早く手当をしたお蔭で一月もするとすっかり水も引いて以前よりずっと肥りスカートの腰まわりなど合わなくなったほどです。間もなくお店を引いた私は江東のあるお風呂屋の二階を借りて中田と同棲しました。家はちやうど銭湯の脱衣場の真上に十二

畳ばかりのお部屋が三つあって、そのうち一つを借り、あとはまだ若いサラリーマンの夫婦が借りておられました。

生活が安定すれば大阪から自分の子供を引きとって育てたい気持で一杯でしたが、彼には別に妻子がありますので、その方にも仕送りせねばならず安月給なのですぐ行詰ってしまいました。はじめのうちこそ、彼は好きな酒も断って一生懸命働いている様でしたが、そのうちまた呑みはじめ度々守衛友達を呼ん

で来ては酒盛りをはじめます。私も女給当時から顔見知りですから、いつまでも声高にやっているとみだらな話に耳をふさぎたい思いをこらえながらも仲間入りさせられました。

そのうちとうとうささいな事で喧嘩をしたあげく中野にある妹のアパートに逃げ出しました。妹のすすめで二人で文化センターへフランス語を習いに通いはじめた頃、どこでかぎつけたか中田がアパートまでやって来て、妹が「お姉さんなんか来てません」というのに私の靴を見付け玄関で口汚なくののしったり、あわれっぽい声を出したりするので、やりきれなくなり近所の手前や妹の主人に対しても悪いので仕方なく帰りました。

それから度々喧嘩をしました。私の髪をつかんで部屋中を引きずり回すので私も腹が立ち、つかみ合いになります。背や背中をさへぶたれ、顔やまぶたをばらし買物にも行けないことがありました。ある日の夕方隣の部屋の前を通ったとき障子が開いていて畳の上にガマ口が放り出してあるのを見、思わずフラフラと中にはいつて数枚折りかさなつた中から一枚をぬいてすばやく元通り投げ出し胸をどきどきさせながら廊下に出たとたん、向うの階段を上ってくる奥さんが見えたので大急ぎで部屋にかけこみました。ちよつと首をすくめてベロを出しましたが、見つかったかしら、との不安とうまく行ったらしい

との思いが入り交ってしばらく興奮がさめませんでした。でも、どうきがおさまると自分の浅ましさにやりきれなくなり一その事見付かって思いきり打ちのめされた方がどんなに気が楽だろうと思ひながら、その夜は、湯殿を洗う高い音が聞こえてくるまでまんじりとしませんでした。

とうとう間代まで滞って首がまわらなくなり彼も私がもう一度勤めに出ることをしぶしぶ承知しました。幌馬車にいた頃の朋輩の芳子さんが新宿で店を開いたことを聞いていたしたのでそこで働かせてもらおう積りでした。新宿の裏街を、たしかこの辺りだと思ってさがし回っているうち与太者風の変な男二人に後をつけれ何度も引きかえそうかとおびえながら、やっと「おでん」と赤い提灯の下つた店に「女店員募集」のはり紙をみつけ中にはいると、ちようと芳子さんがいてホッと一息つきました。はいったところが二間ばかりのスタンドになっている手狭な店で二階に小部屋があるらしく、二人の女がお化粧の最中でした。

翌日から住み込みで、妹に見つかつたら困るわと思ひながら賑やかな所までお客のキヤツチに出ました。私より少し前からいるM子に兄だと紹介された男が、私が常々中田と別れたいとM子に云っていたのを聞いたらしく「片をつけてきてやる」と出かけて行って、

どんなカケ合いをしたのか私の荷物だと風呂敷包を渡しますので開いて見ると、押入れにつつこんであつた私のうす汚れたスリッパや下ばきがつめてあり、あわてふかくしました。間もなく彼からもつと収入のよい所へ変つたらと進められ、どこかの料亭か旅館の上女中の様な口ぶりでしたので、たべさせてもらつて四、五千円にしかならないこの店より悪いところではないと思つて二つ返事で承知しました。

私のつれていかれたのはO新地の港屋という遊廓でした。それでも女中だとばかり思つていた私は何という世間知らずだったでしょう。ヤリ手のお婆さんからお客を取る様に云われてびっくり仰天し「帰して下さい」と泣いたり「女中に使つて下さい」と頼みましたがM子の兄や私の衣類の買入れに二十万円近く使っていると云われ「女中なんかじや利子だけでも返せないよ」どなられるばかりでした。こんなことなら芳子さんの店の方がまだどんなによいか知れないと思ひ港屋の酌婦に交つて廊の中の銭湯に出かけた帰り途、皆と離れて新宿に帰りました。しかしその日のうちに二人の若い男につれ戻されました。

二人はすぐには新地に帰らず近くのダンスレクソン場に私を連れこみ誰もいないガラソとしたホールでいきなり両頬を火の出るほどたたかれ顔を蔽つてうづくまつた私を半裸に

して身体中をとこる嫌わずなくったりけつたりしました。殺されるのではないかと思うと心の底から恐怖がこみ上げ「もう逃げませんから」と男達の足下にとりすがって泣きさけびました。

その日は新地の中央にある組合長の家につれていかれ座敷牢の様な所に入れられました。やっと港屋に戻された夜からお客を取りました。近くの乾物問屋の若主人というこのなじみの客で座敷に挨拶に出た私を頭から足のさきまで見回し腰のあたりにやる視線は私の値ぶみするかのような嫌らしさでした。ひつつこい男の仕草に悩みながら相手の寝入った様子にホッとしたものゝ体は疲れ切っても中々寝られません。そのうちウト／＼したらしくいつの間にか夢を見ていました。

私の一家がまだ上海にいた頃、いつかなくなった父の会社の慰安旅行に当時女学生だった私と妹が会社の家族の人たちと北支を回ったことがあります。私の夢は楽しかった当時のことで北京の天壇で写真をとったりマントウを食べそこなった後、青島に回り忠海で泳いでいるとフカがいるぞという声に大あわてで逃げようとしませんが手足が動かず、だれもいなくなっていくの間にあたりは大海原になっていました。大声で助けを呼ぼうとしたとたん、目がさめてかなしい現実にか



えっていました。客のいうまゝになりながら枕に顔を埋め声をこらして泣きました。

でも私はどうしてもいまの不幸な運命に素直に屈服する気にはなれませんでした。定期検診のため保健所に出かけるときが、この苦界から出る唯一のチャンスでしたから私はこのときを利用しました。これまで来た保健所

は親切な所だったのですが酌婦に落ちたいまの私はもう人間なみの扱いはしてもらえませんでした。港屋で教えられた通り検査の前にトイレに飛び込んですばやく洗滌をすませて行列を作りますと、数人づゝ婦人科の室に入られ数人の先生と看護婦さんの前であの診察台はたゞ一つであるのに待っているものは

看護婦さんにせき立てられて一斉に下半身を裸にさせられます。スリッパを持ち上げたままみんな云い合わせた様に壁に向いていますと先生方の間で私達のヒップの批評がかわされます。まだ日の浅いため線のくずれていない私のヒップに人氣が集まっていました。帰り途すばやく国道に出てタクシーを拾うとそのまゝ妹の所にころげこみました。

また、気まぐれな姉が遊びにやって来たと思っている妹に、とても本当の事は云い出せず、今日捕まえにくるか明日くるかと少しも落着かず毎日窓の方ばかりのぞいていました。三日目の夕方、妹と二人で主人が帰ってくれば映画に連れて行って頂く積りで夕刊の映画案内を見ているとき玄関の声に何気なくのぞいた私はみるみる顔から血の引くのがわかりました。見おぼえのある二人の男に両腕を掴まれ靴下はだしのまゝ連れだされたのはものゝ二、三分もかゝりませんでした。

待っていた組合の自動車に乗せられると私の両手は後に合わされ新地で酌婦たちの懲罰につかわれる手製の革の手錠がはめられました。あわてゝついて来た妹が何か云ったのですが車は出てしまいました。車の中でこのまゝ死んでしまえたら、どんなにいいだろうと思つたほどでした。

組合長の家に連れられて私が受けた仕置はとても筆に書けない程の淫虐なもので、昔か

らこの新地で逃げた女に行われて来たという台かつぎというもので、後手錠のまゝあぐらを組んだ両足首と首縄をむすんでエビの様に折りまげられ背中に十字にくんだ長い棒を背負わされるのです。前後左右に長くのびた棒が床につかえて背中をまげてうつぶしたまま身動きすら出来ず、まだうすら寒い季節なのに全身に汗をかき、無意識のうちにたれ流して数時間放置されました。泣きつかれますと見張りの若いやくざものが背中にまたがり「もっといゝ声で歌え」といって私がまた泣き出すまでおしつゝけました。

妹の主人や会社の方の奔走で私の居所がわかり都議の方を中に立てゝ二十数万円を払つて救い出してもったとき、私の身体中にはもう一生消えないムチのあとの黒いシミが無数についていました。

その後、妹の所に引取られまして、その主人からお舅にお願いしてもらつて関西の本社の方に勤める様手配して下さいましたが、人の口に戸は立てられず、もし私のことで妹にどんな迷惑をかけるか知れないと思い、お金をもらつて出てから、いまある田舎町のサロンに出ています。いまでも時々おそろしかった新地の頃の夢を見ます。悪夢がさめてホツとすると同時にとめどもなく涙が出て参ります。

(おわり)

諺に関するイメージ

佐々木ツトム

諺とは、その解釈の仕方によっては、如何様にもとれる、まことに不可思議千万なものではある。

◎云わぬが花

云つてしまえば、責め折檻はそれで終る。云わない中がおたのしみというわけです。

◎眼は口程に物を云い

猿ぐつわをかまされて、口はきく事は出来ないが、美人の眼は何かを訴えているように真になやましくも艶であるというわけです。

◎女三人寄れば姦しい

ウブな男なら気絶してしまいそうな、すさまじくも露骨な女達のおしやべり、それでいて御本人は案外平気なのが不思議。

◎口車に乗る

女の口車に乗って一生を棒にふる男、男の口車に乗って一生男の絆で縛られる女、こういう男をヒモという。

◎声なき声を聞け

惨殺されて肝や腸が散乱している。今の今まで動いていた足の指もまるで消しゴムのよう。殺された女の怨霊が何かを語っている。

◎人の口には戸は立てられぬ

妻と妾を同居させておく男の噂、その性生活の多様性が激しい幻想となつてツトムの胸に浮かび上ってくる。

一 禪 亭 統 記



内 田 武 男

一禪亭に飼われているヘコにとって唯一の休息は、毎年殆んど定期的に繰返えされるいくつかの年中行事である。といっても年中行事の凡てが、彼等に休息を与えるわけではない。しかし行事の日は、一禪亭は客をとらずヘコを中心にした行事が行われ、ともかく遊戯場の激しい労働から解放されるのである。次にこれ等の行事について簡単に説明することにしよう。

一、ヤブイリ

一禪亭にヤブイリがあるといったら、おそらく不思議に思われる方が大半でしょう。まさしく一禪亭に入亭させられ、晒の禪を締めさせられたら最後、再び娑婆の太陽を浴びることが出来ないからである。随って、このヤブイリというのはヘコに許された唯一の休息日で、ヘコ場で自由に行動出来るというだけの話である。この日は、彼等の尻を追いたて余韻のない鞭の響も聞えないし、監督の鋭い眼からも解放される。起床時の検身から食事までの日課が済むと『ヤブイリッ』という通達が下り、その瞬間から自由となる。といっても、禪と法被を外すことは厳禁である。禪は特にどこでも眼につくように赤禪を締めさせられ、後の結び目にコヨリの封印がされるのである。これは、ヘコが不謹慎な行動をとらないようにする予防措置である。ヤブイリは殊に古参になったヘコにとって嬉しい。

つまり新顔に対して、古参の権威を極端に發揮出来るからである。彼等は新顔に体を揉せたり、或はこれをベッド代りに横になることも出来る。私——風太郎は、昨年入亭させられた富之助という十八になる若いヘコを、このヤブイリでは愉しみ、又、その前のヤブイリでは雪太郎を貰い受けた。というのは、ヤブイリになると、いわゆる稚児に使われる新顔を並ばせ、古参同志で割り振りするのである。私は富之助の臀部に頬杖をついて、成人した男の皮膚を満喫する。ふっくらと盛り上ったすべすべした尻を、一本の禪の線がきりつと押えて締め上げる。富之助は禪の緊縛感を十分に味わえるようになっていたが、それでも、あからさまに禪一本にされると極度に恥かしがる年頃である。私は禪の線をさすつたり「富之助」と彫り込まれた尻の化粧文字を指でくすぐるようにあとづけしたりすると彼は休え切れなくなって身体を蠕動させる。それが寝そべった私の体に快く伝わって来る。ヘコ場は正に禪一本になった肉体が、芋を転がしたように様々な姿勢で雰囲気を楽しんでいるのだ。つまりヤブイリは、この意味ではヘコのソドミー化を促進するよい機会であり、このことは親方の計算にも入っているのである。ヘコのソドミー化が強まれば、それだけ親方に従順になり飼いやすくなるからである。ヤブイリが明けるのは夕刻である。

監督が適当と見はからった頃、太鼓を鳴らしヤブイリが終ったことを告げるのである。この音でヘコは廊下に整列し封印を確かめて貰うと、いわゆる「ごかいちよう」ということになり、就寝まで鞭の響にヤブイリの夢は完全に掻き消されてしまう。

二、墨入れ

墨入れというのは刺青することである。これは入亭時に尻のふくらみにヘコ名を彫られるが、これとは違いヘコが中年になり、皮膚に老化の傾向が現われると、これをカバーするために全身に墨入れするのである。尤も中年にならなくても、親方の趣味で特別にされることもある。現在、墨入れされたヘコは四人しかない。古参の杏平、万吉、千太と雪太郎である。千太と雪太郎は今年行われたが他のヘコもすべて昨年からで一禪亭もようやく歴史を持つようになったことを示す。杏平や千太は四十に近かったし、墨入れされても格別、精神的なショックもなかったようであるが、ヘコにとっては人生の終着駅と知りつつも、墨入れには堪えがたい抵抗を感じるのである。万吉は古参といっても中年に入っただけの年頃で、ヘコの刺青を全身にされ、仕上りの体を鏡に写されながら涙をためていた。つまり大蛇がトグロを巻きながら、肩甲部で鎌首をもたげている図柄である。「禪で締め上げたら、なかなかいけるじやないか」

と親方は如何にも悦に入ったように、万作にポーズをとらせていた。白い六尺禪と墨入された肌とが一つの対照となつて、強烈な刺戟を発散していたからである。雪太郎は親方の趣味で突然行われた。私と杏平が手伝いをやらせられたので、この模様はよく知っている。図は朱を十分に使った牡丹の刺青で背面から股にかけて墨入された。仕上げまでに殆んど一週間費された。

雪太郎は宣告なしに浴室に連れてこられると、すべての準備が出来ていた。私はすぐ墨入れであることがわかり彼の顔は死人のように青ざめていた。親方は裸になった雪太郎を転がすと、刺青師に図柄を体に合わせるように指図する。墨入れは親方の好みで麻酔をかせずに行われるのである。私と杏平は震えている彼の体を押え、刺青師が針を一本一本入れてゆくのをじっと見ていなければならなかった。雪太郎の苦痛の叫びが高まるにつれ、肌は牡丹の朱で染められていく。親方は鞭の先で雪太郎の尻を小突きながら「これで禪をきりつと締めてみる、日本一のヘコになれるんだぞ。有難く思え、このボンボン野郎！」と皮肉まじりに毒づいていた。しかしこの墨入れは、私たちにとっても拷問であった。杏平と真向いになって、雪太郎の両手、両足をしっかりと押えていなければならぬのである。同僚の苦痛の叫びに手をうっかり弛め

もすると、監督の棍棒が四つ這いに踏んばった尻を目がけて打ち下される。そして一週間にやっと仕上げがされ、殆んど半日がかりで浴室で皮膚の手入れが行われた。入浴して例の如く鏡の前に立たされた雪太郎の肌は、美しい大輪の緋牡丹を鮮かに背面一杯に浮き出させていた。この日は一禪亭の住人に披露することになっていたので、富士絹の六尺が与えられた。力一杯締め上げた禪は雪太郎の成熟し切った尻に喰い込み、尻の化粧文字は下半身に散らした牡丹の葉で縁どられ、ふつくと浮き上って見える。稚子臭かった雪太郎の顔が、今では完全に成人した青年の面影に変わってさえた。披露は親方を中心に監督帳場の全員が、肉付け室に引き立てられた雪太郎の肌を鑑賞するのである。雪のように白かったこの若いヘコの皮膚は、永久に失われてしまったという感傷が、私たちの話題となった。しかし親方にとっては、新しい商品として再生された雪太郎をどう売りこむかということで、頭が一杯だった。披露というのもこの値踏の集いなのである。見世場に飾られた古い写真は外され、入墨された雪太郎の肉体は初見世ということで、今夜は客の面前で晒されることになる。

三、かけぞめ

ヘコのユニホームである禪は一年に一度更新される。運動が激しいので一年で殆んど布

に、いわゆる腰がなくなり、前部の押えがきかなくなるからである。「かけぞめ」は要するに、禪の支給とこれをヘコがかけることにちなんだ儀式である。しかし目的は別な処にある。つまり親方が、この形式的な方法を通じてヘコに改めて忠誠を誓わせ、親方の權威を再認識させることである。場所は肉附け室が当てられる。会場には一禪亭の会員がヘコをとり囲むように座り、前方、中央に親方が席に着く。ヘコは不動の姿勢で三列横隊で整列する。彼等の前に台があり、それは丁度ヘコが両手をついて行動出来る程度の広さである。親方の横のテーブルに禪が重ねてある。

これで用意万端、整ったことになるわけである。親方は簡単な訓辞をすると、ヘコに誓わせる細かい注意書を朗読する。これが終ると一人ずつ監督に呼び出されたヘコが台に直立し、禪を受取ると「ヘコとして誓います」と宣言する。ヘコは先ず三角禪をつけ、前袋がびったり体に合っているかどうかを検査して貰う。監督は縁に縫い込まれたゴム紐を加減して、合った処ではずさせ衣料係に渡す。続いて六尺禪をきりっと締め込み、親方に命令されたポーズを台の上でとって見せる。「よし」という号令で親方に一礼すると、ヘコの列に戻るのである。台の上でヘコが失敗すると、肉附け訓練を激しく課せられた上、一日分の減食を申渡される。だからこの儀式は

ヘコにとって緊張の連続である。六尺禪を締め終るのが規定の時間を超えたり、前袋に皺をよせたり後禪が弛かったりすると、非常にうるさい。「この野郎、何年禪を締めているんだ。ふんどし訓練一時間」ということになる。つまり儀式の後、肉附け室に残って立て続けに着禪、脱禪の訓練をさせられるのである。ヘコ全員が六尺を締め終ると、ヘコが「おはつ」と云っている気合いが入れられる。それは一人づつ万才の姿勢で踏んばらせ、きりりと白線で分けられた尻目がけて棍棒を打ち下すのである。つまり向う一年、再び禪と棍棒のお世話になると云う意味である。儀式が一通り終ると、余興が行われるのが普通である。ヘコを除いた一禪亭の使用人を親方が搞うためである。酒肴が運ばれると、彼等の考案でヘコに角力をとらせたり踊らせたり、真似事をさせたりして遊ぶのである。禪一本の青年たちを四つ這いにさせ犬の鳴き声をさせたり、猫の鳴き声をさせたりして囃し立てる。

四、ヘコ直し

ヘコは夫々価格がついていて、これによって客と取引される。これは商品として扱われているのであるから当然である。しかし年令と共に肉体の状況が変化するので、これに伴う価格の改訂も行われるわけである。つまり「ヘコ直し」とは、ヘコの商品価格を改訂す

るという意味である。これはヘコにとって一番辛い行事で大寒の入りを選んで行われる。なぜかという点、皮膚の強度を調べるには、寒気の激しい条件で行うに限るからである。

「ヘコ直し」は肉体の強度とスタイルと仕込みの程度で採点され、総合点で価格を決定する。随ってこれはヘコが採点されるだけでなく監督の成績が問われることにもなるわけである。大寒が近づくと監督のヘコに対する扱いに厳しさを加えるようになる。肉附け室に入れられる機会も頻繁になり、また浴室で体を磨くヘコを口うるさく監督するようにするのである。「ヘコ直し」の前日は一滴の水分もとることを許されない。つまり検査中、用便は禁止されているだけでなく、神聖な行事であることを印象づけるためである。随って夜が白み始めると、たたき起されたヘコは点呼を受け早速、肉附け室に入れられるのである。火の氣一つない陰うつな空気の立ちこめる部屋に素裸で長時間、曝されなければならぬ。一人に費いやされる時間は、ほぼ三、四十分でヘコ全員が終了するまでには悠に十時間はかかる。その間、坐ることも許されないのである。検査は親方と監督と帳場の代表により執行される。例によって台に立たされたヘコは検査棒といわれる海綿棒であらゆる部位をたたかれ、先ず皮膚の弾力や肌目の細かさを検査される。ピシッピシッという鈍い音が室中

をこたまし、直立して待機するヘコに一層、寒さをこたえさせるのである。強度は、台の上に垂れている鎖錠に両手と両足をかけ、それぞれの場合について体を色々の姿勢で懸垂させる。両手を鎖錠にかけた動作は、主として下半身の筋肉の強度を検査するのが目的であり、両足をかけた動作は上半身である。強度の検査になると監督も必死であり、気合を入れる叫びが間断なくぶっかかり合い撥返ってくる。それを縫うようにヘコの力む唸り苦悶の音が、尾を引くように底を流れる。「ヤタッ、下腹に力を入れてんのか、あはたれが」とか、「この野郎、ケツを割りやがって、どんこで、焼きを入れてやるからな」といった調子である。「ヤタ」というのは弥太吉の略称で「どんこ」というのは沢山ということ、「ケツを割った」というのは、怠けているという事で、いずれもヘコ場の常用語である。弥太吉の肉体は短期間のヘコ場の訓練で少年の風貌を残したまま成人した逞ましさに変っていた。ぐっと力みかえった肩はこぶしのように盛り上り、ぼっちやりした尻は、筋肉質の律動感を湛えるようになった。両足を吊され、宙に浮いた上半身を反り返える姿勢をとらされていたのである。……スタイルはヘコにポーズをとらせ肉体を流れる線の均勢度によって採点される。仕込は精神的要素が重視され、従順さ敏捷性等、日常の効果表が

提出され点数に加算されるのである。検査がすべて終ると「ヘコ直し」の最後の仕上げとして写真撮影が行われる。つまり見世場に飾られた写真を取りかえるためである。これは六尺禪を締め込んだ全身像と全裸像が、前面と背面から撮影され、後者は部分写真として拡大され、それぞれのヘコ帳に貼り込まれる。ヘコ帳には同時に採点表が記録され、客にもわかるようになっていのである。「ヘコ直し」の行事がとどこおりなく済むと、自由に入浴することを許され、特別食を支給される。ヘコにとっては激動の後だけに、このような僅かに許された自由も、ホッとしたりつるぎとなって明るさを取り戻す。浴室で寒気で硬直した肉体をゆっくり伸ばし、若いヘコに体を洗わせる気持は、名状し難いものである。

六、衣裳合せ

「ヘコ直し」と殆んど同じ頃に、行われる行事の一つであるが、これは發育盛りの若いヘコを対象とする。衣裳というのは遊戯場で客の好みで着けさせられる下衣裳のことである。杏平、始め私を含めた数人の古参ヘコは助手をさせられる。下衣はすべて肌についたり合せる必要があり、衣裳合せでヘコの肉体に合わなくなったものを修理したり新調したりするのである。色物の禪類（といっても六尺禪ではなく三角禪、モッコ禪、サボータ

の類である）同じくキヤルマタ、オシメカバ、ブリーフ、コンビネーション、前掛、シヤツ、股引等である。すべて肉体の自然の線を傷つけないように作られている。下衣類はすべて〇号というサイズがあり、どの号にも合わないヘコの下衣は、新調されるという具合である。たとえば、モッコ禪は三号であったものが合わなければ二号にし、「富之助、モッコ禪二号」というように記帳される。下衣類はそれぞれ特徴があり、シヤツは、ミゾオチまでの胸の隆起をびったり包むように出来ていなければならぬし、股引は前部のふくらみの線を自然に出すように工夫されているし、コンビネーションは前に屈むと、尻が十分に露出するものでなければならぬ。つまり、これらの下衣の特徴に合わせてヘコにポーズをとらせ、衣裳の合い方を調べるのである。衣裳合せの対象になる若いヘコが、一定間隔で直し、古参ヘコが監督の指示に従って衣裳を廻転させる。一人のヘコに衣裳が合うと、そのヘコは「オシメカバ七号、弥太吉合いました」といった調子で大声で申告する。記帳係の「よし」という声で次の衣裳にかかるのである。その年に入亭したヘコは、羞恥心からとかく申告の聲が小さくなりがちであるが、その場合は何回でも申告のやり直しを命ぜられる。特に前袋の合う禪がない場合、うっかり小声で申告しようものなら「富

之助、三角禪前袋合うものなし」と声が枯れるまで繰り返えさせられる。「この野郎、ペロばかり大きくなりやがって」と如何にも憎々しげに監督は舌打ちしサイズをとる。最早そこには人間性は完全に消し飛んでしまっているが、それ故に——つまり人間であるが故に起る哀愁の感情をヘコは誰でも感ずるのである。

七、娑婆つ氣落しと入亭式——笹吉の入亭

一禪亭の歴史も古くなると、それに伴って入亭も私たちの頃とは違い、次第に一つの形式を伴うようになった。又、入亭する者も、いわゆる食いつめものではなく、育ちもよく純心な青年が選抜された。一応、一禪亭のカムフラジ―された出店が、会社であったり商店であったり、或は一禪亭の客筋の一流会社であったりするわけである。しかし十分に経歴を調査される点は変らないらしい。彼等は一人のサラリーマンとして世話され、アパートから通勤し、ちゃんとしたビジネスを与えられるのである。随って、一禪亭に連れてこられた瞬間は恐らく料理屋にでも案内されたつもりで、明るく燥いだりするらしい。それは、ヘコ場で新入りが放り込まれるのを待ち受けている古参ヘコには、大体想像出来るのである。つまり、笑いさざめきながら近づいてくる足音をよく耳にするからである。

先ずヘコ場に押しこめられると「娑婆つ氣

落し」というのが行われる。それは、その日一日、肉付け室に監禁し監督が総出でおどかし拷問するのである。笹吉というヘコが本年入亭させられたが、この模様について説明しよう。

彼は年令は十七才で、〇〇貿易の給仕ということであつたらしい。見るからに純真さと氣品を備えた美少年で、体格も頑健で筋肉の締りがスタイル全体に感じられた。肉付け室に運びこまれるまで惨々手こずらせたが、シヤツとパンツ一枚にされ縛り上げられると、観念したように大人しくなった。裸にさせないのは、入亭式が済むまで娑婆の人間であるということからきており、突然、全裸で晒すのは刺戟が強すぎるからである。肉付け室からはヘコが下げられるので、娑婆つ氣落しの模様はわからない。しかし時々聞える鞭の音や間断なく怒る声、笹吉のうめき声で、それが入亭式に使えるように仕込まれているのだということが想像できる。入亭式は翌朝、浴室で行われる。これには助手に使われる数人のヘコと親方、監督、帳場、刺青師が出席する。私たちは少年を引き連れ肉付け室に入る。娑婆つ氣落しの疲労でぐっすり寝こんでいた。「これは娑婆の寝おさめか」という皮肉まじりの同情が、私たちの頭をつつと走った。監督は少年のシヤツの襟元をぐっと掴むと、頬に平手打ちを喰わして引き起した。少

年はキヨロキヨロしたが、娑婆つ氣落しの記憶が呼び戻ったらしく「ハイッ」と勢よく立ち上ると、監督にきこちなく頭を下げた。仕込みはどうやら効いたらしい。少年はその場に素裸にされる。そして羞恥心が全身で震えているのを私たちは見逃さなかった。監督は「氣をつけ」と号令する。浴室に連れてこられた少年は、羞恥心から恐怖に変貌した表情をこわばらせていた。親方は無難作に少年の体に触り、色々の角度から眺めたりしていたが「これはいける」とにやりと顔をゆがめる。入亭式は親方の指示で無言の中に行われる。先ず頭髮が剃り落され、続いて俯伏せにさせると墨入れされる。少年のヘコ名と一禪亭という文字が、尻に刺し込まれて行く。激しい痛みをこらえている少年の身体の震えが、しつかりと動かぬように押えつけているヘコの手に流れるように伝ってくる。それは、じつとしていえるものにとつては非常に長い沈黙である。今、彫り込まれているヘコ名は少年は知らない。しかし、これは彼の一生を支配する商品名であることは間違いない。やがて刺青師が立ち上ると、親方は血でよごれた尻の刺青を満足そうに眺める。その後ヘコに支えられて湯舟に浸けられると、少年は始めて泳ぎ切れなくなつて泣きわめく。このヘコの泣き声を「鳴き」という。帳場の代表は「なかなかいい鳴きですな」というと親方は大きく

頷く。少年の体は、数人のヘコによって忽ち磨き上げられる。オイルで仕上げられて、見る見る中に美しい輝きを発し、均勢のとれた美少年の全裸像が鏡の前にあった。そこで真新しい禪が用意され、一人のヘコを練習台にして着禪法を監督は少年に教える。「いいか」という声と「はいっ」という声が折り重なって耳をつんざく。少年は禪を手にとると二尺残して前を押え、股をくぐらせて引きつけるように腰を一廻転させて後禪に噛ませる。そして残った二尺を同じように股をくぐらせて先に噛ませた禪の端と交錯させて腰紐にしっかりとさはさむのである。これを繰り返して着禪法を修得する。パンツ姿の少年から禪一本のヘコに一転したのである。鏡に背を向けて立たされた少年は、鏡を見るように命ぜられる。尻に喰いこんだ一本の白い紐——それが少年が始めて体験する彼に許された唯一の下着である。しかも尻たぶには化粧文字が掘りこまれ、永久に落すことは出来ない。少年は夢うつつに自分の体を眺めていると、

監督は、古参ヘコを一系列に後向きに並ばせて、ヘコの尻を棒で小突きながら、杏平、万吉、風太郎……というように紹介する。それから笹吉に細かな注意を与える。彼が最後に注意をすることは、「これから一生禪一本で暮さなければならぬこと。禪の緊縛感に馴れれば禪を締めなければならぬこと。ヘコの生活は苦しいが、この苦しみも、そのうちに愉しくなること。娑婆のことは一切忘れること」等である。入亭式が終るとヘコ場には一つの愉しみがある。それは入亭したばかりの若いヘコが、ヘコ場の生活にどう順応していくかという過程の一部始終が観察出来るからである。禪の持つ魔力が次第に一つの純真な少年をアブノーマルにし、ソドミ——化を助長させていくのも手にとるようになる。彼等の目が周囲のヘコを避ける初期から、整列する全裸のヘコの肉体に挟まれても震えることもなくなり（つまり肉体の反撥もなくなる）更に、六尺禪を緊縛した感覚に満足の表情が見とめられるようになったり、周囲のヘコの禪一本の姿に焼きつくような眼差しを向けるようになれば、ソドミ——化は殆んど完全である。

一禪亭の行事についてはこの程度である。次に機会をみて、一禪亭のゴシップやエピソードについて説明したい。

(完)

△レポート▽

妊娠女が最高の値

(「東京新聞」32年4月20日付夕刊)

フランスのドレイ反対協会がこのほど発表したところによると、サウジアラビア、イエメン、それにペルシャ海岸の英保護領では前近代的なドレイ売買がいまなお行われているそうだ。最も値段の高いのは生産力を証明したというわけで妊娠中の女性で約三百万円。次は子持ちの母親と十代の少女。現に十四歳になる白人系のベドウィンの少女が七十万円で売られたことがあるそうだ。安いのは四十歳以下の男で約十五万円、また最も安いのは老年の女性で三万七千円位だと同協会は発表している。この相場でいくと去る三月イランで殺された米婦人アニタ・キヤロルさんは百八十万円になるそうだ。キヤロル夫人が盗賊に連行されたのは初めドレイとして売飛ばされたためだったとイラン当局は推測しているが、それは事件の起った地点がドレイの誘かいで有名な場所であるからである。ここで捕えられた人間はまずペルシャ海岸のグワルタルの市場に送られそこから海を越えてアラビア半島へ連れていかれるが、ドレイ商人たちはメッカ参りの巡礼にふん装しているためなかなか見分けがつかないそうだ。

「提供者註」妊娠した女が最高の値とは一寸面白いですね。(東京、土屋生)

(体験告白記)

白人の娘のこと

樺田荒夫

私は御誌の以前のフアンです。ここに書きました私の告白は、奇クにふさわしいものかどうかわかりませんが、或は何かの参考にもなればと思つて書きました。

五年前、私はまだ高校生でしたが、夏休みの間、アルバイトをしたことがあります。そこは軽井沢のNホテルで、進駐軍に接収されている所でしたが、白人の家族が避暑のため幾組も来ていました。私の与えられた仕事はライフ・ガード(命の番人)という役目で、池のまわりで見張つていて、白人の子供が池に落ちないように注意すればいいのです。せがまれば子供達をボートに乗せてやつたり見張番といつてもものきなもので、英語の勉強にはなるし、それにアメリカの子供は人なつこくて可愛いので、五、六才の子供とは

すぐに仲良しになりました。

アメリカの女の子は体格がよいので、十才位になると背丈も私よりも大きく、胸もとを大胆に開いたドレスを着て、もうすっかり大人びて見えます。体格ばかりではなく、一般に早熟で、自由奔放に育っているせいか、或は植民地のような日本に来てゐるせいか、私の眼には一種異様に映りました。

丁度、私がアルバイトに行きだしてから一週間目、十才前後の女の子が三人泊りに来ていて、池の畔の私を見つけるとボートを漕げようというのです。私は仕方なく、その三人をボートに乗せて池の中央へ漕ぎ出しましたが、彼女たちの言いつけでホテルから見えない木蔭へ寄せました。私にオールを止めさせると彼女たちはタバコをとり出してブカブカやり

出すのです。私はどうもこの女の子達が苦手で、いつも彼女たちの姿を見ると逃げるようにしてゐたのですが、とうとう或る日の夕方彼女たちにつかまつて、ボートを漕がせられました。もう池の面も薄もやが立ちこめていて、すっかり黄昏れてゐます。私にボートを漕がせながら、私の目の前で三人でキッスをしたり、もっと露骨な悪ふざけをしてキヤツキヤツと騒ぐのです。まるで私の存在など無視したように恥も遠慮もない態度なのです。

キッスの仕方なども熱烈なもので、一寸ここに書けないような凄惨なものでした。私は堪えられなくなつてしまつて、何度この状態を公表してやろうと思つたかわかりませんが、その方法もないまま、そのままになつてゐました。そして、いつの間にか、こっそり見て楽しむようになつてしまひました。

ある時、ホテルにガーデン・パーティーがありました。私もその夜はパーティーが終るまで池の番をしていなければなりませんでしたが、夜も相当更けてから、三人組の中の二人の女の子がやつてきて、ボートを漕げようというのです。規則としては夜のボート遊びは禁止されていたのですが、少し酔つてゐるような彼女達の語勢に負て、私は言うなりにボートを出し光の届かない暗い所へ漕いでゆきました。彼女達は例によつてタバコを吸つたあと、珍しく私にチヨコロールをくれ、ここで人の

来るのを見張っていると言います。私も何だか興味をそそられて、黙ってうなづきました。すると、二人はドレスを持ち上げると腰を浮かせてズロースをずりおろし、驚く私を



向岸へつけろと言いました。私は音のしないように、ボートを対岸につけ、彼女達が岸にあがるのを手伝ってやりました。彼女達はそのまま白樺と唐松の林の中へ入っていった。

尻目にそれをとってしまいました。さて、そのズロースを置こうとするのですが生憎、ボートの底には一面に水がたまっています。彼女たちは私にズロースを差し出して持っていくというのです。私はそれを受け取りました。まだ暖かみの残っているズロースを膝の上にのせて、不思議に胸がおどってくるのを、どうしようもありませんでした。ズロースにはかわいいレースがついていて乳臭いような甘い香りが鼻をつきました。彼女達はびったりとくっつくとお互いに背中へ手をまわして、キッスをしました。何しろ私の目の前一メートルと離れていないところですから、小さな音や息づかいまで聞えて来ます。気がついてみると、……(中略)……私は頭がカーツとして来て、そこにじっと坐っているのがやっとでした。……(中略)……

まいますので、ズロースを持たされた私も仕方なしについてゆきました。なだらかな斜面に柔い草の生えたところへ来ますと、彼女達は草の上に私のシャツを敷くというのです。私は、そこで見ていられるだけでもいいと思いい、言われる通りシャツを脱いで敷くと、そのすぐそばに坐りました。

彼女達はシャツの上に腰をおろすと、……(中略)……私はもう前後のことも考えないで、近寄ってそのスリッパを持ち上げてやり、手で押えました。二人共、私がそうやって手を出しても何とも言わず、むしろ助かったように……(中略)……私の目の前には、まっ白なお尻が大きくわれて、思わず唇をつけたくなるような光景が展開していました。風もなく、草の香りと彼女達の体臭(或は香水の匂も混っていたかもしれせん)が入りまじって、私はあんなにやるせない思いにかられたことはありませんでした。やがて二人は、さっさとズロースをはき、私には何も言わないで、シャツも拾いもせずとっとと行ってしまいました。あとに残された私は、自分のシャツの上に一人坐って、目の前で行われたことが、どうしても信じられず、夢を追うように空想にふけりました。その翌日から、彼女達はホテルから姿を消していました。きっと東京へでも帰ったのでしよう。そうなってみると、私はなんだか淋

しくなってくるのでした。五、六才の子供達と追いかけてこつこつ水遊びをしていても、ふと物足りなく、三人組の女の子達のことを思うのでした。

マーシャという東洋的な感じのする可愛い眼をした女の子がいて、殊に私によく近づきました。私がアルバイトをやめる二日ばかり前の夜、明日横浜へ帰るのだといって別れにキヤンディを持ってきてくれました。私

が礼を言うのと、とびつので抱きあげてやると、私の首にしがみつき、足で胴を息苦しい程しめつけます。初めての経験なので、一体どうしたのかと、どきまぎしているうちに、忽ち可愛い唇で私の唇がふさがれてしまいました。……(中略)……すると彼女は足を胴から離して、私からとび下りると、「グッ トバイ」と言い残して、元気に駆け出してしまいました。

その翌年、再び同じアルバイトをやりましたが、昨年の女の子達は一人も来なかったしそのような経験も、もうありませんでした。今ごろ、彼女達はどこでどんな女性に成長している事だろうかと、時折ふと思ひ出し、あの頃の事が、いろいろな空想となって、私の頭の中をめぐるのでした。

(おわり)

奇ク十一月号所載、矢桐重八氏のアブ・モード・オール・スクラップは仲々面白く読ませて戴いた。文中、トルコ風呂での臍相に関する問答は筆者も全く同感で、之に就いては数多くの実例を見聞しているが、茲には最近発刊の「別冊週刊サンケイ」、(特集占い読本)から一寸抜萃して見よう

同誌「世界各国占い巡り」の中、足のウラとヘソの穴」と題し、左の一文がある。足裏の占いに次いで変っているのはヘソの穴」と題し、左の一文がある。足裏の占いは大きく穴が深いのがよいとされる。それも上向きが条件である。小さな物がのる程のヘソは大吉上々であるから奇妙。すると出ペソは勿論いけない事になる。伝えるところによると、徳川家康のヘソの穴には小

さな桃がのったそうだし(本当かどうかはわかりません)太閤さまのはすももが入ったという。光秀に殺された信長が出ペソだったというがこれはまゆつばもの。ようするにヘソは深く上を向いて調っているのが吉相なのである云々。上向きの深いお臍は俗に溜り臍といはれ上々の吉運、之に次ぐものに井川臍(音訳、山口県地方の方言かと思うが御存知の方があれば是非御教示下さい。大きなお臍がグツと奥深く引込んであるもの)があるが、流れ臍とはお臍の皺が穴を形成して居らず、単なる凹面にしか過ぎないものである。擬、次に出臍を探すアメリカ人、及びアメリカ人に出臍は居ないという話であるが、之は筆者には一寸信じられない。アメリカのマガジン(ポディル、ヌード等に関するもの)の中にも出

臍はよく散見されるし、英和辞典を翻いても *Protruding Navel* なる訳語がある。又出臍はどうして生れるか?その原因から考えて見ても之は領ける事かと思う。

扱、この辺で話を本題に戻し、一寸探したい話だが筆者の友人K氏の体験談を語ろう。K氏はN社でも有数の企画部員兼シナリオライターであるが、その新婚当時の事、場所は静かな奥湯河原のO荘(おおそ)うだの洒落ではない)新妻は美貌をうたわれた同じN社の美佐代さんだった。宿に着いて程なく、女中に促されて一風呂浴びる事になったのだが『どうぞ貴男からお先に……』そういつて美佐代は妙に尻込みする『いいじゃないか、一緒に入ろうよ、家族風呂なんだぜ』『でも妾お後で結構ですわ』

瞬間妙な予感がKの脳裡をかすめた。若しかしたら美佐代は肉体的な欠陥でもあるのではないだろうか。彼が最も恐れたのは彼女の出臍である。Kは昔から極端に出臍を嫌った(その理由に就いては別に書き度いと思う)

——こんな事なら結婚前に一度確めて置けばよかった——とそんな悔恨の念すら浮んで来るのだった。免に角その場は一応彼が譲歩して、美佐代を先に入れる事とし、頃合を見計って彼も浴室に急いだ。正に夜半の急襲である。見ると浴室のダイヤ硝子に予期したように豊満な彼女の裸形が映じている。五尺二寸、十五貫五百余りのボリウムは彼をよろめかせるのに充分だった。『あらッ』

不意の闖入者に美佐代は戸惑うと、素早く手にしたタオルで腹部を隠した。それが却ってKに猜疑心をかきたてるのだった。——いよいよ怪しい?交互に背中を流し合ひ乍らも、彼は何とかして彼女のお臍を見ようとしたのだが、事毎に失敗に終るのだった。——美佐代は出臍じゃない?見せて

「研究発表」

擦つたい秘密

須藤 律夫

御覧——今となつてはまさかそんな事もい出し兼ねていたKは最後の手段、すきを見てふざけ半分、素早く彼女の腹部を掩っていたタオルを払いのけた。嗚呼! 其処には出臍とは全く反対の深く凹んだ大きなお臍が、真黒なゴマを一杯溜めて微笑んでいる。

『何んだ、出臍じゃなかったのか』

『出臍? まあいやだ、妾のお臍少し引込み過ぎてんのよ、ほら指が半分も入るでしょ、それに一寸大き過ぎるんですもの、あたし恥しくて隠していたのよ』

『恥しがる事なんかないよ、こういうお臍はお金も溜るし幸運の相なんだよ。だけどこのゴマは取った方がいいね』

『でもお臍のゴマを取るとお腹が痛くなるんですって、子供の頃よく母にいわれたわ』

『それは迷信だよ、第一不潔じゃないか、よし外から見える所丈でも僕がとってやる。』

彼はクスクスと笑い乍ら擦つたがるのも構わず、彼女の臍穴に指をグツと差し込むと丹念にゴマをとり始めた。

以上がK君の述懐であるが、その後彼の企画は一作毎に当たったし、美佐代は得意の洋裁の腕にものをいわせ(N、D、Cの踊り子の衣裳など仕立てていた)もりもりと稼ぎ出した。そして閑静な都の西郊に土地附の家も求めたし、待望の電話が架設されたのも九月初めの事であった。

——完——

附記

臍相学に就いては曾って、奇ク誌上にその一端を発表した事があるが(三十一年六月号)その後数々の実例に突き当たり、最近では或る程度の確信が持てるようになった。私は之を単なる趣味の研究に止めず、何か実生活にも益し度いと思う。そんな観点から何かお気付の点など御連絡戴ければ幸いです。

東京都練馬区南町三ノ六〇〇六安藤方

須藤 律夫

突然の咯血で、私は、かなりのショックを受けた。てっきり、再発だと思った。医師の診断の結果は、旧い病巣にも変化は無く、新しい病巣も認められなかったが、出血はなかなか止まず、結局は、出血傾向の体質によるものだと言ふことになった。



ポ ケ ッ ト 告 白

看

護

人

青 葉 楨 一

「看護婦をつけたほうがいい」と云う医師の言葉は、私をひどく当惑させてしまった。同性愛者である私は、仮令それが看護婦であつても、女性の看護を受けるのは、耐えがたい事である。そうして思いついたのが職安で衛生兵の経

験のある男を探してみる事だった。難しいと思つたが、運よく、二日目に、岩淵という男が見付かった。

色が黒く、筋肉労働者のように屈強な体格をした岩淵が、初めて私の病室へ入って来た時、カーキ色のズボンに、戦闘帽によく似た作業帽を眼深にかぶっていたので、衛生兵であつた頃の彼を一時、眼の前に見たような気がした。

「しびんを」と云うと、岩淵は、ベッドの下から尿器を取り、片方の手で、布団の裾をまくろうとした。

私は周章で、

「自分で出来るから」と云つたが、「絶対安静なんですよ。私がしてあげますから、委せておきなさい」

と彼は、ほとんど強制的に躊躇する私からパンツを剥ぎとってしまった。

そうして、岩淵が私の看護にたずさわる間ずっと、私のパンツは、はずされたままだったのである。

x

二週間程で、咯血はやっと治まつたが、その後、未だ三週間は、絶対安静を続けなければならなかった。

咯血以来、一度も排便していない私は、とうとう否応無しに、浣腸をされるはめになったのである。

私にとっては、生れて初めての浣腸だった。尤も、子供の時に経験がある事はあるが大人になってからは、浣腸をする側に回っても、される側になった事はない。浣腸プレイでサディズムを悦びんでいた私が、逆の立場に立たざるをえなくなったのは、いかにも皮肉である。

正直に言って、初めのうち、私は、出来ることなら、浣腸はしないで済ませたかった。しかし、長い間の便秘で、腹部が膨満し、それが苦痛になって来ていたし、それよりも、本当は、病床に就くようになってから、私は妙にマゾヒズムの方向にばかり傾くようになっていて、やはり心の何処かでは、浣腸されたいと、望んでいたのかも知れなかった。だから、表面は厭だと思いつながら、浣腸される(殊に岩淵から)ことに対しての期待も、確かにあったのだ。

「浣腸器、買つて来ますか？」と、岩淵が訊いたとき、私は、
「イヤ、浣腸器はあるからいい。グリセリンもあるし——」

と云ってしまったから、少し顔を赤くした。今更、彼に何を知られてもいいとは思つたものの、やはり、妙に気恥かしい気持はかくせない。

岩淵は、本箱の抽出しの奥から、浣腸器を取り出したが、

「何だ。二〇〇〇ですか。少し小さすぎるなア」

と、ガツカリしたように云ってから、
「まあ、いいや。これで五回やりましょう。本当は、五〇〇〇位のがありやいいんですがネ」

笑いながら私の顔を見て、すぐに仕度にかかった。先ず、挿入便器の用意をし、それから、洗面器に微温湯を充して来て、浣腸器にグセリンを半分入れると、そのあと、微温湯を一杯になる迄入れて薄め、嘴管の口を一寸押えて振り混ぜた。

次は、掛布団を取り去って、寝巻の裾をまくり、腰の下にビニールを敷く。

膝を立てた私は、天井を睥めたまま、全神経を肛門に集中させて、嘴管の挿入されるのを待った。

「駄目々々、そんなに力を入れないで」と云われても、馴れない私は、すぐ反射的に緊張して、括約筋を固くしてしまふ。その為、嘴管を挿入されるとき、少しの痛みを伴った。

二本目を注入し終ったとき、腸はそろそろ蠕動を始め、周章てた私は、思わず、

「もう、いい……！」と云ったが、岩淵はかまわず三本目を挿入し、矢継早に五本を入れた。私は喘ぎながら、彼のなすままになつてゐるより仕方がない。

予期してはいたものの、余りに猛烈な便意

に、私は恰で半狂乱になつて、のたうった。しかも、肛門は固く栓をしたようになって、便は全然出て来ないのだ。激しい便意は次々と襲い、私は身体をのけぞらして呻いたが、いたずらに苦しむばかりである。身体中が油汗でヌラヌラし、下半身をおこりのように痙攣させていきむが、やっぱり駄目だった。それに、余り力を入れて、また喀血を誘発することになりはしないかと、そのほうの危惧もあつて、私はもう、泣き出しそうになつていた。全身タタタに疲れてはてて、息もたえだえなのに便意は強暴な力で、体力の消耗を強要する。

「うッ。うッッ！ ア、アア、苦しい！ ああ、何とかしてくれ！ たのむ、何とか——」
苦痛に耐えかねた私、涙をためた眼で、哀願するように、冷然と立っている岩淵を見上げた。

「便が古くて相当固くなつてゐるし、それに飲み込んだ血が固まつたので、出難いんですよ。少しは苦しいが、我慢しなくっちゃア——」

そう云つたものの、さすがに彼も、少し気毒になつたとみえ、何回目かの便意に私がいきみ出すと、怒腹した肛門の周囲を指頭で強く圧した。今度こそと、私も必死だ。そして、とうとう、太い棒のような便が少しずつ押出されて来た。無理な排便に、肛門の粘膜

が破れ、張裂けるような疼痛に顔をしかめながらも、私は不思議な快感に身を委ねていた。

「大分でしたがね、末だかなり残っていますよ。これから毎日浣腸しましょう。だんだん楽になりますから——」

便器を仕末しながら、岩淵がそう云うのを私はグッタリと虚脱したまま、夢のように聞いていた。

翌日も、便は末だ相当に固く、長時間にわたる排便後、少量の痔出血があった。

三日目からは、便もいくらか軟かくなり、真黒だった便の色も、黄色味を帯びてきた。

三週間経って、便所へいくことは許された

が、私は浣腸をやめず、結局二カ月近くも毎日続けてしまった。

x

あれから、一年余り経つが、私には岩淵のことが忘れられない。殊に浣腸の時の苦しさは、今は甘美な思出となって、しばしば私を虜にしてしまう。そして、何時か一つの願望の形をとるようになつてしまったのである。(私は、後手に縛られて木の幹に繋がれている。下半身は、パンツ迄はがれた濡めな姿だ。一人の男が、暴れる私の脚を押えつけると、無理矢理に太い浣腸器を差込む。私は何とかして、恥しい脱糞だけでもいいとめようと、油汗を流して便意を泳ぐるが、男の足

が、情容赦なく私の腹を踏みつける。私は遂にたまらず、呻声をあげて、身を振りながら脱糞する。私の身体は大便と尿にまみれ、その滑稽にも悲愴な姿に、昂奮はみるみる上昇し、あつと思うまもなく、踏み続ける男の足の下で……!)

この夢が、何時かは実現されるかも知れない。又、不幸にして実現されないかも知れない。しかし、今こうして短い告白文を綴っているだけで、私は、抑えようもなく昂ぶって来る気持を、何うすることも出来ないのである。

(終)

私の体験

帝国海軍の私刑

香川 章 二

私は昭和十九年に召集されて九州の相浦の海兵団に入隊致しました。そこで衛生兵と兵科が決り一週間の後、佐世保の海軍病院へ教育を受けに行きました。そして其処でいる間毎日朝から就寝する迄、まさに地獄の生活でした。集合が遅かったと云っては罰、食事の盛り方が悪いと云っては罰、ハンモックの吊り方が悪い、メめ方が悪い、学習中の態度が悪い、整列の仕方が悪い、掃除をさぼった等々数限りない理由をつけて罰を科されました。その中で最もよく使われたのは銃剣術の銃で尻をなぐるのです。なぐられる方は一列

横隊に順に並んでいて一人宛前へ出て行って両手を前に上げて尻を突き出して上体を前に少し倒すのです。それを教班長がなぐるのですが、百五十人位を三人交替でなぐるのに赤樫の木銃が四五本は折れます。それが竹でなぐる時もあるし一度等は一寸位の鉄棒でなぐられました。尻が腫れ上って二、三日、便所へ行くのに困りました。ブツと腫れて皮下出血で紫色になりました。吊床をつるホックにブラ下らせて一、二と号令を掛けて腕を曲伸させたり、前支えをやらせるなどは日常茶飯事で、寒中に防火用水の中へたたき込む、



したが、全員裸にして海辺で鞭一つのまま、頭の上から海水をザアザアかけられたことがありました。其時も雪が降っていて気温はきつと零下だったでしょう。辛かったことを覚えています。

私等が新兵教育を終えて、扱て配置に就こうとした時は外地は船が危く行けないし内地は定員一杯だし行く所がありませんので高等教育をつけると云う名目で佐世保近辺の部隊に居るマークを持たぬ（腕の所に桜のマーク）上等兵、兵長等も少々入れて教育を始めました。その兵長の中にAと云う若い色の

暴挙もしました。一度はこんな事がありました。洗濯していて石鹼が無くなったと云って

全員を玉砂利の上に正座させました。洗濯中なのでズボンは膝小僧の上までまくっていました。二月の雪の中で二時間位、そんな姿勢のまま放っておかれて唇が紫色になったことがあります。又、こんな事もありました。

何の罰だったか忘れま

白い女の様な兵隊が居ました。目のふちがほんのりと赤いのも色白のせいでしょう。私は初めて彼を見た時、何かゾッと背筋が冷くなりました。

私が甲板兵の当番になった朝でした。Aが当番二人に一寸来いと云うのでついて行くと連れてゆかれたのは、防空壕の中でした。貴様等若い兵隊は此の頃ずるけている、甲板兵の当番もなつたらん気合を入れてやる。と云って二人を並べて用意してあったらしい丸太で尻をなぐりました。たとえ、ずるけていたとしても、その責任者でもない彼からなぐられるいわれはないのですが、仕方ありません。二人共黙って殴られていました。

翌日同じ時刻頃、其の日の当番の者が私にヒソヒソと、お前も昨日Aに防空壕へ引つ張り込まれたか。と聞くのです。彼も今日Aになぐられたのでした。其の晩入浴の時、今日の甲板兵と並んで体をこすりながらフト後を見るとAが後から甲板兵の赤紫色に腫れた尻をニヤニヤしながらじっと見つめています。私はゾッとしました。今から考えてみるとAはサジストだったのではないのでしょうか？ 私には、今でも、そう思われてなりません。

（おわり）

「眞実は誰も知らない」

辻 村 隆

まる二年間の斗病生活の甲斐があつて、私は再び元気を取り戻した。奇巧の再刊を目前に控えて、さながら符牒を合わした様に、本誌から姿を消した私に、それでも読者通信を通じて識った幾許の人々から消息を受取ったが、返事も出せぬ儘に、いつしか絶えて、今では訪れる人もなく、忘れられた存在になり果て、豊中郊外のT療養所で、健康保険を一縷の望みに侘しい二年間を過して来た。

発行毎に、妻から転送されてくる、復刊以来の奇巧を唯一の慰さめに、幻想と構想は病軀を駆け巡って、よくなりたいたい一心で、只管に節制を続け、今再びまみえることは、何ものにもかえがたい歎びだ。

ヒドラジド、パス、マイシンと、治療薬は次から次へと現われても、この病いの如何に多いことか——。人に嫌われる同病相憐れむ

心情からか、毎朝の洗面で出会う隣室の浜田さんと私は急速に親しくなった。

浜田さんの病状も、私と似たりよつたりの軽度と云うには少し手遅れの肺浸潤だった。四十を少し過ぎた彼に、子宝の恵まれぬのも不幸の一つだったのか、麻雀と深酒が禍して五、六才年下の未だ瑞々しい奥さんを広い邸宅に残してこゝに入所していた。

浜田さんは無聊を慰さめるべく、さかんに八ミリシネを振り廻しては、看護婦や若い医師を対象に撮影をしていた。私も一度そのシネに入った事があるが、二週間もすると、送り返されて来たフィルムを、夕食後など皆を自室へ集めては、奇妙な声のないピンボケの画面に、人々を他愛なく喜ばせていたものである。

アルペンとか云う、簡単な八ミリ映写機

操作を、浜田さんの見様見真似で、いつしか私も覚えてしまった。

彼の撮影機はそうり型といわれているアメリカのキーストンで、今では可成り古風な標準レンズのみの、広角も望遠もないものであったが、レンズが二・八で焦点も比較的良好自動操作もできる、いわば素人向きの使い易いしろものだった。

親しくなるにつれて、撮ったり、撮られたり、果てはイーストマン・カラーを使ったりして、意味もなく、風景や人物をとりまくっては、単調な生活の、せめてもの慰さみにしていた。それだけに浜田さんの、看護婦間の人気は上乘で、陰鬱な他の病室とは、凡そ対照的にこゝばかりは朗らかに、いつも笑い声が流れていた。

その晩も小試写会を終って、皆が夫々に散

ったあと、何とはなく、私と浜田さんはペラ
ンダに出て、遙かに赤く光る、伊丹空港の、
黒々とした夜景を眺めていたのである。

その時フト何事かを決心した様に、彼は私
の方に向き直ると、

「貴方が好むかどうか知りませんが、一度変
ったフィルムをお見せしましょうか。いや、
その前にいっておきますが、絶対に他言しな
い事を約束して下さい。……」

風景や、くだらぬ人物写真ばかりでは一向
に埒もないですからね。と尚も浜田さんは誰
にもなくつぶやいて、私を自室に招じ入れ
た。

久しく眠っていた私の妖しい血が急に騒ぎ
出した。未知への激しい執着が私を急速にハ
イド氏の心に引き込んでいったのである。

「白黒ではないんですよ——」

彼は奇妙な笑いを浮べて私につぶやく。

「という、カラーですか……」

「いやその白黒じゃない。それよく世間でい
うシロとクロね、あれではないという意味で
すよ。あれは単なるエロ以外の何ものでもあ
りませんからね。実にくだらない——」

カーテンを引き、部屋を密閉し終って、彼
は私に向きあうと、開き直った様に、更に語
をついで、

「貴方はサディズムという言葉を知存知でし
うか。ハハ、いや知らなくても結構です。唯

ね、莫然とした子供のない私達夫婦の十数年
の生活中には、夫婦生活のあらゆる面を知り
つくした拳句の果に、無味乾燥の生活をエン
ジョイする唯一の手段として、私が妻に徐々
に誘導していった、成果というのが、このフ
イルムなんです。話は一寸変わりますが、貴方
は奥さんを縛ってことがありますか？」

「……」

「いや失礼、とんでもない事をおきまして……
併しね、私達夫婦が単調な生活から脱却する
には、又十数年に亘る夫婦の生活の平凡なく
り返しから脱け出すには、この様なテクニッ
クこれより外に道がなかったのです。私はこ
うした人知れぬ愉しみを持って、いつしか麻
雀や夜毎の酒びたりからも救われたのです。
しかも皮肉なことに、こうしたプレイが、こ
うした病を得る結果ともなったのです。とも
角、百聞は一見にしかずです。これが貴方達
御夫婦の生活のうるおいともなれば幸いです
よ——」

浜田氏は、リールからフィルムをかけ終り
私に目で合図すると、螢光灯のスイッチを引
張った。

私は終始、無言の合槌を打っていた。いみ
じくも又、こゝに同好者を一人見出した喜び
に、わく／＼し乍ら、私の卑劣なジエキル博
士の心が、彼に私の正体を打ち明ける機会を
失わしてしまった。さもない難げに語る、浜

田さんのこの心情を、私は過去如何に多く、
小説に随筆に書き綴って来た事か——。一言
にしてそれと分る言辞を、私は遂々最後まで
私の正体を隠してしまつた気がする。

十六ミリの所謂、シロクロと通称される映
画は見た事がある私も、緊縛（と私は想像し
たのだが……）映画は見始めであるといつて
よい。

今までに幾多のモデルを使って構成したも
のは、何れもカメラによる静物に過ぎなかつ
たからでもあるが、私はやがて映し出された
この画面に喰い入る様に魅せられていった。

字幕も何もない、いきなりパツと女の眼が
画面一杯に拡がる。カメラが徐々に下って大
写しに女の顔がうつる。猿轡——。一種の嵌
口具とでもいおうか、長く引出された舌の根
元を、空気枕の挟む金具を使って、丁度枕を
しっかり挟んだ様にしめてある。その顔は
矢張り予期した様に、しば／＼彼を訪れるあ
のあどけない浜田夫人の苦悶に歪んだ端麗な
顔であった。彼女の舌根を押えつける様に舌
の上下に二本の細引が、深く口中に喰い込ん
で、頬からうしろへとしめあげて、顔をいび
つな瓢箪型にしている。尚もカメラは下ると
上半身の豊かな肌があわれる。子を産まぬ夫
人の水蜜桃をつくりの乳房の盛り上りに見惚
れるうち、湯巻一枚きりの全身が撮し出され
聴てその全身が、柱を背にして、両手を高く

柱の上部の環に、びっちり繋がれている事に気がつく。

カメラの前で縄を引張っているのか、夫人の右足が、足首に巻かれた縄の引張られるにつれて徐々に上って行く。夫人の体が左右に揺れ動き、倒れまいと懸命に一方の足に力を入れてるのが鮮明にうつし出される。

「この間二十五秒です——」

撮影機のフィルムの捻巻きの時間だと浜田さんは、私の耳に口をよせて囁いた。いつもはさして気にならぬ、映写機の回転音が静寂な空気についてカタ／＼／＼／＼といやに音が高い。

画面が変わると、片足を高く吊り上げられた儘、夫人の白い肌には、喰い込む程に強く、太縄が轟々とかけられて、柱を背に身動きも出来ぬ姿に緊縛されている。

さっと一条の縄が胸に走ったと見えた瞬間うーっと夫人が、身をのけぞらしてもがく――。

ピシッという音――、ウームと声ならぬ呻きを発するのが、声なきフィルムから、ひし／＼と私の耳に聞えてくるような幻覚をおぼえる。

颯／＼と連続の鞭の洗礼に、夫人は悶える。微かに鞭あとが糸屑の様に夫人の体を染めて行くのがありありとフィルムに焼きつけられている。

又画面が変わる。苦悶の表情に、カメラは近づき、夫人の苦痛と被虐にもたえる乱れ髪の色を画面一杯に写し出す。鞭の手はつゞくのか、断続して夫人の顔はゆがみ、呀っと舌を引きつらせて、けいれんする。眼尻に大粒の涙が一滴――又一滴、溢れてスーッと糸を引いて頬を走る。

横顔――肉に喰い込む縄目を丹念に脚元まで、カメラの眼はなめて行き、ビク／＼けいれんする、足首でハタと止って、パツと画面は切れて白く光った。

五十呎はまた／＼間に終りを告げたのだ。ランブスイッチ、モータースイッチをきいて、闇より浜田さんの昂奮にかすれた声が響いて来る。

「如何です――。もう二本ありますが、御覧になりますか――」

「いや――。どうも……」

私は一入大きく、浜田さんの手前もなく、溜息をついた。

網膜に残る、あの美しい夫人の苦悶に歪んだ顔がチラ／＼と脳裡に走って、私は彼女に激しい慕情を感じた。

「是非お願いします。しかしよくまあこれだけのものを現象出来たものですね――」

「闇ルートがあるんですよ。普通フィルムは現像料込みの値段ですが、こうした特殊なものを専門にやる店がありましてねえ。じや始

めますよ。」

螢光灯を照らして、お互いの顔を見る気恥かしさから、彼はパチリとライターに点火すると、机上において、馴れた手付で、フィルムを嵌めかえた。

前触れもなく、画面が照らし出された。

「谷崎潤一郎の『鍵』の立体化ですよ。よく見て下さいよ――」

傍らで彼は些か得意気にそう註釈をする。成程、鍵穴にレンズを当てた様な構成で多分彼等の寝室であろうか、ベッドにスッポリと布団を被せて誰か寝ている気配である。

カメラはその物体に近づく。布団の端に紐でもとりつけてあるのか、スル／＼と薄い夜具が脚元の方からずれ落ちて行く。

全裸の夫人が、荷物の様に縛られて髪は乱れている。ゴロリと芋虫の様に半転すると、彼女の背中が画面に撮る。カメラは近づく。墨黒々と背中一杯に『奴隷妻』と書き殴ってある。画面の横手からニューッと男の手が現

われて、(多分浜田さんの手であろうが……)夫人を一転二転させた上、突きとばす。あつ

と思う瞬間、地響きを画面に響かせて、夫人の体は絨氈の上に転げ落ちる。暫らくは身動きもしない。

落ちた夫人の前手縛りの両手首が大写しになる。全身は縄が縛ってあるが両手首のみ針金が深く三重四重に喰い込んで、辛うじて、

針金の両端がギリ／＼ペンチでもねじまげたのかくつきりと撮し出されている。

「ひどいですね——随分……」

「そう思うでしょう。だがね、これはすべて二人合議の上ですよ。家に風呂があるからよいものゝ、あの針金のあとは一ヶ月近くも黒



く跡がついてとれませんでしたよ——」

パツと画面が変わって、男の両手が夫人の顔を挟んでこちら向けにねじる。弱々しく夫人が画面に微笑み、それを蔽う様に一杯に彼がのしかゝって彼女の顔を画面から遮ぎってしまふ。

黙々と彼は三本目のリールをかけた。奇妙な沈黙が部屋中を支配して私も浜田さんも一言もいわない。何かいえば、この場の雰囲気は壊されそうに感じたからだ。

行き届いた庭園の片隅——。古びた石燈籠と松の幹——。突然よろ／＼と後手の儘、突き出された様に夫人が画面を走り、石燈籠の前で俯伏せに倒れる。

ゆっくり画面の左手から浜田さんが現われて、一寸こちらを向いて意味もなく片手をあげる。再び変わると太縄が夫人の両足を縛ってあって、浜田さんがエイと松の太い手頃の枝に太縄をかける。ぐいと引っ張るが、松の枝との摩擦が激しいのか、夫人の体は中々持ち上らない。

「撮影を中断して、妻を机の上ののせて引っ張り上げたんですよ——」

成程画面が変わると、夫人の体は見事に松の枝に逆吊りになって、くるくると前後左右に揺れ動き、足の縄に全重量がかかるのか、何か叫んでいるのが分る。充血した様な夫人の必死の顔。夫人の体は少しも安定せず、ゆらめいている。

後手の縄が石燈籠に結ばれて、夫人は斜めに吊られて固定している。何か叫んでいる。懸命に云っている。苦しいのだろう。

雨ではない。ホースから噴出する水の勢が逆吊りの顔にしぶきをあげ、辛うじて顔を動

かす夫人は早や声も出ないのか、静止の儘、人形の様に水しぶきを、鼻、唇、に受け止めている——。

カメラがぐったりと乗れ下った夫人の顔に近づく。濡れてへばりついた髪で夫人の定かならぬ顔に、苦悶と満足と諦観の形想を撮し出して——フィルムは停止した。

終わったのだ。螢光燈のスイッチをたぐると水色の照明の許に、何とも云い様のない、彼と私の呆然とした姿が明るく浮き上った。

浜田さんは、何か云おうとして口をつぐんだ。今更何の説明が要ろう。

「実は……」

私は始めて、私自身嗜虐に身を焼く一人である事をその時打明けた。

それから四日程した午後、初々しい浜田夫人が、玉子や生花をもって訪れた時、廊下で日向ぼっこをしていた私は、飛び上った。何故ともなしに、憧憬と慕情を切実に感じていた私は、突然に浜田夫人を目前に見て、慌てうろたえ、途迷ったのだ。

そんな私の姿に、夫人は小腰をかがめ、儀礼的挨拶を残して、浜田さんの病室へと消えた。私は浜田さんから、堅く口止めされる迄もなく、この重大な秘密は厳として、私独りの心の中に愉しく温めていた。

T療所百数十人の人々のうち、この眞実は恐らく私以外誰も知らないであろう。又夫人

を世人の冒瀆の目から守る為にも、誰も知ってはならないのだ。浜田さんが、私はあのフィルムを見せようとした動機は今以て奈辺にあるか判らない。若し強いて云えば、サディストのみが持つ、鋭い直感であつたのかも知れない。つとめてジェキル博士を装おう私の日常の言葉の端々に、チラリ覗くハイド氏の姿を、彼は既に察していたのであろうか——。

浜田氏が部屋から頭だけ出して、廊下を一べつし、私の姿を逸早く見出すと、そつと差しまねいた。例によって新鮮な玉子のおすそわけである。健康保険の給食にのみ頼る私にとって、これは有難いプレゼントである。部屋に持帰って、紙包みを開くと、玉子が五ヶの外に小さなメモが一枚入っていた。

鉛筆の走り書でこんな事が書いてあつた。
(女房が今夜泊るのです。愛用の縄御持参です。傑作を御期待下さい——)

三行に躍った様に書きなぐった字は、歡喜に溢れている。私にさして覗き趣味はない——が……。これは何としてでもその片鱗なりとも窺がいたい切ない欲望に捉われた。

隣室とはいえ、厚いセメント壁に仕切られていてはうかがう術もない。ペランダに出て跨いで越せば、或いは覗かれぬ事もあるまいが、第三者をおもんばかつて、浜田さんは唯一の窓を堅く閉めている事だろう。

寝静めてせめて物音なりととも、私は眼を

血走らせて潜かに壁に耳を押つけ、窺って見たが、それも果敢ない努力に過ぎなかった。阪急電車の時たまレールの継ぎ目のガタゴトと云う音がいやに判つきり響いてくる外は、さややと病棟の松籟のそよめきに消されてコトともせぬ隣室の音に、一層瘠をたかぶらせて、いつまでも寝つかれなかった。

翌朝遅く眼を覚まして洗顔に行った時、夫人を送り出して戻って来た浜田さんとぼつたり廊下で出会った。玉子の礼を述べて、扱、メモの件に触れ様とすると、判つきりそれを避ける様に、浜田さんはそくさと部屋へ戻っていった。彼等夫婦の秘密を知っている私に、或る種の憎しみと、親しみと、捉え様な不安を抱えているのではなからうか——。

その後、フィルムを見せて貰う機会もなく努めてその話から避け様とする浜田さんの態度に、何か一枚の膜の隔てを感じつつ、表面は相変らず如才なく交際を続けていた。

浜田夫人の見舞に来る度毎に、二人だけの秘密のプレイが行われている事は、略々間違いない事実だった。

他の入室患者も、時折、浜田さん夫婦の噂をして、この病気に余り仲が良過ぎてもないが、などと罔焼半分に冗談を云い合つてはその癖、浜田夫人の楚々なる艶姿に、いずれも人知れず浜田さんを羨望している様子であつた。恐らく二人の眞実は誰も知るまい。

私が追々恢復に向うのと反比例して、浜田さんはその為でもあるまいが、段々と病状が進んでいる様子であった。夫人の来訪をも院長は忠告した様であった。

忘れもしない、妙に蒸し暑いあの夜の明け方、浜田さんの病状は急変した。

朝からむしむしするので早く眼を覚して、ベッドで、浜田夫婦の幻想を逞ましようする折も折、ブレが私を呼びに来て、浜田さんが私に逢いたいと言っていると呼びにきた。

げっそりと面黄れし、始めて知り合った日の面影の求め様もない浜田さんは、私をドンヨリ濁った眼で見上げると、大儀そうにベッド横の脇机の抽出から紙包みを取り出し、黙々と私に渡して、一言、たのみますと云ってその儘顔を反けてしまった。

胸の熱くなる思いで、励ましの言葉を残して戻った私は、それが予期した様にフィルムである事が分った。二寸角の黄色い小箱に入った四箱のフィルムは、乱れた字で現像先が書かれてあり差出人の名前は空白だった。私には彼が、私に托した最後の気持が、痛い程身に沁みて感じとれたのである。

万一夫人が到着せぬ間に、靈魂が現世を離れた時を慮ばかり、私に托したのであるが彼の厭な予想は的中して、こんすい状態に陥り、遂に空しくなった間際迄、夫人に打った電報の効果は現われなかった。

夫人が転がる様にして駆けつけたのは彼の死後五時間も経てからであった。

慟哭する夫人——私は彼女を慰さめる前に、如何にしてこの難物を手渡すかと、その事許りに心を砕いて、何か頓珍漢なこと許り云った様な気がする。

この儘私が保有しても、誰も知るまい。と激しい所有欲にかられる一方、これを手渡すことによつて夫人と近附きになれ、誰知るまいと思つて残酷な飲びにぞくぞくする程心をときめかせました。

かくして、四巻のフィルムは無事現像されて私の手許へと戻つて来た。

今は映写機とてない境遇から、深夜ひそかにフィルムを伸べては6ミリにも足らぬ極小の仄黒いフィルムの一コマコマを、私は見飽きもせず毎夜眺めては独り愉しんでいた。

虫めがねが誰一の私の武器であり、その断片から察して、このフィルムがASA四〇の至つて光感度の悪い、カメラフィルムのSにも足らぬ感光度から、凡そハイトライトを使用せぬ出来上りに、浜田さんから見せて貰ったフィルムとは較べものにならぬものとしりつつも、私はまるで、宝物の様に大切に抽出し深く蔵い込み、夜がくるとゴソゴソと又奥底からとり出しては胸に抱きしめ、浜田夫人、照子さんのイメージを胸に去来させつつ眠るのである。

待望の退院の日が来た。妻子の世帯やつれの姿に涙ぐみ、二年間の労苦を衷心より謝して私は憶い出多き療養所を後にした。ポケット深く四巻のフィルムを忍ばせて……。

喧噪の世界に私は戻った。

そして或る日曜日、私は浜田照子夫人を訪れる決心をして夕刻、大阪から阪急に乗り、夙川で再び乗換え、佳人の住む苦楽園口に降り立った。日は既にとつぷりと暮れている。

山手に向つて、私は嘗つて浜田氏から教わった、うろ憶えの心の地図を頼りに歩き続け目指す浜田宅へと辿りついたのである。

主人のなくなった家は、心なしか門灯も佗しく、浜田と二字の大きな表札が反つて主の無い悲しさを一際寒々と浮び上らせていた。

呼鈴を押す。心の動揺は激しい。

老婆が顔を出した。私は表だつて弔意の来訪をつけ、間もなく応接間に通された。

静々現われた夫人は、一瞬意外そうに、しかし忽ち、心の悲しみを押し隠して、私の来訪をねぎらい喜んでくれた。

私は心ならずも弔意を蒸し返し蒸し返し、さて如何にして本題に入ろうかとドキマギする。

「実は……御主人に依頼されたものがあります……」

私が云いもやらず、夫人はパッと顔を赤らめ、努めて平静を装おい乍ら

「フィルムでは御座いませんでしようかしら……」

ズバリと云ったのである。咄嗟に私はあつと思つた。そうだ。私が考えている以上彼女は主人との、二人の秘密を撮ったフィルムの所在を気にしていたに違いない。どうしてその事に気付かなかったのか。恐らく彼女は療養所で跡始末の折、必死になつてフィルムを探したに違いない。しかしそれはどこにもなかった。一向に送還されて来なかった。誰にも聞けない。又云えないこのフィルムの存在に、彼女は如何許り傷心した事であろう。恐らく主人が私に秘密を明かした事を、この初々しい主人は勿論知らなかったであろう。そして今ズバリと云った直感——。彼女は真剣な、そして満面に恥らしいの色を浮べて云つた。

「探しました——。その為この様に瘦せたのです。でもよかったですわ……。お返し願ひ度いと存じます——」

「勿論貴女に直接手渡そうと、わざわざ参つたのです。私も男です。御主人から貴方達の秘密を伺つた以上他に口外はしません……但し——」

「え——但し?……」

「そうです、このフィルムは露出不足で恐らく大した事はないでしょう。でも最後に一度見せて戴きたいのです——」



「……………」

私は彼女の返事のない言葉に更に続けた。「御主人の愛読なさる奇譚クラブ——ね、恐らく一度はお読みになったでしょう。私は」辻村隆だと白状する事によって、夫人は益

々驚いた様子だった。

「だから——私が御主人と同好の士であるだけに尚更見たいのです——」

「分りましたわ。お名前だけは存じて居りましたが……。まさか貴方様がそうとは……」

夫人はここで始めて低く笑った。云い様のない魅惑的な、秘密を知った者を許容する笑みを浮べて……

「どうぞ主人の、いえ私達の部屋へお越し下さいませ——」

私はもう遠慮しなかった。夫人は老婆に早く休む事を命じて二階へと私を伴なって昇った。

8ミリで見たあの鍵のある部屋——。

それが今現在に目前にある。ダブルベッドの半身の消えた佗しさは蔽い様もない。

夫人は桃色のカーテンをさっとベッドにひいてそれを隠した。重たげに映写機を持ち出す。

「私が写しましょう。いいですね——」

「ええ……」

最早、観念した夫人は易々諾々である。数カ月振りに陽の目を見たフィルムを前にして私と夫人はつと顔を見合すと、云い様のない奇妙な眼許のひきつる様な笑みを浮べ合った。端麗にとりすました夫人の、赤裸々な姿が数分後には前面の白壁に、残る隅なく曝し出されるのだ。

私は喉ががわく。フィルムをかける手が、稍もすれば震える。

「消して下さい——」

壁際のスイッチが夫人の手で下がると、真黒の暗に二人つきり——

編集の出来ていないフィルムは、無意味な判別の出来ぬ画面を羅列して行く——。

突然灰黒い中に、夫人の全裸の白い肌が、微かに見てとれる。

二年間、私が寝ていた同型の固い鉄のベッドに、柔肌の夫人の全身が曝されている。

夫人は嬉々として半身を起すと、両の腕を後ろに廻す、浜田さんの手が画面の横から伸びて、わざとらしく荒々しげに素早く両手を合せて縛り上げ、ふくよかな乳房に縄をがませて、ベッドの柵に縛りつける。

又暗くなる——何だか判らない。稍明るくなると、夫人の皮膚に、浜田さんの皮バンドがビシリビシリ飛んでいる。

黒く暫らく画面が流れる。二十五呎の折返しの笹替えの個所である。

併し、緊縛はそれで終っていた。いや縄を解いたのではない。緊縛の姿勢の儘、かつて浜田さんが、あれは実にくだらないとつぶやいた赤裸々な姿態が縷々と続いたのである。瞬く間に一巻は終った。私はリールから外して、フィルムの二本目に手をかけ様とした時「お止しになって……」

私の手を押し止めた夫人の腕がその儘、宙を探って、私の首に巻きつくと、

「もう、何もかもおしまいなの……判っていただけます。何もかも……私独りぼっち……」上づつた夫人の熱っぽい声と共に、私は唇

をふさがれていた。

最終の西宮発の阪急に上気して、私は天外に魂を飛ばして、大阪へ無我の内に身託している。夢か——誠か——。私の得たものは……。

あの狂態——。取り澄した夫人の闇の声が途切途切れに脳裏に浮んでくる。

「縛って——、ねえ、縛って欲しいの。思い切りぶたれたいの、好きな様になさって……」

そして闇から私を扉の外へ追いやると、呻く様に、押し殺した慟哭の悲鳴が、今もありありと私の耳朶に焼きついて離れない。

私はそれからと云うもの、絶え間なく襲う闇の夫人の声と、柔肌に追っかけられた。

夢ももう一度——。

私は逸る心を押えてそれから一週間後の土曜日の夜、妻には出張と偽わって、浜田夫人の邸を訪れたが、化性の如く消え去った広い邸には物音とてなく、巡視の警官に咎められて、浜田夫人への来訪をつけると、行く先も判っきりせず移転したとの事で、うさん臭げに私の様子をじろじろ眺め乍ら立去ったのである。フィルムを取戻す為、何とかあの日まで持ちこたえたのか——。それでは再来を約した彼女の言葉は本心ではなかったのか——本心でないとするば、あの夜の……？

所謂、女心は分らない。

昨日も今日も、又明日も私は、彼女の行方を探している。仮初の一夜を私に許して立去

った、彼女の本心は——。ここにも真実は誰も知らない。私自身すらも知らない——或いは又、彼女自身すらも説明し様のない気持ちにかられたのではなからうか——。

求めてどうなるものでもない知り乍ら私は求めている——。だから浜田夫婦の秘密を敢えてここに発表した——。何処かの果てで潜かに奇クを貪ほりよむ、端麗な美女——浜

田照子さんが、この一文を目にとめた時、誌上でいいから、その気持ちを發表して戴けたらこれは私自身としても望外の喜びである。僅れの人、浜田夫人よ——現われて下さい。



私はある病院の看護婦です。これから書くことは職業上の秘密を打ち明けるようで、ちよつとどうかとも思われますが思い切つて発

ブレさんの浣腸記

ナースと浣腸

岩村 美智子

表させていただきます。

そう、丁度五年前、私が高校を卒業して、高等看護学院へ入学してまもなくのことでした。私達のところではお注射の仕方、お薬の飲ませ方等の実習にはお互いに患者となりあつてやつてきたものでした。

或る日の午後、私をいつも可愛いがつてくださる看護婦のY先生がいらっしゃつて「今日は浣腸の仕方の実習を行います。講義は済んだと思いますのですぐ実習にかかります。

そうね、今日のモデルはミツちゃん、やつてくれない。」と云われた時の驚き、思わず真赤になつてしまいました。でもお勉強の為だから仕方がないわと、あきらめてベッドに横になるとすぐY先生によつて、50ccガラス製浣腸器、グリセリン、ワセリンなどが準備されました。いくら全員同性の前とはいえ恥しさに身も心も消えいらんばかりでした。横に立たれたY先生は50ccのガラス製浣腸器にグリセリンを二倍に薄めた液を満されるとその嘴

管にワセリンをぬられ、それを右手に持たれ私を患者に仕立てて浣腸の模範を示されるのでした。「先ず患者さんをこのように仰向けに寝せます。そして足を曲げさせ、口を開かせ、左手で肛門を拡げて右手の浣腸器を挿入します。そして十分入ったら内筒を押して液を送りこんで下さい。」先生が説明されながらゆっくり挿入される筒先は直腸の粘膜を軽く擦ぐっているような感じでした。チュル／＼そうそんな風に静かに入ってくる液は軽い刺激でした。「液を全部入れ終ったら浣腸器を抜き、同時に肛門に脱脂綿を当てて液だけが出ないようにおさえておいて、お便器をあてがいます。五分間くらい脱脂綿でおさえていると、大抵はお通じがありますが、十分間たってもまだ出ないようでしたらもう一度繰返してみます。又老人、小児、重病人の場合はおしめをあててとってやるようにして下さい。」と云っておしりを持ち上げ、足を開けると私にも素早くおしめをあててしまったのです。あゝ、その時の恥しさ、今まで赤ちやんしか見たことのないおしめを自分の身にあてられたのです。その時ほどY先生がうらめしく思えたことはありません。私は気が遠くなりそうでしたが、そのうちにお腹のあたりがゴロゴロいってきました。冷汗が流れてきて「アー」と小さな声と共にドーツと大きな音をたてて暖かな液体が流れ出ておしめをぬら

したのでした。Y先生は「おしめをはずしてすぐ新聞紙でおくってしまします。ひどく周りの皮膚が汚れていたら、温かいお湯と布でよく洗ってやると大変気持ちよくなります。」とおっしゃっておしりをきれいに拭いて下さるのでした。その時はなんの気力もなくなつたものなすがまゝにまかせただけでした。

それから十数人の学院生徒全部仰向けにねかされました。イルリガートル、ガラス製浣腸器、スポイト式浣腸器、差込み便器、おしめ等色々用意されました。一番左のAさんとその右隣のBさんが浣腸してあげ、そしてBさんをCさんが浣腸してあげました。そして一番右のLさんを私が浣腸してあげました。そんなうちにも皆は仰向けに寝たまゝ、足をバタバタさせるもの、冷汗を流して顔を赤くして我慢しているもの、大きな声で「私もうもうしちやうわよ。」と云っている人もありました。私はLさんのお浣腸を終えるとAさんの便をおかわにとつてあげました。次いでAさんはBさんのお通じをおまるで処理してやるといふ具合にして今日の実習を終えました。十数人の乙女がおしりを丸出しにしてゐる光景、知らない人が見たら何と思つたでしょう。そして私にとってはその時受けた羞恥の為に一生忘れられないこととなるでしょう。

その日以来、私自身浣腸されたことはあり

ませんが、患者さんには随分お浣腸してあげました。使用するのは、大体イルリガートルがガラス製浣腸器が多いです。あんな小さなイチジク浣腸など使うことはありません。グリセリンと云つても二倍に薄めたものを50～100ccは入れるのです。しかし、浣腸が自分の仕事となると、皆様のように人に浣腸する楽しみは全然起りません。職業的な義務感があるだけです。でも患者さんの数が多いのでいろいろの場合にぶつかります。これから何度々、浣腸をしてあげると思いますから患者さんを恥しがらせることのないように、又気持ちのよいお通じのあるように上手に浣腸してあげようと思います。

そうね、一番いやなのは老人、子供に浣腸するときですね。こらえる力がないので、すぐ液を排泄してしまつて、ベッドを汚してしまふのです。

市会議員の娘さんとかで、とても美しい方でしたが、盲腸の手術の為に入院されていたことがありました。手術の日の朝、私が「お浣腸しましょう。」と入っていくと耳まで赤く染めて大変な恥しがりよう。で私の方が何か悪いことをしているようで、いたたまれぬ気持ちでした。イルリガートルで浣腸してあげている間中、はあーと小さな溜息をついておられますが、こらえていられる間中、顔を真青にして冷汗を流しておられました。しかも

その時、部室にお父様と担当の〇先生がいらっしゃったのですよ。その時はきつとそれも恥かったのに違いありませんよ。気がきかないわ出てあげたらよいだろうにと思ってその時など同性として御同情申し上げたことはありませんわ。

逆に元気のいいお嬢さんでしたが、外来で浣腸してあげることになって型通りベッドに仰向けて寝ていただき、スカート、ベテイコートをまくりあげ、さて、浣腸という段になって気づいたのですが、下穿をつけていられないのです。つまり下着は今流行のブラジャーとベテイコートだけのスタイルだったので。まあまさか外来で浣腸されることはあるまいとあのような不用心な恰好でこられたのだと思いますがまったく面くらいました。

一方若い男の方などでは浣腸に先だって私がアルコール綿で、清掃消毒をするのですが若い患者の方には、そんな時、私まで顔が赤くなつて困ってしまうことがあります。

ある女子高生の方でした。手術後便秘の為浣腸してあげたのですが、随分おこらえしていらつしやったのですがこられず肛門をお抑えしている私の手からお通じがもれ出したのです。しかも一度に緊張が緩んだためでしょうかベッドの上にはおしっこまでほとばしりてたのです。その時のその女高生さんの

恥しがりようたらなかつたですよ。そう、今にも泣き出しそうでした。だから私は優しくいたわつてあげたのですが。

こんな経験談を書き並べていくと読者の皆様の中にはきつと羨む方もいると思いますがでもね、私は人にお浣腸してあげるよりも他人に浣腸していただくたいの。……例えばあの二枚目のT先生あたりに——あのお嬢さんのように嫌がる私を抑えつけたT先生の持つガラス製浣腸器の筒先は私のおしりをねらっている。「いやよ、いやよ、浣腸はいや、恥しくて、かんべんして。」と云う私の声を聞かばこそT先生は左手で私の腰をおさえ、指先で肛門を静かに開いて浣腸器の先を入れた。

——先生の白く細りした手が私の肛門を脱脂綿で押える。——悪魔の液が腸の中で騒ぎだしました。——あゝ、もう駄目です。私の体から出たなま温い液体は先生の美しい手を汚して下のおまるに落ちました。私は悲しくなつて泣き出しました。……とこんなことを考えているのですよ。そしてどなたか女性の方でこんな私の願いをききとどけて下さる方がいたらなあと思つたりします。

補足

○奇巧の読者の方にはガラス製浣腸器とエネマシリンジを別のものと思つてらつしやる

方が多いようですが、これは同一のものではないでしようか。ガラス製浣腸器の箱にもEnemacylinceと印刷されていますし、又語原的に考えてもCylinceはCylinderと同語原のものでやはり円筒と云う意味を持っていますので当然ガラス製浣腸器をさすものと思われまふ。

○最近医学書院より「写真解説入看護技術」と云う本が発行されました。おむつのあて方、排便、排尿のさせ方、浣腸の仕方、直腸温の測り方、腸洗浄、導尿、膿洗浄の仕方等について、写真入りで詳しく書かれてあります。きつと皆様の御満足をいただけるのではないかと思います。(定価九五〇円)

【後記】

初めて書いた原稿です。ブレさんの浣腸記五篇を書く予定で、もう下書は大体出来上つていますが、とりあえず第一篇をお送りします。

- 一、ナースと浣腸
- 二、ナースの浣腸日誌
- 三、私の浣腸アナムネーゼ
- 四、ラベメントセンター
- 五、浣腸ごっこ

ケンちゃんのこと

(本誌29年九月号「露出願望の少女の告白」30年2月特大号「続・露出願望の少女の告白」の筆者の最近だより)

柴 崎 黎 子

Kさんと婚約させられた私だが、なぜ承知してしまったのか自分でもわからない。どう考えてもあの人には私のひそかな夢を満たしてくれる愛情なんて感じられない。冷たい人——しかも嫉妬深くて疑い深くて、私のどんな些細な出来事をも根掘り葉掘り調べ出して勝手な解釈を下して私を叱る。私はだんだんKさんとはお話も出来なくなってしまう。何を云ってもあの人は素直に受取って下さらないのだもの——。

私はお約束する前から貴方に千浪さんという方がいる事を知っていた。随分、千浪さんを可愛がっていらっしやった。私には妹分のようなものだとおっしゃったが、千浪さんは私より愛らしく、お齡も上ではないか。

私は貴方のように他人事をくわしく知ろうとは思わない。でも今でも東京で、貴方は千

浪さんと仲良くしていらっしやる事はよくわかる。私は嫉妬するわけじゃない。ただ、Iさんと私との関係をあんなにひどく責めた貴方と、今の貴方が私には同一人とは思われないのだ。そういう貴方を見ていると、私は前途が不安で一杯のような気がして来る。

私は貴方の前では、いつも罪人のようにいじめられるだろう。そして私は、貴方の罪を黙認していなければならぬ——私は嫌です。父母は何にも知らない。Kさんを本当にいい方だと信じている。そして一年後には式を挙げるのだと云っている。私は従兄弟のいる田舎へ逃げ出して来た。でも、この人達も私には無理解だ。Kさんとの結婚に別に賛意も示してくれないかわりに、私の外出をも咎める。世間並にみたら、ここの生活だって穏やかではない。女の子のいない家だから、高校

生の従弟が私に悪ふざけをする。ひどいものだ。私が大人しいものだから、だんだん悪い子になって来た。でも従弟は可愛らしい。明瞭で素直で、きっと本当は私を好きなのだろう。私も彼が嫌いではない。普通の女の子なら、この従弟のする事に悲鳴を挙げるかもしれない。でも私は、むしろ彼の悪戯を心の底では待っているのだ。この田舎にじっと我慢していられるのも、この従弟がいるせいかもしれない。——私はIさんを思い出す。Iさんは、いつもきちんと学生服を着て、ダンディスタイルの髪がよく似合うやさしい方だった。私は四年間、彼と交際していたが、その長い間、彼は少しも態度を変えずに私を愛して下さった。私は彼のいう事なら何でも嬉しく従うことが出来た。私は彼に色んな事を教わった。

——「ベッティングという言葉を知っている？」私たちがまだ何の関係も持たない頃、Iさんはそう私に云った。いつの事かもうはつきり思い出せないが、まだ高校生だった私にも、その意味がわかっていった。

「お互いを傷けないための愛の手段だよ。僕はこれを本当に純粋なものだと思うなあ」と彼は云った。私も胸を動悸させながら頷きつた。なぜかその時、私はとっても幸福だった。別にそれを望んでいたわけではないけれど、私は楽しかった。でも私達はベッティ



ングというものは経験しなかった。そんなことを云い出してしまった手前、二人とも内気な私達は行動だけは、その前よりも表面的なきれいなものにしてしまった。私達はそれまで、映画館の中でずっと手を握り合っていたのに、それもなかなか出来ないようになってしまった。私はつまらなかった——というより悲しかった。Iさんて、なんて勇気のない

人だろうと、うらめしくさえ思った。

ある時、私は浣腸を体験した。——なんだか今になっては恥ずかしくてそれ以上は云えない。病気ではなかったのに、私は——そして私はIさんの云ったベッティングという言葉の意味通りの、愛撫なんてどういう事がわからなかったし、ただ好きな人に自由にされるといふ喜びの他は、何を期待するのか知らなかった。でも浣腸の体験は、不思議にIさんへの思慕に繋ってしまった。私は顔を赤らめながら、そのことを空想した。私は自分でも恥しかったけれど、その恥しさがIさんを受する喜びみたいに思われた。私はIさんと二人でいる時、つとめて妖しい雰囲気にしよ

うとした。意志的な偽きより、なんだか身体全体の欲求みたいだった。たとえば、私のお部屋のお人形をとりだして、

「あら、この子、お尻がないわね。」などと云ってしまつてから気づくのか、私自身にもそういう言葉の出る処はわからなかった。そうして私は、とても恥ずかしくなった。Iさんは、私よりもっと照れて笑っていた。でも私は、Iさ

んが私の言葉に関心を持ったことを感じた。私はだんだん勇敢になった。

私は金魚を飼っていた。普通の赤い金魚と黒の出目金と二匹だった。赤い方はよく長いウンチをお腹からぶら下げて泳いでいた。

「ほら見てごらんさい。この長いウンチ」と私はIさんに云うのだった。Iさんは面白がって、御飯粒やパンをやった。金魚は不思議なほどよく食べた。そして毎日のように長いウンチをぶら下げて泳いでいるのを、二人で眺めては色んなことを云った。私達の話は、金魚のウンチから次第に人間のそれにも発展した。そして貴方の、貴女の等と云うようにもなった。

もう二人共、お互いを理解し合っていた。そしてたいして不自然でなく、私はIさんのなすままに浣腸された。死にたいほど嬉しかった。Iさんに浣腸されたのは二度だけだった。あとは浣腸なんて名目をつけなくても、自然に遊べるようになったのだから——

私は浣腸でなくたって良かったのです。私はそのまねごとだけで火の出るほど恥ずかし、だから嬉しかったのだ。Iさんもそれ以上は求めなかった。私もそれだけで、あとは何もしてほしくなかった。

最後の二年間、Iさんも忙しくなったし、私もだんだん大人になったので、そのような習慣は去ってしまいました。でも私は、いつ

も或る慾望に責められて苦しんでいた。なぜかIさんを慕っていた私なのに、彼と結婚することは考えられなかった。Iさんもそのような気持がなかったとみえて、卒業すると遠い故郷へ帰って行ってしまった。

私は今、Iさんがどこにいるのか知らないし、Iさんも、私がこんな田舎に來ていることを御存知ない筈だ。もう二度とお目にかかることはあるまいと思う。——こうしてIさんの事を思い出していると、身体が熱くなるほどなつかしい。そしてこの春、婚約させられたKさん——貴方はそのような私をまるで御存知ない。Iさんのことをあんなに詮索しておきながら、貴方は私に少しも情熱というものをを見せて下さらない。私は貴方のもとへ行くことに全然期待が感じられないのです。

私の従弟はケンちゃんという。私が来たばかりの時、とても親切で私のお部屋から山々を眺めては色々な伝説などを話してくれた。お部屋の片づけや、電灯の修繕なども一人でやってくれた。そしてやさしい子だった。でも、そろそろ異性に興味を持ち出す年頃で、私がお風呂へ入っていると、わざわざお湯加減を見に來たりする悪戯っ子——。

朝、御不浄へ入っていたら、不意にケンちゃん戸を開けたことがあった。ここの御不浄は内鍵がないので、開けようと思えばいつでも外から開けられるのだ。その時は故意に

したのではないとみえて、ケンちゃんは驚いて走って行ってしまった。あとで顔を合せた時、ケンちゃんはすまなそうに私を見た。でも私は何も云わないで笑ってみせた。私は別にそんなに恥しいとも思わなかったのだもの。私はケンちゃんが好きだったから。

そのうちにケンちゃんは、時々わざと足音をしのぼせて來て戸を開けるようになった。そして後で、ガラガラ笑いながら喜んでいゝる。——私もいつかケンちゃんの足音をひそかに待つようになった。小さな頃、御不浄に關しては同じような記憶があるからかもしれない。

夜、私は寝つかれないままに暗いお部屋で何を考えるのでもなく、ふとんをかぶったり寝がえりを打ったりしている。私の悪い癖なのだ。私は寢床の中では奇妙にやるせなくなる。パンティのゴムが邪魔で、それをそっと脱いでからでないと眠れない。お腹に抵抗するものがあると、とても気になるのだ。私はじかに触れる夜具の暖さがとても快い。何となく胸が高鳴って來て、そっとお尻を夜具から出してみることもある。誰か——ケンちゃんでも——その辺からこっそり見ているのではないかという気がして、それを空想してみただけでも顔が火照って來る。

学校から帰ってくると、ケンちゃんは私の部屋へやって來る。そして私が和服を着てい

ると、つまらなそうな顔をする。私はなぜかをよく知っている。私は和服が好きなのだけれど、ケンちゃんは私のお尻をつねりたいのだ。私が和服を着ていては、私に相撲をいどんだり、からみついたり出来ないからなのだ。私は御機嫌のいい時はフレイヤースカートを着けている。自分でも浅ましい心と思うけれど、なぜか陽気なケンちゃんとなわむれたいからだ。ケンちゃんは私に組みついて來てきやつきやつといいながら私のお尻を叩いたりつねったりして、私に悲鳴をあげさせて喜ぶ。私も随分抵抗してみせるけれど、結局は背の高いケンちゃんに圧倒されて捻じ伏せられてしまう。ケンちゃんは私に馬乗りになつて悪戯を始める。私は毎度その頃合いになると、息をはずませながら身体がうずくように熱くなってくるのを感じる。私はそのまま待つ——

何を待つのか、はつきりわからない。ただIさんとの思い出が茫洋と胸に浮んで來るのだ。私が黙ってしまつと、ケンちゃんも息を呑むようにして、本當の悪戯を始める。近頃は「ようし、今日こそひどい目に合せてやる。いいか」

などといいながら、スカートをまくつてお尻を叩く。私はうっとりした気持で、ただ心で「ケンちゃん、ケンちゃん」と呼んでいるだけなのです。

△あ
る
手
紙
▽

男奴隸のこども

皆
川
の
ぶ
子



箕田京二様

本当は編集長と云うべきなの
でしょう。でも、私、独得の言
い訳をもって云えば、何々長様
と言う言い方は照れ臭くもあり
又、ドロ臭くも感じてキラいな
んです。例えば「横町の先生」
とか「社長様」とか、とに角、
変にバカにされた様な感じを相
手に与えるのではないだろうか
と——どうもうまく言い表わせ
ないんですけど——だから多少
生意気に又、馴れ／＼しく思わ
れるムキもあるでしょうが、私
はやはり箕田京二様と言わせて

頂き度いと思います。さて改めて

箕田京二様

お忙しいにもかかわらず再三、御返事あり
がとうございます。それに私の我儘から局止
めにして頂き度いとお願ひしたり、全く勝手
な奴だと少なからず御立腹なのではないでし
ょうか。(申訳ございません)今日は少し変
った話(とは言え、当り前の話だと言われる
かも知れませんが)を例にとって、お教え頂
き度いと思います。それは、鞭の線に描かれ
て、の手記に書いた男のことなのです。

彼は今月の(六月)十日頃までは事実上、
私の奴隷だったのです。だからこそ、あの続
きを書いてみたい? 等と考えていたのです
、が今日では、すっかりそんな気持が消えて
しまいました。何故なら、彼はもう私の奴隷
ではないからです。

箕田様

世の中には、随分インチキめいたMが多い
んですね。彼もその一人、仮にBと呼んでお
きます。Bは私と、SとMの関係であるくせ
に、それ以上のものを要求したのです。

もっとハッキリ云えば、アブの交際は止め
て普通の男女の、ソレの様なおつき合いをし
たいと要求したのです。つまり、Bは自分を
普通の男性として私に認めさせ、やがては私
を征服しよう従わせようと目ろんだのです。
飛んでもないことです。他の人は知らず、私

はそれを悟って、随分侮辱していると憤慨しました。マゾの男がサジの女性に『女王』を感じず『女』を感じるなんて、箕田様、私は腹が立ってなりませんわ。私のこうした考え方は、浅はかな考えなのではないですか。そりやあ『遠くて近きは……』なんて云われているように、又、事実そうなのですが、それは善男善女、つまり普通の男女を指して云うことなのであって、私達の場合は決してそんなことはないと思っていて、私はかなり激しいショックを覚えました。私の奴隷に対する訓練の仕方が手ぬるかったかも知れませんが、でも、色々の人の話を聞き合せてみると、私のSの程度は決して弱い様に思えないのです。それに最初からきびしくやるよりは、徐々に馴らしていったマゾを育ててゆく方が面白いと思っていましたので、あの手記を書いた後、数度逢って訓練しました結果、これなら私の思っている最もきびしいお仕置でも堪えられるだろうと、本当は楽しみにしていた矢先なのですが、それなのに臆病な奴隷め、消え失せるがいい——。

私は改めて、真のMとは存在しないのではないだろうか考えこんでしまった程です。ああ、正常な性欲に全然興味の無い男のMはいないものかしら。

箕田様、こんなこともありますの。
よく「いつ、何処へ、何時に来るように」

と指定します。その場合、相手がそれを望むから、私の気まぐれを与えてやった時のことです。それなのに来ません。私は案外、約束は固い方なので（時間は多少ルーズですけどホホホ、）必ずその日、その場所へは出かれます。それなのに来ないとは、全く馬鹿にしています。私は勿論、怒って後からそれについて問い合すと、必ずといってよい程、答えはきまっています。つまり「お呼び出し頂いた時は、残念なことに私は或場所へ出張中で……誠に申し訳ございませんが……又、今度こそ必ずそのようなことのないように致します故、今一度のお願いを……云々」と……。ホ、ホ、ホ、馬鹿馬鹿しいとお思いになりませんか？ そんなに都合よくその時に出張があるでしょうか。箕田様、私はそんな男が大嫌いです。何故はつきりと「こわいならこわい」と又は「或る私用でその日は家にいたが、どうしても行くことが出来なかった」と正直に云わないのでしょうか。全く癪にさわりますわ。私の経験から見ると、そんな男の如何に多いことか、又、空想のみか知らぬ男が、さも私はMの代表だと云わぬばかりに自惚れているのも、神経にさわりますわ。そんなのに限って大したことがなくて、すぐ音をあげるのを知っていますから。

私とても、サジスチンの代表だと自惚れては居りませんが、でも経験を通して云えるこ

とは、空想だけのSでは決まれないということ。けれど、前の手記の中にも書いたようにSだと云い切るには、少しロマチシストでありすぎり嫌いだないでもありません。又、余りにも気まぐれで勝手すぎる私故、私について仕えて行ける男は、そんなにいないのではないかと思います。いくら相手が「御命令は何でも守ります。盲従致します」と誓った処で限度があり、私自身、人間である以上、相手の感情が読みとれれば、少しはそれに調和して、心なくも抑制しなければならぬことと等、考えると全くむずかしいものだと思います。何もかも忘れてと云いますが、それにも自然具わった限度があり、その限度を無視すると云うことは、法律を無視することに繋がるので——私は矢張りむづかしさを感じますの。

箕田様

「だんだん筆が乱れて、とりとめのない話に流れてしまいうすけど、貴方って一体どんな方なのでしょう。御年令は？ 御容姿は？ 御趣味は？ なんてフ、失礼とは思いますが、私は色々想像と云っても或は、一つの仮定物を連想しての想像では勿論ありませんので、その点は極めて曖昧ですわ。ところで貴方の方は、私、皆川と云う女をどんな人物か御想像下さったことがございましたか。ホ、突拍子もない質問でごめんなさい。

私は文通をしている人達からよく云われるのですが「皆川さんは、お逢いた時と手紙とでは随分印象が違うのね」って——。自分ではそんなつもりではないんですのよ、「どう違うの」と聞きますと、大抵「もっと激しい人かと思った」と云います。ホ、ホ、自分ではハネツ返りで、鉄火でジャジャ馬みたいだつて、謙遜しているつもりなんですがねえ。でも、そうした人達に与える私の印象は、きつと家庭のオカミさんなのでしようね。事実、私は日頃マーケットまで買い出しに出かけるよきオミさんなんですもの。でも、その人達が一度私と会って話し合つと、首をかしげてしまうのです。手紙の上での私と、現在こうして逢っている私と——考えてみて一寸、戸惑うのですね。でも、こう書いたからって、私は別に目立っておしとやかな女性ではありませんのよ。只、手紙等は或程度、赤裸々な自分の氣持をさらけ出して、何時も書くようにしていますの、どうしても激しくなってしまうんですね。でも実際は、そうはいきませんもの。矢張り普通の平凡な女に見て頂きたいと意識的に行動しますものね。でも、日常の生活の中に、一寸したハズミにヒヨイとアブ的なこと（言葉なり態度）が、出てしまう時があります。（お里が知れるっていいですね、ホ、ホ、）そんな時は、すぐ気づいてさう気なく笑いと冗談にまぎらわせてしまいます

の。（内心はヒヤリッとし乍らもね）

先日も或る人が云っていました。「皆川さんのSって、そんなに強いように思えない。お逢いしてみてもう感じた。Sの激しい人は話をしても判るんだけど、貴女からは、そんな感じを受けなかった」と、「お気の毒さまね、知ったか振りの学者さん、そんな微妙なことは当時者だけしか判らないのよ」ってお腹の中で、私、笑ってやりますの、だつておかしいもの。

箕田様

Sの激しい女って、日頃でもそう云う態度をとりますの？ それなら、Mの激しい男性は日頃でも女性の足下にうづくまることが出来ますのかしら？ そんなことはないでしょう。貴方だつてそうお思いでしょうね。S・Mがどの程度激しいとか案外弱いとかは、メーターで計つたつて判らない性質のもので、それは前に書いたように、御当人達、即ち実行した人達だけが知る秘密——。逢つて話し合つて、こうだ、ああだつて臆測するなんて愚かなことですね。そうお思いになりますか。

箕田様

始めて人に逢つた時、私なんかの場合、第一印象が大切なのです。随分、贅沢な選択なのですけど、私の氣性としてこればかりはどうしようもありません。こう云う私なので（人

の好き嫌いをハッキリ区別してしまうので）随分、損な立場になる時もあります。でも誰にでも彼にでもと、くだらない氣を使つて氣軽そうに付合うよりも、私は多少、相手に不快な感じを与えても、限られた（氣に入つた）人達だけで、シツクリおつき合いを続けた方が楽しいと思います。

箕田様

だから、私には馬鹿騒ぎする友達って居りません（必要を感じませんもの）

私の幼な友達にバーのマダムがあります。銀座裏の小イキなフランス風のシャレタ造りのバーなのですが、彼女は美人だし人附合も満点なので結構、自分も楽しんで儲けているというチャッカリ屋でもあります。それに、お酒に酔うと可愛らしい顔立ち（二十八で可愛らしいというのは変ですけど事実、童顔と云つたタチの顔立ちなので）に俄然、妖麗な色氣を漲らせて人からんで行きます。そのからみ方が又、執拗で（尤も彼女は蛇年ですが）からまれた男性は、思わぬ余得に思い切り鼻の下を延すそうです。私みたいな悪友は面白がつて彼女を酔わせてみたくて、口実を作つてはウイスキーを彼女についてやりま

私と彼女はレスボスの関係なんかではなく、只、生れる前からの？ 仲のよい女友達と云うだけのものです。「ヤイツ、のぶちゃん、あんた……助平ね……へへ女の助平か……そんなのあるかな……ウイーちよっと……コラッ、のぶ子、サービスしなさい。サービスしないと口説かれてやんないぞ、ハハハハ」と全く他愛ない人です。私は彼女が大好きです。愛してもいますが、でもそれは母親の愛に似た愛情ですわ。彼女の笑顔は可愛いと思うし、彼女の憂い顔は私の胸を悲しませます。だから、変ないい方ですけど、彼女の子には私、他人を感じないんです。何だか血が繋がっているような気がして——私の異常性も彼女は知っていますし、理解もして呉れます。

或る時、冗談に「ゆき枝、あんたと私とお金を貯めて、防音装置のある部屋を幾つも作って、男を飼育してみようか」なんていったことがあります。そしたら憎らしくも「イヤヨ、私は男に可愛がられるのが趣味だモン。のぶ子みたいに、そんな可哀そうなこと出来ないわよ」っていうから、私は「マア、よくもそんなこといったわね。よし、それじゃあ私がそういう部屋に住んだら、ゆきの惚れた男を探して誘拐して閉じ込めちゃうから……」とやってやりました。そして二人で顔を見合せて、ハハハハ、と何んの気取りもなく笑い転げましたの。友達って、いいもんで

すわね。

箕田様

色々な無駄話に逸れてしまいましたが、又、前に戻って、あの男のことに触れたいと思います。Bは私宛の最後の手紙に「僕は女王様に捨てられた哀れな野良犬です」それから最後の方に「……どうぞ、この上は哀れと思召して、女王様の穿いたパンティをお恵み下さいませ。せめてそれが僕の……」なんて書いて寄こしました。この文でもお判りのことでしょうが、箕田様、Bは自分というものを誇大していい表しすぎる男です。少しのことで如何に自分が哀れな立場にあるかを認めて貰いたいと、必要以上のゼスチアを用います。例えば文を分析してみても判るように「捨てられた……哀れな野良犬……」又、すぐに「哀れと思召して……お恵み……」と云うように——（その前の文にもそんな処が多分あるのですけど省いたのです）

箕田様

別に私は「文体心理」を分析しようなんてむつかしいことはいりません。でもMの男って随分自惚れが強いんですね。手紙では、こんなにも弱々しく書いていながら（全て素直にこの文を読めば、理由もなく私がBを捨てたように、とれるでしょうから）逢うと「僕は男性だ」と無意識に胸を張っておりますの。私にいわせると、S・Mの関係の男女は

お互に女王であり、男奴隷でなければならな
いと思うのです。ですから女王は気高いもの
で、普通の女ではいけないと思うのです。又
男奴隷であって男性ではないのです。奴隷は
それらしく、絶対に女王の命令に背いてはい
けません。忠実な賢い奴隷でなければなりま
せん。この場合の賢いというのは、何も利口
さを閃くのではなく「女王が何を望むか、
どうしたら女王に気に入って戴けるか」と奴
隷自身、女王様に対して使う気遣いのことを
いうのです。それから私が相手に望む大切な
条件は先ず健康なこと。何故かといえば、弱
々しい体では、私の好む鞭打には永く堪えら
れないでしょうから。第二に不正直でないこ
と。これは、やさしいようで一歩むずかしい
問題でしょう。第三に音楽（タンゴ）の好き
なこと等、まあ、大ざっぱに分けて書いて見
ました。最後の「音楽……云々」は、私の好
みなのです。出来ればプレイの時に、タンゴ
曲（それは騒然としたのよりも、ソフトな感
じな曲の方が好きです）をかけ乍ら鞭打ちを
行いたいと思います。そんな気持ちでいる私
なものですから、よくお茶を飲み店へ入っ
ても「タンゴを……」とウエトレスに注文を
つけます。そして僅かな時間に、音楽とSの
感覚を楽しみます。

箕田様

そういった意味ではないのですが、タンゴ

曲の中で「タンゴ・グラマー」というのがあります。その裏面は「タンゴ・ルーレット」「オレガッパ」なのです。楽団は確かりガルド・サントス・タンゴ・バンドです。私の好きなタンゴ曲はありますが、一番好きなのは「グラマー」です。この曲は（御存知かもしれませんが）とても美しく、私などこの曲がかかっている時は、胸の中がギューツとして涙が溢れ出そうになります。まして曲の中程の感じは、見たこともない静かな平和な美しい国に住んでいるような錯覚さえ感じさせます。私は「グラマー」の女王にでもなった気で蕩然となります。お終いの方になってややテンポが早くなりますと、私は小舟に揺られて旅行することを想像します。そして私の静かな幻想は、その曲が終って裏面の「ルーレット」になると、段々S傾向の幻想に変わって行きます。この曲は「グラマー」と違ったS的な響きがあり（といっても、私がそう感じるだけです）まあ早く言えば「グラマー」の曲は、どちらかといえばレスボス島の甘美な「におい」を感じさせます。レスボス島とは、私がくどくどいわずにても充分御承知のことと思いますが、新年号で九雅さんに御紹介頂いた「ビリチスの歌」（ピエール・ルイス作）によれば

チタと豪華を尽したりディアとの中間にあつて、アテネよりもなお輝き、サルドよりも更に腐敗した首都を持っていた。アジア海岸に望む半島に建てられたミチレーヌの街がそれである。青い海が都を取り巻き、寺院の高楼からは、水平線上にベルガムの港のアタルネーの白い線が見分けられた』とあります。

箕田様

せち辛い今の人達に、こんな夢想的な都の良さがわかるでしょうか。素晴らしいと思います。思わず話に実が入り横に逸れましたが、「グラマー」の曲に、私はレスボスの美しい島を幻想します。女子同性愛を何故レスボスというのかというと、この島に流れ渡った、真心の情熱に満ちたあの繊細な恋愛（ビリチスの歌の中より）の事を云うのだそうです。その愛をひろめた女性の名はサッポーといって（レスボスに於ける呼び名を「ブサッブア」といったそうです）その愛情の盛んな島をレスボス島といい、女同志のみの知る愛をレスボス島の愛、即ち略してレスボスというのではないかと思いますが、素人考えでありますので、若し間違っているようでしたらお教え下さい。

箕田様

どうも、話を横に逸す癖が直らなくてごめんなさい。「ルーレット」ですが「グラマー」

に感じなかった。S的なものといっても具体的にどうのこうのとはいえない表しかねます。只「ルーレット」の曲の中では、ザッザッザッというあのタンゴ独得のリズムに乗って、チヤリンチヤリンという鈴（？）の音が聞えて参ります。私はそれを、鎖を引きずる音と考えるので。

『私は白いレースの手袋をはめ片手にその鎖を持ち、片手には勿論、鞭を持っております。』

『どの男とどの男を鎖で繋ごうか……』と思案致します。その頃になると曲も終りに近くなります。私はやっと選んだ男達を後手にして、持っている鎖で骨を砕けよとばかりに拘束します。そして男達の背中に太い角材（丸太ではなく、角が刃物のように削られた角材）を背負わせる様、他の拘束しない男達に命令する頃、この曲は終わります。その後の曲「オレガッパ」で私はこの男達を鞭打つのです——そこは暗い緑色に蔽われた丘の上——時刻は丁度、夕日が沈む頃、丘を下りると小さな池があります。男達は肩に食い込む角材の鋭さと、私の振り下す鞭の厳しさにへとへとです。でも私は冷然と、彼等に踊ることを命じているのです。そう、男達は手足を鎖で繋がれて、肩に角材を背負わされ乍ら、私の命じるまで踊っていなければならないのです。

「オレガッパ」の曲に合わせて……。この時一人の生意気なしかし度胸ある男が叫びました

「ああ女王様、水を下さい……死にそうです」と……。私は「生意氣をいうんじやあない、喉が乾いたら、お前の前の男の血でも吸うがよい」と笑います。男は愕然とします。前の男の血……それは自分と同じ運命の男の、鞭のきびしさに皮膚が破れて流れ出た血なのですから。その男は又、「女王様、お恵みを……」と哀願します。私は「そうね、じやあ、お前が私の鞭を気の済むまで受けるならね」といつてやります。「ああ……」男は絶望的な目差しをやります。私は加虐への喜びに酔い痴れ、男は被虐への恐れにおののき乍らも倒錯した喜びに呻き悶えます。やがて私は鞭打ちを止めます。どうして止めたかといえ、男は口程になく氣絶してしまいましたので……。そこで私はニッコリと笑い、他の男達にいいました。「さあ、お前達、喉が乾いたら丘を下りて、あの池のお酒をお飲み……」男達は喜んで丘をぞろぞろと下りて行きます。勿論、その池の酒なるものは何であるかは、男達はちやんと知っているのです。一匹ずつ這いつくばって舌づつみしました。しかし男達の手足は各自鎖が繋がれていますので、立ち上ることが出来ないで、芋虫のようにゴロゴロと転っています。私は丘の上でこの様子を冷然と見下しています。ええ勿論、私は丘を下りません。だって池は臭くて近寄るのさえ嫌ですもの……。私は新鮮な果物で喉

を潤しますのよ。少し経って男達が丘を上って来ます。その時、男達の口から流れ出たコーラス（丁度、曲の終りの頃、現実にそうしたコーラスが入っております）その声は暗い緑の丘に反映して、夕日の沈む時の一瞬の、あの神秘的な美しさに調和して、私は……満ちます……そして曲は終わりますの。

箕田様

若しこの曲を御存知ないのでしたら、機会を作って聞いてみて下さいまし。そして、その時は、この私の空想を思い出して、その曲に合わせて見て頂ければ、より幸いと存じます。でも貴方は、私のようにはお感じにはなられないかも知れませんね。もっと素晴らしい御空想をなさいましたならば、私にお教え下さいませ。只、単に美しいリズムとしてだけではなく、そんなことを考え乍らタンゴを聞く女も東京にはいるのだナと、お笑い流し下さっても結構でございます。

私が使っていた男について色々お教え頂く筈の手紙が、随分と止り止めもなく長くなってしまった。でも、この手紙を書いてみて、少しは胸の中がスッキリしたように思えます。書く、ということはいいいのですね。

箕田様

書く、ということの外に、時々まき起る強烈なサジースチックな血を持て余す時の、私の処置法（？）を知って戴きたいと思ひます

ので、もう少し時間を戴きますわ。

そんな時の私は、よく立寄る花の名前の喫茶店へ突進しますの。そこは駅から近くの、迎も感じのよいお店です。そこで私は、お茶を飲み音楽（主に前記の曲ですが、たまには変わったタンゴもかけて貰います）を聞いて前記のような（その時によって多少異なりますが）空想をして神経を静めます。この店は繁昌していつも混んでいます。不思議に落ちつくる店なので私は好きです。私がよく行くので顔を覚えていてくれ、私がブラリと入って行くとき黙っていても九十三番（レコードの番号）をかけてくれますので助かります。でも時には、それ位では処理できない時があります。そんな時は半弓場へ行って弓をひきます。そしてかなり強い弓を、疲れるまでひきます。グツと胸を張って弓をひく時の気持は又、格別です。そしてビューンと的に向って飛ぶ矢、ブスツと的（多くは土手ですが）に突きささる時のあの感じは、間接ながら鞭を振り下した時のあの快感を感じさせますの。

箕田様

では又、お便り致します。

この次のお便りには、又何か変わった（新しい奴隷のことか、グループの例会のこととか）事を差し障りのない程度に面白く書いてみたいと思ひます。

では、さようなら

かしこ。

六月十八日

皆川のぶ子

28年3月号
(縛られた女優たち)

東
映

入江たか子
山田五十鈴
高峰秀子
大倉千代子
市川春代
深水藤子
桑野通子
喜多川千鶴
日高澄子
女優名不明
月丘夢路
月丘千秋
田中絹代・水戸光子
霧立のぼる
長谷川裕見子
花柳小菊
利根はる恵
野上千鶴子
桂木洋子
山根寿子
浜田百合子

大菩薩峠、天狗の安
佐膳、折鶴笠
水滸伝、アヘン戦争
涙の捕縄、風雲将棋谷
どくろ銭、牢獄の花嫁
一寸法師、青空浪人
右門十両秘聞
消えゆく影
水戸黄門
素浪人罷り通る
花くらべ狸御殿
二十一の指紋
絢爛たる復讐
麗人草、七つの宝石
平次地獄の門
七つの宝石
怪傑鉄仮面
わが恋は燃えぬ
白髪鬼
平次からくり屋敷
遊侠の群れ、銭形平次
地獄の門
夢介春風無刀流
飛びつちよ判官
鉄路の弾痕
紅一挺拳銃
海賊島、緋鹿子異変
白頭巾親子
千里の虎、遊侠一代
フランチェスカの鐘
エノケンのノートルダ
ム男
右門緋鹿子異変
佐々木小次郎

28年4月号
(責めの美的表現)
(地獄絵行脚)

東映	相馬千恵子 朝雲照代 千石規子
東映	荒川さつき 水の江滝子 宮城千賀子 志賀暁子 沢村昌子 若杉須美子 川路竜子 曙ゆり・並木路子 三条美紀
宝塚	新珠美千代 轟夕起子 T・ラッセル 酒井米子 森静子 平塚泰子 淡路千夜子 桜井京子 女優名不明 鈴木京子
日活	シヤコ万と鉄 大江戸七変化 將軍は夜踊る 猿飛佐助、ごろつき船 難船岬の決斗 ひよどり草紙 獄門島 獄門島、奴隸の町 遊民街の夜襲 私は狙われている 狸、銀座を歩く 酔どれ八万騎 修羅八荒 浪人街 鞍馬天狗大江戸異変 緋牡丹盗賊 ごろつき船 黄金バット 踊る竜宮城 銭形平次
東活	猿飛佐助 続・修羅城秘聞 ならずもの 落花の舞 砂絵呪縛、凡生奈落 罇髑夢遊剣 銭形平次捕物帖復讐鬼 深夜の紅独楽 白帖秘門 海棠やくざ

28年4月号
(縛られた女優たち)

日活	桜井京子	旅姿上州訛
マキノ	岡島艶子・大林梅子	浪人街第一話
新興キネマ	松浦築枝	矢矧、明烏夢泡雪
極東キネマ	淡路千夜子	次郎吉流れ星
松竹	桜木梅子	天狗の安
東映	小浜美代子	怪人金仮面
東映	飯塚敏子	次郎吉格子
東映	高峰三枝子	天狗の安
東映	入江たか子	醉どれ八万騎
東映	宮城千賀子	
松竹	久我美子	奴隷の町
東映	岸恵子	鞍馬の火祭
東映	星美千子	吃七捕物帖
東映	岸旗江	ひよどり草紙
東映	若山セツ子	箱根風雲録
東映	藤間紫	袴だれ保輔
東映	三浦光子	醉どれ八万騎
松竹	高峰三枝子	恋文道中、あばれのし
大映	轟夕起子	次郎吉格子
大映	関千恵子	三万両五十三次
大映	御園裕子	青空浪人
大映	宮城野由美子	トシチンカン三つの歌
大映	三原葉子	水戸黄門伏魔殿の妖賊
大映	西条鮎子	振袖狂女
大映	木暮実千代	風雲七化峠
大映	山口淑子	流賊黒馬隊
大映	美空ひばり	情炎
		戦国無頼
		角兵衛獅子、天狗廻状

29年10月号
(たのしきかな時代劇)

東宝 映塚	東映 映	東映 映
星美智子 三浦光子 花柳小菊 女優名不明 宮城千賀子	霧立のぼる 瑛峨三智子 "	木暮実千代 高千穂ひづる八汐路恵子 千原しのぶ・浜田百合子 霧立のぼる 瑛峨三智子 "
モーリン・オサリヴァン ジョーン・アーサー ドロシー・ラムーア フランセス・ギフォード ナンシー・ケリー " イングリット・バークマン ポーレット・ゴダード ヴァージニア・グレイ ジェーン・ラッセル ヴァージニア・メイオー フレンダ・ジョイスと 四人の美少女 ジューン・デュブル アリーソン・ロバーツ カルラ・デルボツヨ モーリン・オハラ ワンダ・ヘンドリックス	タートザンの逆襲 新モンテクリスト アリゾナ ジャングルの恋 ターザンの凱歌 乱斗街 ジャングルジム ジャック・ダルク 征服されざる人々 シヤングルジム 腰抜け二挺拳銃 なげく者 虹を掴む男 姫君と海賊 ターザンと女豹 バクタットの盗賊 武装市街 荒野の抱擁 フアビオラ バクタット、ノートルダ ムの佝僂男、巖窟の野獣 追はぎ	疾風愛憎峠 青空大名 国定忠治 木曾路の子守唄 すっ飛び千両旅 赤穂浪士 ひよどり草紙 女間者秘聞 ひよどり草紙 びつくり太平記 大菩薩峠 夕立勘五郎 片目の魔王 トンチンカン八犬伝 危し鞍馬天狗

遊俠一代
ひよどり草紙
びつくり太平記
母恋人形
弥太郎笠
すつとび千両旅
鞍馬天狗角兵衛獅子
振袖狂女
流賊黒馬隊
赤穂浪士女間者秘聞
青空大名
素浪人日和
追撃三十騎
危し鞍馬天狗
副將軍初上り
雪之丞変化
彌次喜多第一部
霧の小次郎第二部
美男天狗党
人肌千両
妖異忠臣蔵
知らずの弥太郎
ターザンの凱歌
ノートルダムの佝僂男
バクダツト
巖窟の野獣
海の征服者
ターザン沙漠へ行く
平原児
バクダツトの盗賊
腰抜け二挺拳銃
ならず者
征服されざる人々

29年12月号
(縛られた女優達)

大
映

カルラデル・ボツジョ イングリット・バークマン ディーノ・マッテラー デボラ・カー ジョーン・レスリー	瑛峨三智子 高千穂ひづる 宇治みさ子 浅茅しのぶ 乙羽信子 月丘千秋 淡島千景・宮城千賀子 尾上さくら 喜多川千鶴 山根寿子 草間百合子 南寿美子 伏見和子 若杉曜子 南田洋子 三浦光子 森啓子 長谷川裕見子 上野綾子 桂通子 マリヤ・モンテス	荒野の抱擁 ジャンヌ・ダーク フアウスト クオ・ヴァデイス 私刑される女 八百八町罷り通る 江戸いろは祭 若君逆襲す 風雲八万騎、霧の小次郎 朝焼け富士、鬼伏せ街道 悲劇乙女桜、素浪人日和 縮図 暁の市街戦 花の生涯 恋風街道 追撃三十騎 鬼伏せ街道 とのさま街道 アチャコ青春手帖 死美人屋敷 地獄太鼓 十代の性典 朝焼け富士 素っ飛び男 影法師一番手柄 恐怖のカービン銃 太陽のない街 スーダンの砦
---	--	--

30年1月号
(縛り絵マニアの記録)

30年1月号
(縛られた女優)

新 興 キ ネ マ	日 活	東 映	新 東 宝	松 竹	土人の娘 ベディ・ハッサン ジーン・アーサー 女優名不明 土人の娘 リンダ・ターネル 女優名不明 デボラ・カー ドナ・リード オヴドリ・ドゥター ジャネット・リー 女優名不明 "
松浦妙子	花井蘭子 吉野朝子 毛利峯子 歌川絹枝 伏見信子 "	千石規子 西条鮎子 宇治みさ子 瑛峨三智子 折原啓子 岸恵子 紙京子			
里見八犬伝	血煙天明神 明月蛤御門、幡随院一家 恋の黄八丈 足軽突撃隊 渡り鳥木曾土産 愛染地獄	奴隷の町 魚河岸の石松 大阪罷り通る 題名不明 伊豆の佐太郎 銭なし平太捕物帖 吃七一番手柄 次郎吉娘			ジャバへの順風 ボーリンの冒険 平原児 荒野の襲撃 果てしなき蒼空 海賊黒ひげ 肉の蠟人形 クオ・ヴァデイス 七つの海の狼 私刑される女 魔術の恋 ノーマンのデパート騒動 上級生の寝室

30年1月号 (縄と足の遍歴)		30年1月号 (縛られた女優)	
東 映		東 映	
轟 夕起子	山田五十鈴	折原啓子	電撃二重奏、曠野の魂
轟 夕起子	入江たか子	長谷川裕見子・関千恵子	三万両五十三次
浜田百合子	三条美紀	橋 公子	江戸城炎上
草間百合子	若杉須美子・相馬千恵子	大倉千代子	咬竜の鈴
花柳小菊		相馬千恵子	右門捕物帖、風雲将棋谷
月丘千秋		千原しのぶ	大江戸七変化
島崎雪子		三条美紀	銭形平次
三浦光子			折鶴笠
田代百合子			天狗の安
嵯峨三智子			群狼の街
ヴィヴィアン・リイ			ごろつき船
リンダ・ダーネル			修羅城秘聞、謎の百万両
女優名不明			ジャコ万と鉄
ロンダ・フレーミング			疾風からす隊
女優名不明			はだか大名
			飛びっちょ判官
			新撰 組
			快傑鉄仮面
			素浪人奉行
			とんち教室
			里見八犬伝
			白ろうの仮面
			欲望という名の電車
			アンナとシヤム王
			リゴレット
			夢の宮廷
			悪魔が夜来る

30年2月号 (縛られ映画落穂集)		30年2月号 (最近の映画) (映画に於けるサシステイックなシーンを就て)	
東 映		東 映	
女優名不明	宇治みさ子・三浦光子	女優名不明	悪魔の美しさ
ヴェラ・ラルストン	高山裕子・浪花千栄子	ヴェラ・ラルストン	シヤバへの順風
ドロシー・ラムーア	千原しのぶ	女優名不明	アラスカ珍道中
女優名不明	小園蓉子・南風洋子	ヴァーシニア・メイオ	拳銃を売る男
ウアーシニア・メイオ	井川 邦子	ジーン・ピータース	死の砂塵
ジーン・ピータース	P・キャッスル	三条美紀	アパッチ
三条美紀	長谷川 裕見子	R・ヘイワーズ	幽 霊 男
R・ヘイワーズ	南 悠子・雅 章子	ジョーン・エヴァンス	スキヤンダル殺人事件
ジョーン・エヴァンス	月丘 夢 路		コロラドルの急襲
	ヴァレンティナ・コルテサ		変化大名
	ジーナ・ロドリグダ		快傑まぼろし頭巾
女優名不明			和 蘭 雛 子
ヴェラ・マイルズ			快盗三人吉三
女優名不明			指紋なき男
女優名不明			覆面髑髏隊
女優名不明			照る日くもる日
女優名不明			黄金弁 天
女優名不明			黒 鷲
女優名不明			花咲ける騎士道
女優名不明			タルコア駐屯兵
女優名不明			東京フィアル二二二
女優名不明			フエザー河の襲撃
女優名不明			戦場を駆ける男
女優名不明			ネバダ決死隊
女優名不明			あきれた迷探偵
女優名不明			ノックは無用

31月4月号 (縛られた女優達)					
東映	松竹	東映	" "	東映	東映
三笠博子	浅茅しのぶ	田代百合子	" "	美雪節子 長谷川裕見子 長谷川裕見子喜多川千鶴 香川京子 香川京子 天路桂子 宮城千賀子 橋公子 雪代敬子 R・テムブル 浦里はるみ 北見礼子 南風洋子 草苗光子 山根寿子 千原しのぶ	大映 八千代・大和七夏路 山本富士子 筑紫あけみ 島崎雪子・池内淳子
忍術左源太 顔のない男	謎の百万両 里見八犬伝 關太郎変化 悲恋まむろ川 覆面どくろ隊 風雲將棋谷 椿説弓張月 近松物語 青銅の基督 流れ星三度笠 七変化狸御殿 怪猫逢魔ヶ辻 酔いどればやし めくら狼 百面童子 マグナの瞳 春色大盗伝 伝七捕物帖 つばくろ笠 火牛坂の悪鬼 荒獅子判官 旗本やくざ 踊り子行状記 美女決斗 赤城の血祭				

(最近の映画から)				(最近の映画から)				31年6月号 (最近の縛り時代映画から)				31年8月号 (最近の縛り時代映画から)				(緊縛映画速報欄)				(最近の映画から)			
大 映				松 竹				大 松				東 大				東 東				松 竹			
矢島ひろ子・入江たか子 利根はる恵・桂典子 七 浦 弘 子 美空ひばり・三笠千恵子				高峰三枝子 江島みどり・立花宮子 女優名不明 遠 山 幸 子 草 苗 光 子 春風すみれ 関 千 恵 子 美空ひばり				草 苗 光 子 夏 川 静 江 春風すみれ 美空ひばり 日高澄子・多摩桂子				美空ひばり 恵・三千子 中 田 康 子 美 雪 節 子 小 町 ル リ 子				小 園 蓉 子 七 浦 弘 子 香川京子・山田五十鈴 高 木 悠 子 浅茅しのぶ				花の二十八人集 江戸怪盗伝 風雲日月双紙 謎の決斗状			
弁 天 夜 叉 腰元行状記 御用盗異変 隠密七生記 伝七捕物帖・女狐駕籠 おしどり喧嘩 べらんめえ侍 恋すがた狐御殿				女狐 駕 籠 マリア観音 喧嘩 駕 籠 恋姿狐御殿 殺人計画完了				おしどり囃子 お嬢さんと探偵 のり平の三等亭主 悲恋真室川音頭 お 富 さ ん				好法院勘八 風雲日月草紙 青銅の基督 若き日の千葉周作 顔のない男											

(映画予告篇)

松 竹				東 映				大 映				東 映				大 映				新 東 宝			
紙京子・宮城千賀子・ 小山明子 伊吹友木子 高峰三枝子・千秋みつる 千原しのぶ・忍美智子 北 見 礼 子 田代百合子・喜多川千鶴 春日とも子 長谷川 裕見子 中原ひとみ 園 ゆき子 千原しのぶ・園ゆき子 園 ゆき子 三笠千恵子・美空ひばり 千 石 規 子 花 柳 小 菊 千原しのぶ 星 美 智 子				三笠千恵子・木暮実千代 高千穂 ひづる 鮎川十糸子 M・マーフィ S・マクレーン M・マクスウェル 川 上 康 子 筑紫あけみ 鳳八千代・大和七海路 北 川 町 子 女優名不明				花の兄弟 逆襲獄門砦 女難屋敷 烙印なき男 モデルと画家 紐育秘密結社 十代の反抗 検事とその妹 旗本やくざ 夕立の武士 海の小扇太				晴姿稚児の剣法 花嫁小判 弁 天 夜 叉 火牛坂の悪鬼 マゲナの瞳 闇太郎変化 虚無僧屋敷 中野源治の冒険 力斗空手打ち 幽霊城の拘囚男 竜巻三四郎 謎の決斗状 戦慄の七仮面 続・薩摩飛脚 怪力類人猿 べらんめえ活人剣											

松竹	東映	日活	大映	東映	松竹	新東宝	東映	日活	東宝	大映	新東宝	東映	新東宝	東宝	アメリカ	新東宝	日活	大映	松竹							
高峰三枝子	宮城千賀子	南 寿美子	C・リーチマン	三田登喜子	丘 さとみ	雪代敬子	久保菜穂子・水帆順子	花井蘭子	千原しのぶ	高千穂 ひづる	由美あづさ	青山京子	南左千子・矢島ひろ子	若尾文子	相馬千恵子	長谷川 裕見子	遠山幸子・松島トモ子	扇 千景	C・ブルーム	K・ケンドール	藤木の 実	新倉美子	藤田佳子	丘 さとみ	水原真知子	
治郎吉格子	鞍馬天狗危し	怪傑耶茶坊	謎の 金塊	キッスで殺せ	花の 兄弟	魔の死美人屋敷	祭に消えた男	暴力の王者	怨霊佐倉大騒動	怪猫 乱舞	謎の幽霊船	悪魔の 街	与太者と若旦那	魔の花嫁衣裳	滝の 白糸	四谷 怪談	満月あばれ笠	怪傑阿修羅王	疾風鞍馬天狗	アレクサンダー大王	古城の 劔豪	劔豪対豪傑	極楽 劔法	豹の 眼	日輪 太郎	のんき侍大暴れ

(予告篇)				31年10月号 (最近の映画から)	31年10月号 (緊縛映画速報欄)				
新東宝	東映	日活	松竹	大映	新東宝	大映	新東宝	大映	松竹
若水陽子	喜多川千鶴	美多川光子	長谷川裕見子	伊吹友木子	女優名不明	G・コロブリジター	S・ローレン他	M・モルガン	山本富士子
川上康子	夏川静江	花井蘭子	松島トモ子・扇千景	由美あづさ	山本富士子	筑紫あけみ	立花宮子	花岡菊子	浅茅しのぶ・雪代敬子
魔の花嫁衣裳	人喰い佛々	女人曼陀羅	続・折鶴七変化	怪傑修羅王	人肌蜘蛛	悪魔の街	疾風鞍馬天狗	怨霊佐倉大騒動	醉どれ牡丹
裁かれる十代	マリヤ観音	ノートルダム・ド・パリ	侵略者	マリト・アンワネット	花笠太鼓	鳴門の妖鬼	闘 龍 銭	決斗地獄	征服されざる人々
地中海の虎	地中海の虎	征服されざる人々	マリア観音	田之助紅	田之助紅	マリア観音	征服されざる人々	地中海の虎	征服されざる人々
女優名不詳	女優名不詳	女優名不詳	女優名不詳	女優名不詳	女優名不詳	女優名不詳	女優名不詳	女優名不詳	女優名不詳

32年1月号 (最近の映画から)				(緊縛映画速報欄)				31年12月号 (最近の映画から)			
新東宝	大映	東映	日活	東映	松竹	東映	松竹	新東宝	大映	東映	日活
藤木の 実	浦路洋子・三田登喜子	三条美紀	三笠博子	香 叔子	美多川光子	美空ひばり	高千穂ひづる	長谷川裕見子	C・チャリツシ	D・ロバソン	R・モレノ
浅茅しのぶ	M・モルガン	長谷川裕見子	八汐路佳子	三笠博子	丘 さとみ	美空ひばり	三笠博子	丘 さとみ	美空ひばり	三笠博子	丘 さとみ
風雲黒潮丸	忍術快男児	復讐に來た男	叛逆者の群れ	続・女人曼陀羅	女囚と共に	復讐俠艶録	怪異宇都宮釣天井	不知火奉行	地下鉄三四郎	緑眼童子	夕日と拳銃
肉体の密輸	ふり袖太平記	曾我兄弟富士の夜襲	妖蛇の魔殿	ラスヴェガスで逢いましよう	巴里野郎	王様と私	女と奇蹟	酔いどれ囃子	闘 龍 銭	鳴門の妖鬼	緑眼童子
風雲黒潮丸	ふり袖捕物帖	緑眼童子	風雲黒潮丸	ふり袖捕物帖	緑眼童子	風雲黒潮丸	ふり袖捕物帖	緑眼童子	風雲黒潮丸	ふり袖捕物帖	緑眼童子

(スクリーンで縛られた女優たち)	(映画速報欄)	32年3月号 (正月映画を中心) (の縛られ映画)	(映画速報欄)
東映	松竹映 東映 大映 松竹映 東映 松竹映	メトロ 松竹 新東宝 東映	メトロ 新東宝 日活 大映 松竹
長谷川裕見子 若水美子 花柳小菊	宇治みさ子 筑紫あけみ 三条美紀 丘さとみ 大美輝子 小町ルミ子 高峰三枝子 三浦光子 山根寿子	エヴァ・ガードナー 瑤峨三智子 山鳩くるみ 浅茅しのぶ・三笠博子 宇治みさ子 日比野恵子・若杉嘉津子 筑紫あけみ・花岡菊子 千原しのぶ・三笠博子	エヴァ・ガードナー 藤木の実 喜多川光子 淡島千景 高峰三枝子・雪代敷子 小川明子
風雲將棋谷 人喰い狒々 薩摩飛脚	妖雲里見快拳伝 竜虎の決戦 鳳城の花嫁 浅草三四郎 風雲黒潮丸 続・花頭巾 虚無僧変化 弁天夜叉 変化大名 喧嘩鴉	ボワニー分岐点 その女に手を出すな まだら頭巾 鯛を抜けば乱れ白菊 七つの誓い 鬼姫競艶録 人形七捕物帖 妖艶六死美人	ボワニー分岐点 怪異宇都宮釣天井 肉体の密輸 静と義経 りんどろ 京洛五人男

(女優を縛る監督達)	(映画速報欄)	(緊縛映画感)	(スクリーンで縛られた女優たち)	32年4月号 (縛られた女優達)
大映 松竹 松竹	新東宝 東映 松竹 新東宝 東映	日松 東映 松竹	東映 松竹 東映 宝塚	松竹 松竹
月丘千秋 女優名不明 入江たか子・矢島ひろ子 星美智子 岸恵子 八千草薫 浜田百合子 山田五十鈴・香川京子	木暮実千代 野々村律子・宇治みさ子 田代百合子 草苗光子 北沢典子 長谷川裕見子	市川春代 草苗光子・瑤峨三智子 千原しのぶ・三笠博子 山鳩くるみ	千原しのぶ 高峰三枝子 西条鮎子 新珠美千代	岸恵子 花柳小菊 高千穂ひづる 西条鮎子 月丘夢路
鉄仮面 地獄谷の豪族 花の二十八人集 大江戸大平記 吃七捕物帖 乱菊物語 ジャコ万と鉄	情炎 青銅のキリスト 謎の紫頭巾 修羅時鳥 美女蝙蝠 関八州大利根の対決 花まつり男道中	偶襲銭 美女蝙蝠 七つの誓い 乱れ白菊 魚河岸の石松 弁天夜叉 まぼろし頭巾	鞍馬天狗斬り込む 若君罷り通る 吃七一番手柄 夕立勘五郎	流賊黒馬隊(後篇) 黄金弁天

東 映	東 映	東 映	松 竹	大 映	東 映	東 映
千石規子	花柳小菊・千原しのぶ	瑛峨三智子	用代百合子・喜多川千鶴	美空ひばり・三笠博子	日高澄子・月丘夢路	桂木洋子
暗黒街の鬼	片目の魔王	赤穂義士	關太郎変化	謎の決斗状	七つの宝石	フランチェスカの鐘
角兵衛獅子	鞍馬火祭	花の生涯	素浪人日和	私は狙われている	ごろつき船	銭形平次
人肌蜘蛛	大江戸七変化	月笛日笛	弓張月	次郎吉格子	春風無刀流	よいどれ八万騎
廿一の指紋	三十三の足跡	難船岬の決斗	影法師一番手柄	風雲将棋谷	獨 樓 錢	
朝雲照代	女優名不明	長谷川裕見子				
喜多川千鶴	藤間紫・宮城千賀子					
高峰三枝子	花柳小菊					
長谷川裕見子						
宇治みさ子	相馬千恵子					
山本富士子	長谷川裕見子・三条美紀					
若杉須美子	荒川さつき					
浅茅しのぶ	宮城千賀子・淡島千景					
美空ひばり	美空ひばり・岸恵子					

新東宝	松 竹	東 宝	大 映
千石規子・久我美子	三美美紀・山田五十鈴	藤木の実	花井蘭子
瑛峨三智子	美空ひばり	女優名不明	
松島とも子	沢村昌子	女優名不明	瑛峨三智子
南 悠子	利根はるえ	宮城野由美子	筑紫あけみ
山本富士子	三浦光子	尾上さくら	井川邦子
若山セツ子	水の江滝子	喜多川千鶴	霧立のぼる
橋 公子	長谷川裕見子		
奴隷の町	群狼の街、折鶴笠	宇都宮釣天井	右門捕物帖
伊豆の佐太郎	恋姿狐御殿	風雲七化け峠	トンチンカン八犬伝
御用盗異変	疾風鞍馬天狗	大江戸異変	からす組異変
すつ飛び千両旅	照る日曇る日	鉄路の弾痕	振袖狂女
美女決斗	踊子行状記	恋文道中	恋風街道
快盗三人吉三	袴垂保輔	狸銀座をゆく	絢爛たる殺人
木曾路の子守唄	逢魔ヶ辻	覆面どくろ隊	

松竹												京都														
花柳小菊	花井蘭子	市川春代	花柳小菊	関千恵子	千原しのぶ	宮城千賀子	新倉美子・利根はるえ	岸恵子	藤乃高子	女優名不明	市川春代	若杉曜子	伏見和子	浅茅しのぶ・紫千代	乙羽信子	相馬千恵子	三浦光子	月丘夢路	草苗光子	伊吹友木子	七浦弘子	紙京子・宮城千賀子	小山明子	高峰三枝子		
春風無刀流	又四郎笠	千人悲願	新撰組	青空浪人	青空大名	危し鞍馬天狗	自雷也	江戸いろは祭	疾風からす隊	美男天狗党	牢獄の花嫁	袖交響香猫	地獄太鼓	死美人屋敷	酔いどれ牡丹	縮狼	千丈ヶ嶽の火祭	あばれ熨斗	人肌千両	黄金弁天	女郎蜘蛛	花嫁小判	風雲日月草紙	稚児の剣法	弁天夜叉	
松竹												東映														
夏川静江	小鳩くるみ	小園蓉子	浅茅しのぶ	千原しのぶ	月丘千秋	若水美子	八汐路佳子	浦里はるみ	千原しのぶ	三条美紀	日高澄子・多摩桂子	関千恵子	美多川光子	喜多川千鶴	田代百合子	長谷川裕見子	花柳小菊	三田トキ子	立花京子・江島みどり	中原ひとみ	浅茅しのぶ	山口淑子				
マリア観音	その女に手を出すな	好法院勘八	顔のない男	水戸黄門	怪猫乱舞	火牛坂の悪鬼	幽霊城の傀儡	人喰い狒々	鳴門の妖鬼	百面童子	長脇差奉行	浅草三四郎	謎の金塊	殺人計画完了	江戸城炎上	肉体の密輸	雪之丞変化	里見八犬伝	虚無僧系図	薩摩飛脚	こけ猿の壺	花の兄弟	腰元行状記	中野源治の冒険	顔のない男	戦国無頼

32年5月号 (思い出の緊縛映画より)														(緊縛映画) (画維感)												
大	"	"	"	日	"	"	松	"	全	東	"	"	"	極	新	日	東	大	大							
都				活			竹		勝	映				東	興	活	映	映	映							
佐久間妙子	大倉千代子	深水藤子	入江たか子	花井蘭子・深水藤子・原節子・星玲子	"	"	北見礼子	"	宮川敏子	宮城千賀子	森野洋子	"	"	小浜美代子	甲斐世津子	大倉千代子	筑波久子	中原ひとみ	久保菜穂子	雪代敬子	南左斗子	水原真知子	山根寿子	淡島千景		
無敵乱斗王	無明有明	山彦呪文	大菩薩峠	丹下左膳日光の巻	美女	破魔弓伝奇	緋牡丹伝奇	木村長門守	怪幻蝙蝠魔	怪傑鉄仮面	流星鉄仮面	怪傑虎	荒海の虹	まぼろし城	復讐は誰がやる	山彦呪文	宝の山に入る退屈男	少年探偵団	若衆変化	暴力の王者	酔いどれ囃子	流れ星三度笠	魔の花嫁衣裳	のんき侍大暴れ	喧嘩烏	静と義経

32年10月号 (再映画化作品について)				32年9月号 (ワイド映画の 縛りシーン)				32年8月号 (緊縛映画) (速報欄)				32年6月号 (緊縛映画) (速報欄)				(映画) (速報欄)								
新東宝	マキノ	大	東	日	新東宝	日	東	大	東	大	東	東	メ	東	松	東	新東宝							
岸恵子	月澄江	佐久間妙子	小宮光江	中原ひとみ	新井麗子	筑紫あけみ	浅丘ルリ子・香月美奈子	小宮光江	長谷川裕見子	京マチ子	長谷川裕見子・中原ひとみ	千原しのぶ	小宮光江	アリーン・ロバーツ	久我美子	鳳衣子	藤間紫	勝浦千浪・谷鈴子	水原真知子	勝浦千浪・谷鈴子	藤間紫	浪人街	大名囃子	真田十勇士総進軍
弥太郎笠	鉄塔の怪人	抜打ち浪人	血染の白矢	妖婦夜嵐お絹と義賊天人お玉	月下の若武者	地獄岬の復讐	女狐屋敷	大菩薩峠	鳳城の花嫁	鳳城の花嫁	濡れ髪二万流	地獄岬の復讐	武装市街	柳生武芸帳	鳳城の花嫁	第十三号機橋	雨の花笠	ボワニー分岐点	酔いどれ八万騎	大名囃子	浪人街	大名囃子	真田十勇士総進軍	



読者通信

初めてお便り致します。先日、偶然に九、十月号を入手致しまして、驚いたり喜こんだりした次第です。それで読んでいるうちに何かたまらぬ気持ちになり、ペンをとりました次第で、御笑覧下されば幸甚です。先ず貴誌を手にして、もう一つ物足らなく思ったのは写真の少いことです。画よりも何よりも、写真が一番真実味があつていゝと思ひます。映画のスクリーン写真のようなものは誰でも見られるものであり、特写真を載せてこそKKの真価があるのではないでしようか。それから写真は一枚より、十月号のグラマールの様に二枚程度の方が多く見られてよいかと思ひます。小生、若

い女性がギョツと縛られているのを見ると、たまりません。何とぞ写真を多く載せて下さるようお願い致します。次にアイデアとして泥責めなどは如何でしよう。若い娘が荒縄で縛られ、泥の中で苦悶しているなどというのは、ちょっといけると思ひます。小生は実験が出来ませんので想像ですがやはり泥の中では全裸がよいと思ひます。全身、泥まみれでもいゝし乳房やお尻だけ泥がついていないとか、反対にそれ等だけが泥がついていゝとか、色々あると思ひます。又、それに関連して柔肌に字や画をかくとか、金粉や銀粉を塗るとかいうのもよいのですが金粉や銀粉のときには、全身に塗ると少し面白味がなくなるので、やはりアクセントをつけて塗るのがよいと思ひます。(T・K)

森シズ子様、十月号で拝見の上御意見承りました。小生も貴女と同じく本誌の相当期間の愛読者です。最近、京都を中心の一つのグループを作りたいと思つて居るのですが、幸い貴女のような方とこの企画を兼ねてお話し合えたら好都合とも考へるのですが、この機会に一度お会い下さいませんか。

(京都 三浦正光)

久里須様、御健在何よりです。九月号の通信における第三の形式は、全く小生の感興と同一であり小生の一生を支配する夢でありました。最近の奇巧の流腸に関する記事は極めて興味薄です。しかし奇巧でなくては流腸の記事を見ることが出来ないので、相変らず愛読して居ます。小生の感興の対象となるのは十二、三才の少女から三十前後位までの女性に限り、極めてリアルなものを望みます。その点、高橋よしえ様の「糸姫の体験記」は何度読んでも味のあるものでした。新聞で女学生の集団中毒やら、赤痢発生等の記事がよく出ていますが、それ等の手当の詳細な報告を病院からとり寄せて、奇巧に発表することは出来ないでしようか。小生の女性観には、毎も流腸がつきまといっています。久里須様の御奮闘を切望します。(東京 H生)

復刊以来、着実な御発展をなされて居りますことを嬉しく思つて居ります。八月号、無事入手することが出来ました。特に巻頭の「美への冒険」の素晴らしさ、きつち

りと後手に乳房より腹部にかけて六巻程の荒縄、それにもまして鼻に對する虐待、只もう感心致しました。今後この様なグラビアをどんどん載せて下さることを切に御願ひ致します。小生、初めて読者通信欄に投稿致しますので、皆様の御仲間入りをさせて戴き度く御願ひ致します次第です。

(浜松市 鹿又貞男)

最近、切腹記事の少いのは只々残念です。私ばかりでなく切腹マニアの皆様方はどなたも同じ御考へだと思ひます。九月号の藤山秀緒氏の壮烈、大和撫子は実に素晴らしい。私は大なる切腹マニアで、自分で書いた切腹画が三十枚程あります。会津波羅木利会の久子氏は其の後如何がなされたでしよう。一日も早く全快なされて生々しい切腹譚を誌上に載せられんことをお願い致します。私もナイフ等で切腹の真似をして居りました。今までは皮を少し切つて血が流れるのを見て満足して居りましたが、久子氏が切腹されたことを知つて先日遂に下腹に一文字の傷を作りました。この感想を現在書いて居ります。(山形 高橋孝郎)

求妻小生教師昭和五年生五尺二寸十二貫味噌汁沢庵好内氣M変運動苦手望十代美人五尺三寸十三貫以上筋肉質下肢巨大二重瞼上り眼勝氣派手残忍性不良少女可家事一切当方致浮氣裏切不嗜虐歡迎其他奴隸的服従根岸明美淡路恵子北原三枝浜村美智子春川マヌミ小浜奈々子北玲子崇拝詳細愚作悪魔唇参照

(東京 田沼醜男)

そよ吹く風もどこか秋めいて参りました。皆様も御元氣の事と申します。皆様の投書を読ませて戴いて居りますと、それぞれに自分の楽しみの世界を御持ちのようであらうやましくてなりません。私は今年丁度廿才になります。御家は一ノ宮、御勤めは今年愛知代表で甲子園に出場致しました津島高のある津島の毛織会社の事務に務めさせて戴いて居ります。周囲の方は皆男の方ばかりで、色々お話をなさるのでしようが私の前では

謹厳を画に描いたようなお顔をなさって居られます。ですから私は独りで楽しむばかりで、ゆつくりお話の出来る友達もありません。私は十四、五才頃から何時も男の方に責められる夢ばかり描いて居りますので、自分でも変なのではないからと心配でなりません。した。それがふとした機会に奇くを読み始め、私と同じ想いの方がこんなにあるのかと、何かしら心の暖たまる感謝の念で一杯になりました。それから毎月一冊づつ集めるのが待ち遠しくて、それでも半年位で私の劣等感もすっかり無くなり、御蔭で毎日楽しく過ごさせて戴いて居りますが、時折、色々な責めのお話をしたり、お互に縄をかけ合ったり出来る御友達があつたらと思わずには居られませんが、夢に見る力強いクーパーのような方、そんな方が私の前に現われたら……でもその様な方があつても、若し後で愛情で結ばれるの

新作切腹写真『女体自決悦虐図』

(略号 えつ)

△血紅使用極鮮明実演切腹モデル写真△

大中判印画紙 (タテ十八糎 ヨコ十二糎) 焼付 七枚一組 千円

四馬孝・傑作集

『美しき女体家畜飼育室』

△潰滅の前夜より△(詳細解説は本誌九月号、十月号にあり)

(大中判印画紙) 焼付 八枚一組 八百円(送共)

なら別として、私の願ひだけのために、私の自由を縛られたくありません。未だ私の自由な青春を楽しまたい。さりとて会ってさりと別れられるような、さっぱりした御交際を願える御方の出現を待ち望んで居ります。色々責めの御話など聞かせて下さいませね。若し貴方が信頼出来る紳士ならば何時かは私のマゾの姿も見せて差上げられる日が来るかも知れません。私の性質をよく御承知の上、紳士的に御交際願える方、信頼して御話の出来る女性の友、そのような方が私の前に姿を現わして下さいませね。このように御便りする次第です。皆様、よろしく御便り下さいませね。

(一宮市 真奈美弓子)

○ 本屋で貴誌を手にして全身ぎくつと致しました。そしてその夜は

まんじりともせず読み返しました。SとかMとか云う言葉の意味がこのように深いものとは思いがけまもんでした。今迄の私の不思議な欲望を振り返って、いくらか納得致しました。私は、どうか相当Mの方が多いようですね(と云つても非常に複雑なもので、どういう風にそれが現れたり逆になつたりするかわからないのです。)丁度十月号はMの記事が少なく、その点やや物足りなく感じました。飯田市の矢部かず子様の文を読み全身しびれるような刺激を感じました。私自身あらゆる点で上の部に属する男とひとくちに自負し又、私の冷たさに相当多くの氣位の高い女性が興味を感じ近づいて参りますが、それを多く拒絶して来ているのですが、本当は心の中はその逆なのです。そしてこの私を征服してくれるような

女王を望んでいるものです。矢部さんの男を奴隷化する場合の方法とか心構え、と云った心理的なものを暗示する征服と云うことに異常なまで心が打たれました。どうか一度お便り下さるよう御願ひ致します。

(東京 KY生)

大阪森シズコ様、十月号であな
たの記事を読みました。私は愛読
してからまだ日も残く、これとい
った経験もありませんが、あなた
が提案していらつしやるように読
者間でグループを持ち、文通だの
会合だのが出来たらと思います。
よかったですら一度お手紙下さい。

(岐阜県 田中修)

小生は一介のサディエスチック・
フェチシストであります。秀れた
文化誌奇タに対しては、若干の
不満を持って居りますので一言申
させて戴きます。既に名古屋のM
・M氏も御指摘になつて居られる
ことです。奇タに掲載される創
作、挿画の悉くが成熟した女体を
対象とするものであり、新鮮にし
て高貴な少女乃至女学生を緊縛し
責めることの皆無なのはどうした
訳でしょう。無論、成熟した女
体緊縛の中にも、相応の美的価値

が存在するのはわかりますが、例
えば音楽にモツアルトのロココ趣
味あり、絵画にミレーの抒情画あ
る如く、凡ての「美」には爛熟し
た美とナイーヴな美しさが併存す
るのです。豊満な女性とのイキの
合った緊縛プレイもさることなが
ら十五、六の楚々たる女子高校生
を痛ましくも荒縄で縛り上げ、泣
きじやくる頬をはじき、小さな鼻
をつまみ上げ、耳たぶを引っばる
等は如何でしょう。就中、嫌が
る美少女の柔い鼻を指先で軽く持
て遊ぶ心持は、カルピスの甘酸つ
ばい味にも似て、この上ない満足
を与えるでしょう。無論、十五、
六の年頃はもう子供ではありません
。セーラー服の下若々しい果
実も充分鑑賞出来ます。しかし、
こうした空想は、一般のサディズ
ムに比してより実現困難なもので
あることは、小生も十分心得てお
ります。それにつけても、去る八
月に静岡で起つた一青年の女子中
学生誘拐事件の際、捕われた青年
が語つた「妹が欲しかった」とい
う言葉が憐れを誘います。そして
誘拐して四日間、青年が少女
をどのように扱ったかと、強い興
味が湧き起るのです。今の処、小
生はこうした空想を下手な画や文

章に昇華させて満足しております
が、奇タを通して大方の御批判を
仰ぎ、出来得れば資料の交換等
を行えるような良友の到来を夢見
ている次第です。(青森Y・T生)

ふんどし愛好者の諸兄諸嬢にふ
んどしトビツクをお知らせ致しま
す。

(-)ふんどしというものは、六尺ふ
んどし、越中ふんどしの類から三
角ふんどし、デルタカバーに至る
まで全部自分で作るものとばかり
思っていました。……ただし、夏
の男子用の黒い水泳ふんどしは、

水泳パンツの附属品として市販さ
れています。しかし今度初めてデ
パートの新開広告に堂々と越中ふ
んどしの特売が載っていました。
二枚一組八十円です。ふんどしの
新開広告が出るようになり、デパ
ートで特売される時代、ふんどし
の需用が一般的になってきたので
しょうか。セロフアンの袋に入っ
た越中ふんどしをデパートで買え
るようになってきたのは、何とい
つても嬉しいことです。更に進ん
で、しやれた模様の三角ふんどし
が、男子用、女子用と各種類いろ
いろ買えるようになるというので

【新版】女体緊縛フोट

◎分譲◎

R組 六十組

(印画紙の大きさ 9×13cm)

各組一枚一組 (全部送料共)

一組一枚	一〇〇円
五組五枚	四〇〇円
十組十枚	七五〇円
二十組二十枚	一四〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇円
四十組四十枚	二四〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇円

R1	柔肌と荒縄 (須川令子)
R2	海浜の緊縛 (萩千恵子)
R3	床間の飾り (佐賀美智子)
R4	高手小手 (花坂道子)
R5	海老縛り (萩千恵子)
R6	後手猿轡 (須川令子)
R7	後手足縛り (村田那美子)
R8	鏡うつし (伊吹真佐子)
R9	股間しばり (須川令子)
R10	鎖縛晒責 (萩千恵子)
R11	股間縛正面 (伊吹真佐子)

すが。

(二)三角ふんどし型パンティが二種類、最近名古屋、岐阜のデパートで市販されています。他の都市にも出廻っていることと思います。売場はAデパートでは婦人肌着売場ですが、B、Cデパートでは、男子用と婦人用の両方の売場に出ています。腰部だけのマネキン人形に穿かせて陳列してありますから、直ぐ目につきます。パンティの両脇をぐつと切り上げて、正面も後も完全な逆三角形で、脚とお尻がうんと露出できるようになっています。商品名はセラン(近代化サルマタ)と明記され、別紙、同封の通り着用図が添えてあります。値段は六十円と八十円です。もう一つはサルターという商品名で、その説明には『健康に良く便利で、穿き心持の良い新製品』とあり、また『これは輝と猿又の長所を調和したものです』とも書いてあり、着用した女性の正面写真が包装セロファンに印刷してあります。値段は百五十円。これはパンティというより、越中ふんどしの改良型ともいふべきもので、両脇は重ね合せ式になっていますが、開け放しで、脚は全部さらりと露出され、前記のセランより一層ふ

んどしに近いものです。以上の二つともまだふんどしとはいえませんが、後側をもつとぐつと細くしてお尻の内に入るようにし、丸いヒップが全部出るようにすれば素晴らしい。現代の男女に必ず喜ばれる新しいふんどしになるわけです。しかし、この二つのふんどし型パンティが大デパートの売場に並べられ、マネキンにも穿かせて陳列し、男子売場は勿論、婦人用品売場にも並んでいるという事実は、近い将来のふんどし時代への動きをハッキリ見せているものです。下穿きに男女の区別なくすべてが三角ふんどしを使用する時が近づいていることは、本当に楽しいことです。どなたかこの新製品の使用感を聞かせて下さい。私はサルターの方が好きで、これをお進めします (岐阜 M子)

○ 永らく御無沙汰致しました。暫く健康を害しており、誌上でこそお目にはかかりませんでしたが、編集者先生を始め寄稿者諸氏の御活躍には、何時も陰々声援いたしておりました。私も漸く健康を回復しましたので、これから又、前通りお仲間入りさせていただきます。私は子供の頃から巡査

R 36	R 35	R 34	R 33	R 32	R 31	R 30	R 29	R 28	R 27	R 26	R 25	R 24	R 23	R 22	R 21	R 20	R 19	R 18	R 17	R 16	R 15	R 14	R 13	R 12
和装責め (藤田節子)	手足逆吊り(伊吹真佐子)	首縄股間縛 (坂口利子)	股間縦縛り (中富綾子)	薄羅の緊縛(加賀利江子)	くさり責め(伊吹真佐子)	松樹後手縛(村田那美子)	変型しぼり (萩千恵子)	高手小手 (加賀利江子)	逆海老責め(伊吹真佐子)	股間縛後手 (中塚文子)	後手吊責め(伊吹真佐子)	逆さ吊り (伊吹真佐子)	椅子責め (佐賀美智子)	強烈梯子責(伊吹真佐子)	帆立縛 (萩千恵子)	いたぶり (春日、伊吹)	足湯梯子責(伊吹真佐子)	緊縛横臥 (厚狭春江)	立木しぼり(村田那美子)	トイレ縛り (須川令子)	猿轡の魅力(伊吹真砂子)	開股しぼり(川辺砂登子)	尻立縛り (萩千恵子)	女学生縛り (須川令子)
R 60	R 59	R 58	R 57	R 56	R 55	R 54	R 53	R 52	R 51	R 50	R 49	R 48	R 47	R 46	R 45	R 44	R 43	R 42	R 41	R 40	R 39	R 38	R 37	
トップモード ("	強烈しぼり ("	あきらめ ("	苦悶の表情 ("	猿ぐつわ ("	後手しぼり ("	引き裂き ("	のぞき見 ("	股間緊縛 ("	雁字搦目 (津森静子)	折檻の魅力 (須川令子)	くさり責 (川端多奈子)	御開帳 (萩千恵子)	後手しぼり (加賀利江子)	手足緊縛 (萩千恵子)	股間しぼり ("	コルセット (中塚文子)	松樹しぼり (村田那美子)	後手猿轡 (萩千恵子)	お灸責め (春日、伊吹)	肉体美誇示 (伊吹真佐子)	乳房下緊縛 (村田那美子)	後手首縄締 (加賀利江子)	仰向悦虐責 (川端多奈子)	

が好きで、遠くに交番の赤い灯を
 見ただけで胸がどきどきする位で
 した。今度、入院加療のために上
 京しましたが、今でも印象に残っ
 ているのは、病院へ向うタクシー
 の窓から見た若い巡査の姿です。
 彼は木の多い静かな通りの交番の
 前に、何か物思わしげな様子で佇

が好きで、遠くに交番の赤い灯を見ただけで胸がどきどきする位でした。今度、入院加療のために上京しましたが、今でも印象に残っているのは、病院へ向うタクシーの窓から見た若い巡査の姿です。彼は木の多い静かな通りの交番の前に、何か物思わしげな様子で佇

責められる女、責められる場面八態

北原純子画『風流女体アラベスク』(略号)

大判判画紙(タテ十八糎ヨコ十三糎)焼付 八枚一組 八百円

んでいましたが、チラと自動車の方を見た後黒い引締った顔と、長身によく似合った制服姿がマザマザと顔に焼付いています。奇巧な二月号に発表した、赤い魔境に書いた秋山巡査は、私の理想のイメージです。あのような警官が現実的に居て、私が三村の立場にあつたら、私はもう何時死んでもいいと思うに違いありません。奇巧な読者の中に若し警察官の方がおられましたら、たとえ誌上でなりともお目にかかりたいと念じています。私は二、三年来、男性モードの撮影を秘かな趣味として来ましたが、どうもいいモデルがなくて困っています。二十五才以上四十才までの方で、モデルになって下さる人がありましたら、誌上で御連絡下さい但し条件は全裸です。(青葉慎一)

あろう。表紙左下の二大タイトルは、時には私にとって期待はずれの場合もあるが、その月毎に両者共あるいは片一方いづれか魅力のあるストーリーである場合が多い。今月号は完全に軍配は久留木栄氏の「美容病院」に上った。その次が「終戦奴隷」というところだが前者と後者の差は数段の差があつた。女学生が出て来たのでブルマかと思わず色めきたつたが残念でした。前者は、何とか美しくならんと欲した人の良い木村愛子が美容のためと偽わられて、次号より続けられる苦しい責運動、即ち折檻体操に興味をそそられる。何か原作があつて、それを大分誇張して物語化したのではないのか? 創作とすれば総体的に云つて大変面白い現実的モチーフで構成されているようだ。このままの形で現代小説的に精神的苦痛を主にストーリーを展開して欲しい。次に「痛められし桃の実」は、「黒いベチ

コート」の処の段階が最も良く、このところムチ打ちばかりで興味はない。ムチ打ちには好まぬ。絵物語「お加代源三郎旅日記」は古い手だ。こういう形式は面白いが、今回の絵にしてもストーリーにしても余りお粗末すぎる。その点さえ気をつければ、続けても単純な読者にはよいと思う。オムツが出て来たが歓迎する。あれを強用させる短篇物、特に妙齡の女性をその対象とすれば興味津々。尚、雑誌通信、その他、関係書籍の通信大いに一読の価値あり。文学書の中に仲々それらしい文章のあるのに気づく。最後に「L.T.商会」はどういうことになったのですか。少々モタツいたようだがまだ続くはずだ。期待している読物の一つなのです。グラビア「鼻いじめ」は縄目のないのが残念。グラビアは復刊以前を少々参考にしてみたら如何ですか。(世田谷区上北沢 阿部能廣)

私の「一揮亭雑記」が揮毫愛好者に好評だったことは、作者として張合いがあります。これを機会に私同様に揮フアンの投稿がふえることを希望します。寧ろ一揮亭のようなフイクションよりも経験談

の方が遙かに感銘が深いのです。「水兵生活と私」はその意味で出したのですが、このような投稿が私だけであるのは何といつても残念です。揮は下着として簡便であるというだけではなく、それなりに歴史がありますし使われる必然性があるのです。この必然性からいったら、六尺揮が本来の用途にかなっています。一つは体を動揺させる激しい労働に対して、下腹部を緊縛するという方法で安定を与え、保身法としてはいくつとす。現在、保身法としてはバンドや脱腸帯が使われていますが、これは前者の目的と同じです。つまり六尺揮を使えばこの必要はないわけです。また欧米ではサポーターが日常使われています。これはブリーフやパンツを下衣とする人間にとっては必要性が出てくるわけです。日本人でサポーターを使わずにパンツを直接つけています。が、生理的状況は同じですから、生活様式の相違が今の処必要性を感じさせないだけです。随って本来の六尺揮を使えばこれも一挙に解決されるというわけです。六尺揮が越中褌となりパンツや猿又に変ったのは着物から洋服への変化

に対応するもので、外形を重視する服装感覚がそうさせたのだろうと思います。比良沢氏、その他の人々が出されている一揮亭を現実にした、という希望には私も賛成です。六尺襷をしめた写真の紙上コンクールを取上げたらどうでしょう？

(内田武男)

○ 本誌の内、一番楽しみにしているのは、やはりこの読者通信の処です。皆様はそれぞれ同好の人と文通、又は交際しておられ、一部には同好会の様なものもあるようですが、私の居る松山はKKファンは皆無に等しく、まして本欄に投稿する人は居らず、残念に思っています。この松山に仙台市の花村ミチ子様や京都の益田愛子様のような方が居られると、毎日がとても楽しいのにと、皆様のそばに行けないのが残念です。若し松山に在住の方で文通して下さる方がありましたら、お便り下さい。仙台の花村様、京都の益田様、おさしつかえなければ連絡先をお知らせ下さい。

(松山 H・K生)

○ 敬愛する南川和子様、私も貴女様と同様、一ノ一番に読者通信を

拝見致して居ります。毎月、皆さんがどのような通信を寄せて居りますか。又、新しい人達が続々ふえて居りますのも楽しみにして居り、私自身、未だ独身で恋人も居りませんが、元氣だった頃戴いた事のある配達されたばかりの恋文を読むような楽しみです。今月は特別でした。私が書きました一寸した事に対して、丁寧なお便りを頂きました事に、胸のはずむ嬉しさで早速ペンを手に致しました。この前も書きましたように、私は南川さんの貴絵ファンです。過去、「美女折檻図」に娘から人妻になりたての生々しい美しさを感じ「楽屋裏の管責め」「折檻F.T.C」で成熟し切った女性の一番美しい時代の体の線を如何なく發揮されて居りました。玉稿「私は何故責め絵を書くか」の挿画は文章と共に私の最も好きなものに成って居ります。惜しむらくは口絵のように鮮明だったと残念に思っています。又、貴作をお送り下さいますとの事、嬉しくて何と御礼を申し上げてよろしいやら、厚かましく頂戴致したいと思つて居りますが、貴女様、御一人に私の住所をお知らせするすべもなく、誠に残念でたまりません。気管支

◆新版マゾフオト分譲◆

久方ぶりに待望の春日ルミ嬢出演、男性モデルは愛読者某氏、復刊以来、初めて撮影した本格的なマゾフオト。本来、某氏の求めにより個人的に作成したのですが、特に御希望の方にのみ焼増いたします。尚従来分譲中のマゾフオトは全部、分譲打ちりになっております。

第一組 凌辱篇

(略号 ま1)

大中判印画紙焼付、五枚一組

七百元

第二組 屈伏篇

(略号 ま2)

大中判印画紙焼付、五枚一組

七百元

○ 鑑検査の事は私自身経験はございませんが、多数の方々から大変苦しい検査だということを知りて居ります。口から潜水艦の潜望鏡のようなものを挿入するそうです。私は気管から内臓を覗くということに大それた興味を感じました。「あんな苦しい思いをして菌があらんと云われたときは、一層のこと死んでしまいたいと思ったわ」とこぼしていた女の人も居りました。今から嬉しい麗筆を楽しみに鶴首して居ります。一日も早くお元氣に成られますよう、具々も御自愛專一に、文に絵に傑作を発表頂きますよう御願ひ申上げながら失礼致します。

(柳沢吉保)

○ 慢性盲腸炎という厄介な病気で

静養していたために、すっかり御無沙汰してしまい、時代サド小説を続けてお送りするなど大言を吐きながら御約束が果せず失礼しました。口絵や映画スチールや挿画には、小生愛好の振袖姿が毎号登場するようになりましたので、全く喜びに堪えません。しかし白金氏の教室が終りになったので残念です。楓月太郎氏からは誌上でお呼びかけ頂き、返事も差上げず失礼していましたが、同好者の呼びかけは嬉しいきわみです。以前、通信欄で北原さんや甲斐氏から御呼びかけを頂き、直ぐ返信を投書しましたところ没になってしまったので、両氏には小生の御返事の意が通じないものと存じます。そんな訳で楓月氏に対する御返事も

書く気が起らなくなってしまうた次第です。時代物が少いのは依然としての傾向ですから、体力が恢復したら御約束を果すつもりですが、但し前作が余り評判がよくないので躊躇している次第なのですが、どうでしょうか。では御発展を祈ります。

(東京 笛地佐渡)

○ 小生、二十九才の独身です。女性の下穿きには、これまでも異常なまでの憧れを持ってきたものですが、それが未だにその願ひもかなえられず一人悶々の日を過して参りました。新聞や雑誌などでもズロースやバンテイ、腰巻等の活字を見ただけでもうっとりとして衝動にかられるのです。汚れて穿き古された物こそ私にとっては得難い何にも勝る宝物なんです。それにフエチの例に洩れずマゾの傾向も強いのです。どちらかと申しますと精神的なものに喜びを感じます。年上の豊満な女性の方に心ゆくまで痛めつけられてみたいのです。今まで何かお便りをお願いしましたが、小さな私には気遣いがして、どうにもペンが持てなかつたのです。同好の士も沢山居られ、それにもましてフエチに理解のある女性の方、マゾの女の方も沢山居られる

ことを知り、せめてもとお願いする次第です。どうか皆さんこのさやかな願ひごとを聞いて頂けないでしょうか。今は恥しくて住所は伏せさせて置きますが、お呼びかけ下されば何としてでもお知らせいたしたいと存じます。

(豊中 吉田健二)

○ 待望の奇ク十一月号を拝読して特に興味を唆られたのは、牧高志君の「演出」と文と画、口画では淹れい子画集の「舞妓」、写真では「縛られた女優たち」の三浦光子と尾上さくらの後手縛りで、更に白金紅次氏の「秘蔵の黒髪」の文と画、巨匠伊藤晴雨先生の「残酷芸術展覧会」などは面白く拝読非常に参考になりました。拙作「妙齡美人の吊責め」は文は随分下手ですが、編集者の御厚意で娘の立木縛りの画を入れられたのには深く感謝いたします。(岸本青柳)

○ どんなゲームでしょうか。もう少し具体的に説明して欲しいと思います。同じく十月号にて「製糸工女」木口房代さんの文中に、最近初めて鼻責めのもので出ています。もう少し具体的にスペースを取って書いて下されば、どんなに鼻責めマニアには喜ばれたことかと思ひます。それでも鼻環を貫通させた責めについては、初めてのものと思われます。もし木口さんが実際に実験し、或は実験しようと思われまうらば私にぜひ御一報下さい。私も豊富な実験例もございませう。(古田吉郎)

○ 飯田市の矢部かず子様、小生はかねてから沼氏の作品など愛読する三十台のマゾ派ですが、現在、飯田市民です。信州書店の奇クが売れるので同好者がいるなと思ひました。十月号の貴文を拝見して沢山の奴隷を持たれる女王様の存在を知って驚き喜んでいました。何とか連絡を取りたいのですが小生は土地の者ではありませんから後腐れの心配は御無用です。体験談の御発表も心から期待しております。

(飯田市 ヤブー生)

○ 女装マニアならぬ女性化願望者へ。東京在住の方で、真面目に女性化を考えて居られる方と兄弟になりたいたいと思つて居る二十三才の学生です。もしこのような方が居られましたらば名乗りをあげて下さい。何とか連絡方法を考えます。尚、古井直哉氏が東京の方かどうか判明せず残念に思つています。お目にかかりゆつくりとお話したい気持で一杯です。

○ 百号記念、十一月号は一応期待しておりましたが、やはり編集後記の言葉にある通り、毎月確実に出して行くために、ささやかな号になりましたが、これはこれなりに満足しました。表紙についての私案、一応表紙の画のみを色刷としたらどんなものでしょうか。表紙全体に色刷とするよりは効果が大となると思ひます。星光一氏の

「私の本箱」が終ったようで残念でしたが、九雅節夫氏の「特異な角度から」が再び登場し初めたので安心しました。但し余り無理をされずにお書き下さることを望みます。なお、土路草一氏が「サドの手帳」を書かれることを切に望みます。土路氏の巧みな文章は、私達サドファンにとって期待する処です。天野哲夫氏はどうやら私と同年輩らしいですね。文中の「少年倶楽部」に登場した小説、私も当時のことをなつかしく思い出しました。ただ貴方がマゾヒズムであることが残念の極み。挿画では「苦しみを求めて」の五十三頁の場面が中々によかったです。この画からは、ほんのりとした色っぽさが出て居りました。藤山秀緒氏（女史といわず私はこう呼びかけたのです）の「女はらきりの夢」文中で自作の芝居を見られたとありました。何と妙な気持でしたでしょうね。なお、このカットは私にとつてはチョットいけませんでした。口画は少々物足りません。私としては画の方をふやしてもいいなかったです。表紙はここ二、三号不調でしたが、十一月号は如何にも秋らしくて古風でもあり、なかなかに落着いていてよかったです。

この欄で、木村よし子さんの御手紙拝見してびっくりしました。あなたのようには子供の頃から女の子として育つて来られた人は他にはいないだろうと思われまします。しかし私としては正に羨ましいと感じる位でした。（東京 東一郎）

○ 余り長らく御無沙汰しましたので読者の皆様は、もうお忘れではないかしら。二年余り前、洋子と云う女性を女だてらに組み敷いてあられもなく顔の上に跨った体験記を思い出して下さいますね。私は現在デパートに勤務しています。が、相変らず女性を組敷くことはやめませんのよ。色々な手を研究したり実験したりして見ましたけど、やっぱり美しい女性の顔の上に乗ったりお臀をのせて馬乗りになる、口と鼻を息も出来ない様にパンティ一枚でふさぐことに、無上の快感を感じますわ。始めは相手の女性に何だか悪い気がして、なるべく厚手のパンティを用いましたが、戸破貞子様の御通信以来すけて見える位に薄い絹製のものを愛用する様になりました。所で洋子は、私が無理矢理に二度までも捻じ伏せて組敷いたのですから、普通でしたらすっかり腹を立

てて絶交されるのですが、妙なことに彼女も随分変わっているように見え、半年位たつてから又、私と親しくなつてしまわれました。そして私を「お姉さま」って呼びますの。私はすっかり嬉しくなつて、妹の様に可愛がつていますわ。勿論、時々、彼女と二人で秘蔵のプレイを行います。何んなプレイもお分りでしょう？ つまり二人で女プロレスもどきに格闘して、どちらかが「降参」と云うまで争うのです。別段ルールはありませんから、どんなことをしても構いませんわ。でも私の方が体格も大きいし力が強いのですから大抵の場合私が勝つて洋子を馬乗り組敷きます。そんな時は得たりとばかりに、彼女の可愛い顔をお尻の下敷きにして「うんうん」呻らせてやりますわ。必死になつてすり抜けられることもありますが「あーあわーあつ」と訳の分らない叫声を出して降参することもあるのです。でも、どうかして私が油断している、押し倒されて組敷かれた経験も数度あります。いくら私が腕力で優つていても、洋子に馬乗りが跨がられてからは中々跳ね返せるものじゃありませんわ。そして反対に、私が洋子のお臀に顔

を下敷きにされたことが、二、三度はあるでしょうかしら？ 息が出来ないのと、むっとする体臭で本当に死にそうな気がしますわね。勝負がきまると二人共ぐったり疲れて「ハッハッハッ」と喘ぎながら脚を投げ出して、あんまりいい格好じゃありませんわ。一度は始めての友人を誘つて来て、洋子に組敷かせ私はそばで見ているのです。が、自分でプレイをするのと違つて、別の面白さがありました。でも洋子は、私と二人だけの時は随分あられもないことをするくせにその友人に対しては恥しいのでしようか。あまり思い切つたことが出来ないのです。それでも最後に、洋子が捻じ伏せた友人の顔の上に跨つて、口と鼻を尻でつぶして見せてくれましたわ。私は未だ女性しか組敷いたことがありませんが、男の方にも行つてみたい気持はありますのよ。でも、そんな男性には出会いませんし夢みたいなことですから、女性を組敷くことと満足しています。それから四馬孝様に御願ひがあります。是非お聞きとどけ下さいませんでしようか。つまり、美しい女性が同じ女性の馬乗りになつて組敷いてる場面の画を、口画に発表して

代理部分譲品総目録

新人モデル多数
新しく参加!!

御入用の方は八円切手封入の上御申込み下さい。お送りします。

頂けませんかしら。例えば私が洋子の顔の上に跨っている処、或は跨ろうとしている処を想像して画いて頂けたらと、そればかりを望んでいます。私も自分で描いてみますが、画が下手で幼稚なものしか出来ずがっかりしますのよ。何か月前、大映の『リングの女豹』を見ましたが、総天然色で大変美しく、息づまる程の面白さを感じました。時に寝技で一人が他の一人の股の間に首を挟まれて、ギューギュー絞め上げられる時とか、ロープ際で俯伏せに転った処を、背中の上に飛び上った相手からゴツンゴツンと膝頭で踏んづけられる時等の、苦痛に充ちた悲壮な表情を見ていると、思わずサジスチツクな興奮にかられましたわ。それから『猫と庄造と二人の女』も見ましたが、終りの方で香川京子さんと山田五十鈴さんが玄關先でつかみ合いの取組合をするのがとても面白いと思えましたわ。でも立技だけで引分けになったのがあんまりあつてなくて物足りませ

ん。あの場合徹底的に争って、ついに寝技になり、若くて美しい香川さんが山田さんの上に馬乗りになり、ぐいぐい首を絞めるとか、或は逆に香川さんが粗敷かれて、奇麗な顔を握るはだけた山田さんのお尻に下敷きにされて、うんうん呻くのでしたら、どんなに素晴らしいだろうにと、独り空想して思わず顔を赤らめたりしましたのよ。私の描いた幼稚な絵をお送り申しますから四馬孝様の絵を是非お願ひして下さいませ。(長瀬昭子)

○ 十一月号の奇巧で沼先生が良二の断想集の「マゾ男の見分け方」について抗議を申込まれて居られました。高木良二は不ちでありませう。その高木良二は実は私なのです。出来心でした。とんだ出来心で深くお詫び致します。いろいろ弁解の道も考えましたが、ええい男らしく詫びようとは決心致しました。どうも面目もありません。深く読者にお詫び致します。と共に今後かかる不見識の

事のない事を誓います。沼先生の御指摘に対し深く感謝します。今後何卒どしどしきびしく御指導賜らば幸甚でございます。(佐々木ツトム)

○ 私は奇譚クラブ愛読者の一人ですが我々サラリーマンを満足さして呉れる読物はこれぐらいのものでしよう。何卒今後とも豊富な内容を持つて続刊を希望いたします。ここに私の誰にも知られたくない心理を打あけて見ましょう。内容はいやらしいかも知れませんが、私の真実ありのままを描写するので、その点読みにくいとは思いますが、どうか最後までお読み下さい。私は或る会社の一社員ですがここ四、五年間、アパートに住んでいる一人者です。私は子供の頃(十二、三才)から普通の人と幾分違った心理を持っていたのではなかつたかと思うのです。丁度小学校五年頃でしたか、その時私は女の先生に教つておりました。忘れもしません。その時の先生はとてきれいな歯並びをした白い歯の持主でした。先生が笑った時のあの白い歯、私は今でもよく憶えております。そしてその白い美しい歯に異常なまでの興味を持ったので

す。あの白い歯に金歯をはめたらどんなに美しいだろうと想像しました。ところが学期末近く二月頃でした。先生は虫歯を抜いて金歯を二本入れて来たではありませんか。その時の私の気持は何にたとえたらよいでしょうか。こんなところに私は少年時代から変った性質を持っていたのです。しかし、私だけこんなだったのでしようか。私には他の人々にも、こんな経験があつたのではないかと思うのです。が、如何なものでしょうか。現在の私はこのような気持はもう残っていません。しかし、それよりも強く働くのは、街を行く軽装の女性を見ると、くさりでしぱり苦しめてみたい気持でいっぱいです。でも、こんなことは考えるだけで今の私にとつては到底できることではありませぬので、只空想してはいるのみです。昔の西洋のように女をせり売りしていたらなあと思ひます。そうすれば適当な女を買つてきて逃げないよう、くさりで犬のように括つて飼つておくのだからなあと思つたりします。これはこれは、大変女性をバカにした事を書いてしまいましたがお許し下さい。(大阪 南村生)

◎次号の本誌は十一月中旬発売です

本誌は今後毎月中旬発売の予定です。三ヶ月分、半年分予約の方々は出来次第お送りいたします。毎月お申込の方は、上旬頃までに誌代のお送りを願います。

を想像します。或る時親しき女性に頼んだところ、好奇心もあつたのか引受けてくれましたが、サジスチンでないので気合が合わず、それが因で疎遠になってしまいました。その際感じたことですが、場所は広い処でないと十分なプレイが出来ぬこと、人間馬は前足(手)が短いので工夫がいること。その点貴女様の補助三輪車など当を得たものと考えられます。そして乗杉様に人間馬として調教されたら最大最上の歓喜です。又同好のサド婦人の方、その他ブレイでも結構ですから試用して下さい方ごさいませんか。お呼び掛けを待ちしております。

(東京 飯島洋一)

十一月号読者通信の木村よし子様へ、貴女の不幸については心から同情申し上げます。全く何と申し上げてお慰めしたら良いのか判りません。私が学生時代、同じタラスに男でありながら皮下脂肪が

多くてヒップも太く胸の隆起も年頃の女性と変らぬ位大きく発達したのがいました。その他の事は裸になつた所を見た訳ではなし何とも申せませんが体操の時上半身裸になる場合は実に気の毒でした。彼は卒業後軍属に徴用され、のち軍人になつた筈です。その後どうなつたか生死さえ判りません。そのような事から両性具有について興味を持ち医学関係の本を一時読んだことがあります。尙交際を求めて居られましたが、私は同性愛者ではございません。それを御承知の上で貴女が特異な男性としてでなく、平凡の普通の少女としての精神的な交際ならば是非致したいと存じます。もしそれで良ければ連絡先と方法等を御一報下さい。(東京都世田谷 木村鋭三)

始めてお便り致します。私は二十三才になる男子で或る繊維会社に勤務するものです。健康美あふる堂々たる青年男子の足下で其

の鞭の下にあらゆる凌辱を受けたいと願うのが私の性向です。奇くでも沼正三氏のを男主人に置き換え愛読しております。読者諸兄の中に私の様なものにでも御興味を持たれる方があれば文通交際の願いたいと思います。最後に奇くの発展を心から祈ります。

(神戸三宮 水野高広)

編集長様、私の心からのお願いを申し上げます。私はKKの創刊以来の愛読者です。KKが数年以前まだ大判であつたころから今日に至るまで、一号も欠かさずに購読してきました。お願いというのは、次のような四枚の写真を載せてほしいのです。一、モデルの花坂道子さんが、目も覚めるような美しい振袖の着物を上品に着て、胸高くしめた帯をおたいこに結んだ姿で、おさしきに正座し、両手を前の畳に揃えてついて、少しおじぎをしてゐる全貌を正面から播つたもの一枚を。髪は現代型のままで。二、そのつぎに、その服装のまま、両手を後に帯の上に高くまわされて、ちようと昭和三十三年七月号のはじめの方の花坂道子さんの四枚の写真のようにきびしくくくられ、うなだれて正座し

ている全姿を①斜め後からと、②斜め前からと、③横からと、撮したものの計三枚を。私の一生の頼みです。期待しております。この私の願いを適えて下さいますように。なお欲を申させて下さるなら、この①は白い木綿細引で、②は荒縄または太縄で、③は絹の巾広い布で縛り上げて撮す。三枚のうちの①と②は縄尻が後へ引かれていて柱につないである。また三枚のうちの一枚は手拭でさるぐつわをはめられてゐる。というようにして頂けば、私の喜びは絶頂に達することでしょう。胸を躍らせつつこのハンをいただきます。

(京都 一愛読者より)

△編集部へ 右のアイデアにより花坂道子さんをモデルとして撮影

三条春彦・画

未製本 時代物責絵巻

八枚一組 (百五十八円送共)

【内容】一、山法師と静御前、

二、女スリと岡引き、三、淀君

と千姫、四、犬公方と侍女、五

八百屋お七の最期、六、新選組

と芸妓、七、十郎左エ門と腰元

八、小紫と悪旗本、以上八場面

したいと思ひますので、右の投稿者は編集部宛御連絡下さい。

○

「奇ク」読者欄をみると、男の禪愛用者が中々多いのに我意を得たようで心強く思っています。私は三十才、独身ですが晒木綿の六尺とサポーターとを使っています。六尺の方は時に面白いアイデアの締め方をする時にも利用しています。さて同好の士に夢物語的私案を二つ。まず、各自愛用の禪、サポーター、キヤルマタなどを互いに交換してはどうか。遠く離れた間でも血肉をわけた仲間の感じが強いものになろうと思ひますが、次にはKK誌をなかたちとして、「ふんどし・くらぶ」を作ることそれも出来れば丈夫な布地の（私は粗い目のものを好む）禪を幹旋して頂くようにして、これに登録番号をつけるようにします。前袋の右上に「M-7」番などと、ゼッケンのようにつけたら素晴らしいと思うのですが。同好の士は相よる時は勿論、この正式禪を着用？誰か此の案に賛同される勇士はいないものでしょうか。KK誌には誠に御迷惑なことと思ひますが。

（東京 Y生）

○

十一月号拝見しました。毎月充実した内容で本当に嬉しく思ひます。今月号では特に「美容病院」と「終戦奴隷」の二篇がよろしかつたように思ひます。主人公の木村愛子さんに自分がなつたような気持で胸を躍らせて読んでいます。殊に「美容病院」の方は「終戦奴隷」と違ってヒロインが私と同じような年令境遇です。嬉しく思ひました。けれども、現在の私は実に平凡なサラリー・ガールの生活をいたしております。十月号の読者通信欄では、私の初めの便りをおのせ下さいまして本当にありがたうございました。それに数通の手紙まで御丁寧に転送下され御厚意あつく感謝いたしております。その中で、どなたか、私にグループの中心になつてやられてはとのおすすめがありました。只今の私はとてもそのような力はございせん。御言葉はうれしいのですけれど。それから、十一月号の通信で大阪の忍頂寺静子さんがわざわざお呼び掛け下さいまして有難うございました。私も貴女の御意見には賛成です。いつか御拝眉の機会がありましたらと心から願つております。では、皆さま、さようなら。（大阪 森シズ子）

○

小生は全国的にソドミやを調べてみました。其の数の多いのに、いささか驚きいます。倶楽部とか小会合とかが各都市で行われています。この種のグループも出来ていくようです。大都市の者は案外楽しみと希望がかなえられていくようです。小都市、山村等の人は世間の口がどうの、こうのと苦しんでおられるようです。小生の方へもいろ／＼便りを寄こしますが、割合社会的には立派な人で真面目な職業を持った方が多いようです。十代から二十代は手紙の内容がどうも、いら／＼と苦んでいるという風に小生には思われます。小生相談欄の答えのように返信しておりますが、最近統計を取ってみましたら、十代、4、（割合意くじなしであり雑誌組、二十代、三十代、各5、（思うようにやり遂げる、雑誌にて研究組）四十代1、（恥しいが先に立つ、こつそり雑誌を楽しんでいる組）、四十代になるとハガキ交歓なんて手ぬるいと云つた所でしょうが、実はものすごく多いのです。この年令が軍隊経験者だからです。軍隊という無味乾燥の戦場で、性に目覚め出した頃の若者を古参兵の

趣味に合うように教育する、若者の方は、初めのうちはどうか知らぬが古参兵にタテつけば損だし、まん更悪くないし次第に深くなつて完全にソドミになつてゆきその習慣を帰還後そっくり持ち帰つてきて今度は少年から青年になつたような年令の一寸そんな気持のあるものに當つてみて、いつとはなしに教育する。こういうケースではないでしようか。それが全国的なんだから大多数なんです。ソドミのマゾも大分有るようです。同性に愛されて責めてもらふ事を喜ぶものも都市には大分有ります。東京にてクラブの司会を引受けて出席した時、立派な服装の若者からいきなり、先生と云われて靴に接吻された事がありました。僕の書いたものと僕とを一つにしていくらしいと思つたんですが、応用問題の人達も大分多いです。先月今月と二ヶ月の実話特報のハガキ交歓中よりこの種のものをしぼつてみました。先月も今月も、何回も何回も出してゐるものも一回きりでポツツリとやめてゐるものも（理想の人が見つかったか）あります。同じく文面は同性に限り、とか、男性に、とか、禁色者、とか三島文学に理解ある方、とか、兄

弟として交際とか、何方か男性の方、とか、随分沢山あります。以上はまだ赤裸々な方ですが、僕は一人息子です淋しいです友情の便り下さい。男にも女とも書いてないのは全部ウールの人です。田舎の人は大半はつきり割りきった文章は書きません。これらの人に全部文通して当ってみましたが、四十代は、おはずかしいが妻子も有って平和なんです、ソドなんでもおればよかったと思います。といった返事がくる。三十代は、一生独身を通します。友情をちかつかけて下さい。というような返事、十代は、僕は苦しくて苦しくて三島先生の禁色を読んであんな事の出来る東京へ行こうと思ひますが。というような返事が大半です。ソドはお半、長右エ門が多く、同年令者はフザケルといったところで、ロマンスグレー組は一樣に妻帯者で子供の父であり全部が応召して外地に何年組、復員して結婚、或は結婚式をすましてすぐ応召した人が大半であり、ソドには特にはげしいようです。絶対忘れられなく矯正なんて出来ませんという。只年令的と社会的にハガキ交歓等差ひかえると云った所らしい。ハ

ツキリ女性には飽き足らぬというどんな男でもよい男なら激しい愛情を燃やすという。大都市のようない小都市、農村の四十代は余程苦しんでいるように見えます。只この種の雑誌が唯一の慰めですという。或る外人は「日本はともい国です。学生アルバイトの人随分沢山居ます。僕の趣味の人選ぶ事が出来ます」と云ったが、普通のアルバイトでは大学の費用もむつかしいが、この方ならアメリカ行も共に考えられる所からOKらしいです。大体僕の調べた統計を思い出すまま書いてみました。大体に見てソドミーフアンは女性を好まない。雑誌も女性の裸身が出ているのを全然好まないという人が九九%あります。僕はソドミーだけの雑誌特報なるものを出版されたらよかろうと思ひます。名古屋で紳士、商人、サラリーマン、学生等の集まるこの種の会に司会後で出席しましたら九州から山形で仙台までの人道の集まりで思ひ驚きました。全員満足そうに思ひ思ひの目を光らせて楽しそうに見えました。併し絶対秘密という事を誰も主張しておりません。まだ日本は本物じやありません。(三重、扇要)

(編集後記)

○読者の方々から種々とアイデアの提供やら編集についての御意見とか希望とかいったものを最近に沢山頂き感謝しております。この中で休刊前の内容に比較しての不満も時々混っていました。○復刊号以来の内容のセーヴについては従来からもよく言われたきましたが、口絵、写真、絵物語、小説、告白といったもので、只今手元にあります分を盛り上げただけで、十二分に読者を満足させるばかりでなく歓喜させるに足る資料を保ちておりますし、又、そういう編集のやり方においても既に自信はありますが自粛の一線を堅持している現状を何卒御理解願ひたいと思ひます。

○最近数人のモデル嬢の協力を得ることが出来たので、写真部に於ては爽涼の秋を迎えて各種の趣好で盛沢山の撮影を致しました。何れ口絵に分類品に、皆様のお目を楽しませることでしよう。○長らく沈黙を守っていました辻村隆氏が愈々本号より喝采と再びその麗筆をひたして登場しました。往年のスーパーマンの馬力を發揮して、今後はバリバリ書くと思ひますから、どうか御期待下さい。写真部の撮影についても以前にも増した情熱を注いでくれる筈です。○レポートを送つて下さる方々が沢山ありますが、誌面の狭隘なため、つい掲載の時期を失してしまつて御厚意に報いることが出来ないのを残念に思ひます。掲載したい告白や小説も、大分保留になつたものが溜つていますが、発行部数の関係で今急に増頁も望めませんので、一時長い小説を押さえても、レポートを発表したいと思つています。○増頁といえば、滝れい子氏、杉原虹児氏、伊藤晴雨氏、四馬孝氏からは続々と口絵用の傑作を送つて来られますし、写真部からは新しく撮影した試作品を持つて来ますので僅か八頁の口絵のスペースでは入りきらす悲鳴ものです。29年10月特大号のように四十頁もの口絵頁はなくとも、せめて十六頁ぐらゐは欲しいものだと思ひます。○本誌の表紙につきましては、このままの方がよいという御意見が圧倒的でしたので当分の間、従来通りのやり方で続けたいと思ひます。○次号に予定しました主な読物は、伊藤晴雨氏の「賣物美人伝」辻村隆氏の「夜光る」桂牧次郎氏の「姫鏡」小坂多美枝氏の「大阪屋花鳥(女牢名主)」海野繁朗氏の「女賊変化」黒河達也氏の「カメラと映画雑誌」等々、連載中の「カラシヤの教典」「家畜人ヤブ」「美容病院」其の他、常連新人の作品を多数用意しております。(三三、十、五)